

鳥籠の中

DEKKAマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「俺はピアノが嫌いだ」

ピアノの事が大好きで、そしてピアノの才能があつた少年。だけどもある出来事により彼はピアノを弾くことをやめてしまった。

そんな彼が出会つた二人の少女。その二人とその周りの人間と絡んでいき、少年が変わっていく話。

目次

誘い	1
互いを知ること	12
関係ない	23
お願いがあるんだけど	33
どう思っているのだろう	44
この熱は	53
あいつと俺は	63
記憶の底に	72
私の気持ちは	82
不可解な熱	92
昔の趣味	102
振り絞って	111

イラつき	122
気付かされて	131
ありえないこと	141
好きってなんだろう	151
羨ましかった	161
変わる時	176
深まる霧	192
気になって	201
答えを	209
罪を重ねて	219
幸運を願う	228
捨てきれないもの	237
自分にしか	248

自分は何者か	258
恥ずかしがり屋が	274
理由を知りたくて	286
距離を縮め	297
選ぶということ	309
抱いたそれは	319
渡し合い	329
氷山の一角	339
慣れないこと	348
茨と刺	360
代償を払う	370
不透明なもの	390
夢を見て	400

引きずられて	420
好きであるが故に	434
引っ掛かり	447
雨の日に	457
阻むもの	469
一と多と	480
伝え方	492
伝えるとは	502
罪の在り処	515
そこにある夢	527
背に抱えるもの	538
帳が落ちて	549
浅ましく、欲深く	559

どうあつてほしいのか

同意

582 570

誘い

52の白と36の黒、それら合わせて88。

それ以上でも以下でもない。たったそれだけのものから奏でられる音がいつまでも、俺を掴んで離さない。

これはきつと呪いだろう。でなければ、こんな苦しいはずがないのだから。

「私と組んでほしい」

「断る」

「……どうしても駄目なの？」

「何度も言ってるだろ」

はたして何日目だろうか、この会話は。正確な数は両の指で足りなくなつてから数えることをやめた。

それだけ断り続けてきて、だというのに目の前にいる銀髪の女はそれでも誘うのをやめようとしない。

こうやって聞き流されているのはこいつだつてわかっているだろうに懲りずに話し

かけてくる。

「はあ……どうやったたらお前は諦めるんだ」

「あなたが私とバンドを組めばいいのよ」

「それじゃ駄目だろ」

何を言っているのかわからない、そんな風に思っているかのように首を傾げてくる。

ああ本当に、どうしてこうなったのだろう。別にこいつが全て悪いわけでもないし、だからといって俺が全て悪いわけでもない。それでいて第三者が絡んでいる訳でもない。

運が悪かった、そうとしか表しようがない。

「で、今日はライブの練習はしなくていいのか？」

そう聞くとあいつはしぶしぶといった感じで奥の部屋に消えていった。

初めて会ったのは1ヶ月前くらいだったか、それからあいつはしょっちゅうこのライブハウスに来てる。たまには俺を誘うためだけでも。

そも俺だって毎日バイトをしているわけではないのだからどれだけ来てるのかはわからない。

俺がここでバイトしだした時にはこうやって受付で話すことなど出来ないくらいには客がいたのだが、近くにカフェがあるライブハウスが出来ただなんだで最近あまり客

は来ない。

まあここ数年の流行りはガールズバンドなのだしそういう方が人気なのは仕方がないのだろうが。

あいつはあんなでもここらでは有名人らしく『孤高の歌姫』とかいう呼ばれ方をされているのを最近知った。

歌姫とは大きく出たものだなんて思うものだが、それを認めざるを得ないのもまた事実である。

あいつはいろんなライブハウスに出演していて、今日もそれがあるらしく今はその練習中とのこと。

そんななら最初からそつちで練習すればいいのには思うが、もし聞いたとしても俺を誘うためと答えてくるだろう。もしかしたらここが他所よりちよつと安いからというのもあるかもしれないが。

「暇なんだろうな」

なぜあいつがそんなにライブ回りをしているのかは知らないし、これといつて興味もない。あつたとしても多分俺みたいに誰かを誘うためなのだと思う。

少しばかりの自意識過剰。そんなわけあるはずないと笑い飛ばせばいいのだろうが、急に笑えば随分と声が響いてしまう。

あいつはいつも一人だ。他のところで待ち合わせをしているのか、それとも俺みたく誘った全員に断られているのか。

前者ならばそれでいい、他に見つかれば俺への誘いもなくなることだろう。しかし後者に関しては想像がつかない、あいつからの誘いを断るということが。

あの歌声を聴いて、それでも尚あいつの誘いを断れるやつなんて……そんな多くはないだろうに。

なんてことを考えてしまったがどうせハードなライブスケジュール、それに見合った練習時間を受け付けなとかだろう。または単純にあいつの目にかかっていないだけか。

興味なんてない、そう思っただけのもの暇な時間というのはそのようなものでも考えてしまいがち。俺は次の客を待ちながらあの時の事を思い出していた。

初めて見たあいつ、それはステージの上に一人立つ姿だった。対バンというやつで他のバンドは少なくとも三人はいる中、あいつだけがたった一人でステージに上がった。

俺は後ろの方にいたからあいつの顔は見えなかった。それは前にいた客の盛り上がり之急に物凄くなったからというのもある。

——だがあいつが歌い始めると、周りは一気に静かになった。

ただ意識から外されただけなのか、それともすべての客が空気を読んで黙っただけなのか、どちらなのかは今では知りようもないことだ。

まるで海の底、山の頂上、空の果て。静かで、綺麗で、だけどどこか恐ろしかった。それは聴いたこともない曲。こういったところでバイトしているということもあり流行りの曲、ちよつと古かろうと知らないことはあれど聞き覚えはあるものなことが多い。

だというのに知らない曲。後で聞いてみればオリジナルの曲だと言う。

誰が作ったのか。あいつの友人か、それともあいつが作ったのか。聞き忘れたそれだが今となっては大したことじゃない。

その時の俺は、指を動かしていた。

トントンと、人差し指と中指のみでリズムを取ってしまう。

昔からいつもそう、知らない曲や好きな曲を聴いてるときには無意識にやってしまう。

音が形を持って飛んでくる、そんな風に感じさせられたのはいつぶりか。恐らくそれは単純な上手さもあれど、その声量のせいでもあるのだろう。

火傷しそうなくらいの盛り上がりの中、ヒヤリとした冷たい風が吹いた気がした。

俺の過ちはその後、客が全員帰り軽く見回りをしていた時のこと。

つい置いてあるキーボードに目がいつてしまった。もう一年以上やっていないそれに、吸い込まれるように足が進んでいた。

なんで、そんなことはあの時には考えられなかったが、今思えばあいつの歌声によって動かされた、と認めるしかない。

浮かび上がったのはあの歌声、あの曲のこと。楽譜はない、だがなんとなくこういうのだろうというのはわかってしまつて。

指が滑るように動いていた、一年という期間がまるでなかったかのように。その間何を思ったか、ついこの前のことだというのに覚えていない。

そして弾き終えた時、閉めた筈のドアが開いていて一人の女がそこに立っていた。

そいつは俺の方に近づいてきて、こう言った。

「私とバンドを組んでくれないかしら」

それが、全ての原因だ。

「……指が動いてるわね」

「……行かなくていいのか？」

「まだ時間はあるわ」

また気づかぬ間に指が動いていた。本当に嫌になる、いつまでもピアノに囚われている自分に。

「どうしてあなたは私と組んでくれないのかしら？」

「……突然だな」

「そうやってリズムを取っている以上、音楽は嫌いではないのでしょうか？」

その問いに対し返す答えは単純だ。息をするかのような短い言葉で返すことができないはずなのに、喉奥で何かが詰まるかのような不快感を感じて発することが出来なかった。

「……好きじゃないさ、特にピアノは」

ゆつくりと、確かめるかのように答えを絞り出す。その言葉は誰に向いているのか、そんなことは考えたくもなくて。

「理由を聞いても？」

「人には知られたくないこともあるんだよ」

人間知られたくないことの一つや二つある。勿論大事な物の隠し場所とか、性癖とか、そんな程度の物なら山のようにある。

だがこれは違う、知られてないのならそれでいい。わざわざ誰かに教えようとも思わない。

「また来るわ」

「俺を誘わなければ歓迎してやるよ」

そう言うといつは店の外に消えていった。銀色の長い髪を少しだけ揺らしながら歩くあいつの姿から、何故だか目を離すことが出来なかった。

「嫌い、嫌い。ピアノは……」

ああ、声に出すことが出来ないどころか、思うだけで思考は霧がかかるかのように不明瞭。

一体なぜなのか、それは自分でさえもわからない。

バイトも終わり帰宅し、リビングに向かったところであちで飼ってる猫が近づいてくる。

手を洗ってから少しだけ構っていると眠ってしまった。本当に猫の行動は理解できない、さつきまで元気だったくせに急に寝始めたりするのだから。まあそれがまたいいのだが。

夕飯なに作ろうか、そう思い冷蔵庫を漁るがろくなものがない。ああ、そういえば今日何か買おうと思っていたのに忘れてしまった。

本当に慣れない。二年弱の間やっているのにこうやって忘れてしまうこと

がいまだにある。

自炊の方に関しては何からやることもあったのでそこまで酷くない。これに関しては母親が料理が壊滅的だったというのもあるのだが。

とりあえずありあわせで夕飯を作って食べる。それを食べ終え皿を洗ってソファ―に座り込む。

「……テレビでも見るか」

することがなにもないのでテレビをつけると、そこには見たくない人物が映っていた。

ほぼ反射でテレビを消す、それでもその一瞬は目に焼きついてしまうには充分すぎる程で。

「はあ……」

映っていたのは、俺の母親だった。

何故映されたのかはわからない、がどうせピアノニストの紹介等だろう。偶々つけたのにこれなのだから本当についてない。

少し歩いてある部屋の前に立つ。そこは防音室で、我が家の開かずの間。鍵なんてないけど開ける気は更々なくて、中がどうなっていたかなんてもうあんまり思い出せない。

扉に触れる。冷たくて、重たい。それでいい、もう開けることなんて二度とないのだから。

ここで母親にピアノを教わっていた、物心ついた時からずっと。強制ではない、単純に好きだったんだ、ピアノの事が。

楽しくて、新しい曲を弾けることが嬉しくて、時間を忘れるかのようにやっていた。コンクールに出ていい結果を残すのも勿論だが、それで母親に褒められるのも嬉しかった。

でも母親は一年前、俺が高校に入る前に家を出ていった。理由は知らない。聞かされていないし、聞きたくも。

あの時の父親は見ていられなかった。普段飲まない酒を飲んで、大人の癖に泣いていた。それでも母親を、その相手の事を責めることはしなかった。

昔から仕事熱心だった、でもそれからはまるで母親の事を忘れるためかのように更に仕事に力を注ぎ始めた。

俺は……どうだったか。泣いた、悲しんだ、強烈な印象を植え付けられている癖してそれは、まるで夢であったかのようにふわふわと、非現実的なものとなって残っている。

俺の人生においてピアノは全てだった。だけどそれ以上に俺の人生においてのピアノは……母親からのものだった。

母親の事は嫌いだ、母親の事が嫌いだ。だからこそ……

「ピアノは……嫌いだ」

くだらない、そんなことはわかっている。

でも俺はそう思うことしか出来なかった。

互いを知ること

「私と……」

「断る」

「まだ何も言っていないでしょう？」

「お前が言うことなんて一つしかないだろ？」

バイトも終わり、今日は珍しくも忙しかったので疲れてしまった。さっさと帰ろうと店を出たところ、運悪くやって来たいつものやつにまた声をかけられる。

ため息。後数分早く店を出ていたら鉢合わせなかったのかと思えば嫌な気分になってしまう。

「今日は違うわ」

「自覚があるならやめろ」

「それはできないわね」

ため息をしたからか、そんなことを言ってくるが信じられるものか。会話をしながらも少しだけ歩く速度を速くする。どうせあれだこれだと言って誘ってくるのは目に見えている。

交差点のど真ん中というわけではないけれど、店の前という事もあってそれなりに目立つ。ましてや自分のバイト先の前だ、こんなところを見せたくはない。

というより、せめて声をかけるなら店の中にしてほしい。こいつは自分の容姿を理解しているのだろうか。

「……話を聞いて欲しいのだけど」

痺れを切らしてか突然手を引つ張られる。しかしそれは弱々しくて、振り払うのほとても容易い。

だけれどももしかしたらそれだけで折れてしまうんじゃないか、そんなことも思わされてしまい振り払うことが出来なかった。

「何あれ」

「痴話喧嘩?」

「こんな道の真ん中なのに……」

まるでわざと聞こえるようにしているのではないかと思わされる声が聞こえてくる。本人たちは気づかかれていないと思っているのかもしれないが、自分の話というのはいやけに聞こえてくるものだ。

誰かの視線を受けることには慣れてはいるが、このような視線は慣れていない。頭を軽く搔いて再びため息を溢す。

「わかったよ。取り敢えず移動するぞ」

「別にここでもいいと思うのだけど……」

現状がわかっていないかのように言うので、彼女のを取ったまま歩き出す。

ちよつとですまないくらいには恥ずかしいが、この原因は向こうなのだし文句を言わせるつもりはない。今はとりあえずこの場から早く立ち去りたい気分ではいっぱいだ。

「ちよ、ちよつと。もう少しゆっくり……」

「あ、悪い」

歩幅の違いというのはなんとも厄介で、ちよつと速く歩こうとすることすら出来なくなる。別にできなくはないが、意識してからそうするほど人間終わってはいない。

数分そうして歩いているとカフェが目に入った。周りから人が消えたというわけではないが、先程のような視線を向けてくる者は減ってきたので手を離す。

別にここで話し始めてもいいのだが、折角カフェを見つけたのでその中に入る。どれだけ長く話すかわからないけれど、立ち話もあれだ。彼女と顔を合わせないようにして入店する。

「で、話ってなんだよ」

「今日は素直なのね」

店にまで入ってしまったのだから今更断ることなんてできない、理由なんてそれしかない。

最も入店したのは俺の意思だから悪いのは俺。ああいや、元を辿ればこいつも悪いのだし両成敗か。

向かい合うようにして座るがあらぬ方を向く。パキリと、指を鳴らした。

「いつまでも今日みたいなことされると困るからな」

「困らせてしまったのなら謝るわ」

謝罪なんてものはいくらでもできる。本当に申し訳なきそうにしていれば少しくらい、と思ってみたものの別に俺は怒ってるわけではない。ただ今後の面倒になるのが嫌なだけ。

話始める前に珈琲がやってくる。歌を歌うくせに珈琲飲んでいいのか？　なんてことを思っているのもつかの間、こいつは砂糖を7個も入れていた。

「……なにかしら？」

「それ、甘くないのか？」

「そうかしら？　ちようどいいと思うのだけど」

なんでもないかのように言うが信じようもないことだ。自分の珈琲を飲む気も失せてしまい、そんな俺を全く気にせず珈琲を口にした。

こうしてみると随分と絵になると言うべきか。写真とか絵とか、そういう物の造詣はないが老若男女問わずにそうだと答えるだろう。

話がそれ続けるが家に帰っても特に予定もない。強いて言えば猫と戯れるくらいか。ああでも家に帰って猫と戯れたいので早く帰りたいというのもまた事実である。

彼女はカッパを置き、少しだけ目を細めてこんなことを言ってきた。

「あなたのこと、もつと知りたいの」

一瞬思考が真つ白になって、頭の中で先の言葉が繰り返される。ああくそ、少し見た目がいいからといって騙されるな、こいつは俺をピアノに誘うやつだ。

「……その心は？」

「リサにあなたに誘いを受けてもらう方法を聞いたら、まずお互いの事を知るべきと言われたから」

「言葉足らずにも程があるだろ……」

俺はこいつの事を何も知らない。通う学校は勿論のこと何故俺の事を誘うのか、その理由すらも詳しくは知らない。先程言ったりリサという人も、こいつの名前も。

唯一知っているとすればその歌声、ただそれだけ。いや、随分な甘党だということは先程知ったか。

当然逆も然りで、こいつも俺の事を殆ど知らない筈で。

「そうね……まずは名前から聞こうかしら？」

「……新庄蒼音しんじょうあわた」

「私は湊友希那よ」

それだけ言われて会話が止まる。ただただ無言のまま互いに珈琲を飲み進める。ああ、ちよつと甘く感じる。そうして数分の間の後、再び口を開いてきた。

「……そつちは何か聞きたいことはないかしら？」

「もうネタ切れなのかよ」

「仕方ないでしょう、他に何を聞けばいいのかわからないもの」

絶対こいつ友達少ないだろ。失礼ながらもそんなことを思わされてしまう。まあ、俺も人に言えたものではないのだが。

会話というのは火種と同じで、一度途切れてしまえば盛り返すというのは難しい。が、こちらとしても聞きたいことが一つあったので丁度いい。

「なんでお前は俺の事をあんなに誘うんだ？」

「それはあなたの腕が……」

「時代はガールズバンドだぞ？ バンドやりたいなら女を誘った方がいいと思うけどな」

「……私には目標があるの」

改まったようにそう言われる。目標、こいつはそう言った。夢と言わないということ
は手が届くレベルのことということか。

いや、違う。しなければいけない、そんな意志がその目からはつきりと感じ取れた。

「で、その目標つてのは？」

「FUTURE WORLD FES. に出場することよ」

「……本気か？」

「勿論、本気よ」

真つ直ぐにこちらを見つめられながらそう言われる。この分野における最高の舞台。
それこそ出場するだけで有名になれるが、有名なバンドだろうと出場することが難しい
というFUTURE WORLD FES.

それに出ようと言うのだ、それも学生のこいつが。バンドに関して多少の知識がある
ものが聞けば10人中10人が笑わずにはいられないだろう。

だがこいつは冗談を言っているという風には全く見えなくて。

「……理由はあるのか？」

「ええ、勿論」

「聞かせて貰ってもいいか？ 勿論嫌ならいいが」

何がこいつをそんなに駆り立ててるのか、それが気になった。こいつの歌ならバンドに

拘らなくても事務所にでも入って歌手にでもなれるだろう。

だがフェスにここまで拘る理由。いつもならどうでもいいと聞き流しているようなそういったものが、不思議なくらいに気になってしまつて。

「私の父の音楽を認めさせるためよ」

「……なるほどな」

湊、そんな名字をしたバンドマンを一人だけ知っている。メジャーデビューまでした有名だったところのギターボーカル、そう記憶している。

だった、そう、そのグループはすでに解散していて、その理由は詳しくは知らない。こいつがその人の娘なのかどうかはわからないが、話を聞く限りでは恐らくそうなのだろう。

「そういうことよ、だから私はあなたと組みたいの」

「俺はピアノが嫌いだ」

「……そう、気が変わったらいつでも言つてほしいわ」

母親のことが嫌いだ。勝手に家を出ていくのだから。

だからピアノも嫌いだし、やりたくもない。決めたんだ、もう二度とピアノは弾かないと。

あの出来事は気の迷いだ、体が言うことを聞かなかつたのが悪い。ピアノを弾きたい

なんて、もう思うはずがないのだから。

「で、質問は終わりか？」

「そうね、特に話すこともないわ」

「じゃあ終わりでいいか、金は……」

「自分の分は払うわよ」

「それはどうも」

もしかしたら奢らされるかもしれない、そう思っていた身としてはありがたい。

特別高くもないしバイトもしているのだから金銭的に辛いというわけではなかったのだが、やはり奢るといふ行為には少しばかり抵抗がある。

そういえば今何時なのだろうか、そう思い机の上に置いておいたスマホを開くと湊はその画面を凝視していた。

「猫、好きなのかしら？」

「まあ人並みにはな」

「その待ち受けの猫は……」

「家で飼ってる……」

それより先の言葉を遮って湊は俺の手を両手で包むように掴んでくる。心なしかその瞳は先ほどと同じく意思に溢れ、しかしどこか輝いているかのように見えた。

「あなたの家、今度お邪魔してもいいかしら？」

「は？ 駄目に決まって……」

駄目と言った瞬間、湊の周りの空気が物凄くどんよりとしたかのような気がした。俯かれため息すらつかれる。

目に見えたとしたらこいつの周りの空気は青黒く染まっていたのは間違いないだろう。

「……駄目なのかしら？」

「はあ……わかったよ」

本当に駄目かと聞いてきた時のこいつは、まるで捨て猫かのように思わされた。なんだか物凄く悪いことをしてしまったかのような気がしてつい許可を出してしまう。

だが許可を出せばその空気は一転、凄い勢いで顔を上げこちらに視線を向けてくる。表情には全く出さない癖にわかりやすいやつだ。

「そうね、春休みの五日目でいいかしら？」

「はあ……じゃあそれで。それにしてもお前が猫好きなんてちよつと意外……」

「ね、猫好きじゃないわ！ これは……そう！ あなたのこともつと知るために……」

「あー、わかったわかった」

「そう、わかったならいいのよ」

もってもらしい、だけどバレバレの言い訳をし続けてきた。湊は一つ安堵したかのよう息をつく。もしかしてこれでだまし通せたとも思っているのだろうか。

これを指摘しても面白いだろうが、流石にこれ以上話が長引くのはあれなので今度の機会にでもしよう。

「それじゃあ」

「ん、じゃあな」

会計を済ませそれぞれ別の道を進む、どうやらあいつは俺とは反対方向らしい。

俺はあいつのことはどう思っているだろう。可愛いけど鬱陶しい、だけど歌声だけは物凄いやつ。それが今までの評価で、言ってしまったえばそれだけだった。

だが今回はそれに加えて甘党で猫好きで嘘が下手、ただそれだけのものが追加された。もしかしたら俺は今あいつのことは……そこまで嫌いではないかもしれない。

それだけの三つのことなのに。まあ猫が好きやつに悪い奴はいない、それは当然なのだ……

「……帰って先に風呂入るか」

何を思っているんだ。俺の事を鬱陶しく誘ってくる、それもピアノに。嫌いじゃなければおかしいはず。

今日の風呂はちよつとだけいつもよりも熱くした。

関係ない

春休み、それは休みという素晴らしい響きはあるものの特段やれること、やりたいたいということが溢れるようではないもの。

学校における友人と言える仲の者がいないわけではないが、学校外で遊ぶ程のものではないし連絡先を交換しているわけでもない。

学校によっては課題が出ないところもあるらしいが、わが校ではそんなことはなく山、とまではいかなくてもそこそこの量が出た。

春休みというものは決まってそう長くない。気づけば既に4日も経ってしまったので帰ったら課題を終わらせるとするか、そんな事を考えながら客を待つ。

長期休暇ともなれば普段暇を潰すようなバイト先も客足は何倍ともなる。それにあつて多少の忙しさは感じるが、元の数が少なければ倍にしたところでそれほどでもない。

なんてことを考えてればまた一人店に入ってくる。そいつは見知った顔で、迷わずこちらに向かつてきた。

「あなた、後どれくらいで終わるのかしら」

「……ああ、そういうえばそんな話だったな」

「もしかして忘れていた、とは言わないわよね？」

「忘れてたよ、すっかりな」

「そう、それならまた今度……」

「いや、別に今日でいい」

忘れてたと言った瞬間のこいつの気分の下がり方はとてもじゃないが見てられなかった。悪いことをしたわけではないが、やはり少しだけそう思わされてしまう。

俺の家に来るといふ約束、忘れていたというのは真つ赤な嘘。湊は冗談で言ってるのかと思っていたというのが本音。

異性、それもそこまで深い関係でもない奴の家に行くなんて本気と思えという方が難しいだろう。

それに……別にどうだとしても不都合がつくわけでないのだから。

「両親の許可は必要なのかしら？」

「どうせいないから気にするな」

「それって……」

「あー、後十分で終わるから待つなり帰るなりしてくれ」

言い方を間違えてしまったか、まあ仕事で忙しいとかだと思ってくれるだろう。

知られて特に困ることではないがやはり知られたくはないものだ。哀れむかのような目を向けられるが気持ち悪くて、やはり失言だったと認識する。

湊は近くの椅子に座る。本当に待つのか、今ですら冗談ではないのかと思いつつも時間もはゆつくりと進んでいった。

そして、バイトが終わった時にもまだその姿はあった。

「それじゃあ行きましょ」

「はあ……本気か？」

「でなければわざわざ練習時間を削ったりしないわ」

「猫好きもここまですれば勲章物だな……」

「こ、これはあなたのことを知るためよ！」

「あー、はいはい、わかったわかった」

自分のことはそこそこの猫好きだとは思っていたが、流石にこいつと比べてしまえば大したことないなと思わされてしまう。

猫好きというよりは猫バカだな、などと考えながら道を歩いていた。

我が家にたどり着くまでの間に会話、それは今までなかったような話題を振られていた。バンドに誘われるといういつも通りのものがなく、猫の話で盛り上がった。

やっぱり家に入れないと突っぱねてもよかったのだが一度決めたことを流すのはいい気はしないし、何より他人の沈んでる様子を見るのは昔から嫌いなので出来なかった。

……それに、猫の話で盛り上がってしまったのも原因。

「勝手に部屋に入るなよ?」

「あなたは私を何だと思ってるのかしら?」

湊が玄関からすぐ近くのあの部屋の扉を見つめていたのでそう釘を刺す。流石に大丈夫だろうが念のため。

見られたくない。それはこの部屋だから、こいつだから。

もやっとしたその考えも、飛び付いてきた猫によって吹き飛ばされた。アロマだとかそういうのに興味もないし知識もない、がこんなものなのだろうか。

「……相当懐かれてるのね」

「そりゃ飼い主だからな」

出ていった母親、面談等以外では殆ど帰ってこない父親、兄妹はいないのだから今一番一緒にいるのはこの猫だ。

元はといえば一年前捨て猫だったのを拾ったのが始まりで、少し時間はかかったが懐かれた。母親が猫嫌いだったのもあって憧れていたというのもあったのだと思う。

父親にはまだ見つかつていないが、隠れるように逃げていたのを覚えているのであんまり人には懐かないやつなのだと思っていた。

だが湊が近寄るのを拒否することなく、気持ち良さそうに頭を撫でられていた。

湊は心ここにあらずといった風に撫で続けている。現に目の前にいた俺が立ち上がった後も気づいていない程には。

話すこともないし掃除でもするか、そう思つて俺は二階に上がつていった。

掃除と課題の準備をして下に降りる。ところで湊はいつまでいる気なのだろうか、恐らく満足するまでではあるだろうが……あの様子ではいつになることやら。

いつ頃帰るつもりなのか聞こうとリビングに向かうがあいつの姿が見つからない。どうしたのだろうか、外には流石に行つてないと思うが……どこにいったのだろうか。

もしかしてと思ひあの部屋の扉を見てみたら、ほんの少しだけ開いていた。その事実思わずカツとなつて、その扉を開けてしまった。

「おい、勝手に入るな……」

その扉を開けてまず最初に目に飛び込んできたのは彼女ではなく、猫でもなく、ピアノだった。

自らの半身と言つても過言ではないほどの時を過ごしたそれ。部屋の中心にでか

かと置いてあるそれを中心にだんだんと周りが見えてきた。

ああ、そういうえばこの部屋はこんな感じだった。見回せばトロフィーや賞が置いてある。そして……その時に撮った母親との写真も。

頭が痛い。

手が震える。

喉に埃が入ったかのように気持ちが悪い。

一年ぶりに入ったその部屋は、記憶にうつすらあつたそれと、何にも変わっていないかった。

「……ごめんなさい、この子が入っちゃって連れ出そうと思つたら」

その声で始めて湊の存在を認識する。その手に抱えられていて、鳴き声をあげている猫の存在にも。

この部屋に入ってから何か耳鳴りのようなものがする。それは何度も耳にしたもので、奏でたもの。床に、壁に、天井に、あのピアノに、音が染み付いている。

「……あなた、やっぱり凄いのね」

「……お前には関係ないだろ」

「関係あるわ、同じバンドのメンバーになる人の事は知っておいた方がいいでしょう？」
「ならないって言ってるだろ」

早くこの部屋から出てしまいたいのには足がそれを許さない。縛り付けるかのように動かせない、扉はやっぱり重くて冷たくて開けることができない。

「あなた、本当にピアノが嫌いななの？」

「……何回もそう言ってるだろ」

「これを見る限りはそうは思えないけれど……」

「……昔とは違うんだよ」

湊が見ているあの写真は何時のだったか、身長的には恐らく小学生の時のものだろうが……コンクールなんて出るのが普通だったからいちいち覚えていない。

どうしようもないくらいい笑顔をこちらに向けているその自分の顔、映っているピアノに母親の顔。

そのすべてにどんな感情を抱いたか……自分ですらわからなかった。

「……今日はごめんなさい」

「……目を離れた俺も悪かったからいいよ」

夜風を求めて外に出た。湊も帰ると言っていたので少しだけ一緒に外を歩く。

あの部屋に入ってから体が妙に熱い、何かが沸き上がってくる、そんな風を感じさせられている。

今回の件に関しても誰が悪いというのではない。猫が部屋に入ってしまったのが悪いと言えどもそれまでだし、湊が取り押さえ無かったのが悪いと言えどもそれもそれだ。

だから俺が掃除に行ったのが悪いと言われれば、それもそういうことだ。わかっていて、納得できるかどうかは別である。

「あなたがピアノをやめた理由って……いえ、なんでもないわ」

あんな楽しそうな表情をしていて、あんなに結果も残せていてどうしてピアノをやめたのか。湊はそれが気になって仕方がないのだろう。

だが聞いてこない。今日は悪いことをしたからと思っただけか、この前聞くなと言っただけか。どうにせよ、それは俺にとって嬉しいことの筈で。

それじゃあまた。そう言っただけで去っていく湊に対し、俺は後ろから声をかけていた。

「……母親がピアノリストで、家を出てった」

これでわかるだろう？ そう言うのと湊は振り返ってくる。俺自身、どうしてこいつに言おうと思ったのかわからない。

見られてしまったから特に隠しておく必要がなくなつた。そんな程度のものなのかもしれないし、これを言えばもう誘われなくなるかもしれないから、そう期待してのこともかもしれない。

子供か、俺は。

俺は来た道を戻ろうと背を向けたところで湊に、待つてと呼び止められる。

「……………めんなさい」

「別に謝罪の言葉が欲しかったわけじゃ……」

「でも」

風が吹いた。冷たくて、ザザツと木の葉が揺れて音を出した。

——あなたのそれ、ピアノとは関係ないと思うわ。

割り込まれるかのようにして発せられたその言葉は、風よりも冷たく感じさせられた。離れていて、木の葉の揺れる音で聞き取れなくてもおかしくないのに、嫌なくらいはつきりと聞こえてきた。

何も言うことが出来ない、否定をすることも、肯定をすることも。それだけ言つて去つていく湊の後ろ姿をただ見ること以外、何も出来なかった。

「……………簡単に言つてくれやがつて」

そんなのわかつてる。でもどうしてもそれを切り離すことが出来なくて、どうしてもそれは一緒のものだった。

俺は母親のことが嫌いだ、だからピアノのことは……

どうなのだろう、それが疑問に変わる前に思考をやめる。嫌いだ、大嫌いだ、そうで

いい、そうあればいい。

「お前は何も悪くないよ」

膝の上に乗って来た猫の頭を撫でながらそう呟く。なんだか申し訳なさそうにしているように見えたのは、ついに俺の頭が可笑しくなってしまったからのだろうか。

日が昇り、また沈んでもまだあの言葉が頭の中で反響し、結局その日は眠ることが出来なかった。

お願いがあるんだけど

「気持ちわりい……」

あれから二週間、それほど経ったというのにあいつの言葉はいつまでも楔のように俺の中で刺さっている。錆びれ、崩れることなく深々と。

だからこうして夜になるとそれを考えさせられて寝れなくなる。忘れようと顔を洗いい、昔やっていたゲームを引つ張り出してみたものの効果はない。

考えなければいい、忘れればいい。そんなことは何度も思った、わかっている。でもそれは叶わない。

自分の意思ではないかのように勝手に浮かんできて、ヘドロみたいに思考の隅にへばりついて、どうにせよ眠りにつくことは出来なかった。

「……明日はバイトか」

あの日からあいつとは一度も会っていない。他のライブハウスの方がいいと思ったからなのか、それともキーボードのメンバーが見つかったからなのか。もしかしたら俺の話聞いて誘うのをやめようと思ってくれたのか。

まあどれにせよ来たなら来た、来ないなら来ない、それだけだ。どうであれ、誘いは

断る一択なのだから俺には関係ないことで。

関係ない、そう、関係ない筈なんだ。うざったるくてしつこくて、やりたくないのに何度も誘ってくる。それから解放されたのだから少しくらい嬉しいと思う筈だ。

ならなんなのだろう。どうしてあいつのことを考えてしまうのだろう、どうして少しも嬉しくないのだろう。

目を瞑り思考をやめようと思うものの、やはりと言うべきか尚更強まるばかりで薄れることはない。そんなだから眠ることは出来ないまま時間が過ぎていった。

バイト中だというのに欠伸が漏れてしまう。結局あのまま寝ることが出来ず気が付いたら日が昇っていた。

徹夜は苦手ではないがやはり眠いものは眠い。幸いというべきなのは今日が平日ではなかったこと。授業中に寝ることはいいにしても、その行くまでの間がめんどくさくてありやしない。

入り口の扉が開く。記念すべき今日初めての客、その客は見覚えがあり、そして相変わらず一人だった。

いつも通り、だというのに少し緊張してしまうのはあの言葉のせいなのか。

「で、今日もいつも通りの用件か？」

「私はバンドを組んだわ」

不思議と渴いた喉から発したその言葉への返答。いつも通り開口一番に誘われるのだと思っていた俺はその言葉に驚きと喜び、そして不思議な安心感を抱いた。

喜びはわかる、わざわざ嫌いなものに誘われなくなるのだから。だがこれはなんだ、なぜ安心したのでらうか。

こいつがバンドを組めたことに対する安心？ それは違う、こいつなら妥協なりすればいつか組めるというのはわかっていた。

寧ろ組めたとしてもこいつについていけなくてすぐに解散してしまわないかと不安なくらいである。

ではなぜ？ それは……………

違う、それは違う、違わなければならない。

よもや決め込んだものを疑うなど愚か者のすることだ。ピアノのことは嫌い、どれだけ誘われようとこれだけは変わるはずはない。だから、そうであるはずがない。

そうだ、徹夜のせいだ。睡眠が足りないからこんなことを考えさせられてしまう。きつと寝て思考が回復すれば迷いなく嫌いと言い切れる筈で……

「どうかしたのかしら？」

「…………いや、俺もやつと誘われなくなるなと思つてな」

「いえ、キーボードだけが見つかってないの」

ギリ、と奥歯が擦れた。なんとも運の悪い話、更に聞けば来月の初めの方にライブの予定が既に入っているらしい。それもこの地方ではまあまあ有名などころのものだ。

「それで今キーボードを探しているの。あなたが入ってくればそれは解決なのだけ……」

「やる気がないやつが入ったってしょうがないだろ。やる気のあるやつを探して誘え」

「ああやって指を動かしてるのだからやる気はあると思っただけど……」

「……それとは別だろ」

「それにやる気があったとしても実力がなければ意味がないわ」

だからあなたが私の知ってる中で最適なのと言われる。言われて悪い気はしない、褒められて嫌な人間など相当な嫌味を込められていなければそうなのだろう。その褒めてくる相手が素人ではないというのも相まってではあるのだろうが。

本当に気に入らない。

できればこいつとは話したくない、さっさと別の誰かを見つけてほしい。湊に誘われると、この気持ち揺らいでしまいそうだから。

「……俺はピアノは嫌いだ」

「そう。でも気が変わったらいつでも言っただい」

そう言つて湊はライブハウスから出ていった。話すためだけに来るなんて、俺がいなかったらどうするつもりだったんだ。

いつでも言えと言われても俺はあいつの住んでる場所なんて知らないし、よく行く場所だつて当然知らない。

ましてや連絡先も知らないのだ、万が一、億が一気が変わろうとそれを知らせられるのはあいつがここに来たときだけで、それがいつになるかはわからない。

でもその心配をする必要はない、だつてこの気持ちは変わることはないのだから。

あいつの言葉が頭の中に残っている。わかつてる、あいつの言つたことは正しい、それでも切り離すことはできない。

俺は母親のことが、ピアノのことが嫌いだ。それは絶対に変わらないし、変えるつもりもない。

変えたく、ないのだ。

あれから更に一週間後、湊はまたライブハウスにやつてきた。だけど今回はいつもと違い一人ではなく後ろに見たことのない4人を引き連れて。

「後ろの人達は？」

「バンドメンバーよ」

湊を含め5人、そしてこの前は連れてきていなかったということは恐らくキーボードが決まったのだろう。無意識のうちにほっと息をついていた。

ツインギターでまだキーボードは決まっていなくて、それがあってもいいかもしれないが……まあそうだろうと俺には関係のないことだ。

「湊さん、その人は？」

「新庄蒼音、私の言っていた人よ」

俺の名前が出た瞬間、黒いロングヘアで胸のでかい子がびくりとした後俺の方を見た。反応を見るにあの人がキーボード担当なのだろうか。

それにしても湊はなんと言ったのだろうか。後ろの人達で驚いているのはその黒い髪の人しか見えなかったし、そう変なことを言われたわけではないだろう。しかし自分のことなのでやはり少しばかり気になってしまう。

「で、今日は練習してくのか？」

「もちろんよ、ライブまで時間がないもの」

そう言われたので受付を済ませると湊達は扉の中に消えていった。ただ一人を除いて。

「うーん、まさか男の子とは……」

「行かなくていいんですか？」

「少し話したいことがあつてき。あ、アタシは今井リサ、リサでいいよ」

……正直湊はこの人みたいな感じの人とは馬が合わないと思つていたのだが、バンドを組んだということはそうでもないのだろうか。

それにしても話したいことはなんだろう。何かやらかしたかと思つたがそんな記憶はない。

「友希那とはどんな関係なの？」

「別に、なんでもないですよ」

「あの友希那が何度も誘つてたらしいからそうは思えないけどな」

あと敬語じゃなくていいよ、そう付け加えられる。俺はなにも返さない、返せない。

あいつと俺とは別になんでもないのは事実である。赤の他人ではないにしろ、知り合いかと言われたら首をかしげる程度。どんな関係と言ひ表すには関係が薄すぎる。

そういえばリサという名前には聞き覚えがある。湊がその名前を出していたはずだ。ということはバンドを組む前からの関係、友達とかそういういたものなのだろうか。

ふと気になって関係を訊ねてみれば幼なじみと返つてきた。なるほど、となればあいつとは長い付き合い。ならばしっかりと手綱を握つて欲しいものだ。

「で、話は終わりか？」

「あー、これは話つていうかお願いになつちゃうんだけど……」

「お願い?..」

俺とリサが会ったのはこれが初めて、関係といえるようなものは名前を一度聞いただけ。リサが湊になって言われたのかはわからないが、お願いなんてされるようなことは思い付かない。

ライブハウスの代金をツケてくれとかならば突っぱねようと思ったが、彼女が発した言葉は不思議なものだった。

「友希那と仲良くしてあげてほしいんだよね」

「……俺がそうする必要はないだろ。そっちの方が付き合い長いんだし」

「それはそうだけど……アタシって音楽やめてた事があってさ。だから音楽の事は蒼音の方がわかってあげられると思って」

「俺は現在進行形で音楽をやめてるが」

リサは相当な世話焼きなのだろう、それはこの短い会話だけでもわかる。まあ、幼なじみという補正込みであって誰にでもというわけでもないかもしれないが。

俺だってピアノはやめている。だったら俺よりも今音楽をやっているリサの方がまだいいだろう。

そもあのメンバー全員が音楽をやめていたわけではないだろうからそういったことはメンバーに相談すればいい。であるから、彼女のお願いを叶えてやる必要はなくて

「あれ、そうなの？ 友希那は凄い腕前だつて褒めてたけど……」

「もうやらないつて決めたんだよ」

「え、アタシも聴いてみたいんだけどな」

「……そろそろ行かなくていいのか？」

「だね、あんまり長く話していると紗夜に怒られちゃうし」

メンバーだからこそ相談できないことはあるかもしれないから、そういう時にはよろしくね。そう言つてリサは扉の中に消えていった。

相談できないメンバーつて、それは本当にメンバーと言えるのか？ そんなことを思いながら次の客を待つことにする。

とんとんと、カウンターを指で叩く音だけが聞こえてきた。

そろそろバイトも終わりの時間、湊達が部屋から出てきた。他の客が来て、それが帰つてもまだ残つていたのだからそのやる気が伺える。

「あ、あのっ……」

「りんりん、早く帰ろ」

「え……あ、うん」

そんな彼女達の内の一人、りんりんと呼ばれたその人は俺に話しかけようとした素振

りをしたが、紫色つぼい髪色をした背の小さい子に呼ばれ、その子の方に向かっていった。

何か用でもあったのだろうか。気にしたところでわかるはずがない。それにしても胸でかいな、そんなことを思いながら彼女の顔を見ていとふと目が合うがすぐにそらされる。

気づかれたか、この視線に。

女は視線に気づきやすいとどこかで聞いたことはあるがそれなのだろうか。少し申し訳ない気持ちになって、鼻の下を触れてみるが何の変化もない。

下心的なものは抱えていない。まあ説得力は自分でも笑えるくらいにはないのだけれど、本当だ。

湊達が出ていって数十分後、俺もバイトが終わり外に出る。曇りの空はなんとも不安で、雨が降りだしてきてしまいそうな雰囲気がある。

雨は嫌いだ、理由は山のようにあるし、その全てはくだらないこと。降らなきやいなと思いつながら道を歩く。

「来月のあの日は……バイトはなかったっけか」

湊達のライブの日、多分その日はバイトもないし予定もない。行ってみるかと思わされた、それはあいつらの音楽に興味があるから。

湊の歌声は素晴らしい、それだけは否定しないし出来ない。それだけでなくあいつがこれでもいいと思つて集めたメンバーでのライブ、それが気になった。

「そういえばあいつらのバンドの名前聞いてねえや」

まあ行けばわかるか、そんなことを考えながら空を見上げる。

当然空は灰色一色。ため息がまた一つ零れてしまった。

どう思っているのだろうか

音楽というのは目を瞑って聴いた方がいいとされる。

視覚からの情報が遮断されて聴覚が敏感になる。なんて理論的な事が言われているが、自分でそう思って、子供の頃からそう教わっていただけだ。

Rosealia、そう呼ばれたバンドがステージの上に出てきた。そこには俺のよく知る奴がいて。

どんな演奏をするのだろうか。そう思いながら演奏が始まるのを待つが、物寂しさに指先同士を擦り続けている。ああ、どうやら俺は随分と楽しみにしているようだ。

湊はここでも人気者なのか、バンドを組んでることについての疑問の声が聞こえてくる。まあ、孤高と呼ばれていた奴が突然バンドを組めばこうなるか。

開始前だというのに少しざわついている室内、それを始まりを告げるドラムがかき消した……

音の粒が溶け合って一つになっている。一曲目、二曲目と進む度にRosealiaの世界に吸い込まれていく。下手なメジャーバンドなんかよりもよっほどいい、そうさえ思わされるのは知り合いだからか。

まさか、そこを誤るほど腐ってはいない。

こいつらがバンドを組んでから初めてのライブ。だというのに緊張している様子は欠片もなく、まるで楽しんでるかのようすに見えてくる。

未だに聞こえてくる周りから聞こえてくる言葉からしてどうやら音楽ライター達の目にも止まるほどらしい。

視線が自然とステージの上に持つていかれる。そう、視線がステージに持つていかれる。

こいつらの曲は目を瞑ることが出来なかった。なんでなのか、どう思わされてなのかはわからない。

指の動きに注目していたから、それが無いわけでもない。しかし前の方ではないからそこまで見えるわけではない。湊の、Roseliaの人達の表情から目を離せなかった。

楽しそうな表情、特に湊がうつすらとだが浮かべているその表情から、目を離すことが出来なかった。

「ラスト、聴いてください」

まるで風邪でも引いたかのように思考が纏まらない。心の奥底に火でもついたかのような熱さを感じさせられる。最後の曲を聴いていると、それがより一層浮かび上がった。

てくるように感じられた。

これはなんなのか、どうして浮かんできたのか、それは俺自身でもわかることはない。今日はバイトはなく、しかしながらこれといった予定もない。家にいるとなんだか落ち着かないから行く宛もなく外をぶらつきまわる。

昨日の熱は未だに引いておらず、渦巻くようにして胸の中で確かに感じ取れる。ファンになった、言うだけなら簡単だが実際にそうなるとは思わなかった。

確かに凄いとは思っていた、確かに気になっていた。でもそれだけで、ファンというには程遠かったというのにそうさせられてしまった。

「あれは……もしかして湊か？」

ふと目についたその後ろ姿。長い銀色の髪が背中にかかっている。そうではないかと思わされたが、顔は見えないので確証はない。

しかしその周りには沢山の猫がいた。腰を落として猫用のおやつをあげていてそこそこ懐かれている様子を見るに俺の予想は恐らく当たりで。

「あの……」

「はい……し、新庄君！ どうしてここに……」

「散歩してたら偶々」

「こ、これは……そう！　リサから猫用のおやつを貰ったのだけど持って帰るわけには
いかないから……」

声をかけてみたらやはり湊だった。振り向いて俺の顔を見た瞬間に立ち上がり聞いてもいない言い訳を言ってくる。

この前の口振りからこいつは猫は飼っていないだろうし、そんなやつに猫用のおやつを渡すやつなんていないだろうからそんなことはすぐに嘘とわかる。

ほんの少し顔を赤らめられる。昨日と同じ人物だとは思えないその姿はなぜだか見ていられなくて、俺は猫の方に視線を向け腰を落とす。

「……そういえばあなた、昨日来てくれたのね」

「なんで知ってるんだ？」

「ステージの上からはよく見えるものよ」

湊は再びしゃがんで猫の方を見る。俺の方にも一匹やってきたが撫でることはしない。俺には家で買ってるやつがいるのだから浮気をするつもりはない。ただ眺めるだけだ。

俺と湊は顔を合わせることなく、それでも会話は続いていく。

「あなたが昨日のライブどう思ったか、聞かせてくれないかしら？」

「よかったよ、凄く」

「そうじゃないわ、感想じゃなくて改善案が欲しいの」

そんなもの見当たらない、というわけはない。音楽において完璧という事象は表現として出すことはあれど、事実としてはありえないし、音楽をやっていた身としてはそれに気付けないということもない。

個々の技術面はどうこう言うつもりはない。それこそリサが少し遅れてしまう事があつたのが気になつたくらい。

だが初めてということ緊張をしていたということもあるのだろう。それにこれに關しては練習をしていればどうにかなる、ライブの回数を重ねれば緊張だつて次第に和らいでいくだろう。

そも俺はベース経験者でもないのだから言えることもないし、未経験者に言われてモチベが落ちる、なんて事を言われてしまったら困る。

唯一経験したことのあるピアノ、まああれはキーボードなのだが……あれはよかつた。あの人も緊張していたのかわからないが、音が少し硬いように感じさせられた。

ああ、懐かしい。俺もコンクールに出始めた頃はあんな風に音が硬かつたような覚えが……

「……ああ、思い出すな糞」

「どうかしたの？」

「なんでもねえよ、強いて言うならまだ音を合わせられるかなって思った」

苦し紛れの嘘ではない。Roseliaが結成されてからそう時間は経っていないのだから完璧に音が合っているということはない。

そも、一人でやるのと他人と合わせるのでは大違いだ。バンドを始めたばかりなのだから伸び代というものはそこかしこに転がっているだろう。

「そう、出来ればもう少し聞きたいのだけど……どこかで休憩しないかしら？」

「バンドメンバーとやってりやいいだろ」

「こういうのは多くの人から聞いた方がいいでしょう？」

断ってしまえばいい、だがそれは出来ないのは何故なのか。ファンになった故か、俺にはわからなかった。

俺はさっさと移動しようと思ったが湊は猫と離れるのが名残惜しかったのか、言い出しつぺの癖して五分くらいその場を動こうとしなかった。

「……なるほどね、次の練習ではそこも意識してみるわ」

この前と同じカフェで珈琲を飲みながら話をする。こいつの砂糖の量は相変わらずで、覚悟していたというのに胸焼けがする。

「あれは……燐子？」

会話も途切れ、帰ろうにもお互いにまだ珈琲を飲み干していないので帰ることもできず二人して外にいた猫を眺めていた。

しかし少し視点を上にあげればそこには昨日のライブでキーボードをしていた人がいた。誰かを待っているのだろうか、周りを見回しながら立っている。

視線に気づいたのかこちらの方を見てくる。しかし俺らを見るなり驚いた表情を浮かべ、逃げるように小走りでどこかに行ってしまった。

「あなた、燐子に何かしたのかしら？」

「してねえよ」

よもや、俺がそういうことをする人物に見えるというのか。人を見た目で判断するなとは幼い内に学ぶものだというのに。

あの人は待ち合わせ現場を見られたくないのか。もしそうでないとするならば……やはりこの前のあれに気づかれてしまっていたのだろうか。

「どうとも思っていないの？」

「何がだよ」

「燐子についてよ、自分と同じ楽器をしているのだから少しは気になっているのかと思ってる」

なんとも思っていない、そう言うのは嘘になる。ではどう思わされたのかと聞かれ

ば自分でもよくわからない。

でもなんとなくだがそれは、俺にとって嫌なものだということだけはわかる。でなければあれほど甘く感じさせられていた珈琲の苦味が戻るはずもない。

いや、これは元のものより遥かに強いもので。

「……俺のことは別にいいだろ、もう誘うこともないんだし」

「……それもそうね」

「そもそも練習しなくていいのかよ、お前の目的通りならコンテストもそう遠くはないだろ？」

「今は個人で課題曲をこなして貰ってるわ」

こいつなら休みなしの毎日二桁時間練習とかやってるのではないかと思っていたが、どうやらそんなこともないらしい。

そもこいつらは高校生、全員の都合が毎日合うはずもないし、ライブハウスだってタダで使えるわけではないのだから当然といえは当然なのだが。

「そういえば……あなたの家の猫は元気にしてるかしら？」

「そりゃあもうな」

「え、えつと……またお邪魔してもいいかしら？」

もう隠す気もないのか、なんの言い訳もせずにそう聞いてくる。

こいつは素直じゃない、そして一度決めたことは絶対に曲げない、そんなやつだ。三ヶ月に満たない付き合いだが、それくらいはわかる。

でもこうして顔を赤らめ顔をそらされながら、しかしチラチラとこちらを見ながら言われるのは慣れていない。

自分で理解しているのかいないのか。人を見た目で判断するなと思ったばかりだが、こいつには自分の見た目を少しは鑑みてほしいものだ。

「……ああ、いいよ」

表面上はあまり変わっていないが、言った瞬間はあつと湊の周りが明るくなったような気がした。

それを感じると何故か湊の事を見ることは出来なくて、外を眺めながら珈琲を飲む。誤魔化すために飲み込んだその珈琲は、先程とうってかわって甘く感じさせられた。

この熱は

「雨……降ってきちゃった」

今日はあこちゃんからNFOをしようという誘いが来てて、何かお菓子と飲み物を買うだけと思いコンビニに来たのだけれど雨が降ってきてしまった。

すぐに帰るつもりだったし、天気も見えていなかったから傘なんて持ってきていない。この服はお気に入りのものだし、今日はもうお風呂には入ってしまったから体が濡れるのは少し嫌だ。

それに、約束の時間まではまだ暫くあるから。

早く止まないかな、そう思いながら雑誌コーナーの前で真つ暗な空を眺める。

こんな雨の日はいろんな事を思い出す。初めてのコンサートの日、上手いかなかったあの日のこと。

彼を、新庄さんの事を知った日を、彼を好きになったあの日の事を。

彼は私がピアノを始めたきっかけだ。今日のように雨の中、そんな日にお母さんに連れて行かれたコンサート。

そこで新庄さんのお母さんの演奏を聴いて私もこうなれたら、なんて思った。

だけれどもステージの上に立つ自分を想像することなんてできなくて、あの人は私と住んでいる世界が違う、私はこうはなれないんだろうなとも思わされて一人落ち込んでいた。

でもその後の彼の演奏、それに私は心を奪われた。いや、演奏の前に彼がピアノの前に座つた時には既に心引かれていた。

顔もよく見えないというのにそんな風にさせられた理由は一つ、紹介された彼が先ほどの女性と同じ名字で、私と年齢が同じだったということだけ。

なんだか見てるこっちまで緊張してしまったのは今でも覚えている。でも私の思いなんて届いてもいないかのように全く緊張した様子なく、とても楽しそうに弾く彼に酷く憧れた。

まるで遠い国の誰か、そう思わされた。そう、世界の違う誰かのようなではない。遠い国、同じ世界で、限りなく遠くにいる人。

て。 同い年な彼だからこそそう感じさせられて、私もこうなれるんじゃないかと思わされた。

あの際の心臓の高鳴りは物凄くて、それこそ演奏に打ち勝つてしまいそうなくらい煩かった。

あの時の演奏は今でも私の中で特別で、大事な物として残っている。

まるで何かが始まったかのような、そんな感覚は人生であれが始めてだった。

「思えばあの時は……まだ憧れてただけだったのかな」

その後お母さんにお願いでピアノ教室に通わせて貰うことにした。ピアノが楽しかった。どんどん上達して、上手くなっていくことが確かにわかったから。

でもピアノが上手くなる度に彼との差がどんどん広がっていつてるような感じもした。彼が出来ることが私には出来ていないと、上手くなってしまったが故にわかってしまったから。

でもそれでよかった。諦めようとしなかった、出来なかった。憧れていたからそれが普通なんだと思えていた。ちゃんと練習して、私も大きくないコンクールでなら受賞をするくらいになることもできるようなれたから。

でもあの日、コンクールで失敗してしまった日。少し挑戦してみようなんて先生に言われてしまつて挑戦をしたけれど、たくさんのお客さんに見られていると思つたら頭が真っ白になって、練習で出来ていたことが出来なかった。

悲しかった、恥ずかしかつた。できるのならば消えてしまいたい。そんなことが頭の中で暴れ控え室で泣きそうになつていたところに彼はやって来た。

「あの曲難しいよね」

「ふえっ……あ、あれは先生が私なら出来るって……」

「でも弾いたってことは自分でも弾けると思ってたんでしょ？」

「そ、そうですけど……私は結局弾けなかったし……」

「やらずに成功するよりやって失敗しろ、母さんがよく言ってるよ」

一体どうして私なんか話しかけたのか、それは今でもわからない。

暇だったからか、私の弾いたものが偶々彼の気になるものだったのか。それとも泣いていて目障りだったからなのか。

でも理由なんてどうでもいい。その言葉は確かに私に突き刺さったから。

今でも鮮明に思い出せる。言葉だけではない。あの時の彼の笑み、何か暖かい感情も全て。

彼は私の次の出番だからあんまりお話出来なかったけど去り際に彼は言った、いつか一緒に弾けたらいいねと。

それだけの言葉で溢れてしまいそうだった涙は枯れたように止まり、彼の演奏を聴こうと控えに向かい足は無意識の内に動いていた。

ステージの上で演奏する彼を見ることは少なかつたわけではない。だけどここの時はいつもと違う風に思わされた。

先程まで話していた彼と、ステージ上で演奏している彼。それが同じ人物には見えな

くて……

——まるで、王子様のように見えたから。

子供らしい、でもその思いは本物で。

それによつて私の中の憧れは形を変えた。憧れるだけには留まらず、私は彼への恋に落ちていった。

「友希那さんとは……どんな関係なんだろう？」

この前あこちゃん待ち合わせをしていた時にカフェで友希那さんと新庄さんが何か話しているのを見てしまった。

もしかして……付き合っているのだろうか。そう思うと胸が苦しくなる。でも私なんかがどうこう思つても何かが起きるわけではないし、起こせもしない。

彼は友希那さんの誘いを断り続けたというのをあこちゃんから聞いた。どうしてなのだろう、彼のピアノは私よりもずっと上手な筈なのに。

「確かRoseliaの……燐子さん？」

「はっ、はい……そうですけど……」

そんな風に考え事に耽つていたら突然横から声をかけられる。もしかしてファンの方だろうか、いや、私なんかになんかそんなものができるわけではない。

きつと友希那さんや氷川さんのファンで、偶々同じバンドの私を見つけたから声をかけただけ。そう思つてそちらを向くと……そこには新庄さんがいた。

頭が一瞬で真つ白になる。夢か何かかと思うほどに混乱し、思わず外に飛び出した。だけれど雨は未だに止んでないどころか先程よりも強くなっている。

まるで閉じ込めるように降るそれ、真つ黒に染まつたかのようなその雨は視界を遮るほどに降り続け、走る車の明かりしか目に映らない。

「傘、持つてないんですか？」

彼も私を追つてか屋根の下に来てそう言つてくる。雨は止みそうにない、だけどこれ以上遅くなるといよいよ濡れて帰ることを覚悟しなければいけないから。

それもあるけど、ちよつとの期待を込めて私は頷いた。

「それなら……入つてきますか？」

「お、お願い……します」

急に顔が熱くなつて彼の顔を見ることが出来なくなつた。どんな表情をしているのか、それは自分でもわからない。視線を落とすのが最大限の抵抗、こんな顔見られたくなくて。

道を聞かれたので答える……嘘のものを。家までは遠くない、普通の道で帰れば5分程度で着いてしまう。少しでも彼と長くいたくて、つい嘘のものを教えてしまった。

「……………」

せつかくの時間なのに恥ずかしくて、何を喋ったらいいかわからなくて会話をすることが出来ない。

望んだ今を夢想していた頃の私はどんな風なことを話していたのか。ああきつと、彼はまだ私にとって憧れで。

私に歩幅を合わせ、車道側を歩く新庄さんの顔は暗くて見えない。彼は今、どんなことを考えているのだろうか。

いや、そんなことよりも何かないのか。そう思つて頭を働かせていると、ついに彼から話を振られてきた。

「Roseliaは上手くいつてますか？」

「は、はい……みんな一生懸命で……どんだん音が合つていつてます」

一度話してしまえばこちらのもの、会話を途切れさせないように話す。その全てどうでもいいこと、それらに私と彼との関係性などありはしない。それでも会話をしていること自体が嬉しく感じられる。

一生懸命に話していると小さく笑われた。あの時の笑顔とは違い、どこか安心していいかのように。

「な、何かおかしなこと……言いましたか？」

「いや、もしかして俺って嫌われてるのかなって思ってたので」

「そ、それは……私、人見知りなので……」

目線が合ったらそらしてその次には逃げてしまったのだ、そう思われても仕方がないのかもしれない。

そんなことはないんですと説明しようと改めて彼の方を向くと、彼の傘を持っていない方の肩が少しだけ濡れていることに気がついた。

彼は優しい人だ、それは付き合いなんで言うのもおこがましいものだとしてもわかれている。

少しの隙間を更に詰める。水浸しになった地面を歩く度にほんの少しの水が跳ねる、錆び付いたかのような匂いが嫌になつた。

「……ですか?」

「あ……はい、そうです」

家にたどり着き、そう言って私が屋根の下に行くと彼は帰ろうとする。

また会える、その確信はある。彼のいたライブハウスに行けば会えるだろうし、そうしなくたって彼と友希那さんの仲を考えればまた会うことはできるだろう。

ではそれに甘えてもいいのか、ただ会えればいいのか。そうじゃない、そんなものじゃない。気がつけば私は、今までで一番大きな声を出していた。

「あのー！」

「……どうかしましたか？」

雨は未だに強い。叩きつけるような音がして、そんな遠くにいないはずの新庄さんが遠くにいるかのように感じさせられる。

ちよつとでも声を小さくしてしまえばかき消されてしまいそう、届かないまま消えてしまいそう。そんな風に思いながら私は声をあげた。

「あの時の約束……覚えてますか？」

また一段と、雨が強くなった気がした。

『りんりん、今日はいんまりチャットしないね』

『ごめんね、ちよつと考え事してて』

子供の頃、まだ小学生の頃のもの。それも対したことじゃない、ふと漏らしたようなもの。だからそう返されて当然で。

嘘を言われていないのは彼の口調からわかる。もしかしたら約束どころか私と子供の時に会っていたことさえ覚えていないかもしれない。

『りんりん、次のフロアでポストだよ』

「うん、気を引きしめていこ」

悲しかった、寂しかった、それは間違いない。あの約束を引きずっているのは私だけ、子供の頃からずっとそれにすがっている。

憧れていた、好きでいた。あの約束が私をピアノに向けさせていた。

なら覚えていないと言われた程度でこの思いは消えてしまうのか。そんなことはない、その程度で消えるものではない。

『ふっふっふ、あことりんりんの消えない闇の炎で燃やし尽くしてくれようぞ！』

燃料なんてこれから手に入れればいい、とにもかくにもこの思いは消えることはい。冷めて覚めようと、例えば雨に当てられても焼き尽くすかのように燃え盛る。

私は彼の事が好きだ。長い間思っていたそれを、今日始めて、本当の意味で再確認した。

『うわーっ！ りんりん、攻撃来てるよ！』

『ご、ごめん、ぼーっとしちゃってた』

……とりあえず、今はNFOに集中しよう。

あいつと俺は

昔から運動が苦手だ。嫌いではないけれど、得意じゃないと言うのすら戸惑うくらいには苦手だ。

走ったりサッカーだったりの腕、特に指を使わない運動であれば中の下程度にはできる。しかし野球やバスケットといったものはどうしようもなく苦手で。

「やったらこうだもんなあ……」

今日の体育ではバスケットをやったのだがパスを取り損ねて怪我をしてしまった。幸いと言うべきか酷くないし痛みが続いているわけでもないのが救いだらう。

ただこんなになってしまったので今日は料理をする気も起きない。帰り道に夕飯を買ったためにコンビニに向かうことにした。

「昔からやったら違ってたんだらうか」

指を怪我するといけない。母親からそう言われて手を怪我する可能性のある運動はさせてもらえなかった。

無論子供同士の遊びならそれでいいとしても体育ならそうもいかない、と本来ならなっていたのだから。

教師としてもそんなの関係ないと言いたかったのだろうが有名なコンクールで結果を出し続け、全国に行つてしまつたりしたせいかな教師側もそれを承諾した。

だから俺は野球もバスケも、休み時間のドッチボールすらやってこなかった。だから、というのは言い訳になるかも知れないが運動は苦手だ。

「……まあ別によかつたんだがな」

あの時の俺は仕方ないと割りきれていた、それでいいと思えていた。

確かに休み時間、外でドッチボールをしているクラスメイトを教室の窓から見るのは少し寂しかったし羨ましくなかったのかと言われれば否である。それでも俺にとつてはそれよりもピアノの方が大事だったからよかつたのだ。

……まあ、今となつてはなんであんなに好きだったのかと問いてしまうほどなのが。

その経験のせいか本を読むことが多かつたし、必然的に本が好きになつてどんどんとインドアな人間に。

更に他人と遊んでも来なかつたので友人関係も少ない、どうしようもない人間になつてしまつたものだ。

「いらつしやいませー」

そんな声を聞き流しながら雑誌コーナーへ。立ち読みできることに感謝しながら週

刊誌を読み、あらかた読み終えたところでカップ麺と飲み物を買ってレジに向かう。

「カップ麺は健康に悪いぞ〜」

「……なんでこんなところでバイトしてんだ？」

「何それ、アタシがバイトしてるのがそんなにおかしい？」

「まあ、似合わないよな」

「あはは、まさか正面から言われるとは……」

馴れ馴れしい店員だなど思ったがその声は聞き覚えがあり、視線を向ければすぐに誰かわかった。

似合わないとは言ったものの見た目ではなく雰囲気の話だ。とてもじゃないがコンビニでバイトをしているようには思えなかったから。

「いやあ、自分でも似合わないかなあとは思ってるんだけど、Roseliaの活動のためにもお金が必要かなって」

「ああ、そういう」

ライブハウスだってタダじゃないし弦の張り替えもある。確かにサはベースだったし、ベース弦はギター弦よりも割高だからそういうのもあつてだろう。

レジに商品を出すと指の怪我について触れられ、その後自分の手と見比べるかのよう
に俺の手を見てきた

「蒼音の指って長いよね」

「そうか？」

「ちよつと羨ましいなあ。隣子も長かったし、ピアノやっているとそうなのかな？」

「……さあ、俺はそういうのあんまり詳しくないから」

ピアノと指の長さに関係があるのかは知らないが、届くようにと毎日指を広げていたのだからそうなるもおおかしくないのかもしれない。

「明日って時間ある？」

「5時くらいまでバイトあるからそれ以降なら」

「アタシ達も丁度それくらいまで練習だし丁度いいじゃん。少し話がしたいんだけど

……いいかな？」

「暇だしいいよ。そっちはどこで練習を……」

「いや、アタシがそっち行くからいいよ」

「はいよ」

商品を受け取って店を出ようとしたら呼び止められて、そんな会話をしてからコンビ二を出る。話ってなんだろうか、考えてみるが思い付く気配もない。

まあ明日になればわかるか、そう思って帰り道靴からスマホを取り出した。

「で、話って?」

バイトが終わるとリサが店に来たが、ここだとなんだからと言われカフェに向かうことになった。

最近ここによく来るなんて思いながらいつもと同じく珈琲だけ頼む。リサは紅茶にお菓子と頼んでいたが。

「今回の話っていうよりもお願いになっちゃうんだけど……」

「また湊の話か?」

「違う違う、今回はアタシ自身のやつ」

飲み物が俺とリサの前に運ばれてくる。リサは一口それを飲むがホットで頼んだので当然熱い。あちちと漏らしながらリサはそれを置く。

「えーつとね、今回のお願いつていうのは……アタシに音楽を教えて欲しいの」

「……俺はベースやったことないし、音楽はもうやってないって言っただろ」

「もう、でしょ?」

その目は真剣で、欠片の冗談も含まれていないのが嫌にでもわからされた。

「勿論技術面は自分でどうにかするけどさ、ここはもう少し強く弾いた方がいいとか、そういうのを教えて欲しいの」

「それこそ俺じゃなくてメンバーとやった方がいいだろ」

「それはそう、なんだけどさ」

まるで聞きづらいことを聞くかのように視線をあちらこちらに向けながら、いつの間にか運ばれていたお菓子を一つ食べ、自分に指を指しながら聞いてきた。

「……Roseliaで一番下手なのって、アタシじゃん？」

「……まあ、そうだな」

「相変わらずはつきり言うなー……」

でもやめてた時期もあつたんだししようがないだろ、そう言いかけたところで真つ直ぐとこちらを見るリサを見てその言葉を飲み込んだ。

多分、リサが音楽を教えるって欲しいと言ってきた理由は……

「アタシも上手くなってるって自覚はあるんだけどさ、どうにもみんなが凄すぎて、本当にアタシがここにいていいのかって偶に思っちゃうんだよね」

「他のメンバーから出て行って言われなきゃそれでいいだろ」

「そうじゃなくて、アタシはみんなにいて欲しいって思ってもらえるようになりたいんだよね」

自分の実力が足りていないのを自覚しているから音楽を教えるって欲しいと、メンバーと一緒にいることに胸を張れるようになりたい、要はそういうことだろう。

「……でもそれ、別に俺じゃなくてメンバーとやればよくないか？」

「うーん……やっぱりき、隠れて上手くなって驚かせたいって思っちゃわない？」

——お母さんが公演に行ってる間にたくさん練習してびつくりさせたいんだ！

リサが笑いながら言ったその言葉に、ふと昔父親に言ったその言葉を思い出す。

ああ、あの時は本当に母親が、ピアノのことが好きだった。それこそまるで、今の自分とは違う人物だと思ってしまうくらいには。

「……どうかしたの？」

「……なんでもねえよ。わかった、手伝ってやるよ」

「ありがとう！ 報酬は……アタシの手作りクッキーでどうだ」

「期待しとくわ」

「友希那にも好評だからね、期待しといていいよ」

その言葉でつい顔をしかめてしまう。自分から提案するということは少なくとも不味くはないのだろうが、あの湊に好評となるとどれほど甘いのか、想像がまるでつかない。

ただ一度期待すると言った手前やっぱりやめると言うことも出来ない。俺のしかめた顔を見てかりサは不思議そうに訊ねてくる。

「どうしたの？ 友希那の名前が出たら急に嫌そうな顔したけど」

「いや、あいつが好きってなるとどれだけ甘いんだろうなって」

「そこは大丈夫だから安心しなつて」

それもそうか、もしあの珈琲と同程度に甘い菓子を渡されても処理に困るだけだ。

もしリサも湊と一緒に極度の甘党だからこう言っているのなら……隠れて湊に渡すしかないな、菓子を食べているリサを見ながらそう思う。

「それにしても友希那が甘いのが好きってなんで知ってるの?」

「……ここで珈琲頼む時、あいつ滅茶苦茶砂糖入れるからそりやわかるさ」

「ふーん、一緒にここに来た時があるんだ」

「言つても二回だけだぞ」

「二回もかあ。友希那がそんなに仲良くしてる人久しぶりに見たかも」

「二回でそれって……あいつ、友達いるのか?」

二回程度でそんなに言うのなら、あいつの交友関係はどうなっているのだろうか。それこそ *Rosealia* しかないのではないか。

まあ、それこそ俺が言えた話ではないのだけれど。

「クラスが違うからなんとも言えないけど、多分一緒に出かけたりとかはしてないと思うな」

「……つまりぼつちか」

「そこまでじゃないと思うけどね。まあそういうわけだし、蒼音も引き続き仲良くして

あげて？」

思い出される嫌な記憶。親が出ていったと知れ渡った時のクラスメイトからの哀れみと興味、その二つが入り交じった視線は今でも思い出せる。

まるで檻に入れられたパンダ。あの時のあれは今でも鮮明に思い出せるし、出来れば思い出したくない。俺は、なにも悪くない筈なのに。

そこまで酷くないにしろ音楽に身を委ね、交友関係も少ない。

また少し知れた湊のこと。あいつに対して少しだけ、自分が重ねてしまつて。

「そうだ、連絡先交換しようよ」

「急だな、別にいいけど」

「教えて貰うときもあつた方がなにかと便利だしね〜……つてアイコン猫なんだ」

「何か悪いのか？」

「いや、なんか意外だなつて」

猫といえば友希那も実は、と話を始められた。それはどんどんと派生していき、話が終わる頃にはリサの紅茶は冷めきつていた。

記憶の底に

俺は本が好きだ。漫画やライトノベル、歴史書なんてものまでも偶に読む。ただ一番に好きなのは小説で、バイト代の殆どはこれに消えている。

小説を読んでいると偶に自分でない誰かになったかのように感じることもある。自分を小説の中の人物が上書きして、本当にそこにいるかのような。

そんな感覚が好きだ。暇を潰せるからというのもあるが、一番は自分の世界が広がる。そんな気がするから。

「いっぱい買っちゃったな」

信号で待つている間に買った本を鞆にしまう。まだ昼飯も食べてないしどこか寄つていこうかな、そんな事を考えながら歩いているとすれ違い様に声をかけられた。

「新庄さん……ですか？」

誰かと思いい振り返るとそこにはリュックをしょって、右手にでかい袋を持った燐子さんがいた。

買い物帰りなのだろうか。少なくともまだ昼だから練習帰りということはないだろうし、これから練習に行くという風には見えない。

「この前はありがとう……ございました」

「いえ、大したことじゃないですし……」

そう言うとは何か変な空気に。それっぽく言ったが自分の家に人を入れるなんて大層なことだ、それも異性となれば更に。

そう言えばよかつたのかもしれないが、変な風に誤解されるのもあれだ。気でもあるんじゃないかと感じられたらたまつたもんじゃない。

こんな時に限って信号は中々変わらない。話す物も簡単には見つからないから、少し嫌だけどあの話題を出すことにした。

「あー……あの時の約束ってやつですけど……ごめんなさい、やつぱり思い出せませんでした」

「い、いえ、大丈夫……です。大したことじゃ……ないですから」

あのうるさい雨の中、確かに聞こえたその言葉。あの時は急だからというのもあった、しかし時間をかけて思い出そうとしたが本当に覚えていなかった。

そも会ったことすら覚えていないのだ、約束をしたかどうか、その内容までなんて覚えていないはずもない。

でも覚えていないと答えた時のあの悲しそうな顔は、視界を遮るような真つ黒な雨の中でも確かに見えた。

今回だってそう、大したことじゃないと視線を下に落としながら答えるその姿はどうか悲しそうに見えてしまう。

だというのにそれがなんなのかを聞こうとすれば誤魔化される。隠されてしまうと気になってしまうのは仕方がないだろう。

「えっと、この後って時間ありますか？」

「は、はい……今日は *Rosealia* の練習もないので」

「それなら……どっか寄りませんか？」

俺がそう聞くと燐子さんは酷く怯えたようにひっと声を漏らす。やはり嫌われていてるのではないか、そう思わされてしまうような反応。

もしかしたら思い出せるかもしれない、そう思つての誘いだつたのだがやはり急すぎたか。

駄目なら大丈夫ですよ。そう言おうと思つたのだが燐子さんは俺の言葉よりも早く、肯定の言葉を被せてきた。

「どこに……寄るんでしょうか？」

「……嫌ならいいんですよ？」

「だ、大丈夫……です」

「それなら……駅前のカフェにでも行きませんか？」

目線をそらされながら言われるのでやはり嫌なのだろうか。更に一步引いたかのようには答えられるので周りからは俺が暴力的な人間に見えるかもしれない。

それも込み、単純な善意も込みで荷物を持ちましようかと訊ねるがそれも大丈夫ですと答えられた。

単純に持たせるのが悪いと思ったのか、中に入ってるものが壊れやすいものなのか。はたまた俺のような人間に持たれたくないのか、そのどれかは俺にはわからない。

一步だけ、俺と燐子さんの間の距離が遠のいた。

「おまたせしました〜」

カフェに来たはいいものの先ほどのせいかなんだか話しづらい雰囲気を感じてしまい、結局注文するものが届いてくるまで話すことはなかった。

誘ったのはこちらなのだから流石に悪いと思いつい何を話そうかと思案する。

思い出せるきっかけとなるものが理想なのだろうが、それで思い付くなら苦労しない。

何でもいいとは思っているものの流石に変なことを聞くわけにはいかないし、とりあえずと当たり障りのないことを聞くことにした。

「今日は何をしてたんですか？」

「買い物に……行ってきました」

「何を買ってたんですか？」

「えつと……」

そこで会話が止まる。答えにくいものなのか、やらかした。答えなくても大丈夫ですよと言おうとしたところで燐子さんの方から話しかけられる。

「新庄さんは……何をしてたんですか？」

「本を買ってました」

「本……好きなんですか？」

「そうですね、燐子さんは本読みますか？」

燐子さんは小さく頷いて、それに対し俺は小さく喜んだ。話の種が出来た、それもあるがもう一つ、もしかしたら本好きの人と話が出来るかもしれないという喜び。

数が少ないせいかわり合いに本が好きなのは一人もいない。それこそSNSの人とおすすめしあうくらいしか出来ないが、やはりネタバレ防止というのもあり話すことなど殆どできない。

だからこそ本について話せる人というのは欲しい。好きなもののジャンルが合っていればこの上ないが、別のジャンルを知れると思えば良いことだ。

「好きなジャンルと違ってありますか？」

「特に好き嫌いはい……ないですけど、クロスワードとかそういうのが……好きです」

「それなら今度俺の好きな本貸しましょうか？」

「な、なら今度私のお気に入りの本も……貸しますね」

「お願いします、つい嬉しくなりほほ反射でそう返した。何を貸そうか、出来ればマイナーなやつの方がいいだろう。」

「だがしかしきちんと面白いもの。クロスワードの本は持っていないが、クロスワードが好きならばあれとかいいかもしれない。」

「そんな事を考えているだけでとても楽しい。今どんな顔をしているのかわからないし、わかりたくもない。だがここまで楽しみだと思っただけは久しぶりだ。」

「ふと燐子さんの方を見ると顔をそらされてしまった。顔が少しだけ赤くなっていたが実は熱でもあるのだろうか。」

「あの……えつと……」

「具合が悪いなら帰っても大丈夫ですよ？」

「い、いえ……そういうわけでは……」

「ならいいのだが、一体どうしたのだろうか。結局俺は当初の目的も忘れ、約束なんて一切思い出す気配もなく数十分ほど話してから燐子さんと別れ家に帰った。」

「あー、うるせー」

家に帰り今日買った本を読もうと思ったのだがどうやら近所で工事が始まったらしく、その騒音はなんとも激しいもので耳障り。

本来なら音楽を聴きながら本を読むことはしないのだが今回ばかりは仕方がない。騒音を聞き続けるよりはいいだろう。

何を聴こうかと思つたが、昨日リサから *Rose lia* が練習している時の動画が送られてきたことを思い出した。

バックグラウンドとして聴くのはなんだか悪い気もするが他に聴きたいものもないし仕方ない。それにこれ一回だけでどうしたらいいのかを教えるわけではないのだし。

……あと、あいつらの音楽は嫌いじゃないから。

ページの捲る音、それは音楽に隠されて聞こえない。一度聴き終えたらいちいち本を読む手を止めてまでリピートする、それをさせられる程の力がこの動画にはあった。

無論本への集中が出来ていない証拠なのだがそれでもいい。というよりも途中から買ってきた本を読むのをやめ、隣子さんに貸すような本をどれがいいかと積んである本から探していた。

一度読んだ本、しかしそれでも自分で面白いと思えた本。それでもこの耳から聴こえるものに勝るものは未だに見つけられなくて。

「にしてもほんとにいい音してるよな……」

俺はピアノノ以外何もわからない。だから湊がどのような技術を用いているのかはわからないし他の楽器も同様だ。

だがいい音を出している、それだけは確かにわかる。こうして次の本を探す手を止めて聴き入ってしまうくらいには。

ここまでの演奏はライブハウスで長い間バイトしているといえ聴いた覚えがない。

これでいいかと本を探し当てると葉を挟んで閉じ、この演奏を聴くことに集中するよとにした。

「隣子さんの音って……」

確かに聴こえてくるキーボードの音は優しくて、どこか安心するかのような音で、この前のライブより遥かに柔らかいものが聴こえていた。

本人はあのように人見知り。というよりかはおどおどしているのは演奏にも反映されていて、少し音が他と比べて弱い。それでも上手だと思わされる。

自己評価だが音楽についてはなかなか口うるさい方だ。というのも小さい頃からピアノニストの母親の音を聴いていたのだしそうなるのも仕方ないだろう。

それでも素晴らしいと思えるこのキーボード、その音はどこかで聴いたことのあるようなもので……

「……聴き覚えがある?」

つい口からそう溢れてしまう。似たような、ではない。この音には聴き覚えがある。勿論多少の誤差はある。しかしこの優しくて、安心するかのようなこの音は、記憶の底にあつたものと照らし合わせれば一致した。

ということは俺は隣子さんの演奏を聴いたことがある、つまりはどこかで会つていたことがあるということだ。

しかもこうして覚えているということは……少なくとも一度ではないと思う。

ならこれはいつのものなのか、どこで聴いたものなのか。

それはコンクールで、何度も聴いたもの……

「っ……………」

イヤホンを外す、本に挟んだ葉が落ちる。だからどうした、それだからといって大したことではないだろう。俺には既に関係のないものだとは何度自分で思ったものか。

ああ、そうわかつている。ならなんなのだろうか、このイラつきは。

「……寝るか」

外から聞こえてくる工事の音に漏らしたその声はかき消され、いつの間にカラカラまで渴いた喉に冷蔵庫から水を取り出して入れる。

寝室に向かう途中中目に入ったあの部屋を、なぜだかわからず見つめていた。

彼女と会ったことがある。なら約束とは一体何なのか、もしかしたらあの部屋に入ってみればわかるのかもしれない。

だけど……ああ、昔を思い出すような事はしたくない。悪いけれど、彼女にはごめんなさいと偽ることにしよう。

「俺は……ピアノは嫌いだ」

何故だろう、本当によくわからないことばかりだ。それこそどうしてそう眩いたのかすらわからない。瞳を閉じて目を覆う。

だけれど瞳の裏に昔の光景が浮かんできて、そのせいか眠ることはおろか落ち着くとさえ出来なかった。

私の気持ちは

私には目標がある。

大きな、とても遠くて届かないまま終わるかもしれない目標が。だけど絶対に、何をしてもたどり着かないといけない。

だからそれのためには、全てを捨てる覚悟もある。

だというのに私は一体何を迷っているのだろうか。

事務所からの誘い。今まで断ってきたそれに二つ返事をする、首を縦に振る。たったそれだけ、その手をとるだけで私は長年の目標を達成することができる。

そうわかっていたというのにあの場では答えを出せなかった、出すことが出来なかった。以前の私であれば即答であつたらうに、私は時間をくださいと言ってしまった。

その答えを曇らせたのは *Rose lia* の存在。私はあのバンドにどこか期待をしている。いや、期待と言うよりも確信に近いと思う。

Rose lia としても、フェスに出ることは出来る……

「いえ、もう迷ってる時間はないわね……」

言われた期限は一週間。既に六日が経っていて明日には答えないといけない。

……いや、迷うことなんてない。Roseliaとでもフェスには出れるかもしれない。確信めいてはいても確実ではない。

長い間の目標がやっと達成できるのだ、それも確実に。ならばどちらを取るのかなんて明白で。

「私は……」

お父さんの音楽を、世間に認めさせてやる。だから……私は絶対にフェスに出なければならぬ。

部屋の電気を消す。もう決めた、早く日が過ぎてしまえばいい。そしてあの手を取ってすべてを早く決めてしまいたい。

無理矢理に時間を潰すために眠ってしまおうと思っているのに全く眠れる気配がない。何故か、それは音が頭の中で響いているせい。でもそれは騒がしいわけではなくて、寧ろ心地のよいもの。

ならばなぜ眠れないのか。確かに睡眠導入に向いたものではないけれど、それは私がその音に聴き入ってしまったているからで。

それが何かはわからない。もしかしたら変な病気にでもかかってしまったのか。

音の流れていないヘッドホンを付けてみても全く消える気配がない。まるで私が眠ることを、私の決定を許さないかのようその音は休むことなく響いている。

「……外にでも出ようかしら」

どうせ眠れないのなら外の風にでも当たって少しでも落ち着こう。そうすればこの音も消えてくれると信じて。

まだ着っぱなしだった制服から着替え外に出た。まだ夜遅くはないけれど暗くはなっていて、空には月が浮かんでいる。

行く宛もなく歩く。そういえば今日は帰ってから何も食べていない。ほんの少し思えばだんだんと思考を空腹に支配されてきた。

そんな事を考えていたらやがて歩くのさえめんどくさくなり、偶々辿り着いた川岸の手すりに手をかけ空に浮かぶ月を眺める。

この時間、周りには誰もいなくて私一人。川の流れる音、頭に響く何かだけが聞こえてくる。

ああ、残ってしまったているこの思考も、頭に鳴り響く音も、川のように流れてしまえばいいのに。そんなことを考えていると一つ、新しい音がやって来た。

「お前、なにしてんだ？」

その声の主は私の隣に移動して、だけど私と真逆に手すりに背中からもたれ掛かる。

「……バイト終わりかしら？」

「いや、散歩」

何でもないかのようにそう言ってくる。それもそのはず、彼は知らないのだから。ではなぜこんな風に隣にいるのだろう。いつもの彼なら会話がないならどこかに行つてしまふようなものなのだが。

風が吹いた。ざわざわと葉が揺れて、髪の毛が視界に映り込んで見上げていた月を隠す。手でそれを払うと彼が声をかけてきた。

「お前ら、今大変なんだつてな」

なぜそれを、どこからそれを。ああ、この事には構つてほしくない。決めたから、揺らいでほしくないから。頭の中で未だに響く音、それを強くしてほしくなかつたから。顔も合わせず、だというのにその言葉は真つ直ぐ私に刺さつてしまった。

「……あなたには関係ないわ」

「ああ、俺には関係ない」

「それなら」

私に構わないで、そう言おうとしたところで彼は手に持っていた袋をこちらに見せてくる。

変哲の無いただの紙袋。中身も見えなければ予想もつかない。その中から彼が取り出したのはクッキー。それを一つ食べてから私に言う。

「リサから頼まれたからな」

また、またリサなのか。リサがいると音楽にちゃんと向き合えない。揺らいで、悩んで、迷ってしまう。

ただこれは彼には関係の無いことだ。だから彼になんと言われようと、彼がリサになんと言われていようと揺らぐこともないし、迷わされることもない。その筈なのに……

「……あなたは、どうしたいの？」

「どうしたいって、何がだよ」

「わかってるでしょ。私にどうさせたいの？」

「俺がどうこうすることじゃないだろ」

リサのように優しくはしてくれない。冷たい、だけどそれは正しくて。私自身そうして欲しい筈なのに、不思議な感覚に襲われる。

今回だってそう。私が全部悪いのに、私の自分勝手にこう悩んでいるのに。だから構ってもらわなくなってきたいいのに、一人でいいのに、その筈なのに……

——私は、誰かの助けを求めている。

「お前はどうしたいんだ？」

「……気持ちだけじゃ、音楽は出来ないわ」

お父さんの音楽を認めさせる。それだけを思っていた私が漏らすにはなんとも滑稽

な言葉。

リサにも同じように返した、だけどあの時とは意味が違う。あの時は単純にリサの気持ちに対して、だけど今回は……私の気持ちに向けて。

息ができなくなってしまうくらいに胸の奥が締め付けられた。

「それはわかるけど……なんというか、あれだろ」

そこで彼の言葉は止まる。言いづらいことなのか、空に視線を移し、見えないはずの彼の顔が少し険しく見えた。

突然、強い風が吹いた。先程よりも強いそれによって髪が再び視界を隠し、手でそれを払う前に彼は言った。

「好きな事を我慢するのは……違うだろ」

手で髪を払った頃には彼は真っ直ぐ、どこでもないところを向いていた。その言葉は誰に向けたものなのか。私に対して、それはあるのだろうか……まるで、自分に言い聞かせるかのよう。私の勝手だけど、そう思わされた。

「別に、好きななんかじゃ……」

つい怒鳴ってしまいそうになったが、それはスマホを急に私の目の前に突きだしてきて彼によって止められる。

それはリサとのメッセージ欄らしく。そこには一つの動画が貼られていた。そして

そこに映っていたのは……私と、Roseliaのみんな。

「本当に好きじゃないなら、こうはならないだろ」

再生されていくその動画。ヘッドホン等は付けていないが周りが静かだからよく聴こえる。

聴こえてからではない、画面を見た瞬間にわからされた。頭に響いていた音の正体はこれだと、私はこれに悩まされたのだと。

「私は……いつから……」

こんな風に、楽しそうに音楽をしていたのだろう。自分では気づかないようなことなのに、見せつけられることで無理矢理にでもわからされる。

私はRoseliaで奏でる音楽が、Roseliaが、好きなのだ。

胸にストンと落ちるようにそれは自然に、まるで最初からあったかのように理解できた。

でもそれだけ、それだけだ。Roseliaのことが好き、でもそれこそ気持ちだけ。好きというだけで結果を出せるとは限らない。

「……好きなだけでは、フェスに出れるとは限らないわ」

「お前がフェスに出るために集めたメンバーなんだろう？ なら、いけるだろ」

「根拠もなくそんなこと言わないで！」

「ああ、根拠なんかない」

ならこんな、惑わせるような事を言わないで。言葉にならないそれを叫んでしまいうになる。私は、私は……

どう、したいのだろう。

「お前はもうどうしたいんだ？」

「私……は……」

フェスに出場する。それより先に浮かんできたものは、Roseliaと音楽をした
いという感情だった。

でも、でも、でも、それでも私はフェスに出なければいけない。それが確実に、目の
前に頑強な階段のようであって、それに対抗するかのように細い蜘蛛の糸がある。

そのどちらを取るのか。そんなもの明白な筈で……

「俺は、お前ならフェスに出れるって思ってるぞ」

そんなこと、私の方が思っている。また風、少し冷えてきた。背中を押すかのような
それは、私の選択を決めさせてきた。

スマホが震える。何かかと思いいてみると相手は事務所の人。ああ、悩みはもうな
い、既に消えた。私がどうしたいか、それをわかれたから。

「はい………お願ひします」

「ま、後悔しないようにしな」

後悔は……するかもしれない、しないとは言いきれない。でも、少なくとも今は、これでもいいと思えてる。

「あなたには私の誘いを断ったこと、後悔させてあげるわ」

「……期待しないで待つといてやるよ」

そう言つて彼はリサのクツキーを一つ渡して何処かに行つてしまった。

いつもと変わらないリサのクツキーの筈なのに、空腹からか、はたまた別のものかわからないがいつもより美味しく感じられる。

風は強い、それは未だにそう。夜ということもあり少しは肌寒いが……何か暖かかった。

三日後に会つて話がしたいとメンバーに送る。紗夜、あこ、燐子と送り、最後にリサに送ろうとしたところで指が止まる。

——新庄君とリサは、どういう関係なのだろうか。

……いや、それは私には関係の無いことだ。それにどのようであれ、二人が関係を持っていたから今回のことはこうなれたのだ、二人には感謝をしなければならなくて。

「……風邪でもひいてしまったかしら」

自らの額に手を当てる。確かに少し暖かいが、普段と対して変わらない。ため息がこ

ぼれ、それは風に乗って舞い上がる。

靴で軽く地面を叩く、小さく歌を歌ってみせる。私はこの上なく上機嫌で、だけれどメンバーと会う三日後が今から酷く憂鬱だ。

上手く言葉にできる自信はない。謝ったら許してくれるのか、三日後と言わずに今すぐの方がいいのではないか、ぐるぐると、ぐるぐると思考は溶けるかのように頭の中を染め尽くす。

悪いことはないはずなのに、自分で決めた筈なのに。上機嫌な心の裏で私は何かに苛立っている。何に、何故、そんなことすらわからなくて。

不思議な苛立ちは、結局その日に取れることはなかった。

不可解な熱

肌に当たる弱々しい風を感じながら本のページの捲る。休日昼間の公園ということもあり、少しばかりうるさく感じられるもそこまで気にならない。

本来なら部屋で一人静かに読みたいもののだが、如何せんあれだけうるさいと思っていた工事の音がパタンと止むと、ほんの少しうるさくないとそわそわしてしまうようになった。

……いや、これは違うか。静かだろうとうるさかろうと、集中出来ていないということとは変わりない。そしてそれはこの前のことがあったからだろう。

あれからあいつがどうなったのか、俺はまだそれを知らない。知りたいと願っているわけではないが、いかんせん自分が関与したことなのだ、気になってしまうのも仕方がないだろう。

これは燐子さんに貸す予定の本で、折角だからということと読み直している。しかし読んだのもそこまで前の話でもないということもあり内容は殆んど覚えてしまつていて。

相変わらず自分を誤魔化すのは随分と苦手だ。文字は読める、だけれどその内容は浮

かんでこない。浮かび上がるは空想ではなく現実で。

ため息と同時に本を閉じ鞆に入れる。一応葉を挟みはしたが、もうこれを開くことはないだろう。一度やめたことというのは再開するのに労力を要するものだから。

「あれ、蒼音じゃん。久しぶり〜」

気晴らしに外に出て散歩すること数分、自販機で飲み物を買っているリサに遭遇した。鞆を持っているが制服ではないし休日なのに学校があった、というわけではないだろう。

Rosealiaはどうなったのか、それをいきなり聞けるほど命知らずではない。

湊には去り際に後悔させてあげると言われたが、その言葉に含まれた意味を読み取ることが簡単だった。当然、俺の勘違いである可能性はあり、関係のないことであり、あの後心変わりしていないという確信はない。

「何してたの？」

「別に何も。そつちは？」

「友希那とテストの勉強しようって約束だったんだけど、友希那はまだ寝てるのかわからないけど既読が付かなくてさ」

テスト、なんとも嫌な響きだ。そういえば俺もテスト近かったな、なんて事を思い出させられて少しだけ気分が下がる。

点数が取れないわけではないがそれでも面倒くさいのは確か。とは言っても普段授業以外で全く勉強しない、というわけではないので深刻な程辛いとは感じない。

しかし勉強会、そして湊とである。リサからは暗い雰囲気を感じ取れず、これで見ているのならば大したものだ。となれば、答えというのは見えてくるもので。

「蒼音って今暇？」

「見ての通りだな」

「じゃああそのカフェ行かない？ 友希那が来るまででいいからさ」

断つてもいいのだけれど今は燐子さんに渡すようなの本を持ち歩いているし丁度いい。このままリサを通して燐子さんに渡して貰おう。そんな事を考えながら俺たちはカフェに向かって歩を進めた。

「そういえばアタシ達、バンド続けられることになったんだ」

「……そうか、そりゃよかったな」

「うん。コンテストは駄目だったけどあんな楽しそうな友希那を見るのは久しぶりだしアタシ、少し嬉しいんだ」

突然そんな会話を振られた。知りたかったことで、しかし既に知れていたこと。わざわざ礼をされるようなことでもないし、していないと俺自身思っている。

もしリサに頼まれていなかったら、俺は今回と同じことをしていただろうか。頼まれなきやそんな状況だと知らなかったのだから、なんてものは関係ないとすれば……

ふと息をついた。カップから上がっていた湯気が揺れる。それは熱いからと意識したものではなく、無意識に漏れ出てしまったもの。

何かに安心している、どこかホツとしたかのような感覚を覚えた。何故だろう、何にだろう。そんなものこの状況であれば一つしかなくて。

Roseeliaの音楽がこうして続いていることに安心している。どうやら俺は本当にRoseeliaの演奏が好きらしい。

「そうだ、この前のクツキーどうだった？ 甘過ぎたとかそういうのがあったら……」

「いや、美味しかったよ」

「よかった。友希那以外に渡すことあんまりないから不安だったんだよね」

「他のメンバーには渡してないのか？」

「あ、いいねそれ。次の練習の時渡してみるよ」

そんな会話をしていると店の扉が開く。そちらの方に目を向けるとそこにはもはや見慣れたやつがいた。

湊は少し驚いた様子で俺の事を見てくる。まあリサと二人の予定だったのだから俺がいたら驚くのは当然か。

「……どうして新庄君がいるの?」

「お前が来るまでの暇潰しとして誘われてな」

「ちよつとく? アタシはそんなこと微塵も思つてないんだけど」

お前の件についての話をしていたとはリサも言つてほしくはないだろうし、湊もそういうのは知りたくないだろう。

湊が来たのだし俺がここにいる理由はない、というよりいても邪魔になるだけだし早く帰るとしよう。

そう思うものの珈琲を一気に飲み干すにはまだ熱すぎるので、帰るにしてもちよつとはかかりそうだななんて考えていると湊が俺の隣に座つてきた。

リサの隣に座ればいいのに。一瞬そう思ったし言いかけたが、こいつが知ってるかはさておき俺はすぐ帰る。であれば話し相手とは正面に座っている方が話しやすいだろうしこのままでいいだろう。

珈琲から少しでも熱さが消えるのを待っている間に鞆から本を取り出し、忘れないようにそれをリサに渡しておく。

「これ、燐子さんに渡しといて」

「ん? 別にいいけど……どうして?」

「いや、今度本貸すつて話になつたからさ」

「……あなた、隣子とも仲がいいのね」

仲がいい、どうなのだろうか。たまたま趣味が合った程度なのだからそれほどでもない気がするが否定はしておかない。その判別基準は人それぞれだ。

すると暇なのか、湊がその本をリサから取りペラペラととても読めない早さで捲っていくが丁度葉を挟んだところ程度で本を閉じた。

「お前らは本とか読まないのか？」

「たまーにね、恋愛小説とか」

「音楽雑誌ならたまに読むわ」

リサは予想より少しずれた回答、それに対し湊は相変わらず猫と音楽以外に興味がないらしい。わかっていたしどこかそんな返しを期待している自分がいた。

そう、そんな返しを期待した。なぜ期待したかなどわからない。だけれど自分のことだから期待したという事実だけはわからされる。

まあ、理由なんてものは湊にはそうあつて欲しいからなんて程度のものなのかもしれない。

そろそろかと思ひ熱さの和らいだ珈琲を飲み干して席を立つ。本も渡したし、湊も来たから俺がこれ以上ここにいる理由はない。

自分で飲んだ分の金を置き、荷物を持ってその場を離れようとしたところで湊から疑

問の声をかけられた。

「もう帰るの?」

「お前ら勉強するんだし俺がいても邪魔だろ」

「あなたはしないのかしら?」

「用具持つてねえしな」

なぜだろう、別に俺がいがいまいが変わらないだろうにそんなことを。いや、むしろいたら邪魔になる可能性だってあるだろうに。

そんな俺と湊とのやり取りを見てか、リサはいいことを思い付いたかのように提案をしてくる。

「アタシと友希那に勉強教えてよ」

「なんで俺が……」

「もしかして蒼音って勉強苦手だったりする?」

「苦手ってわけじゃねえけど、別に得意ってわけでもないぞ」

「なら余計いいじゃん。人に教えると理解しやすいっていうし」

そう言った後リサは店員を呼び珈琲を二つ頼んだ。リサは先程珈琲を頼んでいないし今あるジュースもまだ飲み終わっていない。

となればこれは俺と湊に向けてなのだろう。逃げ道を塞がれた、こうなつては帰ると

印象が悪いだろう。

俺としてはわざわざ人との関係を悪化させるかもしれないことはしたくない。しかもそれがこいつらとなればそれは更に確かだ。

勉強を教えるとしても何をすればいいのだろう、問題集とノートを開く二人を見て思う。今までそういつたことをしたことはないし、学習塾等にも通っていないからどうすればいいかわからない。

特段することもなく二人の様子を伺ってみるが二人の様子は順調そのものだ。下手に話しかけた方が邪魔になってしまいうだろう。これ俺がいる必要なかっただろ、そんな事を思いながら二人のノートを覗き見る。

リサはところどころ間違えてはいるものの大半は正解している。湊もそんな風なのかと思ひ見てみれば……ノートは見事赤字で染まっていた。

「お前、それ基礎の部分だろ」

「し、仕方ないでしょう。わからないものはわからないのだから」

「にしてもだろ……もしかしてお前、英語以外にもこんななのか？」

「……赤点は取っていないから問題ないわ」

そう言つて湊は黙りこみ目の前に座るリサが苦笑いしているのが見えた。この程度授業を不真面目でも聞いていれば理解が出来そうなものだが。

というか、Roseliaの作詞は誰がやっているのだろうか。それが湊なのであれば、それこそ英語は問題ではないか。

湊から一つペンを借り最初から説明していく。上手く教えられているのかわからないが、ここは基礎の部分なので教えるにしてもそんなにややこしくはない。

一通り教えてみて理解しているかと思えば隣を見ると、湊の顔がとても近くにあった。非常に整っていると改めて思っている。思えば湊の顔をここまで近くで見たのは初めてで、彼女から視線を外せなくなっていた。

「……ちよつと」

数秒後、顔を少し赤くされる。ごくりと喉が鳴る。そうして新しい珈琲が運ばれてくると、俺は飛び退くように彼女から離れた。

熱を感じた。それは今日の前にある珈琲の熱さとは違うもので……

「……トイレ行ってくるわ」

逃げるかのようにして席を離れる。その熱は焼き焦がすかのようで、その場を離れたというのに体の内側で弱まる様子もなく存在して。

これは一体なんなのか。ピアノをしていた時に似たようなものは感じたことはある。でもそれ以外でこう感じさせられたのは初めてだ。

不可解で、だけど気持ち悪いということのないこの熱の正体は一体なんなのだろう。

どれだけ考えてもその答えはでてくれなかった。

昔の趣味

あれは一体なんだっただろう。二週間が過ぎ、それでも尚鮮明に思い出せるというのに未だに尻尾も掴めないでいる。

あの後帰って熱を測ってみたが結果は普段よりほんのちよつと高い程度、感じていたもの比べれば低すぎると言い切れるほどのものだった。

「……人も人が減ったなあ……」

学校のテストも終え、今日はバイトもないので久しぶりにゲームセンターに遊びに来た。と言っても連れがいるわけではなく一人なのだが。

ゲーセンには一時期来ていた。それこそバイトを始めた理由はゲーセンで使うように金が欲しかったからだっったりする。

しかしいざバイトをしていくとそっちが忙しすぎて、だんだんと来る気が起きなくなってしまうという事態に陥ってしまった。本末転倒とはこのようなもののため存在する言葉なのだろう。

最後に来たのはいつだったか。あの頃は人で溢れていて暑さを助長していたとまで思うが、久しぶりのゲームセンターは随分と静かで……勿論ゲームの音は耳障りな程に

聞こえてはくるのだが、少なくとも溢れんばかりの人の姿はそこにはなかった。

廃れてしまったかからか、それとも時間が時間だからなのか。誰かとつるんでいたわけではないし、他人のあれこれを気にしたことはない。だけれども、何故だか随分寂しく感じてしまう。

「あれ、もしかして……蒼音さんですか？」

「ん？」

声をかけられらるなんて思ってもいなかった。もしかしてあの時いた人が覚えていたのだろうか、そんな風な事を思うが声が男にしては高いため、それと名前を言い当てられたためにそれはないと一瞬でわからされる。

「えっと、君は確か……？」

「ふっふっふ、そう、我こそはRoseliaの闇のドラマー。漆黒の……漆黒の……」
言葉につまりうーんと悩んでいるその子はRoseliaのライブでドラムを演奏していた子だった。

随分と悩んでいるようで腕を組み目を瞑って唸ってまでいる。この調子では暫く出なさそうではあるが、遮っては悪いと待つことにする。自分もこういうのにハマったことがあるものだ。もつとも数年前の話ではあるが。

「漆黒の天使、あこである！」

意味ありげにポーズを決めるあちゃんの姿は、キマっているといえそうですが。

漆黒の天使とは、それは墮天使なのではと思いはすれど口には出さないことにした。

「……今日は練習とかないの？」

「あ、はい。今日は練習が休みだからりんりと遊ぼって話になって」

「燐子さんもこういったとこ来るの？」

はつきり言つて想像がつかない。こういったうるさくて人が多いところは好きなところで、加えてゲームとかには興味を持たなそうなものだと思つたから。

偏見でしかないが似合わないと思つたのだから仕方ない。そんなことを思っているとおこちゃんは首を横に振つた。それは否定の意味であり、つまり俺の予想は間違っていないことを意味していて。

「りんりんは人が多いところが苦手だからあんまりこないですよ」

「じゃあ君はどうしてここに？」

「予定よりもだいぶ早く着いちゃつたから時間潰しもかねてババーン！ と音ゲーした
いなって」

ババーンという擬音からしてやるのはあれだろうか。そんなことを考えながら店内を見てみると疑問を含んだ声で話しかけられた。

「蒼音さんもゲームするんですか？」

「あー、昔はしてたけど最近は」

「えー。じゃあNFOってゲームやってましたか？」

「やってたね、と言っても1年以上前の話だけど」

「それならあことりりんと一緒にやりましょうよ！ 復帰キャンペーンもありますし！」

燐子さんNFOやってるんだ、意外な事実を知りつつもその問いには了承の返事をしておく。

勿論やる理由なんていうのものにもないのだが、逆にやらない理由もない。やめた理由も嫌いになったからではないのだしまたやってみてもいいだろう。いつまで続くかは知らないが。

「それにしても少し意外です」

「何が？」

「蒼音さんがゲームやるなんて。友希那さんと一緒にそういうのに興味ないって感じなのかなって思ってたから」

興味が無い、そんなことはない。では興味がある、それも正しいとは言えない。

ピアノをやめて、その癖まわりついてくるそれから逃げるために夢中になれる何か欲しくて、そんな時にクラスのやつが話してるのが聞こえたから始めただけ。

たまたま他の事より長く続けられた。こういうことを一切してこなかったから飽きるのが遅かった、俺にとつてゲームとはその程度のものでしかない。

「そうだ！ 連絡先交換しましょうよ、今度りんりんもやる時NFOに誘うんで」

「うん、いいよ。それより燐子さんの待ち合わせは大丈夫なの？」

「もうちよつと時間あります。あ、蒼音さんも一緒にどうですか？」

「……俺がいたつて邪魔でしょ？」

「そんなことないですよ、りんりんも大丈夫つて言ってくれる筈です！」

何処に行くのかと聞いてみればゲームのイベントらしい。誘われてしまったし、そんなにゲームがしたくてここに来たわけでもない。

ただどほんのちよつぱりでも考えてしまったからか、頭にピアノのことがはつきりと浮かんでしまっている。

それがどうしようもなく嫌で少しでも忘れられるならと、買い物をしなければ無料というこゝで俺はその提案を了承した。

「りんりんくん」

待ち合わせ場所と言われた場所に着きそうになり、燐子さんらしき人が見えた瞬間とこちゃんは燐子さんの元に走って向かっていったのを見て、元気だなあと思いながら俺

もそこに向かう。

ゲームのイベントと言っていたが具体的には何をやるのだろう。まあつまらなくなければそれでよくて、最悪つまらなくなつて構わない。頭がからっぽになれるのなら。

「りんりんくん、大丈夫？」

「ど、どうして新庄さんが……」

「偶々近くで会つたから誘つてみたの！」

やはりこういつた趣味は知られたくないのだろうか。驚いたかのような、怯えたかのような声を出される。

最低限嫌われないというのは本人の証言から既にわかつてはいるが……俺がいたらやはり邪魔ではないだろうか。そんな事を考えているとあこちゃんに手を掴まれる。

「それじゃあ行くー！」

燐子さんもあこちゃんに手を取られているようでそのまま会場らしきところに入る。その天真爛漫な性格は燐子さんとは正反対のように思えるが、それだからこそ馬が合つたりするのだろうか。

なんか保護者みたいになつちやつたな、そんな事を思いながら連れてかれるがままに会場を回る。

物販にイベント、NFOとのコラボキャンペーンなど様々などころに行つたが燐子さんはあこちゃん以上に買つていた。なるほど、どうやら想定外にNFOが好きらしい。

そんな中俺であるが、特別面白いと思うことはなかった。まあほぼ知らないのだからそれも当然、だがつまらないと思うこともなくただただ時間が過ぎていった。

「あこトイレ行つてくる!」

「え……あ、あこちゃん……!」

少し長めの列に並んだが一向に前が進んでいない様子を見てか、あこちゃんはトイレの方に向かつていった。我慢していたのだろうか、走つたら危ないよと燐子さんが注意していた。

今日の話の中心はあこちゃんだったので彼女がいなくなれば会話もない。かといってスマホを目の前で弄る気も起きなくて燐子さんに声をかける

「あー……この前貸した本どうでしたか?」

「は、はい……凄く……面白かったです」

どうやら彼女は話題を作るのが苦手なだけのようで、一度話し出してしまえば話は殆ど途切れずに続けられてくる。

どこが面白かったか、なんて話をするだけでも退屈を紛らわすには充分、やはり誰かと話す時は好きな物についての話をするのが一番で。

「今度続き貸しますね」

「あ、ありがとうございます……」

クロスワードが好きと言っていたのでミステリー、しかしそこまで暗い雰囲気はないものを選んでみたが気に入ってもらえていたようで安心した。

しかし続きを貸すと言ったもののいつ貸せばよいのだろう。連絡先を交換すればそれは簡単に解決するが異性にそれを提案するのは気が引ける。

基本持ち歩いておいて偶々会うか、他の Rose lia メンバーと会った時に渡しておいてと頼んでおくか。まあそれでいいかと自分で解決させそっちの本も楽しみにしておきますねと言っておく。

「えっと……いつなら……返せますか？」

「あー、リサとかに渡しといて貰えれば」

共通の知り合いというのはなんとも役に立つものだ、それを実感する。俺とリサも頻繁に会うというわけでもないが、他のメンバーに比べれば多い方だろう、ここ最近限れば湊と同程度程にも。

いやはやしかしこちらからあいつのバイト場所に行けば日付さえ合えば会えるのだし、渡して貰えさえすれば簡単に受け取れる。

やはり持つべきものは親しい仲、そんなことを思っていると燐子さんはちよつと残念

そんな顔をしていた。

「……どうかしましたか？」

「い、いえ。なんでも……ないです」

どこか落ち込んだような、そんな雰囲気を感じさせられた。何故落ち込むのか、そう考え始めようとしたところであちやんが帰ってきた。

その後、その日は隣子さん側から話しかけられることはなかった。

振り絞って

Rosealiaの練習中だというのに全く集中出来ない。今日は個人個人で練習をしているのでそこまで問題ないが、もしこの調子で全体練習をしていけば確実に迷惑がかかってしまっていた。

いけないと何度も思ったけれどいつも通りにやることができない。なんでそんな風に集中出来なかったのか、理由は一つ。隣であちゃんと話しながら練習している今井さんの方をチラリ見る。

ああ、今井さんと新庄さんは……どんな関係なんだろう。

友希那さんと新庄さんはどんな関係なのか。一時期、いや、今でも少なからず気になっっているそれよりも深く気になってしまう。

話を聞くに今井さんと新庄さんが初めて会ったのはこの前湊さんに連れられて彼のバイト先のライブハウスでとのこと。

それが本当であるならばそれは最近。ならばそんなことはないと考えerことはできず、だけでももしかしたらと考えさせられる。

人と人との関係なんて日進月歩では進まない。止まり、迷い、それでようやく進むの

だ。ああでも、それは私に限った話かもしれない。

今井さんとあちゃんみたいな人ならば、それこそたった一日で進みきることで。

そんな考えに耽っていたら練習が終わっていることにも気が付かなくて、皆が片付けを始めている姿を見て私も慌てて片付け始める。

片付けが終わると友希那さんはすぐに帰ってしまい、それに続くように氷川さんもスタジオを出ていった。

新庄さんの事をどう思っているんですか、何度聞こうとしても友希那さんはこうやってすぐに帰ってしまうので聞くことができない。

練習中に聞くわけにもいかないし、練習前も音楽を聴いているのでそんなことを聞いて邪魔をしようとも思えない。

まあ、私にそんな勇気があればの話なのだけど。

「燐子、これ渡しとくね」

「え……あの、これは……」

「蒼音から渡しといてって言われてさ」

今井さんから渡されたものはこの前蒼音さんから借りた本の続編。それを私に渡すとそれじゃと言って今井さんはスタジオを出ようとする。きつと友希那さんを追いか

けるのだろう。

それはいつも通りのことだけど……気づいたら私は今井さん呼び止めていた。

「ん、どーしたの？」

彼女はなんでもないかのように聞いてくるけど私は正反対に落ち着くことなんて出来なくて。鼓動が高鳴っている、口が簡単には開かなくて頭が真っ白になって、手を胸に当てて一つ息を吐く。

「今井さんは……新庄さんとどんな関係なんですか？」

「どうって言われても……別になんでもないよ？」

「そうじゃなくて……その……」

新庄さんと付き合っているんですか？ 私はそれを、聞いてしまっていた。

気づかれたからというものだろうか、それとも荒唐無稽な事を急に聞いてきたからだろうか。驚いたような顔をしたまま今井さんは動かず、言葉を発しもしない。

先程それはないだろうと考えて、でも私が彼を好きになっっているんだ。であれば他の人が彼の事を好きにならないという理由なんてありはしない。

それに……今井さんのような人ならば、彼が好きになってもおかしくなさそうだから。

友希那さんに聞けないことを更に踏み込ませたようなそれを何故今井さんには聞け

たのか。彼女から話しかけてきてくれたから、確かにそれはあるだろう。でもそれ以上に、怖いからだ。

「ないない、絶対ないから」

「……本当……ですか？」

「ほんとも何も、アタシも蒼音もお互いのことそういう風に思っただけ」

手を左右に振りながら何でもないかのようにそう答える今井さんに、ならば何故こんな風に本を預かっているのか。

そう聞こうとしたところでふと気づく。それはただ単純に、彼女と新庄さんの仲がそれだけいいということではないかと。

付き合っている訳ではない、でもその程度の仲ではある。今井さんは彼に対して恋愛感情を抱いていないというのは嘘ではない、隠されていない。

でも、それなのに、私はそんな今井さんより新庄さんとの仲が浅い。前から知っているのに、最初から好きなのに、私と彼は、ただの他人でしかない。

「もしかして隣子……蒼音のこと、好きだな？」

なんちやあって、どこかおちよくなるように聞いてくる。好きなのかと聞かれ頷くことすら出来ない。恥ずかしいとか、気づかれたくないからだとか、そんなものではない。本人はいいのに、今井さんも彼の事が好きだというわけではないのに。この気持ち

には欠片の偽りもないというのに。

ああ、でもそれも納得だ。こんな私だから、臆病で、踏み出せない私だから、彼と仲良くなる事が出来ないのだろう。

牛歩などというものではない。遅いとか速いとか、そういう次元の話じゃなくて、きつと私は一步や二歩、もしや半歩に及ばぬほどにしか進めていない。

「え、マジ？」

「……………」

「なんか意外というか…………いや、悪く言ってるわけじゃないんだけどさ」

私は前を向けずに俯いてしまう。いつもなら沸き上ってくるであろう恥ずかしさも今はなく、ただただ悲しい。こんな自分が、どうして自分はこんなのかと。

「え、なに、何処が好きなの？」

「何処…………と言われましても…………」

「もしかして一目惚れ？」

「い、いえ…………そういうわけでは…………」

一目惚れ、どうなのだろう。新庄さんの演奏を始めて聴いた時、恋というには弱いけれど既に惹かれていた。見た目に惹かれたわけではないけれど…………違う、と言うのも違う気がして。

知識はあるが経験はない。百聞は一見に如かずといいはすれど、その一度だつて煙のように形を掴ませない。

「……あ、そうだ！ 蒼音から本渡してもらつてつて言われたけど……今持つてる？」
「は、はい、持つてます」

今井さんに渡して貰えれば。そう言われ、だけどずつと渡せてなかつた。すつかり忘れていたというわけではない。自分で渡したかつたど、そう思つただけ。

他に理由といえるものがあるというのなら……これを渡してしまえば彼との関係も、なくなつてしまうのではないかと思つたから。

どうせ出来ないことなのにそれを望んでいた。背伸びして、でもいざしようとなれば縮こまつちやつて。ほんと私は変わらない。

私の返答を聞くと今井さんはスマホを取り出す。それを耳に当てている様子から誰かに電話をかけようとしていることはわかつた。

いったい誰に、そんな私の視線を感じてか私の方を見ながら今井さんは口元に指を立てて相手と話し始めた。

「あー、今暇してる？」

誰と話しているのだろう、何を話しているのだろう。そんなこともわからないまま、私を置いてけぼりにして話は続く。

ちよつと待つてねと聞こえたので相手は友希那さんだろうか。話終えた今井さんはスマホをしまい私に話しかけてきた。

「燐子はこの後時間ある？」

「い、一応ありますけど……何かあるんですか？」

「ん……内緒」

近くのコンビニに行つてみてと言つて今井さんはスタジオを出る。今井さんは行かないのだろうか、そんなことを思った直後今井さんに本を貸せていないことに気づく。

言った側ではあるけれど忘れてしまったのだろうか。そう気づきはする癖に口には出せなくて。ああ本当に自分で返せる機会、それと勇気があればいいのに。

明日には絶対に渡そう、そう決めて先程の今井さんの言葉を思い出す。一体コンビニに何かあるというのだろうか、理由も教えてくれないので少し不安だがこんな風に言つてくるということは何かはあるのだろうか。

去り際に残された、頑張つてねという言葉が胸に引つ掛かった。

今井さんに言われた通りコンビニにきたが、結果としては何故行つてみてと言われたのかわからなかった。からかわれた、というわけではないだろう。でなければ頑張つてねと言われた理由がわからない。

もしかして私かわかっていないだけなのかと思ってもう一度考えてみてもやはりわからない。一体なんなのだろうと思ひ辺りを見回すと……ある人と目が合った。

「リサは一緒じゃないんですか？」

ああ、そういうことか。歯車が噛み合ったかのように理解できた。今井さんはこのようなように仕組んだのだろう。

喉から先が詰まったかのように声がでない。何をすべきかなんてわかりきっている、でも何を話すべきかは全くわからない。

「えっと……燐子さん？」

「あ、はい……本を渡したいと思って……今井さんに呼んでもらいました」

「そういうことですか」

嘘をつく、その場のぎだけどそうするしかなかった。慌てるように鞆から本を取り出し新庄さんに渡す。

それを受け取ると彼はすぐに帰ろうとしてしまう。突然の呼び出しだったので用事でもあるのだろうか。待つてくさいと言うことすら出来ない、手を掴んで引き留めることも出来ない。

声にならない声が漏れる、手を伸ばすがそれは届かない。手を降ろして、そんな自分が嫌で項垂れてしまう。

結局私は止まったまま、前に進むことが出来ないままで……

「あ、そうだ」

声をかけられ視線を上げると彼は私の元に近寄ってきて連絡先交換しませんか？
とんでもないかのように言ってきた。

お願いしますと反射で答えていて、連絡先を交換すると彼はそれではと言つてこの場を去つていった。

「……………」

きつと彼からすればなんでもないことなのだろう。本を貸し借りする以上しておいた方が楽だから、その程度でしかないかもしれない。

自分からできたことではない。それでも、私にとってこれは……

目を閉じて、スマホを胸に当てる。少し、ほんの少しずつだけど、暴れるように鳴っていた心臓の鼓動が落ちついていく。

私は家に帰るまで、スマホを手放す事は出来なかった。

「……………はあ」

その夜ベッドで横になりながらスマホを眺める。彼とのトークページ、文字ならもしかしたら、そんな事を考え眺め続けて早数十分。

本、どうでしたか？ 打ち込んでそれを消す。ずっと好きでした。それは頭に浮かんだだけで打ち込むことすら出来ずに転げまわる。

「……このままじゃ」

新庄さんは魅力的だ。それは容姿的な事もあり性格的な事でもある。

かつこいい、大多数の人はそう答えると思う。優しい、関わった事のある人なら殆どはそう答えるだろう。

だから時間が経てば今井さんも、友希那さんも惹かれてしまうかもしれない。そんなればきつと私なんかではどうしようもない。

立ち止まっていても周りの人が助けてくれるかもしれない。今回みたいに彼の方から近寄ってきてくれるかもしれない。

だけどそれでいいのか、いいはずがない。だから、私は……
『今度、ご飯でも行きませんか？』

ほんの小さなものでも、感じとる事が出来ないほどだとしても一歩前に踏み出せる勇氣を振り絞らないといけない。

恥ずかしさを感じないなんてことはない。それこそ胸は爆発しそうな程にうるさくなつて顔まで真っ赤に染まりそう。

やっぱりやめよう、そう思つて削除ボタンに指を伸ばして、でもそれもすることが出

来なくて。

ここで出来なければいつするんだ、自分にそう言い聞かせ一つ深呼吸をして……
目を閉じて、力強く、その一文を送信した。

イラつき

見渡す限りの本。棚に詰め込まれ目当ての物が紛れ込んでいたら探し当てることなど出来そうもないが、今日は特にこれといった目当てのものはないので何かないかと歩き回る。

新しく本を買おうと思いやつて来たのはいいもののほぼ決めずにやつて来た。そのうえこれだけは買おうと思っていたお気に入りの漫画の新刊も見当たらない。

こうなつては何も買わないという選択が一番賢いのだろうが、この店は家から遠いという訳ではないが近いという訳でもない。そんな店にやつてきたのだからその選択は何だかもつたない気がしてその気は起きない。

そうは思うものの本当に興味をそそるようなものは何も無い。これは何も買わずにどっか寄つてしまうか、そんな事を考えながら何かないかと探し歩いていると音楽雑誌のコーナーに着いた。

音楽雑誌などバイトの隙間に読む程度で買ったことはない。滞在する理由もないが折角なので見て回っていると立ち読みしていたのか、本を棚に戻している湊に出会った。

「あなたは……こんなところで何をしているのかしら？」

「こんなところで本を探す以外にすることあるか？」

「あら、音楽は好きじゃないんじゃないか？」

「……ここは偶々着いただけだ」

最近少しだけおかしなことがある。それは湊と話すとき、ほんの少しだけ体が熱くなること。酷い時には胸が少し痛くなる、これはいったいなんだというのだろう。

調べてみたがこれといったものはない。そも熱がないのだ、体が熱いのに熱がない。矛盾するようなことではあるが事実である。問題ないとわかっていながら、いや、問題がないからこそ気になってしまう。

「そういうお前は何してるんだよ」

「何って……あなたと似たようなものよ」

「そりゃそうか」

湊は手ぶら、俺と一緒に何を買おうかと探しているのかと思っただが、会話をしながら視線は俺から外れて棚に手を伸ばしながら見回している。買うものは決まっているのだろう。

目的もないしここにいる理由もない。こんなところにくるくらいは探し回ったがよさげなものが見つからなかったので帰りはどこかに寄るとしよう。

はてさてどこに寄るものかと考えながらその場を去ろうとすると湊に呼び止められた。

「この後って時間あるかしら？」

「……一応あるが、何のようだ？」

「近くのカフェが二人で行くと安くなるって見て、折角だし誘おうと思つて……」

「なるほど、じゃあ待つてるわ」

断る理由もないが受ける理由もない。あるとしたら金が浮くかもしれない程度だろうが、それならばその金で何かした方がいいだろう。

聞くにリサからそんな話を聞いたというのと音楽の話がしたいからとのこと。その答えに不思議なイラつきを感じながら湊が本を買ってくるのを待つことにした。

「……なんで受けたんだろ、俺」

本当にわからない。自分でも勝手に口に出していた。まるで自分が言ったと思えないくらい無意識であるかのように溢れ出ていた。

偶々目に入った音楽雑誌、ピアニストの紹介をしていたそれが目に入るとまたイラつきを覚えた。

でもそれは、先程のイラつきとはどこか違うものだった。

何にイラついてるのか。二つ目のイラつきは何にイラついたのかは明確だというに

も関わらず最初に抱いたイラつき、それが何に向けたものか何故なのか、それがわからなかった。

「男女だと余計に安くなるのね、都合がいいわ」

「……お前、意味わかってるのか？」

「カップル割って書いてあるけれど……要は男女でいればいいのでしょうか？」

「……はあ」

確かに言っていることは正しいがそれでいいのか、ため息をつきながら運ばれてきた珈琲を口にする。

相変わらず砂糖を大量に入れた珈琲を飲んでいるこいつからすれば俺なんてその程度のものでしかない。それは勿論俺も似たようなものである筈で。

「……そういえば最近はどうなんだ？」

「どうもこうもないわ。フェスに出場するために練習、それだけよ」

そんなことを言いながらもうつすらと口角が上がっている。なんやかんやいつつもこいつ自身 Rose lia で音楽をするのは随分と気に入っているらしい。

そういえばバイト先でライブをするらしいが、参加するバンドに余裕があると言っていたので提案しておくか。まあまだまだ先の話ではあるのだけれど。

「新庄君は私達の音について何か思ったことはないかしら？」

「最近聴いてないからわからねえな」

「それもそうね。それなら今度のライブの予定なのだけど……」

俺は燐子さんの音を昔聴いた事のある音だとわかったその日から Rosellia の演奏は殆んど聴いていない。最近はリサから送られてくることもないのでそれもあつてだが。

何故聴かなくなったのか。難しく、ややこしい理由なんてものは一つもない。ただ単に昔の事を思い出すのが嫌なだけ。

区切りをつけて忘れようとして、思い出さないようにした。我ながら女々しいとは思ふものの思い出されるのだから仕方がない。

別に燐子さんは何も悪くない、ただ俺がそうなってしまっただけ。本を貸し借りしているのはなんともないというのに演奏の時だけそうさせるのだから質が悪い。

「……聞いてるかしら？」

「……あ、わりい、聞いてなかった」

聞き直してみたが湊は答えてくれなかった。聞いていた部分から察するに俺はライブに誘われてたのだろうが、どこか拗ねてしまったかのようにそっぽを向かれる。

行きたくないというわけではないが先程の理由の通り行きたいと思いきつてるわけ

でもない。

珈琲を飲みながらスマホを弄っていると不機嫌な様子で湊からそのライブの日付を告げられた。

「……了解、場所は？」

「ここに来るときにあつたライブハウスよ」

改めて言われなければ行かなかったものの言われてしまえば行ってもいいかなんて、ほんと自分でも揺れすぎだとは思う。

もし聴いてしまったらまた思いだしてしまうかもしれないが……俺は *R o s e l i a* の奏でる音が好きで、その二つを天秤にかけた結果行ってもいいと思えただけだ。

「……断らないのね」

「誘われたのに断るのはあれだろ」

「バンドの誘いは断ったじゃない」

「……それはまた別だろ」

珈琲を飲み終わったので席を立つ。会計は二人で割って、さらに割引まで入るのでだいぶ安くすんでいる。これならばほしい本を見つけたとしてもどうにかなるだろう。

「カッパル割をご利用のお客様は写真を撮らせていただきます」

「いや、別に大丈夫です」

「そんな遠慮しなくても大丈夫ですよ」

悪気なしの善意100%、会計の後店員はそんな笑顔を見せながらそう言ってくる。ああ、やはり割引となれば碌なことなどありやしない。

カップルじゃありませんと言っつてしまえば簡単に切り抜けられるのだろうがその場合支払いが追加されるかもしれない。

だが仕方ないし普通料金で払うか、そう思い再度財布を取り出した所で湊が不思議そうな声色で俺に尋ねてきた。

「なんで財布を取り出しているの？」

「お前話聞いてなかったのか？」

「別に写真を撮るくらいいいじゃない」

「……お前はそれでいいのか？」

「……？ ええ、別に構わないけれど」

それを聞いてか店員は先程よりも強めの笑顔を俺に向けてくる。横で首をかしげながら本当にわからなさそうにこちらを見る湊が恨めしい。

写真を撮るといつても店側ではなく俺らの携帯でやるらしいのでカメラを開いて渡ししておく。

「二人とも笑ってくださいいね」

無茶を言ってくれる、笑うなんて出来そうもない。そんな俺に対してか少しだけ不満
そんな表情を浮かべながらも店員は二枚ほど写真を撮り、スマホを俺に返してくる。

「それじゃあライブの感想、頼むわね」

「……ああ、わかったよ」

そう言つて別れた後、先程撮った写真を見る。

これだけのことだというのに信じられない程に緊張した。それこそかつてのコン
クルールの時と同じか、下手したらそれ以上に。

俺はなんともないような表情を浮かべてはいるが内心を知っている自分からすれば
この写真は滑稽そのもの。

それに対し湊はいつも通りの様子。まるでなんともないかのようなその姿にほんの
少しだけイラついた。人の心などしるよしもないが、間違いなくこいつは何もわかつて
いなさそうぞうで。

無意識のうちに舌打ちをしてしまっている。何をこんなにもイラつかさせられてい
るのだろう、どうしてこんなにイラつかさせられているのだろう。

もしかして、俺は……

「……馬鹿馬鹿しい」

イライラするのに理由も糞もあるか。睡眠不足とか栄養の偏りとか、理由なんていく

らでもある。確かにカフェが安くなったのはあるが、それ以前に本を買えなかったのだ。原因はそれかもしれない。

むしろそうであれと思ひ込む。ならばとそのイラつきのままに先程の写真を消そうとして、しかしそうすることは出来なかった。

だから余計にイラついて、抵抗するかのようにスマホの電源を落とすことにした。

気付かされて

空の向こうがうつすらと明るくなっていく。今何時なのかとスマホで時間を確認した途端にやって来た眠気に目を擦る。

あの奇妙な苛立ちと不思議な感情に悩まされ、寝なくてはという意思に逆らうように眠ることは出来ず、気がつけば朝になってしまっていた。

今日は休みでもなんでもなく学校がある。しかし辛いというべきか体育は存在しないので、徹夜をしたせいで怪我をすることもないだろう。まあ座学に関しては仕方がない。

欠伸を大きく息を吸うことで誤魔化して、重たい体を起こし朝飯の準備をする。

「……ありやなんなんだろうな」

もしかして、そう何度も考えたものの一瞬で否定した。不思議な感情はピアノをしていた時に似たような物を感じていた、その苛つきは今までには感じてこなかった。

ピアノと似ていて、尚且つ苛つくとなれば……嫌いなのだろうか、あいつのこと。

それは何度も考えたものと真逆のもので、そうなのだろうかと思ってみたが俺の頭はそれをゆっくりと否定する。嫌いではない、それははつきりと言える。

嫌いではないというものはこうもはつきりと、確かめるかのように言えるというのに相反する感情に関してには感情的に、すぐに出すことしかできない。

これに違いがあるとすれば……なんなのだろう。

「……暇だな」

今は何時もより二時間以上早く、部活に勤しむわけでもないからこんな時間から学校に行ってもすることなどあるはずもない。かといつて家ですることがあるのかと言われたのならそれも首を横に振らざるを得ない。

この時間のテレビなど碌な物がやっていないし、今から寝てしまえば起きれる自信などありはしない。はてさてどうしたものか。

そんな俺はあの部屋に目を向けていた。暇ならばピアノでもしていればいいと、誰かが囁いてきたみたいに。

思い切り手をテーブルに叩きつけようとして、やめる。子供じやない、癩癩を起こすのも物に当たるのもよくない。

怒りという感情は持続しないというけれど、ならばこの感情の名前はなんなのか。眠気すら吹き飛ばしたこの激烈な感情の名前が呆れや嘲笑とでもいうのだろうか。

顔を洗ってその思考すら流そうとすれば、逆に頭の中に塗りたいくってしまったかのようにならぬ。その思考は強くなっていく。

ため息をついて、座り込んで目を瞑る。子供ではないというけれど、こうして引きずることこそ何より子供らしいと自分が一番わかっている。

そう、これだからおかしいんだ。湊に対して抱いた感情はピアノに対して抱いた物と似ているというのはどういうことだ。

ピアノは嫌いだ。でも湊に対してはそれはないとはつきり言えてしまう。

好きだと、そんなものはあり得ないと考えるから、当然湊に対しても似たような風に考えてしまう。

そんな思考を遮るかのように電子レンジの音がして、出来上がった朝食をさっさと食べる。この前湊に勧められた音楽を聴きながら隣子さんから貸してもらった本を読んで時間を潰す。

ふと昨日撮られた写真を眺めてみた。相変わらずイラつかせてくる。何が、誰が。さあ、何故だろう。

スマホの電源を切り、本の世界に逃げ出した。

「馬鹿ねみ……」

あんな朝を過ごした身からすれば授業なんてものを聞いていたら眠気が来てしまうのは当然で、その上抗う理由もないのでそれはもうゆつくりと寝させてもらった。

湊のように勉強が出来ない訳ではないのだから危機感を抱かないし、高二ともなればそんな生徒後ろを向けばちらほらいるのだから罪悪感なんてものも抱いていない。

しかしそんな風に寝ていたとしても眠いものは眠い、普段と比べたら格段に少ないのだから当然ではあるのだが。部活をしてるやつは大変だな、そんなことを思いながら帰路に着く。

今日はバイトもないので帰ってさっさと寝てしまいたいものだが夕飯を作る元気なんてあるはずもない。コンビニで適当に買っておこうと思いつき途中にあるコンビニに寄ろうと考え、欠伸を漏らしながらも歩き続ける。

買うにしても弁当かカップ麺か、はたまたパンにでもしてしまおうか。なにも食わずに寝るという選択肢もあれど起きた後に空腹に襲われるのは簡単に予想できる。

まあ着いてから決めればいいのかと思つた所でコンビニに着いたので中に入ると見知った顔が一人。気の抜けたような挨拶が店員から飛んできた後それから話しかけられた。

「お、偶然だね〜」

「……そういえばお前ここでバイトしてたな」

「今日はないけどね」

リサも学校帰りなのか制服のまま、この時間なのだから当たり前といえれば当たり前

ののだが。話すこともない、適当に食べ物を手にとってレジに向かう。

「おう、リサさんの彼氏さんですか？」

「違うって、友達だよ友達」

「……知り合いか？」

「アタシの後輩、バンドもやってるんだよ」

先ほどの店員はどうやらリサの後輩らしく軽く自己紹介をして解散、となるはずだったのだがリサがこの後時間ある？ と聞いてきた。

勿論暇ではあるが、さっさと寝たいということもあり忙しいと答えるが、ちよつとだけと押されたので了承してしまう。

優しさではなく、断つても受け入れるまでなんやかんやで聞いてきそうだしさっさと終わらせる方が早いと思っただけだ。

「てかお前練習ないのか？」

「今日はなし、といつても自主練はするけどね」

ここで練習手伝つてなど言うのなら即座に断つて帰ろうかと思つたがそんなことはなく、本当にただただ話しかつただけらしいので会話をする。

他の客の入りはない。というよりあつたとしても既に既に会計を済ませた俺に構つていゝる方が問題だ。リサの後輩も暇だからなのか俺達の会話に耳を傾けている。

「……で、何の話だよ」

「あー……燐子と最近どうなのかなって」

「あ？ 別に何ともないが」

「でも本の貸し借りしてるし、最近はお飯の約束もしたんでしょ？」

「……なんでお前が知ってんだよ」

連絡先を交換した日の夜に飯の誘いをされたのだが、その日は予定が入っていたので延期ということにしてしまった。

しかしながらどうとはどういうことなのだろう。別に仲が悪くなったわけでもないし特別よくなったわけでもない。

「そんなん聞いてどうした？ 別にお前に関係ないだろ」

「い、いや……あ、アタシそういうの結構気になっちゃうからさ」

あははと誤魔化すような笑いをされる。一体なんだと思いつつも頭が上手く働かないのてわスルーする。

「じゃ、じゃあさ、友希那のことはどうなの？」

その問いを受けた瞬間、眠気よってか靄のかかったような頭の中が晴れていく。俺のこの迷いを知ってか、先程燐子さんの事を聞いたからなのか、はたまた話を途切れさせないようにとの親切心か。

言葉に詰まった俺を見て不思議そうな視線をリサは向けてくるので恐らく知られていなかったのだろうが、それでもドキリと心臓が鳴った気がする。

「……もしかして友希那のこと好きなの？」

「……んなわけあるか」

「蒼音、顔真つ赤だよ」

そう言われ顔を背ける。顔が赤い？　なんだそれは。それではまるで……俺が湊の事を好きだと、言い当てられてしまっているようではないか。

俺があいつのことが好き？　そんなわけあるか。それは朝思ったことと同じで、なに今度は、今だけはハッキリと思うことは出来なかった。

「なんて、嘘なんだけどね」

「……帰る」

「あー、ちよつと待つてよ」

「もう教えるのもやめだ」

「ごめんつてばあ」

その場から逃げるようにしてコンビニを出た。流石にバイト中の身分で追っ掛けてくることはないはずだ。それにちよつとだけと彼女は言った、もうちよつとの範囲を越えている。

しかし、あの後輩の視線もムカつく。何やら面白いものを見るような目でこちらを見ていた。全て見透しているかのように、生暖かい目が向けられていた。

頭を掻く。イラつく、イラつく。湊が、リサが、あの後輩が。そして、俺自身にだ。

本当に寝不足かもしれない。家に牛乳は置いていただろうか。

『ごめんごめん、ちよつと言い過ぎちゃった』

ふとメッセージアプリに送られてきたそれを見て、ちよつとで済むものかと送り返してやろうかと思っただけどやめる。きつと今は何を言っても裏目に出る、ボロが出る。

というか、あいつはバイト中に何をしているんだ。

『それにしても友希那の事が好き、ねえ』

『違うって言っただろ』

『あんな反応見せられたら信じられないよねえ』

否定しているのにそう言ってくるのもそうだが、何処か納得している自分が何よりも。あんなやつのが好きでたまるか。頭が悪くて、甘党で、猫が好きで歌が上手なだけのあいつのことを。

「……新庄君？」

後ろから声をかけられる。声だけでわかる。それは今一番会いたくなくて、一番会いたかった人物。ほぼ反射的に振り向くとやはりというべきか、そこには湊が立っ

た。

その姿を見るだけで、声が聞こえただけで何故だか心臓の鼓動が速まってきた。その癖不快感は存在しないのはいつもの通り。眠気があるのも相まってか頭が働かない。

靄はいつの間にか濃くなって。

「……何か用か？」

「いえ、ただ見かけたから声をかけただけよ」

湊と会話すること一言二言、それだけして湊はこの場を去ろうとする。

じゃあなと答えることも出来ず、手を振ることさえ出来ずに足も動かせない。引き留めることも突き放すこともできなくて、俺はただ見送ることしか出来なかつた。

高鳴り。胸のあたりに手を置いた。ああ、さつさと沈んでくれはしないだろうか。押し潰すように、握りつぶすように、手に力を込めていた。

川沿いを歩いているので色々な音がする。水の音、他の人の歩く音。話し声や犬の鳴き声など。そのお陰か心臓の鳴りも収まってきて眠気もうっすらと消えかけてきた。手すりに手をかけ目を瞑る。

こんな経験はない。誰かを嫌いになったことはあれど好きになったことなんてない。

これが本当に好きという感情なのか、異性に対しての好きというのはこういうものな

のか。何もかもがわからない。

わからないけど……

「……そういう感じの本、家にあつたっけか」

なんでもは知らない。知らないことは知らなくて、知っていることしか知らない。当たり前であることだけれど、一を知れば十や百までいかずとも二や三程度は知れるものだ。

ならばこの感情が一体何なのか、本当に嫌いなのかどうなのか、徹底的に調べ尽くしてみるのもいいだろう。

ありえないこと

わからない、どれだけ悩まされてもわからない。

好きとはなんなのか。そのような本は探してみたが家にはなく、ネットで調べようにもよくわからないものばかり。

それならばそういった類いの本を買えばよいのだろうが、まだどこか自分の中で認めたくない部分があつてなのか買いに行こうとはなれなかった。

「……燐子さんは持つてんのかな」

延期となつていた食事の話、いつにしましうかと話し合つた結果が今日だ。昨日そういえばと思い出して慌ててしまつていた。

女の人と会うなど……最近は不思議と多いな。だとしても慣れていない事はたしか。まあ回数が多いとはいえ今回は今までとは全く違う。今までは偶々出会つてというものだが、今回は事前に決めておいて向かうというものだ。きっと、これは天と地ほどの差があつて。

時間はどれくらい早く着いていればなんてこともわからない。決めたのだからその通りに、なんてほど単純なものではないだろう。

どうせならこういうのもリサに聞いておけばよかったなと思いつつも予定の10分前に到着、流石にこれなら問題ないはずだ。まあ予定より早くついているのに問題があるとするならばそれはなんともおかしい話なのだが。

まだ充分に早いし燐子さんは来てないだろう、そう思いつつも一応ということで辺りを見回す。待つにしても10分程度どうということもないと思っていたのだが、予想外にも店の近くに燐子さんは既にいた。

「どれくらい待ってたんですか？」

「い、今丁度来たところ……です」

視線をそらしながらそう言われる。彼女が手に持っているペットボトルの水が残り少なくなっているのを見て、嘘だなとわかってしまう。

いくら外が温かくなっているとはいえ長時間待つのは辛いだろうに。そうは思いつつも時間よりそこまで待つてはいないだろうと区切りをつけ、店に入り席につく。飲み物なんて、飲みかけを持ち歩く人だっているだろう。

しかし不思議だ、これもある程度考えてみたがわかりそうにない。どうして燐子さんは俺と飯などに来たのだろうか？

勿論嫌というわけではない。単純にわからない、理由がないのだ。俺にも、彼女にも。前々からこの店が気になっていて複数品食べてみたいからというのなら納得はいく

が、それなら別に俺ではなくあちやんと来ればいい。

それならばあちやんが用事でもあるのかと思つたが、それならリサだつていいわけだし、わざわざ日を延期したのにといいことはそれもない。いったいなんなのだろう。

まあこんなにあれこれ考えていようと嫌ではないのだしどうでもいい。もしかしたら俺が男で胃袋がでかいから、なんて本当に下らないものなのかもしれないけれど。

「あの……新庄さんは……どれにしますか？」

「え、あー……じゃあおすすめして書いてあるのでこれにします」

思考を遮られるかのようにそう聞かれる。席についてしばらくが経ち、メニューを眺めながら考えていたせいで既に決められたと思われてしまったのだろうか。

とりあえずおすすめと書いてあつた物を頼むと伝えたが隣子さんは一向に店員を呼ぶ気配がない。

もしかしてまだ決まつてないのかなと思つたものの、なんだか困つたように店員の方を眺めていた。どうしたのだろうと思つたがその原因はとても単純なもので。

最近にしては珍しく店員を呼び出すボタンのようなものがない。彼女は自らのことを人見知りと言つていたしこういったものはやはり苦手なのだろう。すいませんと声をあげれば近くにいた店員が俺たちの席にきた。

「俺はこれで、隣子さんは？」

「あ……わ、私はこれで……お願いします」

頼み終わって見たが会話がな。静かなままが悪いというわけではないが、折角の機会でも話さないというのもあれだ。

燐子さんもその事について迷っているのか下を向きながらもチラチラとこちらの方を見てきている。さてどうしたものかと考えているうちに飲み物が運ばれてきた。

どうして俺なんかと飯にきたのか、一番気になることはそれなのだが、やはりそれはいきなり聞いてしまうのは感じが悪いだろう。

はてさて何を話したもののか。珈琲を飲みながら思索してそういえばこれがあつたなと思いつ出したので口にする。

「この前の本はどうでしたか？」

「凄く……面白かったです。私のは……どうでしたか？」

「そつちも凄く面白かったです」

こちらが貸したのはこの前貸したミステリー小説の続き、それもあつてか燐子さんから渡されたのもミステリー小説。

このジャンルで面白そうな物は読みつくしたと思つたのだがやはり本の数は星の数とでも言うべきか、とても面白い上に今まで読んだことがない物だった。

「今日も……別の本を持ってきました」

「あ、ごめんなさい。この前の借りたやつ持ってくるの忘れちゃって……」
「い、いえ……今度返して貰えれば……大丈夫です」

そう言つて燐子さんは鞆から本を取り出し俺に渡してくる。今回も同じくミステリー物、実は恋愛小説を借りたいんですがなんて申し訳なさあり、恥ずかしさもありません。言える筈もなくその本を受け取つた。

この本に恋愛要素でもあればいいのだが。そう思いながら本を眺めていると少し不安げな声で話しかけられた。

「もしかして……もう読んだこと……ありましたか？」

「いえ、これも初めてです」

「そ、そう……ですか。よかつたあ……」

ほつとしたかのような表情を浮かべられたところで料理が運ばれてくる。会話は一旦途切れ、俺達はそれを食べることにした。

燐子さんの方に運ばれたものはかなり少なく見えるがそれで足りるのだろうか、そう思つた理由は考えないでおこう。俺は意識的に視線を上げた。

「今日は……ありがとうございます」

「感謝されることじゃないですよ」

「いい、いえ……わざわざ時間を作って貰ったので」

強制されたわけではない、何かしら手助けしたわけでもない。であれば感謝なんてされることでもない。

むしろ本を返し忘れてしまった上にこちらは貸して貰ったのだ、感謝するならこちらからの方が正しいだろう。

「あ、あの……」

聞きづらいことを聞くかのように視線を落とし手を胸に当てながら声をかけられる。

なんですかと聞き返すと発されたその言葉は、何だか期待が込められているかのような気がした。

「新庄さんは……ピアノってまだ……やってるんですか？」

息が詰まる。どうしてそれをなんて思ったのは一瞬のこと。こちらが隣子さんの音に聞き覚えがあるのだ、その逆もあつて然りだろう。

しかし何故それを聞いてきたのか、それがわからない。

声が枯れそうになりながらも絞るかのようにして聞き返した。

「……湊から……聞いてないんですか？」

そう聞くと察したかのような表情を浮かべた後目を伏せられる。なぜ聞いてきたのか、単純に自分もピアノをやっているから聞いてみた、そうではないだろう。だとする

ならばこのような表情をされる理由にならない。

であれば何故か。それが……あの時の約束というのに関係するものだからなのだろうか。

燐子さんと目が合う。どこか寂しそうな表情を浮かべそれ以上何も聞いてこない。

居心地が悪い。頭を何度か掻いた後それじゃあと言い残しその場を去ろうとすると、少し大きな声で呼び止められた。

「また誘って……いいですか？」

「……大丈夫ですよ」

何故、どうして、何もかもがわからない。

あの時の約束とは一体何なのだろう、何故燐子さんは俺を誘ったのか、誘うのか。少し離れてから振り返ると燐子さんもその場を離れ始めた。

帰り道、イヤホンを付け様々な事を考えながら歩いていると唐突に肩を叩かれた。

一体誰だと思ひ振り向けば、そこにはまるで自分は何もしていませんよと言わんばかりに両手を顔の位置まで上げ笑顔を向けてくるリサがいた。

「……なにか用か？」

「別に、偶々見つけたからさ」

「なら俺は帰る」

「いーじゃんちよつとくくらい」

歩みは止めないがリサは俺の隣を付いてくる。どうせ録でもない話、下らない話だ、それに長い話でもないだろう。

「で、どうなの？」

「……どうもこうもねえよ」

どうなのと聞かれてもエスパーではないしなんのこともわかる筈もない。なんてこととはなく、ニヤニヤとしたその表情がそれが何に対してのものなのか全て教えてくる。

「まだ認めてないんだ」

「……そういう本は持ってねえからわかんねえんだよ」

「ふくん。なら今度アタシが貸して上げるよ」

とびつかりのおすすめのやつをね、そう付け足され一瞬足が止まる。求めていた物、しかしこう易々と手に入るとなると戸惑ってしまふ。

でもなんだか断りたさが。そう思ったのはこの気持ちがあんなのかわかってしまっただけだ。理由は多分、それだけだと思う。

「……随分と協力的なんだな」

「蒼音にも色々手伝って貰ってるからね。ほら、貰いっぱなしってなんか嫌じゃない？」

「……どうせお前は誰にでもそうなんだろうけどな」

湊関連だからなのか、それともこいつが誰にでもこうなのか。それが後者であるのだからというのとはなんとなしにわからされる。

「今度ご飯にでも誘っちゃいなよ」

まるで確信しているかのような物言い。否定もせず、だが受け入れることも出来ない。

しかしそこで一つ、あることが頭によぎるが直ぐ様それを否定する。そんなのありえない、俺が湊を好きだという可能性以上に。

「そういうもんなのか?」

「何のこと?」

「……いや、なんでもねえ」

ご飯にでも誘ってみろ。したことはない、でもされたことはある。

ああ、それはありえない。そう、こんな風に誰かを好きなんじやないかと迷わされているから、考えさせられているからこそこんな風に考えさせられるんだ。

これは思い上がりだ。思春期らしい、馬鹿みたいな男の勘違いだ。

燐子さんが俺の事を好きなんじやないかなんて……

リサと別れ家に向かうその間、家についたにも関わらずそんなことはないとわかって

いようとも、
頭の中はそれで
いっぱいだった。

好きってなんだろう

好きってなんだろう。ふとそう思わされたのは何故だろう。

単純に自らがそれについてわからなくて、そうであるかのような感覚を覚えたからだろうか。それともそういったものを、誰かから向けられたと思ってしまったからだろうか。

「……ありえねえよな」

日が沈み、うつすらとした雲に覆われながらも月はそんなもの関係ないと自らの存在を見せつけてきている。

否定して、そんなことはないと言い聞かせて、わかっているにも関わらずこんなにも考えさせられる。

カーテンを閉じ布団をかける。ああ、こう思われても向こうからしたら厄介極まりないし気色が悪いだけ、勘違いなんてものはされるだけで気持ち悪いものだ。

そうわかっていれど考えることをやめることは出来なくてため息一つ、部屋は明かりがほぼなく暗くなっている。しかしそれでも目を閉じて、手で覆って。

風邪でも引いたのか知らないが思考が収まる気配がない。寝てしまえばいいと思っ

たがそんな状態で眠れる筈もなくて。

好きってなんだろう。俺が湊に対して抱いているこれはそうなのか、燐子さんが俺に向けているのはそれなのか。

はたして俺がピアノに対して向けている気持ちは……本当に嫌いという感情なのか。

思考をやめようと考えてもその考えがある時点でどうしようもない。少しの頭痛を感じながらも頭の中ではピアノの音が流れ続けていた。

昨日の夜はよく眠れなかった。だからといってバイトは休むわけにはいかないので気合いで乗りきったのだが、こういう日に限って人が来るのは何故なのだろう。

しかし忙しいのも悪くはない。お陰様で頭の中からピアノの音は抜けきってくれたし二人の事を考えることもなかった。それに眠気も既に薄れてくれたし。

店から出れば日差しが肌を突き刺してくる。正午はとっくに過ぎていているというのに元気なものだ、雲一つない空を見上げながらそう思う。

本を貸してあげるとリサに言われたものの昨日の今日で渡されるわけもなく、予定とと言えるものは何一つとして存在しない。

帰って寝るか、それとも猫と戯れるか。どちらも魅力的ではあるが……本屋にでも寄るとしよう。

理由らしい理由はないが、パツと浮かんだそれ。あえて意味を付け足すならばどうせリサに貸してもらえるのだからとは思うものの、やはり自分でも少しくらい見ておいた方がいいなんて程度のもの。

まあ、それを店員のところに持っていけるのかとなれば別の話だが。

「おや〜？ こんなところで奇遇ですね〜」

さつそく本屋に向かおうと歩きだそうとしたところでそんな声をかけられる。

こんなゆつたりとした口調の知り合いなんていただろうか、まだ曲の流れていないイヤホンを外し、そんなことを思いながら振り向くと二人の少女がいた。

「……リサの後輩か」

「モカちゃんって呼んでくれないんですよ〜？」

「モカ、知り合い？」

二人の内の一人はこの前リサと一緒にバイトをしていた女の子、どうやらモカというらしい。しかしもう一人は完全初対面。赤のメッシュが特徴的で俺の事についてモカに聞いていた。

「もち〜。後リサさんとも仲がいいんだよ〜」

「新庄蒼音です」

「……美竹蘭です」

「どうやら二人は同じバンドのメンバーらしくこれから練習に向かうとのこと。」

知り合いの知り合いなど気まずいだけだろうに。そんなことを考えながら、それなら早く行った方がいいだろうと言ってその場を去ろうとしたがモカに呼び止められた。

「蒼音さんって、音楽出来るんですよね？」

「……どこから聞いた、それ」

「リサさんが色々教わってるって言っていましたよ」

余計な事を言ってくれた。別に言うなというわけではないけれど、あちらこちらに知れ渡ってほしいというわけでもない。昔から面倒事になりそうなことは嫌いなんだ。

「それで？」

「アタシ達来週の土曜にライブやるんですけど来ませんか？」

「悪いがその日は予定ありだ、客が欲しいなら他を当たれ」

えく、と納得いかないようにモカは声を漏らす。教えてくれというものでないだけで、予定がなかったのなら行ってもいい。最も初対面に近い人間に教えを乞う人間などそうはいないだろうが。

まあ何も予定があるというのは嘘ではない、その日は湊に誘われたRoseliaのライブがある。

元から約束していたものだから被せるわけにはいかない。それに……どちらを優先

したいかと言われてもそちらだし。

「ちなみに、予定つてなんなんですか？」

「ちよつとモカ、聞く必要ないでしょ？」

「別にいいよ、隠す程の事でもないし」

Roseliaのライブがあるから。そう漏らした途端、面倒そうにしていた蘭ちゃんが食いぎみに俺に対して聞き返してきた。

「……それつて、向こうの本屋の近くのライブハウスですか？」

「そうだけど」

「おく、それならアタシ達と同じ場所だ」

偶然というのは思わぬところで起きるらしい。まあライブハウスが多いとはいえ被ることくらいあるだろう、そんなことを考えているうちに蘭ちゃんはモカの手を引く張つてさつさとその場を離れていった。

モカが待つてよと訴えていたが蘭ちゃんは聞く耳を持たなかつた。時間がまづくなつたという可能性もあるが……Roseliaの話が出た途端だ、多分原因はそちらだろう。

理由はわからない。あの二人のバンドはRoseliaとライバル関係なのか、ただ蘭ちゃんが一方的にそう思っているだけなのか、俺は部外者だからわかるはずもない。

それに知る必要もない、気にはなるがそれだけだ。二人は何の楽器担当してんのかなと思っただが最後、俺はイヤホンをつけ本屋への歩みを再開した。

恋愛小説とは簡単に言っただけのものだがやはり王道とも言えるジャンル、その数ははかりしれない。それこそライトノベルとかまでにも広がってしまうしどれがいいかなんてわかる筈もなくて。

本のタイトルを見ながら偶に目に止まった物を手に取り元の場所に戻す。そんなことをしているだけで時間は一瞬にして過ぎ去っていく。

埒が明かないので今人気の恋愛小説は何かと検索し、出てきた本はどこにあるのかと探し回ってようやく見つけた。

今人気となればリサからそれが貸される可能性があるんで見る必要だつてないが、そう思いながら手を伸ばすとその本に向かつて一つ、俺以外の手が伸びていた。

「あ、ごめんなさい」

「いえ、大丈夫で……」

その声は聞き覚えがあり、相手も同じなのか少し驚いたような表情をこちらに向けてきていた。

「新庄さんは……こういう本に興味、あるんですか？」

燐子さんの困惑した表情とゆったりとした服、普段気にしていないそんなところに意識が行ってしまう。だからこの問いにどう答えるか、そんなことも考えさせられてしまう。

興味があると答えてしまえばいい、今恋とは何なのかと迷っているから気になったと答えてもよい。でもそういうことを言うことは出来なくて。

「……リサから本を貸して貰うんで、知識として持つといった方がいいかなと思ったので」嘘ではない、そうわかつてはいるのに目をそらしてしまう。もしかしたら好かれているのではないのか、そんなことを考えさせられてしまっているから……昨日とは全く別、燐子さんを、意識してしまっている。

互いにそれ以上話すことはなく、しかしその場から離れることもなく。先ほどの本のことなど全く意識の外、視線をあちらこちらに彼女は向けている。

どうしたものか、居心地が悪いわけではないが空気が悪い。何かしら話すことがあれば、そう思いながら辺りを見回していると、奥の音楽雑誌コーナーに見覚えのある髪色。もしかやと思わず少し身体を動かして全体を見てみれば、何の偶然か、そこには湊の姿があった。

驚きで一瞬体が止まる。離れているから確信はないが、音楽雑誌を立ち読みしているのでこちらには気づいていないと思う。もつとも、あの様子では隣にいたって気づきは

しないだろうが。

急に一点を見つめたままの俺を不審げに思ったのかどうかしましたかと燐子さんは俺に声をかけ、後ろを振り向いた。

「あ、あの……この後お時間って……ありますか？」

「え……まあ、あります」

「それなら、どこかに寄って……いきませんか？」

それを見た途端にそんなことを言ってきた、後ろの湊の方をチラチラと見ながら俺の答えを待っている。

ぞわぞわと背中を何かが昇ってくるかのような感じがした。虫が入ったわけではない、汗をかいたわけでもない、それは今まで感じたことのない不思議なもの。

了承すると燐子さんは俺に向けて先ほどの本を差し出してきたが、買わないので大丈夫ですと答えると、燐子さんは迷うかのようにその本を見つめた後レジに向かっていた。

「ほんと……なんなんだろうな」

この気持ちは、好きとは、恋とは、本当になんなのだろう。仮に俺が湊の事を好きだとしたら、今燐子さんに向けているこれはなんになるのか。

一人待っている間湊の方を見続ける。ほんとに音楽に真剣らしく飽きずに音楽雑誌

を読み続けている。そんな姿から目を離せなくて……

「……新庄さん？」

「えつと、どこに行くとかあるんですか？」

「いえ、特には……決めてないですけど……」

本を買い終えた燐子さんに声をかけられ湊から目をそらす。行きながら考えましよう、彼女は逃げるようにその場を離れた。

本当に不思議だ。他の人になら気もかけないような些細な事が燐子さんに対してのみ気になってしまう。服や声、手に持つ鞆やその視線の動きにも。

それは……湊に対して感じたことがあっただろうか。そんなこと、向けていたとしても半ば無意識のためわかるはずもない。

ふと振り向くと、湊は丁度読み終わって帰ろうとしていたのか、こちらの方を向いていた。

チクリと、何か胸に刺さったかのような気がした。それが何かはわからない、それが何故かもわからない。

湊から目を離し燐子さんと並んで外に出る。湊に対して抱いていた苛つきのようなものは感じない、だけど何か似ているようなこの感覚。

「どうか……しましたか？」

「……なんでもないです」

ああ、わからない。迷路か、推理か、難問か、ミステリーにででくるようなどれも違う。

好きって、なんだろう。

そんな疑問が、いつまでも頭の中で暴れていた。

羨ましかった

ライブというのはやはり緊張するものである。それが自分のものではないというのにこれ程考え込むものなのだ、当人達からしたらたまたまったものではないだろう。でもこの緊張は普段バイト先で行われているライブの時には感じない。

それは俺が店員ではなくただの客として観に来ているからなのか、今回行われるライブが Roselia によるものだからなのか。信号が変わるのを待つ間そんなことを考えてしまう。

「来てくれたのね」

「……リハーサルはまだなのか？」

「もうすぐよ」

「他のメンバーは？」

「……時間に間に合えばそれでいいのよ」

それならば俺なんかと会話せずに少しでも早く行こうという心構えを持った方がいいだろうに。口には出さないがそんな事を思ってしまう。

「そういえばあなたは？　まだ時間はあると思うのだけど……」

「……本屋に予定があつてな」

家においても落ち着けなくて、なんて言える筈もなくそれっぽい嘘をつく。そうと興味なさげに返事をされ、信号が変われば直ぐに歩き出す。

「二ついいかしら？」

しかし彼女は渡りきれば急に歩を止め、思い出したかのように振り返りそのように聞いてくる。一体何だと思いつつもその問いは一向にやってくる気配もない。

「なんだよ」

「………いいえ、なんでもないわ」

一体何なのか、ライブハウスに着いてもそれについて話されることなく、それじやと言う前に湊は中に入つていった。

一体何を聞こうとしていたのか。いいえと言うまでの間がかなり長かつたしどうでもいいことということではないのだと思う。

気になるが気になつた所で仕方がない。こういうのは一度答えてもらえなかつたら二度と答えてもらえないものだ、気にするだけ無駄だろう。

本屋に行くかカフェに行くか少し迷つたが、暇な時間はあるとわかつていたので一昨日リサから借りた恋愛小説を持ってきている。それでも読むかと決めてカフェに入る。人目につく場で読むのは憚れるが、誰かに覗かれるということなどそうそうない。

恋愛というのは本当にわからない。好きとは何か、本に書いてある胸が痛いというのも、ドキドキするというのも、素直になれないというのも、それ以外のことも。

どれかを体感したことはあるのか、どれも体験したことがあるのか。思い出せないなんてこともないのだが……

本当に、好きってなんなのだろうか。ページを捲り、机の上を無造作に指で滑らせた。

わっ、と周りの人間は盛り上がる。ライブが始まりバンドが変わる度に盛り上がりは右肩上がりです、これからもまだまだ盛り上がっていくだろうというのは簡単に予想させられる。

では俺は盛り上がっていないのかと言われたらそれはまた別の話だ。音を聴いていたらそこは違うのでは、なんて思ってしまうのはとても勿体無いことだと周りを見回せばわからされる。

だとしても全てのバンドにどこか惹かれるものがあつた。心に響くとは違う、感動させられるというのでもない。それが何かわからないまま次のバンドに。

『続いてはAfterglowの皆さんです！』

そういつてステージに登ったメンバーの中にモカと蘭ちゃんが見えた。集中している様子がよくわかる。目配せをして、全員が頷くと同時に演奏が始まる。

A f t e r g l o w の演奏は今までのバンドに比べて、より一層目が離せなかった。音がどうとか、そういうものではない。全てのバンドにあつた何か惹かれるもの、それが一際強く感じさせられて。

これはこの前の R o s e l i a のライブの時に感じたものと同じ。目を瞑れなくて、イラつきを覚えて……自分の中で何かが溢れて飛び出していきそうになる。

一体何なのか、少しもわからない。いずれ来るであろう R o s e l i a の演奏を見ればこれは何なのかわかるのだろうか。それともわからずじまいなのか。

蘭ちゃんの歌は上手い。それこそ今までのバンドの中では一番ではないかと思ってしまう程に。

この前湊の名前を出し、同じライブハウスでライブをするとわかった時蘭ちゃんは少し焦るように練習に向かつていた。

蘭ちゃんもギター付きとはいえボーカル。同じボーカル同士、多分ライブ関係みないなものを蘭ちゃんは湊に向けて抱いているのだと思う。

目を細める。視界が薄らと白く染まる。眩しいな、少し。

そんな事を考えていたら次で最後の曲になってしまった。見落としてはいない、聞き逃してもいない、それでも時間は早く感じさせられた。

相も変わらずその演奏からは、目を離す事が出来なかった。

A f t e r g l o wの演奏が終わるとR o s e l i aの名前が呼ばれ、湊達がステージに上がった瞬間盛り上がりは更に苛烈になる。

胸が痛い。ああ、これはなんだろう。物理的ではない、なんだか締め付けられているかのような、そんな不思議な感覚を感じさせられる。あいつらは人気なのか、そんなことすら考えることが出来なくて。

頭も沸騰しそうなくらい熱くなっていて、今すぐにも前に進みステージの近くに行きたくなってしまう。

一歩、目の前の人に当たらないようにと歩を進めようとしたその瞬間に足が止まった。

まるで金縛りにあつたかのように動かない、体が欠片も動かない。何かあつたわけではない、演奏が始まると同時にそんな現象に襲われた。

それだけではない、不思議と喉が渇く。胸も頭も先程より熱くなり、それによつて蒸発させられているかのようで。唾も脳髄も、消えて燃えて亡者になりそうだ。

何故だろう、ステージの上のR o s e l i aと俺との距離がとても遠くに感じられる。現実的な距離でいえばそう遠くはない。そのはずなのにとても遠く、違う世界にいるかのような遠さ。

鳥肌が立ってきている。どこまでも素晴らしい演奏で……

楽しそうな表情、奏でられる音、その全てが俺を魅了して離さない。

まるで餌を籠の前に置かれた鳥のよう。焦がれ、求め、手を伸ばす。しかしそれは手に入れることは出来ず、ただただ眺めることしか。

ああ、どうして俺は……

——あのステージに、立っていないのだろう。

そう思つた瞬間、全身に冷水をかけられたかのようなものを覚えた。熱くなつていた思考はピタリと止まり、しかし体は動かせないままで。

なぜそんなことを思うのか。湊の誘いを断つたのは誰でもない俺自身。そして断つた理由はピアノのことが嫌いだから。

ならばこんなこと思うはずもない。本当にそうであるならば微塵たりとも思つてはいけないはずなのに。

「すごいね」

「うん、私達もあんな風に演奏できるのかな……」

演奏間に斜め後ろから小さくそんな声が聞こえてきたので顔を向けてみる。二人の視線は *Rosealia* に釘付けで俺に見られていることを気づいていない。

その二人もバンドでも組んでいるのか、それともこれから結成するのか。普段考えるとするならばそんなとこだが今回は別のところに目がついた。

その二人組の目は、憧れているかのような目をしていた。夢見る子供、まるでそんな風を感じ取らされる。

最後の曲が始まった。俺もステージに視線を戻すと、楽しそうに演奏をする Rose lia のメンバーの表情を見て気づく。

どうしてこんな風になっていたのか、何故こんな風に考えさせられるのか。その全て簡単で、単純なもので。

ああ、俺は……………

楽しそうに演奏するやつらが、羨ましかったんだ。

「私達の演奏、どうだったかしら？」

その言葉で遠くに行っていた意識が戻ってくる。そう問いかけてくる湊の後ろには Rose lia と After glow のメンバー揃い踏み、バンド間の仲はいい方なのだろうか。

「……………よかったよ、凄くな」

「そうじゃなくて、もっと具体的に言ってくれないかしら？」

「感想ですか？ それならアタシ達にもお願いしま〜す」

「ちよつと待つてください」

そう会話を割り込んできたのは Rose lia のギターの人、名前は……なんだっけか。

「湊さんは彼の事を評価しているみたいですが私は彼の事を知りません。そんな人から具体的にと言われまして……」

「アタシも、腕前もわからない人から言われても納得出来ないと思う」

彼女と蘭ちゃんの見解は至極真つ当であり俺もそうだと思う。

初心者ならばいざ知らず、腕前のある人間からすれば上手さもわからない人間からの意見など、相当切羽詰まってでもない限り寧ろ邪魔にしかならない。

根本的なものであれば本人達も気づいているだろうし、細かいところは意見した側が間違っている可能性もある。それこそ個々の好みであるものかもしれない。

しかし腕前がわからないと言われてもどうしようもない。そう思っていたらモカがポン、と手を叩く。

「蒼音さんが演奏すればわかるんじゃないんですか〜？」

名案を思い浮かんでしまったと口には出さないが、モカはわかりやすくそんな表情を

俺に向け、それに続いて湊を覗いた全員の視線が俺に向かってくる。

「その……新庄君は……」

「それでいいなら。と言つてもどこでやるんだ?」

そう言うのと湊は驚いたかのような視線をこちらに向けてくる。それを見てカリサも、燐子さんも不思議そうな視線を向けてくる。

それも当然か、今まであれほどピアノは嫌いだと言つて誘いも蹴つていたのだ、頭でも打ったのかと心配されてもおかしくない。しかしそんな事はどうでもいい。

「うゝむ、ここを使うわけにはいきませんしく……どうしますか?」

「それならこの近くで路上ライブしてる人をこの前見たぞ、時間的にも丁度いいんじゃないか?」

「さ、流石に路上ライブをしてもらうのは……」

「俺はそれでも……とは言つてもピアノがないと話にならないだけど……」

「そ、それなら……私ので……大丈夫でしょうか?」

存在した二つの問題、まず場所に関してだがこんな突然の提案なのだ、許可を取っているはずもない。しかし路上ライブ程度初犯なら注意される程度で収まるだろう。赤髪の人提案を受けることにした。

そして次の問題であるキーボードの確保、これも燐子さんの助けで無事解決した。

他にもピアノとキーボードの違いなどはあるのだが……二年程やってないのだ、それに比べれば微々たる物だろう。

「それじゃ片付けが終わったらね、すぐに終わるから待つてて」

リサがそう言うのと湊と燐子さんを除いた全員がこの場を離れていった。目を険しくさせ湊は俺に聞いてくる。

「……どういふ風のふきまわしかしら？」

「さあ、酔っ払ったのかもしれないな」

それだけ言うのと湊も控え室に向かっていき、燐子さんもその後が続く。

嫌いだ、嫌いじゃない。好きじゃない、好きだ。別々のものが混ざりあつてどれがどれかもわからない。そんな状態だというのに頭はとてもすつきりしている。

外に出てベンチに座り赤色に染まる空を見上げる。空は雲一つなく、晴れ渡っていた。

案内されてやってきたのは駅から少し離れた場所。確かにここなら雑音は少ないので路上ライブをするなら理になつてはいるのだろう。

ただ駅への道ということもあり人通りは多い、邪魔にならないところを探し演奏の準備をする。

「ごめんなさい、こんなことに協力してもらって」

「い、いえ……本当に大丈夫……です」

周りを見れば同じく路上ライブをしている人がちらほらと目に入る。

準備が完了し鍵盤に指を置くと指が震える。緊張からか、武者震いともいうやつか、それとも弾くなど心の片隅が叫んでいるからなのか。

息を大きく吸い、昔演奏を始める前にやっていたように指を動かしてみると震えはパツと収まった。

「……さて、何を弾けばいいのか？」

「新庄さんの好きなもので大丈夫です。楽譜もありませんし」

「わかりました」

ギターの人、来る途中でリサから教えてもらったが紗夜というらしい。彼女からなんでもいいと言われたので一番弾きなれた曲を思い浮かべる。

ここは色々な音が聴こえてくる。人の歩く音、他のバンドの演奏、ペットの鳴き声。だけど、いつも聴こえていた母親のピアノの音は聴こえない。

鍵盤を指でなぞり、また一つ深呼吸をして、演奏を始めた。

ああ、これだ。なくしたピースを見つけた感じがする、そしてそれがピタリとはまっ

たような。指が勝手に動く、頭が真っ白になっていく。

真っ白になったものがある一つの感情が埋め尽くしてくる。楽しい、頭の中はそれ一色。ああ、結局俺はピアノのことが……大好きなんだ。

「うっそ……」

「これは……」

声は邪魔だ、視界は邪魔だ、自分の世界に入り込む。もうピアノの音しか聴こえてこない、そしてそれは俺の奏でているもので。

音が皮膚から体の中に入ってくる、自分の血であるかのように身体中を駆け巡る。最高だ。終わらせたくない、ずっとこうしていたい。

そうは願うもののどんなものにも終わりはある。たった一曲、それだけなのに名残惜しさを感じながら演奏を終えた。

「蒼音さんすつごういー!」

「……まさか、これほどとは」

「これは流石のモカちゃんも驚きを隠せませんな」

顔を上げるとそんな声が拍手と一斉に聞こえてくる。見回せばその中には知らない人もちらほらと。ああ、そういえばここは路上だった。

わからない、どんな顔をすればいいのか。大勢の前での演奏なんて数えきれないほ

どやった、それからの拍手も体に染み付くほど受けた。

だというのになんだか恥ずかしくなって、そして自分の意思でピアノを弾いたという事実を改めて感じさせられ、下を向いてしまった。

本当にこれでいいのか、ピアノが好きだと認めてしまっていていいのか。もし認めてしまったのなら俺は、父親になんて顔をすればいいのだろう。

今ならこれも気の迷いと誤魔化せるかもしれない、そんなことを思いながら俯いたまま止まない拍手を受けていると、突如左手に痛みが走った。

「次、やるわよ」

「は?」

「観客からの期待には答えるべきでしょ?」

前を向くともう一回、そんな声が聴こえてきた。アンプがないのだから聴こえづらいだろうに、もちろん褒められているのだから悪い気はしない。

恐らく軽くではあるがつねられたのであろう左腕、未だにヒリヒリはするが……前を向ける力は貰えた。

しかしやるわよとは一体、まさかとは思うが……こいつも歌うつもりか? ここにはマイクなんてものはないというのに。

「お前もやるつもりか?」

「当然、嫌とは言わせないわよ」

「マイクあんのか？」

「音量には自信があるわ。曲は……そうね、あなたと会った時ので大丈夫かしら？」

初めて会った時の曲、忘れるはずもない。それは今日のライブでも聴いたもの。早速演奏を、と思ったところでリサの声が割って入る。

「友希那、蒼音はやったことないんだよ？ いきなり合わせるなんて出来るわけ……」

「大丈夫よ」

リサと燐子さんが声を漏らす。Afterglowの人達も紗夜にあこちゃんも不思議そうな表情を向けている。そしてなにも知らない客たちは演奏をいまかいまかと待っている。

「あなたなら出来るでしょう？」

そう言う俺の返事を待つこともなく、いつも通りの表情でこいつは前を向く。それは正反対に不安そうな表情をリサと燐子さんから向けられる。

楽譜などない、だけど頭の中には存在する。あつてるも間違ってるもない、もとより正解などないのだ、俺だけの楽譜がある。

フレーズと音を知っているのだ。そんなもの、どうにでもなる。

初めて聴いた時、こんな風だろうと決めつけた。

今日のライブ、ハッキリと輪郭を知ることができた。
ならば弾けない道理はない。目を瞑り、思い出しながら演奏を始めた。

俺と湊の音が変わる。ああ、やはり演奏は楽しい。先程浮かんだ悩みなんて一瞬にして消え去った。父親なんて関係ない、母親なんて関係ない。

俺が、ピアノを弾きたいんだ。

ふと前を向くと前で湊が歌っている。後ろからというのもありどんな顔をしているのかはわからない、がどこか楽しそうというのとはわからされる。

締め付けられるように胸が痛む、ドキドキするというのはこういうことだろう。

ピアノは好きだ。そう素直になれたから、ようやく認められたのかもしれない。

もうやめだ、自分に嘘はつくことは。ピアノが嫌いと言い続けて拘ったからといって生まれ変わる訳でもない。

だからこの感情も、どんな否定をしようとしてそれが事実。それなら……全部引きずつてやろう。

俺は、湊の事が好きだ。

その日の演奏は多分これから先、一生忘れることは出来ないだろう。そう、思わされた。

変わる時

久し振りに聴いた新庄さんの演奏は一日経った今でも頭の中に刻まれている。最初に聴いた曲は彼がコンクールでよく弾いていた曲でどこか懐かしい、そんな感じがした。

そして次に彼が弾いた曲は、私達の曲。友希那さんの歌声と一緒に聴こえてきたその曲はその日私が弾いたものと同じだけど全く違うものだった。

当然と言えば当然、新庄さんはその曲について全く知らないのだから。そもそもそれは私達の曲なのだから正解なんてものはハッキリとしていない。私のだって何度も工夫し、変えた結果できたものなのだから。

「――」
雑音が聴こえてくる。私は新庄さんの演奏を聴いてただただ圧倒された。

あの時聴こえてきた演奏を記憶のままに指に落とす。違う、こうじゃなくて、こう。あの時の演奏以外に頭に浮かぶものを振り払うかのように演奏を続ける。

ああ、邪魔だ。頭の中に浮かんでくるあの光景が邪魔だ。彼の笑顔が、友希那さんに向けて浮かべていたあの顔が浮かんでくる。

どう思っているのだろう、どんな関係なのだろう。振り払いたいののに、そうしようとするほど絡み付くように頭の中で根を張り出して、指に絡み付いて鈍らせてくる。

それを払い落とすため、もう一度初めからやろうとしたところで手が止まる。真つ暗闇にキーボード、自分の腕しか映っていないかった視界が広がっていく。

左手を見ればそこには私以外の手が。小さな手、誰のものかなどわかりきっていて、釣り上げられるかのように意識が浮上する。

「りんりん、もう時間過ぎてるよ？」

「それにしても隣子は凄いな、話しかけても気づかないなんて」

「ご、ごめんなさい……」

「いやいや、責めてるわけじゃないって。ほら、もう片付け入ってるよ？」

Rose liaの練習中だったのに自分の世界に入り込んでしまった。勿論悪いことなどないのだが時間を守れないとなるといいことではないと思う。

若干の反省をしながら片付けを始める。その最中に浮かぶのも先程と同じ、ついついため息が漏れてしまう。

「りんりん、今日の夜NFO出来る？」

「うん、大丈夫だよ」

やったくと喜ぶあこちゃんを横目に友希那さんの方を見る。綺麗、本当に私なんかとは大違い。

彼が友希那さんに向けたあの笑みの意味、ただ演奏が楽しくて漏れ出たものならいい。でもそうでないなら、あれが友希那さんだから出たものなら……

「そういうえば湊さん、新庄さんはなんと仰っていたんですか？」

「新庄君？ 何も聞いていないけれども……」

「そうですか、感想を求めていましたしメールか何かで既に聞いているものかと」

氷川さんの聞いている事は私も気になっていたこと。新庄さんは私の演奏に対してなんと思っているのか、気になって気になって夜も眠れなかった。

そんなになるならば連絡先も交換しているのだし、自分で聞けばよかったと今になれば思うものの昨日の時点では思い付かなかった。

ただ、思い付いたからといって聞けるかと言われたらそれはまた別の話。

「私は新庄君の連絡先を知らないわ。感想については今度会った時に聞こうと思っただのだけど……」

片付けていた手が止まった。友希那さんは新庄さんの連絡先を知らない、聞き間違いでなければ確かにそう言った。嘘だと疑う反面喜んでいる自分がいる。

友希那さんが新庄さんの連絡先を知らないこと、私が知っているのに友希那さんが知

らないこと。

友希那さんが、新庄さんが、互いの事を好きなのではないか。その可能性がほんの少しでも、揺らいだことを何よりも。

「なるほど、あれほどの演奏が出来る人からの感想を貰える機会はそうないと思ったのですが……」

「リサは確か知っているわよね？」

「知ってはいるけど……燐子、お願いできる？」

「え……わ、私……ですか？」

「そーそー、アタシからだとかちゃんと見てくれるかもわからないしね〜」

氷川さんと友希那さんから見ええないようにこちらを向いてウイंकを一つする今井さん。

今井さんからだとは新庄さんは見ないかもしれない、そんなことは絶対ないだろうにそんなことを言ったのは……私のため。

「わかり……ました……」

「……燐子も新庄君の連絡先を知っているのかしら？」

「はい……本の貸し借りとか色々……便利なので」

「……そう、ならお願いするわ」

暫くの沈黙の後、そう言つて友希那さんは出ていった。今井さんもお願ひねと私に念を押してから友希那さんを追つていった。

今日の天気は雨、それもとて強いもの。じめじめとしたものだけど不思議と気分は悪くない。雨の音が少しだけ心地よく感じられた。

「……どうしよう」

家に帰つて数時間、なんと送ろうか迷い続けて決まっていな。いつも文であれば一瞬で送れるというのに新庄さんが相手の時だけはこんなにも緊張してしまう。

お母さんもお父さんも今日と明日は忙しいというので家には一人、そんなだからベッドに座り込んでずっと考えている。

書いては消して、消しては考え、考えては書き、消す。呆れてその回数すら数えなくなつた時突然電話がかかつてきた。

びっくりとしてつい声が漏れ、相手の名前を見れば新庄さんの名がかかっている。それにより更に驚き一体何故と考え電話に出られない。

しかしだからといって待たせるわけにもいかない。わかつてはいるが緊張が収まる様子はなくて一つ深呼吸、それでもスマホを持つ手が震えてしまう。

「も、もしも……」

声も震える。どうして、理由なんて思い付かない。あれこれと思考を回して、回しすぎて、頭が真っ白に塗りつぶされる。

心臓は向こうに届いてしまうのではないかと思うほどに高鳴って、胸に手を当てて落ち着かせようと試みるが効果はなくて。

『リサから燐子さんから連絡がなければ電話してあげてと言われたんですけれど……何かありましたか?』

「……はあ」

『……どうかしましたか?』

「いい、いえ、なんでもありません……」

無意識のうちに溜め息が漏れてしまった。彼が連絡をかけてくれたのは今井さんが言ったから、ただそれだけの事実によって熱されていた思考が冷めてくる。

別に私に用があるわけでもない、話したいことがあるわけでもない。そう落ち込みはするとはいえ何も話さないというわけにはいかない。

幸い話題になり得るものはある、というよりも聞かなくてはいけないことがある。

「私達の演奏の感想……気になってまして」

『あー、そういえば伝えられてなかったですね』

全体として個人としてアドバイスとも取れるような感想。忘れないようにと近くに

あった紙に書き、そしてその言葉を頭の中でもう一度確かめてみる。

必ずしもそれら全てが正解というわけではない。そういう考えもあるというだけのものなのだが、それらには納得できるだけの何かがある。

私達があうすらと感じていたことも、全く気づいていなかったことも。彼が上手だからと知っていなくても考えさせられるかのような。

『……こんな感じですかね』

「ありがとう……ごさいました」

『いえ、大したことではないですよ』

それじゃあ切りますね、彼がそういつた瞬間私は待つてくださいと言っていた。どうしたんですかと聞いてくるその声以上に私の方が困惑している、なぜ私は呼び止めたのだろう。

沈黙が痛いくらいに感じられる、喉は渴いて既にカラカラになっている。聞くなど頭は訴えてくる、聞けと心は囁いてくる。

吐き出してしまいそうな程の緊張、ライブやコンクールで感じるそれと同じ、でも全く違うもので。

何度か深呼吸。暴れまわる心臓の鼓動が喧しい。

「新庄さんは……友希那さんのこと……どう思ってるん、ですか？」

聞いてしまった。求める答えは一つ、だけど今度は新庄さんが何も話さなくなる。私と同じく気持ちを落ち着けている最中なのか、それとも私の言うことが理解できないのか。

やっぱりなんでもないと切り上げてしまいたい。だけど聞いたのは自分だから、やつと聞けたことだから、込み上げてくる酸っぱさを抑えながらただ待っていた。

中々答えないのは私の気持ちをわかっているからか、それとも恥ずかしいからなのか。彼は大きく息を吐いて、言った。

『湊の事は……好き、です』

たった二文字、ただそれだけの物なのにそれは、今まで受けたどの言葉よりも衝撃的だった。

込み上げていた酸っぱさも、心臓の鼓動もだんだんと収まっていく。だけど胸の痛みだけは、形を変えて残っていた。

弾けそうなものは突き刺すようなものに、焼き尽くされてしまいそうなものは凍えてしまうかのように。それだけは全く収まる気配もなく、私を蝕んでいる。

「……突然こんな事聞いてしまって……ごめんなさい」

『……………』

「また……お薦めの本……貸しますね」

そう言つて通話を切ると同時、糸が切れたかのようにベットに仰向けで倒れ込んだ。お風呂は入ったけれど晩御飯はまだ、なのに食欲は少しもない。

ああ、なんだか笑えてきた。勝手に期待して、勝手に落ち込んでいる。自分では何一つきっかけを作れないというのに僅かな可能性には期待をしてしまう。

ああ、本当に……

「馬鹿みたい……」

スマホがまた連絡を知らせてくるが今は誰が相手だと確認する気も起きない。電源を消し、部屋の電気も消し、そのまま目を瞑り寝る体勢になる。

本当に馬鹿みたい。新庄さんからすれば私なんて、それこそなんだってないのだろう。もし彼と出会ったあの時にこの思いを伝えていれば、ずっと前に伝えられていれば、この結果は別のものになつていたのだろうか。

なんて、どうしようもないことだとわかつていることを考え、心地よいと感じていた筈の雨の音に苛ついてしまう。雨漏りでもしてしまつたか、ああいや違う。涙なんて出せなくて。

それもどうしようもないことだからと気にしないようにと意識をして、私は意識を闇

に溶かしていった。

「白金さん、大丈夫ですか？」

「……あつ、大丈夫……です」

「朝から体調がすぐれていないように見えましたけれど……今日の練習はお休みにしますか？」

放課後、氷川さんからそう話しかけられる。結局昨日はあのまま寝てしまい、今日の朝も食欲はなかった。

熱があるわけではない。ただ昨日の事を未だに引きずっているだけ。

「えつと……」

「無理はよくないですよ。湊さんには私から伝えておきましょうか？」

練習が出来ないなんて状態でないことは自分が一番わかっている。大丈夫です、そう言うべきだともわかっていて、思っていた。

だけど友希那さんの名前が出たその瞬間、喉元まで上がっていたその言葉が唾と共に飲み込まれていった。意思に反する様に、まるでそれが本音であるかのように。

「……はい、お願い……します」

今日は、友希那さんには会いたくない。

大丈夫、今日だけだから。明日には何でもなくなってる。胸の底の暗いこれも、悲しみも、全部忘れていつも通りになることが出来る。

そう、別に何かされたわけじゃない。湊さんが、新庄さんが悪いわけではない。どうしようもないことで、そうわかつているからこそ。

今日だけは、練習を休むことにした。

帰宅後何もする気が起きなかつたので無理矢理に寝て、目覚めた時には二つメッセー
ジが届いていた。

一つはお母さん、帰れるのが遅くなりそうだから晩御飯は自分で食べておいてねとい
うだけのもの。

二つ目はあこちゃんから。お大事にねという内容がとても長く、そしてあこちゃんら
しく送られてきていた。

「お腹……すいちゃったな」

もう丸一日何も食べていない、お母さんから送られてきた晩御飯という文字が消え
去っていた飢餓感を思い出させてきた。

自分で作ってもいいんだけど……めんどくさくてそんな気は起きない。コンビニで
何か買ってしまおうと思いい外に出る。

雨は朝の時点で止んでいたのだけどあれほど強かった雨、道路には水たまりが幾つか目に入る。下を向き、間違えて踏んでしまわないように気を付けて道を歩く。

そうしてコンビニに着いたところであることに気がつく、財布を持っていない。落としたわけではなく忘れてしまった。

そんな馬鹿など一瞬思ったが制服のまま着替えず、何も持たずにやって来たのだから当然と言えば当然。寧ろ何故気がつかなかったのだろう。

……ああ、何故もどうしても、わかりきっていて。

仕方がない、めんどくさいけれど帰って自分で作ろう。そう思い家に帰ろうとしたところで声をかけられた。

「燐子さん？」

それに対して零れた声は、道行く車の音にかき消された。鼓動がゆっくりと速くなる。

顔を見ることが出来ないのは何故だろう。恥ずかしい、それが少なからずあるのは事実なのけど昨日のこと、それが胸を締め付けて顔を下げさせる。

呼ばれただけ、それ以上は言葉一つない。だからといって互いにその場を離れるわけでもない。

車の音とコンビニから聞こえてくる音、それしか聞こえてくるものがない世界を破つ

たのは、私だった。

ただそれは、言葉ではなかったのだけど。

限界だったのか、お腹が鳴ってしまった。

こんなの漫画以外で聞いたことがないと思ってしまうほどのもの。もしかして聞こえてしまったのではないかと新庄さんの方を見ると、こちらから目を離し頬を掻いていた。

顔から火が出そうとはこのようなことか。急に熱が出たのかと思うほどに顔が熱くて、更に深く顔を沈めさせてしまう。

「あー……家近いんで、何か作りましようか？」

その言葉に驚いたが私は頷いた。私の家だつてそんな遠くない、私をどう思っているかわからないが新庄さんは湊さんの事が好き。それはもうわかったこと。

それだとしても、私は新庄さんの隣を歩いていった。

「こんなものですけど」

家にながらせてもらい暫く待つとご飯を出される。待っている間は落ち着かなくて部屋中を見回してしまった。

広い部屋、そう感じたのは事実部屋が大きいからではあるのだけど、それ以上に部屋

に物が少ないのが原因だと思う。

話を聞く限り新庄さんはバイト帰りで、家についたらピアノをしようと思っていたらしく晩御飯は予め作っていたらしい。

その料理は私が作るものよりも美味しく、少しだけへこんでしまったのは内緒だ。

「……………」

会話はやはりというべきかない。昨日あんなことを聞いてしまったから重い空気が互いの間に感じられる。

何か話せる事を、そう思案していたら洗い物をしている新庄さんから声をかけられた。

「昨日のあれですけど……………その、そういうこと、ですか？」

少し恥ずかしそうな声、不思議そうな声。顔をこちらに向けずに聞いてくる。

そういうこととはどういうことか。なんて聞くまでもなくわかってしまう。伝わってしまい恥ずかしいともあれ、伝わって少し嬉しいというものもある。

……………そして、伝わっているのにああ答えられたのだと、少しだけ寂しかったり。

でもここで私がいとその二文字を言うだけで全てが終わる。そう、その二文字だけで好きだと伝える事ができる。

好きだと、真つ直ぐに伝えられれば私にも可能性があるかもしれない。

振り向かせて、私に興味を持ってくれるかもしれない。でも私なんか、新庄さんの恋を邪魔していいのだろうか。

諦めて、邪魔をしない方が新庄さんにとって、いいはずだから。

いいえと言ってしまったおうとしたその瞬間、昨日新庄さんに言われたアドバイスを思い出した。私の音はどこか遠慮をしているようだ。音の強弱ではなく、表現が弱いのだと、

他人を持ち上げるかのような、バンドとしては間違っではないけれどそれでももう少し、自分を出してもいいかもしれない。

多分それは音楽以外にも現れているのではなく、音楽以外でそうだから、演奏に現れてしまっている。

変えたいと願っていた、変わりたいと願っていた。それはいつかだったけど、今でなければ何の意味もない。

だから……

「はい……私は新庄さんが好き……です」

一糸纏わぬ本音。たった一つ、偽りのないこの思い。好きだと、恋をしているという気持ち。

後悔を残さない為だとかそんなものではない。私が望む、これがいいと思える結末の答えを掴むため。友希那さんは彼のことをどう思っているんだろう、なんて奥底に抱きながらも手を伸ばした。

深まる霧

何がなんだかわからない。

これは夢だと、そう思ってみても手をつねれば痛みが襲ってくるだけ。好きだと言われ、頭がおかしくなるくらいには困惑している。

俺が答えられずにただただ時間が過ぎ、これ以上外にいと親に心配されるからなのかはわからないが、また今度と言って燐子さんは帰っていった。

そうであるというのを全く予想していなかったというわけではない。そうなのではないかとうつすら思っていた。

でもそれを直接言われると、だからどうしたという程の衝撃。どうにも思考が動かないで吐きそうなくらいに息が詰まった。

俺は羨が好きだ。それは俺自身わかっているし、認めている。そしてそれは燐子さんにも言っているもので、であれば俺には断るという選択肢が当然あったのだが……そうすることは出来なかった。

そもその話俺が彼女の言ったことの真意を聞いてしまったのが悪いと言われればそれまで、ならなんで聞いてしまったのか、それは自分でもわからない。

困惑している、頭の中がぐちゃぐちゃだ。でもこれは今日だけのもので、明日には何事もなかったかのように普通に言えるかもしれない。

なんて、あり得ないことを考えてしまう程度には現実から目を背けたくなってしまうて。

「好き……か」

ふとそんな言葉が漏れる。考えたから、悩んでいたからわかる。好きというのは心地よいもの、難しいもの。でもそれ以上に怖いものだということを。

嫌だと言われたら、嫌われたら、想像したくないものだがもしかしたらと考えさせられる。そしてそれは俺だけが抱いてるものではない筈で。

俺は燐子さんのことが嫌いか？ そんなわけがない。

告白されて迷惑しているか？ むしろ嬉しさすら感じさせられる。

なら俺は、燐子さんに嫌われたくないか？

その答えは一つ。当然、誰であろうと仲がよい人間から嫌われたいなどと考える筈がない。

いや、仲がよいというのは語弊があるか。向こうからのものはその程度のものではないだろうし、こちらからは……恐らく、友人程度というのでは温くなってしまうているかもしれない。

そうであるならば、嫌われたくないのであれば、友人程度ではないほどに意識してしまっているのならば……

それは、好きと言ってもなんら間違いはないのではないか？

「……あほらし」

だとしても、どちらが好きだと言われたのなら迷いはすれど答えられると思う。馬鹿らしいと決めつけて、考えたくなくて逃げ出した。

今日はピアノを弾く予定だったし今からやろう。思考を捨てるように、追いかけれぬように。ピアノを弾くためにその場を離れようとしたのだが、そうはいかなかつた。

原因なんて大それたものではない。猫がにやあにやあと側で鳴いている、ただそれだけ。

構え、まるでそう言っているかのように鳴き続けている。既に立ち上がったけれど座り直して猫を撫でる。

撫でてやるととても気持ち良さそう、ああ、猫というのは本当に愛らしい。ピアノは……明日は休みというわけではないのだからどうせ長くは出来ないのだし、今日は猫と戯れよう。

猫は好きだ、ピアノも好きだ。どちらの方がと言われたら……さて、どちらだろうか。もし、こんな風に片方の好きを蹴つてもう片方の好きを取るといふのなら……

駄目だ、どうしても考えてしまう。関連性なんてないはずなのに。ため息が溢れる、なぜ溢れたのかは俺ですらわからない。

「父さん……」

父親は母親が家を出ていった時なんて思ったのだろう。俺なんかには想像もつかないし、聞くなんてことが出来るはずもなかった。

ただ好きな人に離れられるというのは……やはり、辛いものなのだろうか。

忘れるように、吐き出すように、猫が寝るまで無心で撫で続けた。

学校も終わりバイトも終わった。一日の殆どが消え去るような長さではあるもの、それはあつという間に過ぎ去っていった。

考えて迷って、それこそ湊に対して考えていたときよりも考えた。

燐子さんは何故俺の事が好きなのか、そんなことから俺は燐子さんの事をどう思っているのかまで、全部。

好きか嫌いか、どちらか決めろと言われたら好きだと言い切れる。それは好きと言われたから意識をしているせい。それもあれど、それだけではないのは俺が一番わかっている。

他人からの感情というものは自分から出る感情と比べ気になりすぎる。それは自分

で解決できないことで、わからないことであつて。

自分のことを嫌いに思う人間のことを好みになることはないのは当然ではあるが、自分のことを好きな人間ならばどうだろう。感染、増殖、チヨロいものだ。

「あ、蒼音さん！」

止まらぬ思考、それは前から飛んできた声に一時休止を強いられた。声の主はあちやんでその隣にはリサがいる、恐らく練習帰りなのだろう。

彼女達だけならどうともなかった、でもその両隣にいる二人、湊と燐子さんを見て止まっていた思考は倍以上の早さで巡りだした。

どうして二人が、燐子さんは湊に対してどう思っているのか。なんと声をかけるべきか、どうして四人なのか、なんて程度のものにまで思考が至る。

「……どうかしたのかしら？」

「……なんでもねえよ」

様々にめぐる思考の中今もつとも考えているもの。それは湊ではなく燐子さんのこととで、そちらの方に視線を向け目が合えば顔を赤くしてそらされる。

それはいつも通りではあるが一つ違うとするならば、俺も目をそらしてしまったことだろうか。

「そうだ。この前の蒼音、すつごくかっこよかったよ」

「あこもそう思いました！ りんりんもそうだよね？」

「えっ……う、うん。凄く……かつこいいなと……思いました」

ああ、本当におかしい。リサやあこちゃんに褒められるのは単純に嬉しい、それだけであるのに燐子さんから褒められると嬉しくはあるが、どこかに恥ずかしさが隠れている。

それに対し感謝の言葉を伝え、しかしその場で解散という訳にはいかない。リサが湊と、あこちゃんが燐子さんと話しているためだ。

だからどうしたと別れの言葉を残してその場を去る、大分前の俺ならば恐らくそうしていただろう。

そうしないのはこの悩みという名の霧を晴らすためにか、それとも、霧の中にあるものに魅せられてしまったのか。

「……そういえば、なんでお前ら四人なんだ？」

「ん？ あー、紗夜は忙しいからさ」

「そういう新庄君は？ 買い物をしていた、というわけではなさそうだけど」

「バイト帰り」

話したい内容はこんなものではない、しかし肝心の話したい相手がちちらを向いてくれないのだからどうしようもない。話す内容など……なくはないが、それが出来るか

はまた別だ。

歩きながらでの会話なので時間制限付き。どうするべきだろうか、それとも話さず帰ってしまった方がいいのだろうか。そんな風に迷っているとあこちゃんから話しかけられた。

「そうだ！ 蒼音さん今日の夜NFOやりましょう！」

「NFOって……確かあこと燐子がやってるゲームだよな？ 蒼音もやってるんだ」

「やってた、だな。今は誘われたらたまにやるくらいだよ」

誘われたらやる、しかし自ら進んでやろうとは思わない。それこそあこちゃんから誘われなければ起動すらない程度だ。

あこちゃんとやったのは数回程度でしかない、そしてその時は必ず……燐子さんもいる。

「あ、あこちゃん……私も……いいかな？」

「大丈夫！ ですよね、蒼音さん！」

「……ああ、大丈夫だよ」

「それじゃあ帰ったら連絡しますね」

今まではなんともなかった。一緒にゲームをして、それにどうこう思うことはなかった。しかし今回はどうにも変な緊張をしてしまう。霧は濃くなるばかり、迷ってしまっ

てなにもわからない。

湊が俺の事を不審げに見ているが何か変なことにでも気づいたのだろうか。一応自分の格好を見てみるが何も変なところなどない。であれば……そんなにも行動に現れてしまっていたか。

「それじゃアタシ達はここで、じゃあね」

「……ん、またな」

「ほくら、友希那もなんか言いなつて」

「……さようなら」

振り向き、俺に顔を見せないようにして湊はそう言つてすぐさま歩き出した。苦笑いしながらリサはその後を追いかけていった。

あこちゃんもその後を追いながらも未だにその場を離れない燐子さんに不審げな目を向けている。俺も何故かその場から離れられない。多分、燐子さんからの言葉を待っている。

「また今度……あ、蒼音……さん……」

「……ええ、また今度」

顔を真っ赤に染め上げて、下を向きながらそんなことを言つて燐子さんはあこちゃん
の所に走つていった。

頭が沸騰してしまいそう。こんな小さなことで心臓が今までにないくらいに鳴っている。喉が渴いて、舌を軽く噛んでみせる。

おそらく顔も真っ赤になってしまっているだろう、少なくとも先程の燐子さんとい勝負をしてしまうほどに。

名前で呼ばれるからなんだ、俺だって彼女にはそうしてる。ああでも、突然そうされて不思議なくらいに体が熱くなる。それは一度、感じたことのあるもので……

今まで燐子さんはこんな風に思っていたのだろうか、感じさせられていたのだろうか。もしそうなら……名前前で呼び合ったら湊も同じようになるのか、俺も思えるのだろうか。

引つ掛かった赤信号、いつもなら気にもしないそれだけど、なんでか一つため息が零れていた。

気になつて

最近、色んな事が気になつてしようがない。今までなら気づきもしない、気づいたとしてもだからどうしたと無視していたものが嫌なくらいに。

そんなだからかよく疲れる。イラつきもして、小さく嬉しく思うこともある。

何が気になつているかはわかる。だけれども何故そう思うのか、それがわからないものばかり。

様々なものに意識が行きそれらについてどうこう思う。音楽をするものとして悪いことではないのだが……いかんせん熱が出たのかと思わされることがしばしばある。

「あなたのそれって……」

「ん？ お前が勧めてきたやつだよ」

「そう。それで、どうなの？」

「ロックはわかんねえ、でもだいたいいいもんだな」

こーうやって新庄君が私の勧めた音楽を聴いていること、そしてその音楽についての感想。私達の音楽ではなくそんなことまで本当に、どうして気になつてしまうのだろうか。

それだけではない。彼が他の人と一緒にいると視線が持つていかれる。私の知らない誰かでも、私を知ってる誰かでも、何故かわからないが意識してしまう。

それはリサでも隣子でも、青葉さんだったりにも向けられる見境のないもので。

「んで、用事ってなんだよ」

「用事？」

「いや、お前が聞きたいことあるって言ったんだろ」

そんなこと聞いていないなんて思ったが、ああ、確かに聞いた。一体なんだったか、こうやって覚えてないくらいに無意識で聞いたのだ、きっとそれなりのものがあつたのだろう。

しかしながらそれは思い出せなくて、そもそもそんなものがあつたのかもわからな
い。だけれどなんでもないわ、なんて言うことは出来なくて何かないかと思案する。

「ピアノの調子はどうかしら？」

「多分中学生の頃のが上手いくらいには下手になって落ち込んでるわ」

「……とても落ち込んでる風には見えないのだけど」

「なんだ、わかるのか」

その顔はとても楽しそう。彼は実際に演奏をしているわけではなくただこうして話をしているだけだというのに。まるで始めたての子供のようだ。

話を聞く限りは成長を実感できるのが楽しいらしい。上手だった自分を知っているからこそ、それを目指してやるのが本当にとのこと。

彼は本当に楽しそうで、嬉しそうで何故か視線を離せない。小さく笑った彼を見ると胸の奥がチリチリと焼けるかのように熱くなってくる。

ああ、これもおかしなことだ。彼と一緒にいる誰かだけではなく、彼自身にも視線がいつてしまう。

それにしてもあれで中学生の時の方が上手なくらいなんて中学生の彼はどんなだったのだろう。やめていなかったらどうだったのだろう。

もしそれなら彼は私の誘いを、受けてくれたのだろうか？

……いや、それは無しだ。燐子が *Rosealia* に入ってくれてとても感謝しているし、今新庄君が代わらせてくれと言ってきたても私達は認めない。

それは時間の問題ではない。ただそうあれと思うから。それにこの前の彼の演奏に合わせて歌った時何処か違和感を覚えてしまったのもある。

その違和感は燐子の音に慣れたから、ではなく彼の演奏が遠くに聴こえたから。音の大きさの問題ではなく彼と私の演奏の筈なのに彼と私、別々でやってるように感じた。

彼の音はソロ。圧倒的で魅力的、それをするだけの力がある。だけれども周りに合わせない、合わせられない。周りの実力が足りないのではなく一人で道を開いていく。

それはピアノリストとしては正解であったとしても、バンドマンとしては間違っている。バンドは一人では出来ないのだから。

「それで、リサはまだなのか？」

「……リサに何か用でもあるのかしら？」

「別にねえよ。俺も予定があるけどリサが来るまで待とうとは思っただけ」

リサの名前が出てきてそれすらも気になって。事実リサがやって来るのは本当でそれを待っている。そしてそれを彼に話したというのも私からなのに。

カフェの中で偶々見かけ隣に座り、しかしなにもなかった。音楽の話、なんでもないことですら話す事はなくて。勿論することも出来たのだが……何故しなかったのだろうか。

やはり最近はおかしい、無意識でどうこうしていることが多すぎる。買い物をしすぎる、食べ過ぎるといふわけではないから問題はないが……流石にどうかした方がいいだろう。

「予定って？」

「……隣子さんに呼ばれてな」

彼がそう言った瞬間お店の中にリサが入ってくる。元は20分以上前にここで集合予定だったのだが、バイトが長引いてしまったらしくリサが遅れてきてしまった。

わざとではない、これは練習ではない。それであれば咎めるつもりはない。リサが新庄君に話しかけるが、用事があるからと言って新庄君はお店の外に出ていった。

軽く挨拶をして話もせず、本当にリサとあれこれするわけではないようだ。ならば何故彼は私といたのか。

私を一人にしないためだったのか？ 子供じやないのだから別によかったのに、そう思うとなんでか胸の底が温まった。

それは子供扱いされたことにしろるか、でも苛ついているわけでもなくて。

「友希那、何話してたの？」

「別ににも」

「ん、ほんとかなく？」

「嘘をつく理由はないでしょ」

そう、なにもだ。意味を持ったものはただの一つもなかった。別にそれで不都合はないからといってどうということはないはずなのに、なんでか寂しさを覚えて。

そんなことより新庄君が隣子に呼ばれた、それがなんなのか気になって仕方ない。やつとりサが来たというのに、彼は行ってしまったというのに考えるのはそればかり。

そんなものが私が関与するものではないのだから欠片も気にする必要はないとはわかってる。そのはずなのになぜこんなにも考えさせられるのか。

「どうしたの、友希那？」

「なんでもないわ」

なんでもない、熱はないし気分も悪くない。だからこれはなんなのだろう。言い表せないようなこの感じ、ざわざわと奥底が沸き立つような不思議なもの。

本当にわからない、やはり最近何かおかしい。大和さんや紗夜に聞けばわかるだろうか、そんなことを彼が聴いていたロックを片耳に流しながら考えていた。

「申し訳ありません、ジブンにはわかりません」

「いえ、こちらこそ変なこと聞いてしまつてごめんなさい」

学校で大和さんにその事を話してみたが結果はこの通り、一体あれはなんなのだろう。迷えば迷うほど新庄君が頭に浮かんでくる。

本当に訳がわからない。どうして新庄君なのか、リサでも燐子でも、紗夜でもないしあこでもない。それが偶々なのか、それとも理由があるのか。

「あ、でもジブンも機材に関してならそうなっちゃいますね」

「大和さんも？」

「はい、他の人が使つてる機材だったりとか見たことのないものだど気になつてしまつて」

「……そういうものなのかしら？」

「ジブンは機材の事好きだからそうなっちゃいますね。湊さんが何に対してそう思っているかはわからないですけども」

好きだから？　そういうものなのだろうか。でもそうであるならそれは猫だつていいはずなのにどうして彼だけになのだろう。

嫌いではない、好きかと聞かれたら……まあ、そうだろう。でもそれはリサ等にも抱いているはずのもので何も特別なことなどないものなのに。

チャイムが鳴ったので席に戻る。気になるものの *Rosealia* の練習の時には気にならなくなれているのだからこのままで不都合はない。

だけどそれは練習の時だけ、こうして暇な時間であれば考えてしまう。

いや、授業の時間が暇というわけではないが古典ということもあり集中力が続くはずもない。周りを見れば始まったばかりというのに既にうつらうつらとしている人すらいる。

古典というのは苦手だ、というのも勉強に気を向けていなかったのだからわからないというだけ。

その中でも恋愛云々の物は特に苦手、その癖昔の人間はそういうものを書き記しがち。覚えればいいというわけではなく理解しなければならぬ。稀にリサから貸され

る本ですらわからないのだ、昔のものがわからないのだからそれで当然で。

この時登場人物がどう思っていたかなんてわかるはずがない。好きだからなんて、そんな特別なことなのだろうか。

いつもならうつらと眠気と格闘し始めてしまってもおかしくないのに今日に限ってはそんなことはなくて。

好きだから気になってしまう。その言葉が不思議と頭の中に残っていた。

答えを

湊と別れ燐子さんの元へ。その足は重く一歩が小さく、そして遅い。別に重い荷物を背負っている等の訳ではないのだからその原因は精神的なもの。

別に嫌な訳じゃない。何も悪いことはしていないし喧嘩をしたわけでもなく、行くのがめんどくさいとか帰ってやりたいことがあるわけでも。

「はあ……」

好きと言われてから会うのは二度目。この前は Roselia の人が、その後のゲームでもあこちゃんがいいたから一対一となるとこれが初めて。

人がいたからか、それとも気を使われてかはわからないけどこの前は続きを、告白の答えを聞かれなかった。正直、気が重い原因もそれなのだと思う。

「……また赤かよ」

湊と別れてから当たる信号全てが赤、時間まではまだまだ余裕があるので問題ないが、つい声で漏れてしまう。それはまるで俺に時間をくれるよう、それでいて惑わせるかのよう。

俺は湊は好きだ、それは間違いないくて変わりようがない。じゃあ燐子さんは？ 湊と

どちらが好き？

この前前で呼ばれてドキリとした。たったそれだけかと言われてもそれだけでしかないのだけど、それはその程度なんてものじゃなくどうにも衝撃的で。

あの時の胸の鳴りは、熱さは、湊に勉強を教えていたときに感じたものと全く同じもの。

あの時は不可解だと、全くわからなかったそれが今となってははつきりとわかる。それを燐子さんにも抱いたとなれば答えは一つで……

信号が青に変わったので進む。聞かれたらどう答えよう、それは当然今でも迷っている。でもそれ以上にもし、聞かれなかつたらどうだろう。

俺は自分から言えるのか、ごめんなさい、またはお願いしますと。それとも……聞かれないのならそれをよしとして先伸ばしにするのだろうか。

そんなことよくないとわかつている。そうしないようにするべきで、であるならば答えなくてはいけない。グルグルと、渦潮のように頭の中で思考が回り続けている。

あれだけのこのこと亀の如くまでとはいかずとも、それなりの遅さで歩き続け目的地に辿り着いたのは約束の30分前。

もしかしたら既にあるのではないか、そんな不安を抱きながら周りを見渡せども燐子さんの姿は見当たらない。

流石に早すぎたか、そうは思いつつもこの間ご飯に行つたときは燐子さんが待つていたのだしこの方がいいだろう。

約束した場所はまたカフェ、先程もいたが珈琲一つしか頼んでないから胃に余裕はあり何も頼めない、なんてことにはならないと思う。

燐子さんを外で待つか中で待つか。外には座れるような場所はなく、だから楽をするなら中だろう。でもこの前彼女は外で待つていたし天気も悪くない、であれば外で待つべきだと思う。

「ま、待たせちやい……ましたか？」

「あ、俺もさつき来たばかりですので……」

十分程待つて聞こえてきたその声は燐子さんのもの、聞き間違える筈もなく振り返ると、息が止まった。

その服は今までの彼女の服とは全くの別物。それこそ今年のトレンドと検索をかければ名の知れたコーデイナーがあげていそう、そんな服。

とても派手とまでは言いきれないがそれでも目立ちそうな服。恥ずかしがりやな彼女とはかけ離れていて……普段とは違う彼女に見惚れていた。

「あの……似合ってます……ます……か？」

「……はい、似合ってますよ」

顔を赤くしていきながら、声も小さくしていきながらそんな事を聞かれる。

真つ直ぐには見ていられなくなつて誤魔化すように道を歩く人を見れば、ちらりと燐子さんを見て何事もないかのように前を向き直し、再度ちらりと、そんな人すら見受けられる。

燐子さんもそれに気づいたのか、小さく声を漏らしながらさらに顔を赤くする。そんなならば、とならないのは……俺が燐子さんに好かれている知っているから。この格好にも理由があつてだとわかつているから。

「……えつと、このお店でいいんですよね？」

もはや返事すら出来ないようにで顔かれるだけ。店内なら見られないというわけではないが、不特定多数に見られ続けると感じる事はないだろうし幾許かはましになるだろう。

それに……じろじろと彼女の事を見られているのも面白くない。

「まだ早いですけど入りませんか？ 予約とかつて……」

「し、してないです……けど、多分大丈夫だと……思います」

カフェの中はすいているというわけでもなく混んでいるというわけでもなく中途半端、まあ混みあつていて入れないというのが最悪なのでそれを回避できただけでも感謝するべきか。

好きな席にと言われたので出来る限り人がいないところに、とりあえず俺達は何か頼む事にした。

「……………」

今日はいいい天気ですね、この料理美味しいですね、珈琲好きなんですか？ 飛んできたのはそんな質問ばかり。

無論迷惑していないしそれが悪いとも言わない。しかしながら卓上が珈琲とホットミルクのみとなつてから15分、そうなつてからは一切話を振られなかった。

こちらから話しかければ何かしらの返答がある、長続きしないわけでもないがそれは世間話や自己紹介の延長線上のようなものばかり。

もしかして、聞くつもりはないのだろうか。あれは全て気の迷いでした、なんていうことはありえないだろう。それは今日、服装が何よりも表している。

無論、それが俺の勘違いだといわれればそれまでだが。

聞かれないのならばならば俺から言う、単純明快なそれだが実行には移せない。

正直なところを言つてしまえば今日、正しくは燐子さんに会つてから、鼓動がずっと早い。
い。

熱を持ったように熱く、胸を突き破りそうな程激しく。それほどだというのに痛いど

ころか不快感すらない。その不思議なもの、これもまた湊に対して抱いたものと同じで……

「あ、蒼音……さん」

「……何ですか？」

待つという意味合いを込めちびちびと飲んでいた珈琲も飲みきってしまった。それを見てか燐子さんは視線を俺からそらし、聞き逃してしまいそうな小さな声で言った。

「この前の……あの……その……」

また顔が赤くなり始めるのが見えた。忙しい人だ、なんて思うはずもない。

恥ずかしがりやなのに無理をして、そんなのに告白をして、そしてその時間けなかつた答えを聞くとうして。誰であろうと、俺もその立場なら顔を赤く染めるだろう。

結局その後は何も続かなかつたが……言いたいことがわからないほど馬鹿ではない。なので俺から出来ることはひとつだけで。

「燐子さんからの告白、凄く嬉しかったです」

「……………」

今までされたことがないから、可愛い人からされたから、同じくピアノをしている人だから。そうじゃない、燐子さんだからそう思っている。

湊からはわからないが他の人からされても、おそらくよくわからないまま断っていた

と思う。

「……俺は湊の事が好きです」

「そう……ですか……」

そう、これが俺の答え。俺は湊の事も好きだ。複雑怪奇、答えの存在しないこの問いに与えられた三つの選択肢。

その中で俺は、最も最低の選択肢を選ぶことにした。

「でも、燐子さんの事も好きです」

あなたが好きです、あいつが好きです、あなたとあいつのどっちも好きで選べません。どれを選ぶべきかは難解で、代わりにどれを選んでんじや駄目かは決定的。だけど俺はその中で選ぶべきではないとわかりきった選択肢を選んでいた。

燐子さんの事が好き。それは今まで嘘だと思わされて、考えさせられて、しかしどう考えてもそうはならなくて。

でも今日燐子さんに会って、話して、それで間違いないと思ってしまうた。

何故？　好きと言われて、そうあるべき行動をされた。それに触れて、もう自分では変わることが出来ないところまで行ってしまった。

俺は……燐子さんの事が好きだ。

「だから告白に答えることは……まだ、出来ないです」

頭を下げる。俺はそれだけの事を言っているのだから。

「蒼音さん……」

それは駄目、今選べと言われても仕方のないもので、しかしながらその答えは用意していない。何も発する事なく、しかし頭は下げたままで時間が過ぎる。

今周りからどうこう思われようという。ただその許しを、それだけを求めていた。

「……はい、わかりました」

その言葉は信じられないもので思わず顔を上げてしまう。それ以上は何も喋らず、隣子さんがホットミルクを飲みきるのを待つてから会計に。あんなことを言ってしまったのだから俺に払わさせて貰った。

「……蒼音さん」

「……何ですか?」

店を出て家まで送らせて貰って、いよいよ別れるというところで初めて話しかけられた。怒っているのか、悲しんでいるのか、表情からは読み取れない。

「待つてます……いつまでも」

その時見せられた笑顔は優しくて眩しくて、ドキリと心臓が鳴り……ズキリと、胸の奥で何かが痛んだ。

家に帰るも何もする気がおきない。鼓動は早く、熱は続いて、痛みもまた止まらない。ピアノをすれば誤魔化せるかもしれない、そう思つて何分経つただろう。実行に移すことはできず、というよりかはしようとしなかつたという方が正しいだろうか。それら全てを納めたくなくて。

誰かを好きになつて、そのくせ他の誰かを好きになる。それは本当に悪いことなのか。一生を誓つたわけでもないしまず付き合つてすらいのないのだからそんなに、なんて考え出した自分が嫌になる。

今になつて欠片もわかりなくなつた母親の事が少しかだけわかる気がした。それが何より嫌で、振り払うように頭を掻く。

そんなことをしようと湊が好きで、隣子さんも好きという事実は変わらない。どちらも好きで、それだからどちらが好きかはわからない。

「俺から……」

もういつそ俺から湊に告白をすればどうなるだろう。多分あいつは俺にそんな感情抱いていないだろうから望む答えは返つてこない。であれば諦められるかもしれない。

でももし、望む^{望まぬ}答えが返つてきたら、それを俺は受け止めることが出来るのか。

湊に好きと返されたら隣子さんの事、何もなかつたかのように忘れられるのか。

期限はない、だけどそれは永遠ではなくて。先伸ばして忘れ去つて、それが許される

ものではないと俺はわかってる。

俺が好きなのだから湊にするべきなのか、俺が好きで、俺からも好きだから隣子さんにするべきなのか。自分のことなのに、いや、自分のことだからこそ、何もかもがわからない。

罪を重ねて

好き、たった二文字な癖に複雑なもの。好きとは一体何なのか、ここ最近何度考えたかわからないそれ。

わかった気になって、でも実際には全然わかれてなくて。一度決めたのに歪めてしまう程度には脆くて、それだというのに自分の中では大きな存在で。

燐子さんに好きと言った、だけど湊の事も好きなまま。どちらが上なのか強いのか、それがわかっていたら苦労しない。答えなんてわからない、そもあるのかすらもわからない。

告白されて、名前で呼ばれ意識させられて。そんな程度、いや、俺にとって……多分、彼女にとってもそれは大きなもので。

「……わかんねえよ」

選びますと俺は言った。なんて傲慢、俺に待たせるような権利はない。

あなたを迎える準備が出来ていないからというわけではなく、わからないから迷っている、だから待っていてくださいと。ほんと、我ながら最低だ。

わかってる、待たせれば待たせるだけこの胸の中の罪悪感は膨れていく。わからない

い、いつになつたら、どのようなことがあつたら選べるのか。

本を読めど、調べてみてもヒントもなにも乗っていない。もう解決策なんて見つからないからいつも通りに過ごしてきて、なんてこと出きるわけがない。

いつも通りに過ごそうと今まで通り何とも考えないなんて事はあり得ないだろうし、二人に会つて何も変化ない、なんてこともあり得ない。

でも、そんな風に思わされていても時間というのは止まらない、早くもならず遅くもならない。

これからどうしたらいいのだろう、なんて自分の事なのに、自分だけの事ではないから、何もかもがわからない。

「おやく？ こんなところで奇遇ですね」

「……別に、なんもおかしな事ないだろ」

「いや、蒼音さんなら向こうの方が似合つてそうだったので」

「ちよつとモカ、いきなり失礼だつてば」

バイト終わりに立ち寄つた本屋、気分転換というよりかはちよつとした現実逃避として漫画コーナーを見ていたらモカに声をかけられた。

そしてそれを咎めるかの様に言う人はA f t e r g l o wのライブに出演していた

子。覚えてますか？　なんて言われてしまったので勿論と返しておく。

「あ、自己紹介してなかった。上原ひまりです、よろしくお願いします！」

「新庄蒼音です、よろしく」

それにしても……ふむ、燐子さんといい勝負かもしれない。なんて考えてしまい視線を本に向けて誤魔化す。

「蒼音さんは、どんな漫画が好きなんですか？」

「なんでも、面白ければな」

「ほっほ、それなら今度アタシのお気に入りを貸しますから、蒼音さんのお気に入りのやつ貸してくださいよ」

わかったと流すところらにやってくる人が一人。先程モカが向こうの方がと指差した所からやって来たのは蘭ちゃん。

その手には一冊の本。何を持っているのかは知らないが向こう、音楽雑誌コーナーから来たのだから恐らくそれで。

「あ……どうも」

軽く頭を下げるだけで特に話す事もなく……と予想していたのだがそうはならなかった。

「この前の演奏……凄くよかったです」

「うん！ 私なんか感激しすぎて、あの後ず〜と頭の中ふわふわしてたもん！」

「それはひーちゃんの頭が空っぽなだけなんじゃないの〜？」

「ちよつと〜、失礼な事言わないでよね」

よかつたと言われ褒められて嫌な筈がない。恥ずかしさは確かにあるがそんなものは気にしたところでなくならないし、それ自体嫌と思うわけではない。

自分の演奏を聴いてそんな風に思ったのだと言われ嬉しいと思えている。あれは俺のものだと、母親は関係ないと思え始めていて。

「……そんなに褒められて嬉しかったんですか？」

「……顔に出た？」

「ええ、まあ」

「にっこにこですわ〜。いや〜、眩しいくらいですよ〜」

その言葉を聞いて更に恥ずかしくなり、ほんとにそうなのかと口元を指でなぞるが特に口角が上がっているとかはわからなかった。

となれば誇張なのか、どうであれ蘭ちゃんにも気付かれたのだからわかりやすかったのは確実。

嬉しい、それは事実だ。ずっと母親に、勝手に考えていただけだが縛られてきた。それを感じられずに音楽を出来るとなれば嬉しいと思えないということこそ不可能という

もので。

「そういえば新庄さんはどうしてここに？」

「……暇潰しだよ、なんかいいのあれば買おうかなってくらいで」

「蘭く、聞いて驚かないでね。なんと蒼音さんは、漫画が好きらしいんだよ！」

「いや、何も驚く要素ないけど」

「うっそく、モカちゃん的にはビッグニュースだったんだけどな」

「あ、蒼音さん、ごめんなさい。モカは元からあんな感じてして……」

別に気にしてないから大丈夫、そう言つてやることもなく帰ろうとしたのだが、折角だし途中まで一緒に帰りましょうよなんてモカに言われてしまった。

流星にそれはと思つたのに蘭ちゃんもひまりちゃんも駄目と言わないので断りにくく、本を買うのを待つてから四人で帰路につくことになった。

「あれ、珍しい組み合わせだね」

帰宅途中そんな声をかけられて、ひまりちゃんもモカもその声の主であるリサに返事を返している。

折角思考から少し抜け落ちていたのに、やはりそうすることはいけないことだと示すかのようにその隣にはいつも的人物が。

胸が締め付けられるかのようで、まるで埃を吸い込んでしまったかのように息をするだけでも違和感が感じ取れる。

言葉を発せず目もそらせず。先程の違和感は膨らんで形を変えて、少し目を細められ見られているのが気になってしまう。

「湊さん、こんな時間まで練習してたんですか？」

「そうだけど……それが何か？」

バチバチと火花散りそうな程に鋭い視線を蘭ちゃんに湊に向けていて、それに対して湊は涼しい顔をしていて。

視線が俺からそれで蘭ちゃんに向かったこと、少しの安堵をしたがどこか残念に思う自分がある。

やはり意識しているのか蘭ちゃんは湊と口論を、といってもほぼ一方的なもので、それも喧嘩というよりかはただの自慢をしているかのような。

少し苦笑いしているひまりちゃんを見ながらも終わる気配がないので少し離れリサもついてくるかのようにこちらにくる。

「蒼音、モテモテだね〜」

「……アホ言うな」

「こんな美少女達に囲まれて蒼音さん、羨ましいですな〜」

急なりサの発言にドキリと心臓が鳴った。男女比を今さら思い知らされたというものではなく、もしかして知られてしまっているのではないかと。

なんでもないかのようにその後も二人と話しているのだし……気にしすぎか、それにもし知っていたとしても話すとしたら二人きりの時かメツセージでだろうし。

「それにしても蘭、友希那さんの事になると本当に熱くなるよね」

「蘭は負けず嫌いですからなく」

一向に終わりそうにない二人の口論を見ながら会話をする。見えるのは二人、視線が向かっているのは一人。だけれど思っているのは二人、そしてその片方は蘭ちゃんじゃなくて……

「そういえば蒼音、メツセージ送ったんだからちゃんと見てよね」

「どうせあれだろ？ 帰ったら見る予定だから安心しろ」

「モカちゃんその内容が気になっちゃいますな」

「大したことじゃないって、ただ演奏したの送って色々教えて貰ってるだけだから」
昨日の夜送られて来て、どうにも見る気にもならなかったので今日の夜に確認しようと思っていた。

もしかしてと思い聞いてみたが一人での演奏ということで安堵から一つ息をつく。もし二人のどちらかでも音が入っていたら聴くことに集中なんて出来なかったろうし。

「え、蒼音さんってベースもできるんですか？」

「違う違う、テンポとか音の強弱とかそういうのをね」

「成る程……わ、私にも教えてもらえませんか？」

突然の提案、受けてあげなければいけない必要はなくて、だけど断る理由もない。あるとするならば時間を取られるくらいではあるが、それこそ暇な時にやればいいので了承する。

それに記憶が正しければひまりちゃんもベースだろうからリサと比べて、というのでやりやすくもなるだろう。

暇な時間は出来れば作りたくない、だって燐子さんと湊の事を嫌にでも考えてしまうから。

そうするべきだ、それはわかってる。でもどうせ答えは出ないし、それが苦しくて甘えてしまいそうで。

待つてくくださいと言ってしまったのだ、何よりしてはいけないのは一つだけ、甘えて答えを出すこと。それは自分でもいずれか後悔してしまうだろうし、きつと何よりも最低なものだから。

「蒼音の指導は厳しいよ、覚悟しといた方がいいかもね」

「ひえっ……が、頑張ります！」

「面と向かってじゃねえんだから覚悟も何もねえだろ」

それでもだよ、と言ってくるリサを無視してひまりちゃんと連絡先を交換する。

折角だからとモカとも交換させられて、そろそろかと思いついて湊の方を見たがまだ終わらないように。

「モカはお願ひしなくていいの？」

「モカちゃんは天才だから一人でできるのだ」

そんな会話を聞き流しながら最近増えてきた連絡先の一覧を眺め、その後湊の方を見て何故か一つため息をついた。

幸運を願い

アラームの音が部屋の中に鳴り響き、深くに落ちていた意識はつり上げられる。冬ではないので布団から出るのに覚悟がいる訳ではないのだがそれでも相変わらず誘惑は強い。

時間を確認したため息一つ、体を起こしてカーテンを開けると焼き焦がすかのような朝日に襲われる。

適当に朝食としてつまみながらスマホを確認していつもと同じ時間になれば、同じ格好に物を持って外に出る。

「めんどくせえなあ……」

今日は体育がある、それも一時限目から。憂鬱で仕方がない。動き回りたくねえなと考え、しかしサボるというわけにもいかなくて。

目の前で色が変わった信号に足を止められる。今まで何度も経験したそれに今更どう思うわけもなく、周りに見える人と同じくスマホを弄って変わるのを待つ。

……ほんと、驚くくらいに普通だ。何がという訳ではない、俺自身の事。

好きと言われわからされ、決めなくてはいけないと思わされているのにこうやって普

段通りに過ごしている。

勿論こうして考えているのだ、ほっぽりだしているわけではない。決めなくていいやと思っっているわけでも。

悩んでいるのは本当だ、でも人生というのはそれだけじゃなくてしなくちゃならないことがそこそこある。これだつてそう、したいしたくないとかそういうのじゃない。

でもこの時間に焦るくらいに考えて、なんてことは出来ない。朝だから頭が働かないせい、焦つても出る筈がないと考えているせい。

昨日と同じく連絡先一覧を眺めてみる。学校の奴らとバンド組、後は父親しかいないそれだけどこに湊の名前は存在しなくて。

「……今度聞いてみるか」

自分から、恥ずかしいとかそんなもの感じない、と言えば嘘になつてしまうのだろうがこの程度出来る……多分。

好きと思わされるのならばこうやって距離を詰めなければいけない筈で、その詰め方がよくわからないからこうやってわかるものからやっていくべき。

付き合いが薄いままならば決めようがない。もしもうちよつと踏み込んだらあいつなんて……となるかもしれないし、勿論その逆も。

「……………」

じゃあもう一人、それはそこに記されていて。こちらは湊と違って向こうもこちらの事が好きだとわかっていて、であるから名前を見るだけで妙に恥ずかしくて。

本当に好きなのかと何度も聞いて、そして毎回好きだと結論が出て。疑いの思い、それは湊にも抱いたけれど同じ結果が出ていて。

どこが好きなのかと言われたら言い表しにくい、でもそれは湊にも言えること。

向こうが好きだから、それは否定しない。でも湊が俺の事を好きになつたとしたらすっぱりといけるかとなればそれは別の話。

信号が青に変わり周りの人が動き出す。俺もスマホの画面を消して歩き出す。

今まではずっと向こうから。好きなのだから俺から誘ってみてもいいかもしれない。

そんなことを思いながら学校への道を進んだ。

ああやつぱり二人の事を考えずにはいられない。前言撤回、普通なんて、そう思っているだけで形を変えてしまっていた。

帰宅後はピアノの練習を三時間くらいして、少し休憩と夜の町を散歩する。昔はこのくらいでもなかったのに、前が元気すぎたというのもあるだろうが。

締め切った部屋でやっているの外に出れば少しスッキリする。帰って再開するか、それともまた別の事をするか、そんなことをぼんやりと空を眺めながら考えていると後

ろから声をかけられた。

「蒼音さん、こんばんは！」

聞こえてきたのはあこちゃんの声。こんばんはと振り向きながら返して、練習終わりのか制服のままの彼女の隣にはもう一人。

「……………こんばんは……………」

声だけでドキリとして、顔を見ればそれはまた強まって。

変わっている。それは彼女を見る目か、それとも俺の思考なのか。どうであれなんだか気まづくて返す言葉を思い付かず頷くだけで。

あこちゃんはその俺を首をかしげ不思議そうな目で見て、燐子さんの方を見てまたおかしいなと首を傾げる。それがまた恥ずかしく感じさせてきて、多分それは燐子さんも同じで顔を伏せられた。

「……………こんな時間まで練習？」

「はい！ 実は今週末SMSっていうのがあって」

SMSとはこれまた大きなライブイベント、そこに招待されたとのことでそれに向けての練習、本番まで一週間を切ったということ。練習時間も伸びてとのこと。

Rosealiaは順調に勢いをつけているらしい。うちのライブハウスにやって来た客が話していたし、クラスでもその名が飛んでいた時には驚かされたものだ。

「そうだ！ 今日イベントクエストやりませんか？」

「あー……確か明日までだっけ。でもそれやって大丈夫なの？」

「まだ全然やってなくて……でも三人ならすぐに終わらせられます！」

三人、それは当然俺とあこちゃん、そして燐子さんということだろう。断りにくさもあれ、燐子さんの見上げるような視線によってか断りたくなくて。

断る理由もないのでそれを受ければ喜んでるあこちゃんに対し元氣だなと感想を抱かされ、燐子さんも同じように思っているのか微笑んでいる。

意識せずともその優しい笑みに視線を吸い寄せられてしまつて……

「よし。りんりん、早く帰ろ」

「え……あ……うん」

そう言つてあこちゃんが燐子さんの手を引つ張つていくとハツと我に返る。少し残念そうな顔を見せつけられた、もう少し話せたらと思わされた。

こんな感情を俺は湊に対して抱くのか。リサに手を引かれ湊が離れていったら残念だと思ふのだろうか。

事実として起こらなければわかる筈もない、そんなものはどうでもよくてどう思われるのか。だけど結局わからず仕舞いで頭を搔いて家に向かう。

ライブは今週末と言つていたが今週末はバイト、客としてはいけないけれど上手くい

くことを願うことくらいはしてやろう。

目の前を何かが横切る。暗闇に隠れ、しかし2つの光るものが見える。何かと思いつきよく見てみればそれは黒猫で。

黒猫は不吉の象徴、迷信ではあるがそう言われる事がある。一体誰がそんな言い出したのだろうかと思いつながらも地域によつては幸運の象徴であるそれに、Roseliaのことを願つてやることにした。

「なんだ、今日はライブがあつたんじゃないのか？」

「……」

SMSからの帰り、私は気がつけば新庄君のバイトしているライブハウスに向かつていた。

なぜオーディエンスが離れてしまったのか。それがわからなくて、それだけを求めて彼の元を訪ねることにした。

「新庄君は……私達、Roseliaが何か変わったと思うかしら？」

「突然なんだよ」

「知らなければいけない。この前とは違ふと言われたのだからそれをどうにかするために。」

自分ではわからない、私達ではわからない。彼ならあるいは、そんな願ひを込めて聞いてみたが彼は顎に手を当てたまま言葉を発しないでいて。

「……まあ、仲良くなつたんじゃないか？ この前もファミレスとか行つたんだろ？」
「……！」

それは思いもよらぬこと、音楽には一切関係のないことで……だけど聞いてしまえばそうとしか思えないこと。

仲良くなつた、それだけならば聞こえがいい。でも言い換えれば？ 緩くなつた、ああ、いいはずがない、あつていいはずがない。

ああ、そういうえば練習の時あの私語が増えた、リサがクツキーを持つてくるようになった。紗夜がそれを学ぶようになって、隣子はなんだか緊張感が薄まつていつて。

そして私は……それを、悪くないと思つてしまつていた。勿論百ある内の百悪いという訳ではないだろう、でもそれがほんの少しでも悪いとするならば……

「そう、ありがとう」

「で、他には？」

「これだけよ。それと……」

——これから私に話しかけないで

突き放すようにそう言った。彼は意味がわからないとこちらを見てくるが。言うべ

きことは言ったのでライブハウスを出る。

後ろからちよつと待てと彼の声が聞こえてきて、逃げるように私は走り出した。

どうしてもこうしてもない。甘えが悪いというならばそれを消そう、彼はRoseliaのメンバーではない、であるならば関わる必要はない。

たまに演奏を聴いて貰ってなどいたが……それだけ。元より彼と私の関係なんて何もなく、であればなくなっても一切の問題があるはずもなく。

胸が痛い。それは走っているから、そうであるはず、それ以外に原因なんてないのだから。

足が棒になったみたい、それでも走ることを止められない。振り返ってもし彼がいたら、何も変わらないままになりそうだから。

「はあ……はあ……」

川岸の手すりが見え、そこに体を預けて走るのをやめる。もう疲れた、手で支えなければ今にも崩れ落ちてしまいそうなほど。

どうして走ったのか、めんどくさくなりそうだから？ 違う、怖かった。名前を呼ばれたこと？ 違う、何がなのかわからない、でもそれは確かなもの。

「……」

息が整い始めて周りを見回せばふと気づく、ここはRoseliaが解散しそうに

なつた時、新庄君に助けられた場所。これは偶然には思えなくて、それでも本当に偶然で。

彼にあんなことを言う必要はあつたのか。

彼が関わるものじゃない、それはわかつてる。でもそれは逆にその程度というもので、わざわざ口に出して伝えるほどのものではないはず。

そう、彼は私にとつて、勿論その逆でもどうでもないはずだからどう思うこともないというのに、もう話しかけないでなんて言う必要は……

……いや、もうどうだつていいことだ、考える必要だつてないだろう。今どうするべきか、それは *Rosealia* を昔のように、ただそれだけで。

「そのためには……」

明日の練習で全員にそう話そう。わかってくれるはず、わかってくれなくてもそうさせるつもりだ。

胸の痛みはまだ続いている。走っていたせいであると頭では思つていて、だけどそうじゃないと何かが訴えてきていて。

じゃあこれは何？ それは誰も答えてくれなくて、胸にぽつかりと穴が空いたような気がした。

捨てきれないもの

ピアノの音がする。それは俺の指先からで、目的もなくただ弾き続ける。

これから話しかけないでなんて湊に言われて一週間も経って、それでも未だによくわからない、実感が無い。長い夢だと、そう言われてしまえば信じたくなくなってしまふほど。一体どうしてかなんてわからない。もしかして何か悪いことでもしたのか、言ったのか。それとも元からそういうものが積もっていて遂に限界を迎えたからなのか。

「はあ……」

大きなため息をつきながら立ち上がり部屋を後にする。もし先程の通りのものがないならば何かあったということではない。

あの時のあいつは、少しだけ怖かった。鬼のような形相とかそうではなく、切羽詰まったかのような何かを感じさせた。それこそ今すぐにも崩れてしまいそうな。

そしてそれは Rosealia が何か変わったか言われ答えてから、であるならばそれはそういうことで。

「……聞けるわけねえだろ」

連絡先を開いてリサとのメッセージ欄の所に行って、それで何もすることが出来ず眺

めるだけ。

Roseliaが何かあったとするならばそれはあいつにも関係のあるもので、そんなものを気軽に聞けるほどの心は持っていない。

猫を撫でながら、しかしそれにたいし癒されるとか思うことは出来なくて。ああまで言われたのだ、待ち続ける方がいいと決めつけて、でも蹴飛ばされたかのように心は焦らされる。

湊とは仲はいいと言い切れないが悪い訳ではない、そう思っていた。でもああ言われたということはそれは、俺が勝手に思っていただけで……

スマホが電話を知らせてきたので相手を確認せずに出る。一体誰だと、悪戯だとしても今はあれこれ文句を思えることすらできなさそうだ。

『あ、あの……もしもし』

聞こえてきたのは女性の声、それは燐子さんのもの。ドキリと胸が鳴る、こんな時でもそれは変わらない。

「……何か用ですか？」

『明日会うことって……出来ますか？』

「明日ですか？」

『駄目……でしょうか？』

俺が湊に話しかけないでと言われた事を隣子さんは知ってるのだろうか。もし知っているなら明日会おうと言ってきた理由は一つしかなくて。

湊にああ言われ、であればもう悩む理由なんてない筈で。なのに俺はここで大丈夫ですと言うことが出来ない。つまり、俺は湊の事を諦めきれないということだ。

「くそが……」

『蒼音さん?』

「いえ、なんでもありません。ごめんなさい」

ついそんな言葉を漏らしてしまう。ふと隣子さんなら湊があんなことを言った理由を知っているかもしれない、なんて事を考えてしまった。

「……明日、どうしますか?」

『えつと……駅前に……1時くらいとか……どうでしょう?』

知っているからなんだ、それを聞き出して何になる、俺は一体何を待っていたんだ。

俺は *Rose lia* じゃない、誘いを断り続けたのだから。であれば俺が関与出来るものではないはず。待ち続けた、でも自分からは何も出来なくて。

湊との縁が切れた、それはとても残念に思うし考えるだけで苦しい。でもその代わり、悩みといえるものがひとつ消えたと考えれば……

「それじゃあ明日それでよろしくお願ひします」

『はい……ありがとうございます』

一体何に対しての感謝なのか、そう思いながらも電話を切る。もし俺が関与出来るとするならば……どうだろう、することは出来るのか。俺があいつらだったら、俺はどうしてたのだろうか。

「……………」

明日、どうなるのだろう。期待と不安が入り混じりぐちゃぐちゃになって気持ち悪い。

何に期待しているのか何が不安なのか、どちらも一つではなく、そしてそのすべてはわからない。

手が滑って開いたのはギャラリーで、そこに映るはいつか湊と撮った写真。縁は切れた、連絡先も知らない、であればアイツを示すものはこれと勧められた音楽のみ。

全部消してしまえと思い立って、でもそうすることは出来なかった。

人通りが多い。それは場所もあり時間の関係もあつてのもので、燐子さんがいたとしても見つからないのではと思ってしまう。一応待ち合わせの時間にはまだ早いのだが、それでも十分前だ、彼女の事だからいるかもしれない。

どこにいますかと聞いてしまえば楽なのだが、予定より早いのだし聞いていなかった

たら恥ずかしい。

とはいうものの探しに行つて入れ違いになつたとなつては馬鹿馬鹿しい。待つているとしたら申し訳ないが十分くらいは我慢してもらおう。俺もそうなのだからお相手のようなものだ。

そう考え、しかし周りの人を見れば男ばかり。それを見てどう思つたのだろう、自分ではわからないがスマホを取り出してメッセージを送つた。

今どこにいますか？ そう聞いて答えられた場所は隣の店の前。そんなまさかと思ひ見れば見れば柱の陰になるような場所に隣子さんの姿が。灯台下暗しとはよく言つたものだ。

「ごめんなさい、気づけなくて」

「い、いえ……私も……気づけませんでしたから」

取り敢えずと近くのカフェに入る。何か話そうと思つて、でもそれは飲み物が届くまで行われなかつた。それは彼女がずっと俯いていて、とてもじゃないが話しかけられなかつたから。

「蒼音さんは……湊さんに何があつたか……知ってますか？」

「……いえ、俺も知らないです」

「……そう、ですか……急にごめんなさい」

「何かあったんですか?」

「実は……」

頼んだホットミルクを一口飲んで、次に深呼吸を一つすると燐子さんは切り出し始めた。

S M Sの後から湊が厳しくなった、簡単に言えばそれで、だけどそれはその程度ではないらしい。どうやらS M Sはうまくいかなかったようで、スタツフからも以前と何か違ったようななんて言われてしまったそう。

そのスタツフに言われたという言葉が引つかかかって覚えがある。それは湊から聞かれたものと言葉違えど内容は同じ。であるならば……

「あれか……」

仲良くなったんじゃないか、何でもないかのように言ってしまったそれをあいつはそうだと捉えてしまった。

そんな馬鹿なと思えど否定しようがないくらい一致していて。じゃあなんだ、俺が原因だつていうのか? 認めたくない、しかし認めざるをえない。

だけでももう一つ、なぜあいつは俺に話しかけないでと言ったのか。Roseliaに何かあって、それをどうにかするには俺が邪魔だからああ言ったのだと俺は思っていた。いや、思っていたかっただけという方が正しいか。

俺は Roselia じゃない、その問題に俺は一切の関係がない。なのにあんなことを言われたということは……

「……燐子さん、この後って予定ありますか？」

「予定ですか？　ない……ですけれど」

「それならどっか行きませんか？　本屋とか」

そう聞けば燐子さんは驚いたかのように目を見開き、顔を赤くしながらも了承される。

ああ、そういうことか。なんの関連性もありやしない。単純にあいつは、俺の事なんかどうでもいいんだ。寧ろ嫌い側によっているのかもしれない。でなければあんなことと言われる道理がない。

それならもう迷うことはない、壊れかけていた鎖もやっとな壊れてしまった。燐子さんの方を見れば少しだけ鼓動が早くなっていく。決めれたからか、迷わなくなったからか、どうであれ好きという事実が俺の中で強まって。

この誘いは本心だ、湊の事を忘れようだとかそういうものは一切ない。ただそうしたいがための誘い。

後燐子さんも相当まいってる、問題が起こったのだから当然ではあるのだが少し疲れしているように見えたからというのもあるのだけれど。

燐子さんが好き、それは偽りのないもので惑わされるものがなくて。でも湊に対して好きじゃないというのは、まだ思うことは出来ないでいた。

「何があつたんだろう……」

一人こぼしたそれは湊さんのことではなく蒼音さんに向けられたもの。あの後本屋に行つて一緒に色んな本を見てお話しして、だけどそれだけだった。

その間に Roselia の話は一つもなかった。蒼音さんのこぼした言葉から察するに友希那さんと何かあつたのだと思う、でも友希那さんの名前を出す度顔をちよつとだけ歪める彼に聞けるはずもなく。

彼ならもしかして知っているかもしれない、どうにかできるかもしれない。そう思つてのことだったのに、なんだかズキリと胸が痛んだ気さえしてしまった。

喧嘩でもしてしまったのだろうか、もしかして……告白でもされてしまつて、彼はそれに答えてしまった。だから私から友希那さんの名前を出してほしくなかつたのか。

いや、もしそれであるとするならば友希那さんに何があつたか知っているかと訊ねた時にあんな辛そうな表情を、聞くのを躊躇わさせるほどのものをするはずもなく。

それならなぜ、その謎は一つじゃない。一体何があつたのか、それは当然として、どうして私に何も言つてくれないのか……

「はあ……」

最低だ、考えてしまった自分が本当に。自意識過剰にも程がある。友希那さんと何かあった、それも良くない方向性のもの。

相談してくれたらよかったのに、そう思ったのは本当だけどその裏でどうして私に告白の答えを言ってくれないのか、なんてものさえ考えてしまった。

それだけならいい、こんな時でもというのはあるけれどまだその程度なら。自分で嫌になつてしまうのはこの気持ち。残念、不安、疑念、それならいい。あんまり思いたくないけれど、自分が嫌に思わされる程のものじゃない。

「なんで……嬉しいなんて……」

自分でもわからない、わかりたくない。考えたくなくて壁に寄りかかりベッドに座る。でも感じてしまったそれは強まっていく一方で、なんだか怖くなって目を瞑る。

もう何も考えないと考えることで精一杯。真つ暗な中ギユツと枕を抱きしめていると電話の音が聞こえてきた。いったい誰だろうと思つて見てみれば相手はあこちゃん
で。

「もしもし……どうしたの?」

『えつとね、Roseliaの為に何かできることないかなって』

例えば、そう言つてあこちゃんは幾つもの案を出してくる。意味のなさそうなもの、

もしかしたらと思わされるもの、それこそ皆でクツキーを持っていくとか、また全員でNFOをやるとか。

最初は沈み込んでいるかのような声だったのに、気がつけばあこちゃんの声がある少しかだけ楽しそうな声に変わっていつてる事に気づく。

多分それは後半になるにつれてRoselliaのみんなでなにかをして解決しようという意見が多くなっていったからというのもあるのだろうけども。

「あこちゃんは……Roselliaの事、本当に大好きなんだね」

『うん！ だってRoselliaは超々カッコいいバンドだもん！』

なら私は？ Roselliaのことは、友希那さんのことは？

……私も、Roselliaの事が好き、友希那さんのことだってそう。だから今のまじじゃ駄目、Roselliaの為に出来ることを考えないと。

聞こえてくる楽しそうな声、それを聞けば聞くほど先程の感情なんて気にならなくなっていくって、どうするべきなのかと考えて私からも提案していく。

蒼音さんにも手伝って貰って、そう考えた瞬間、なんだか黒いものが奥から沸き上ってきた。突然黙ってしまったものだからあこちゃんはどうしたのと聞いてきて、大丈夫とそれに返す。

蒼音さんに手伝って貰ったとして、それで上手くいったでしょう。でももしそれで二

人の中が前より良くなってしまうとしたら？ そう考えたら段々怖くなって。

だけど友希那さんと蒼音さんの事、それを思うとなんだか黒く重くて、焦げたかのよ
うな癖にへばりつくようなそれが溜まっていくかのような感じがする。

だから話題を変えた、もうこれについては考えないようにしよう。

でもそう簡単にいくはずもなく彼の事を考えてしまう。それでいいのか、自分に聞いて、自分では答えられなくて。あこちゃんに聞けるはずもないからそれについて一人で
悩み続けていた。

自分にしか

『あ、蒼音さんそつちじゃないですよ』

『マップピングを済ませてないと……迷いやすいですから』

あこちゃんたちとNFO、何やら素材が必要ということとでその手伝い。こんなことしていいのだろうかとは聞けることは出来なくて。それに俺も素材を集めようかなと思っていたのでちょうどよかった。

ゲームをしているからといってRoseliaの事を何も考えていないというわけではないだろう。事実Roseliaの為にどうしたらいいか、始めるなりあこちゃんからそれについて聞かれたのだし。

『そういえばりんりん、りんりんって蒼音さんの事下の名前で呼んでるよね？』

『そ、それがどうかしたの？』

『なんか理由とかあるのかなあって』

上ずったような声を漏らしながら、しかし理由を話すこともごまかすこともできないようだったので助け舟を出そうとしたがパツとは浮かばない。それに、俺自身聞きたいことでもあって。

『そ、それは蒼音さんだけじゃなくて友希那さんの事も……』

苦し紛れにか燐子さんがそう言うのとピタリと急に静かになる。声がしないのは勿論キーボードを叩く音もしない。

これはやってしまったか、Roseliaのことはともかく湊の事は二人にはまだ決まづいことのように。

『り、りんりん、蒼音さん！ モンスターだよ！』

そう言われハツとなりそのモンスターと戦闘する。Roseliaのことは好き、勿論湊の事も好き、二人はそう思っている筈。これで嫌いだったなら……いや、Roseliaのことを考えるということはそうではないだろう。

明らかに先程より雰囲気が悪い。くだらないことでも言って和ませられれば良いのだけれど人付き合いの少なさ故かそうすることは出来なくて。

『友希那さんって蒼音さんのこと……どう思ってるのかな？』

「……さあ、嫌いなんじゃない？」

『うーん、それはないと思うんだけど……』

あこちゃんから突然そう言われる。わからない、それはそうとしか思えないということとを否定されたことに対してではなく、俺が嫌いなんじゃないと疑問の形で返したこ

ああ、わかりきっていることなのにまだ期待してるのか、してしまおうのか、俺は。

『じゃあ蒼音さんは友希那さんのこと嫌いなんですか?』

『あ、あこちゃん……』

「好きじゃないよ」

そうきつぱりと言い切るとまた静寂が。これは紛れもなく自分のせいだけどそれをどうこう思う事も出来ず、そろそろ終わりますと言う。

しかしその場で中断ということができるゲームではないのでセーブポイントまで行ってゲームを切り、通話から逃げ出した。

一体どうしてあんなことを言ってきたのか、なんて考えはするが嫌な空気を作るだけ作って勝手に消えたのは俺。ああほんと、我ながら最低なやつだ。

——好きなんかじゃない

確認するかのようにそう呟く。そう、俺はあいつの事なんか、俺が好きなのは燐子さ
んだから。

好きだと言われたから言ったから、決めたから。その筈なのに壊れてしまったはずの鎖を意地汚く引きずっていて。

俺の事が嫌いなやつなんか、趣味が合ってるわけでもないやつなんかどうでもいいと思ふことが当然であるわけで。

さつきはすいませんでした、二人に対しそうメツセージを送り燐子さんに思いを馳せる。

好きだ、間違いない。例え、もし、万が一湊が俺の事をそう思っていたとしても揺らぐものではない。

そう思うと頭痛がしてきてため息を吐く。期待するなど、するだけ無駄だと何度思ったらわかるのか。

大きいため息をつくと近くに寄ってきた猫をなでることにした。

「やつほー、久しぶりだね」

「別に、そうでもないだろ」

「そう？ アタシ的には久しぶりな気がするんだけどなあ」

学校終わりのバイト中、入ってくるや否やそんなことを聞いてくるやつがいた。しかし二週間も経っていないのだし久しぶりというのは少し違和感を覚えてしまう。

笑顔を絶やさず、そんな様子だったけれどリサは急に真剣な目をして俺に、話があるんだけどと言ってきた。

「残念ながら終わるのは先だから今日は諦めろ」

「んー、待つのは駄目？」

「だいぶ先だぞ。というかお前、こんなところで油を売ってる暇なんかあるのか？」

俺なんか構ってるくらいなら Rosie の方に時間をかけた方がいいだろうに。時計を見ればバイトが終わるまで後40分もある、結局どんな用事であれここで話せることはない。

「もう知ってるんだ。それなら……」

「今日は駄目だ」

「さつきは駄目って言わなかったじゃん」

「大丈夫とも言っていないだろ」

「それなら明日ならいいの？」

「……そういうわけじゃねえよ」

俺ができることなどなにもない。できたとして話を聞くとかその程度、それならやらんこともないが……いや、駄目だ。多分こいつは湊の事について話してくる。

それは聞きたくない、アイツに対しては何も思いたくない。好きとか、嫌いとか、どうしようもないことだから全てを忘れ去れるまでは。

「因みに友希那の事なだけ……」

ほらやつぱり、口を開けば友希那友希那と言うようなやつだ、確信はなかったが予想なら簡単だった。そしてその答えというのも簡単なもので。

「余計やだね」

「どうして？ 蒼音は友希那の事……」

「これ以上は後の客の邪魔になるからもう帰れ」

お客さんなんていないじゃん、そんな声が聞こえ続けるが無視し続ける。

どうせこんなの一時しのぎに過ぎないなんてのはわかってる、どうせバイト終わりに
はりサからメッセージが送られてきていることだろう。でもそれなら無視すればいい
だけの話。

気にしないようにと決めて、でもどうしても考えてしまうから遠ざけて。ああ、どう
してこうなってしまったのか。

元を辿ればその原因は俺だというのにまるで他人事のように、そう思いたくて思考を
巡らせていた。

考えに耽っていたせいかわバイトは体感すぐに終わった。スマホを手に取り、いつもな
らすぐさま弄りながら帰路につくのだが先程の通りで見たくない。

まだ空は暗くなり始めたばかりだから星でも見ながらというわけにはいかななくて、退
屈になりそうだなとため息をこぼしながら店の外に出ると声をかけられる。

「……なんでまだいるんだよ」

「もうお客さんの邪魔になるからとかの言い訳はなしだよ?」

なんでまだ、幾ら寒くないとはいえ退屈だろうし、それに座るところもないというのに。そんなに聞きたい、または聞かせたいものなのか。

「蒼音はさ……アタシが *Rosealia* にお節焼きすぎって思う?」

「知るか、常に見てるわけじゃないんだから。まあ湊にはだいたいぶ焼いてんなとは思いうけどな」

「やつぱりか……はあ」

大きなため息、それから先何も言われることはなくて。じゃあなと言って帰ってしまってもいいのにそれが出来ない、体がさせてくれなかった。別に悪いことじゃないだろうと励ますことも。

「アタシ達今どうなってるのか……知ってるんだよね?」

「……まあ、大体はな」

「それならさ……蒼音が友希那と話してくれないかな?」

意味が分からない、こいつは何を言っているんだ。メンバーでもない、嫌われている俺が一体何を話すというんだ。

「なんで俺なんだよ」

「……蒼音から言われたら友希那も考え直してくれそう、って思ったからさ」

「……自分で聞けよ」

俺がそう言うのとリサの雰囲気が変わったような気がした。蓋が開いたというか、地雷を踏んだ、そんな感じ。

つい一歩下がってしまつて、それを見てか手を掴まれる。ちよつと力を入れて振るえばその手は振り払えそうだった。だけど、そうすることは出来なくて。

「アタシだつて、ホントは頼みたくなんかないよ」

別に大きくなければ迫力もない。なのに俺はその言葉に圧倒された。それならとか話を挟むこともまた出来ないでいると更に言葉を投げかけてくる。

「アタシの方が蒼音より何倍、何十倍も一緒にいるのに、蒼音はRoseliaじゃないのに」

その顔はまるで怒っているように見えた。でもその矛先は俺でない気がした。

「ずっと……ずっと友希那の事思つてる自信があるのに……」

声が弱まつていく、なのにその声はより確かに聞こえてきて。

「友希那は蒼音の音楽を認めてる、アタシは……一回やめちゃったから」

リサの瞳には、涙が浮かんでいた。

「Roseliaじゃないから、蒼音だつたら……多分友希那は聞いてくれると思うから……」

そこまで言つて泣いていることに気づいたのか俺の手を離し袖でそれを拭う。俺じゃなきゃアイツには、馬鹿な事をと頭で思つて、でもそれを否定しきりたくなくて。ここまで言われてそんなこと知るかと思うことなんかできる筈がない。でも一つ、俺には問題があつて……

「……俺は湊に話しかけるなつて言われたから無理だ」

「それつて……SMSの後？」

「当日夜だな」

だから俺の話なんて聞いてもらえない、そう思つただのだけれどリサは俺の胸を人差し指で軽く押して言つた。

「友希那の事、好きなんでしょ？」

「……………」

見透かされるような、真つ直ぐと見られると目をそらしたくなるがそうさせない力があつて。別にと返せばいいのにそうできない、まるでそれが？であるかのようで。

「それに、友希那は蒼音の事、嫌いじゃないと思うからさ」

「……………は？」

「怒らせたりすること言つたわけじゃないでしょ？」

「当たり前だと領けばなら大丈夫と言ひ、それじゃまた連絡するねとその場を去ろうと

するリサを呼び止めた。

「俺は話したいことを話すだけだ。大事なことは全部、お前達でどうにかしろ」

そう言うのと彼女は驚いたかのように目を丸くして、その後笑って力強く頷いてその場を去って行った。

その後ろ姿を目で追い続けながら彼女の言葉を頭の中で繰り返す。

湊が俺の事を嫌いじゃない、一体何だっというんだ。でもそれなら……

ずきりと胸が痛む。それは何度か感じたことのあるものだけど今回は今までで一番強いもので。

湊の事が好きなんですよという問い、俺はそれに対してはいともいいえとも答えることが出来なかった。

俺がアイツに話したいことってなんだろう。俺の事を嫌いなのかと訊ねるのか、Roseliaはどうするのかと聞いてみるのか。言った方がいいもなにもかもがわからない。

俺はアイツの事を好きじゃない、今まで本心かどうか自分ではわからないけどそう思うことは出来ていたというのに、急にそう思うことが出来なくなっていた。

自分は何者か

私は一体、何をしているのだろうか。ふとそんな事を考える。

為さねば成らぬことがあるからそれを成すために、動機はわかる、でもそれ以外がわからない。

何をすればいいのか、何でこんなやり方しかできないのか。何もかも全て。

「どうして……私は……」

何で私はこちらも向こう見ずなのだろう。今更立ち止まることなんか出来ない、どうしたらと相談できる相手もない。

メンバーにはあんな事を言ってしまったから、それ以外には……関係のないことだから、関与されることではないから。

自分でもわかつている、関係ない、関与されることではないと。そうわかっていると、いうのに、関係のない人のことを考えさせられてしまうのはどうしてだろう。

「……燐子？」

すれ違ったその人を見間違うはずもない。向こうもそうなのか、お互い振り返って見詰め合う。久しぶりと声をかけることすら出来ず、ただどその状態のまま動けない。

燐子はあること一緒である時から練習に来ていない。なにか思うことがあるのか、それとももう来ないつもりなのだろうか……私のせいで。

声をかけられない、向こうからもそう、だけどお互いその場を離れようとしなさい。距離を詰めることも、視線もそらすことも。

「っ……」

ずきりと痛みが、ああ、これはいったい何なのだろう。突然やってきて蝕んできて、なんだか言い表せないような感情を抱かせてくる。

苦いもの、嫌いだから避けているそれだけどそれが私の中で作られるような気持ちの悪さ。吐き出せるならそうしたいけれど形はないものだからそれに苦しめられる。

これは罪悪感というものなのか、ならば謝れば消えるのか。でも、それを実行するわけにはいかない。強がっているわけではない、私はこうするしかないのだから。

振り返ったら自分がしてきたこと全部見えてしまって、先に進む道が消え足を取られ、何にもできなくなってしまうそうだから。

「やっと見つけた……って燐子じゃん、久しぶり〜」

「お、お久しぶり……です」

「やっぱり久しぶりってなるよね。よかった〜」

「どうか……したんですか？」

「ん？ ああ、こっちの話だから気にしないで」

後ろからやってきたのはリサで、私達の近くに来るなり大きく息を吐く。少し急いでいたのか、それとも緊張からなのか。やっと見つけたというからには何か用があるのだろうか……多分 Roselia の事だろう。

そう思うとつい逃げ出したくなる。自信がない、問われたらきつとまともなこと、正しいことを返せない。それでも、これだけは絶対に逃げることは許されない。

「……何か用かしら？」

「まあね。ただ……」

リサからの視線は私を通り抜けてその後ろの燐子に向けられる。燐子に話があるのか、それとも燐子には聞かれない話なのか。

少し悩むようにして、でも決めたのか強い目で私の事を見てリサは言った。

「友希那……蒼音と話、してくれない？」

その言葉は私の予想を裏切るものだった。てつきり Roselia の事だと思っていたから身構えていたけれど、それでもその内容は私にとって拍子抜け、と思えるようなものではなくて。

むしろ逆だ、息が詰まって心臓が鳴る。何故？ 彼に頼まれたのだろうか、彼に何か伝えたのだろうか。それともただ単に知り合い同士がギスギスしているのが嫌なだけ

なのか。

「……必要があるのかしら？」

「ある……って言ったら話してくれるの？」

「そんなことをする暇があるなら練習をするわ」

「そんなことって……」

燐子が声を漏らす但其の通りでしかない。必要がない、話せば音楽が上達するのか、問題もわかるのか。必要がないから関係をどうこうする必要がなくて。

「そもそも、彼から聞いてないの？」

「話しかけないでって言ったんでしょ？」

「それを知ってるなら……」

知っているなら何故聞いてくるのか、彼と私のいざこぎを解消しようという目的なら余計なお世話だし無駄なことだ。だって、元から問題なんてなくて私が一方的に言っただけなのだから。

そう言ってしまうえばリサも納得するだろうか、きつとしてくれないだろうかそれは曲げられないもの、どうしようもないもので……

「どうしてそんなこと、言ったんですか？」

「彼はRoseliaじゃない……それだけよ」

「それなら……言う必要だって、ないじゃないですか！」

割って入ってきたそれは普段の彼女からは想像もつかないもの。気圧される、反論も出来ないまま一歩足を下げさせられる。彼女は一体何に怒っているのだろうか。

向けられる対象は私であるのは間違いない。燐子と新庄君は仲がいいから、そんな程度ではないだろう。

「……友希那さんにとって蒼音さんは……どんな人なんですか？」

「別に……」

どうでもない、そう答えようとしたが二人の視線にその言葉を飲み込ませられる。私に何を言わせたいのか思わせたいのか、それもわからないまま仕方ないと思いを巡らせる。

新庄君は……音楽の話が出来る人だ、私と一緒に猫が好きの人だ。何故だか気になつてしまう人だ、話しているといろんな事に気が向いて、だけどどこか落ち着くような人。後は……

……
おかしい、わからない。ふと抱いた違和感は膨れて頭の中がそれいっぱいになって

——どうでもない人ならどうして、こんなにも考えられるのだろうか。

「どうしたの？ 友希那」

「……いえ、何でもないわ」

答えられぬまま時間が過ぎていく。新庄君は私にとって何なのか、ただそれだけのものがわからない。

既にどうでも良いという答えは二人の視線もあれど、ここまで考えさせられたのにそう答えることは出来なくて。

「蒼音さんは……友希那さんの事が嫌い……なんですか？」

わからない、なにもかも全て。彼のこと、燐子が何故こんな事を聞くのか。嫌いということも、その意味も。

そんな私に対し、燐子は更に質問を投げかけてくる。

「それなら……蒼音さんの事が好きなんじゃ……ないですか？」

「ちよ、ちよつと燐子」

「……どうしたらそういう考えになるのかしら？」

私の言動からとれるものはそれとは正反対であろうもの、だけど心の奥底で納得させられてしまう。

「蒼音さんにだけそういう事を言うなんて……おかしいじゃないですか」

「……答えになつてないわ」

口ではそういうものの頭の中ではそうもいかない。新庄君に言われたらその言葉に

甘えてしまい、Roseliaを昔の様にできなくなりそうだと思つたから。

そんな言い訳ばかりが頭の中で浮かび続けて、でもよくよく考えたらそれは言い訳にならないもので。

思い返せば、彼にだけというのは今回だけのものではない。名字で呼ばれていること、連絡先を知らないことなどを気にかけてさせられるなど全部、彼にしか抱かされたことのないもので。

「……心当たりはないん……ですか？」

「……………」

「まあまあ二人とも落ち着いて。それで、友希那は蒼音と話してくれる気になつた？」

話す必要がないと言つて、その明確な答えは一つも返つてきていない。彼と話せば練習にくるとか、これ以上余計な事をしないと、そういうものが。

でも、嫌だと答えられない。それは私の中で抑え込んでいた新庄蒼音という存在が表に出てきたから、彼と話したいと思つてしまったから。

「……考えておくわ」

そう言つて私はその場から逃げるように去る。二人は何やら話しているが離れたせいもあつてか聞こえない。

新庄君と話したい、そうは思つたものの何を話したいのかはわからない。何から話せ

ば、何のために話せばいいのかもわからない。

Rosealiaのこと、音を取り戻すためにはどうしたらいいのか。それをわかることができるのなら、それを求めているのは間違いないけれど……本当にそれだけなのか。

目の前で猫が通り、周りに誰もいないことを確認してその子の近くに行く。そういえば彼も猫を飼っていたわね、なんてことを考えながらその子に手を伸ばす。

「やっぱり……」

猫は好き、それは隠しようのない事実だ。その前例があるからこそ好きというものがまったくわからないというわけではない。

猫と新庄君に対しての気持ちは同じでない。それははつきりとわかるというのに、彼を好きじゃないと思うと、そうと言い切ることは出来ないままだった。

新庄君と話したい。そう思った翌日になっても私は未だにそれを実行することを出来ないでいた。あんな事を言ってしまったからだとか、やっぱり必要ないからと思いついたからではない。

ただ話したいだけならば今日すぐにでなければ彼のバイト先に行ってみればいつかは会えるだろう。でもそうじゃなくて今日すぐにでも、そんな風にせかされている。

だけど彼の連絡先は知らない。燐子に連絡してもらおうというのは……してほしくない。それが一番だとわかっていて、それでも嫌で。

気持ちを抑えきれない、だけどそれを確かにする方法はしたくない。それだから私は……

「……留守なのかしら」

インターホンを鳴らしてみたが誰も出て来る様子はない。私が今いる場所は彼女の家の前。一度だけ来たことがあって、道もなんでも覚えていた。

ここなら間違いなく彼と会うことが出来る、そう思っていたのだが留守であるなら仕方がない。

空は暗くなり始めているというのに留守だなんて、こうしようと決めたからバイト先を覗かなかったのが裏目になってしまったか。

もしかしたら……居留守でも使われてしまっているのかもしれない。そうであるというのはあまり考えたくないものではあるのだけどありえないものではない。もう一度だけ鳴らしてみても、やはり反応はない。

明日ならいるかしら、そう考え、でもできるだけ早くがいいと思わされて。彼がいつ帰ってくるかなんてわからない、それにもし居留守でも使われていたら私は帰れない。

ため息一つ。今日はこれで最後と、インターホンを鳴らそうとした。

「……お前、何やってんだ？」

「リサから、あなたと話してって言われたから、その……」

後ろから声をかけられて振り返れば当然かのように新庄君が立っていた。素直にない、リサの事を言い訳に使ってしまう。ただ私がそうしたいだけなのにそう言うことは出来なかった。

言葉が淀んでいる私の横を通り過ぎて彼は鍵を開ける。ああ、やっぱり私がどう思っているように、彼は私の事を……

「……外だとあれだろ」

「……いいのかしら？」

「……うちの猫にまた会いたいわって言ってただろ」

それだけ言って新庄君は私を置いて家の中に入っていった……鍵をかけずに。ふと笑みが漏れる、少しだけ嬉しいと思わせられる。

彼が居留守を使っていなかったことか、彼に拒絶されなかったことか。私ですら言われるまで忘れていた約束を覚えていてくれたからか、彼もまた、何かを言い訳にしていたことか。

どうであれ、彼が嫌だと言わないのであれば有難くそうさせてもらおう。私も上がらせて貰って鍵を閉めて、リビングへと向かわせてもらった。

座らせてもらおうと猫が寄ってきたので、彼の許可を取って膝の上に乗せる。彼も私の前に座り、だげど話しかける事なくそっぽを向いたまま。そっちを見てみるもなにものもない、ただ壁が広がっているだけで。

互いに言葉にを発しないまま時間だけがすぎる。膝の上の猫がたまに鳴いて、それ以外には少しも音がしない。

あんな事を言ってしまったのだから私から切り出すべき、そうは思っているも何から、何を話せばいいのかわからない。

そんな私を見てか彼から話を切り出してきた。

「お前、Rose-liaについてどう思ってるんだ？」

それを聞くということは……やはり全部知っているのだろうか。それはリサによるものなのか、そんなのどうでのいい。隠す必要もない、だげどこれを話して何になる。音を取り戻すための道、それを私は知りたいのに。

でも新庄君はきつと無駄になることは聞いてこない、それは今までの付き合いで分かっているつもりだ。私ですら分からないそれを知るため、そうであると思ひ答える

「一緒にバンドをする場所よ」

「……それだけか？」

「他に何かあるというの?」

「じゃあ、お前はなんだ?」

私は何者か、多分そのような問い。私は私、それ以上でもそれ以下でもない。そう答えればいいものの何故か詰まったかの様に口から出ない。

そうじゃないと、求められている答えが何なのか、それを奥底だけではわかっているかのような。

私は何者なのか。お父さんの夢を叶える為の、高校生の、猫が好き。私は私、何度考えても出てくるのはそれだけで、何度出てきてもそうじゃないと思わされる。

湊友希那、それが私を表すもの。他でもない、Roseliaのボーカルの湊友希那、ただそれだけで……

……私は今、なんて思った? 余りに違和感がなくまた別のものかと思いきや巡らせたが、それだけはこれは違うと思わず、極々自然なものであると思うことができた。

ふと彼の顔を見ると、ようやくわかったかとも言いたげにこちらの事を見ていて……

「もう一回聞くだ。お前にとってRoseliaは、なんだ?」

「私にとって……歌を歌える唯一の場所」

「お前は、誰だ?」

「私は、Roseliaの湊友希那よ」

「それを俺じゃなくて、あいつらに言っでこい」

手を私の事を追い払うかのように動かす。なんでこんな事がわからなかったのか、音を取り戻して誇りを取り戻す、そうするために、わかるまで顔向け出来ないなんて思っていた。

だけど私は、Roseliaのことが好きだから。わからなくても、そうしたいと思わされて。

「新庄君……ありがとう」

「……用が済んだなら帰れ」

彼はまたそっぽを向く。少しだけ顔が赤くなっていたような気もするが……部屋も熱くないし気のせいだろうか。

それよりもRoseliaのこと、少しわかったせいか思わされる事が沢山ある。みんなはRoseliaのことをそう思っているのか、みんなは演奏の時に何を思っているのか。

気になるそれは一人ではどうしようもない、だから今度みんなに許しが出れば聞きたくて。でもそれにはまずみんなが、私の事を許してくれなければいけない。

悩んでも仕方ない。駄目だと言われて、それで諦められるものではない。許しが出る

まで頼み続けるだけ。

「そういえばもう一つだけ、言わなければいけない事があったわ」

「……なんだよ」

「この前はごめんなさい」

「……別に気にしてねえよ」

だからこれからよろしく、そう言つてスマホを差し出すが彼はわかっている様子で連絡先を交換したいと言えば渋るかのように、だげど交換してくれた。

あんな風だったのに見送りには来てくれるようで、ドアに手をかけ、ああそういえばこれを言い忘れていたと振り返る。

「忘れ物か？」

「いえ、言い忘れてたことがあつて」

「まだあんのかよ」

「ええ」

わからなかつた、正直なところ今でもよくわかつていない。でもこの気持ちを表すにはこの言葉しかない。知っているそれとはまた別のもの。この気持ちのこと全く分らないけど、そうであるということだけはわかつてしまう。

「どうやら私、あなたの事が好きらしいわ」

「……は？」

「それだけよ。それじゃあまた今度……」

「待て、意味が全くわからないんだが」

「言葉の通りよ」

「そうじゃなくてだな……」

好きになった理由が気になるのだろうか、それは必要なものなのか。正直言ってしまう。ええ、私自身どうしてこんな風に思わされたのかわからない。

ただ燐子に好きなんじゃないかと言われ、そうであると思わされただけ。何故もどうしても知らないし、気になるものでもない。

そう言っても彼は納得していなさそう、だけど彼はそれ以上聞いてくることはなかった。

「そろそろ帰らないと。それじゃあまたライブに来てちょうだい……蒼音」

「……ああ、気が向いたらな」

その後彼が何か呟いたが聞き取ることは出来なかった。帰り道、少しだけ冷たい風が吹くがそれが気にならない程には身体が熱い。

これはなんだろうか、わからない。わからないけれど……なんだか気持ちがいいもので。

好きとは何だろう、それはわからない。好きならばどうなるのか、どうするべきなのか、調べようとすると妙に恥ずかしい。好きとはこういうもののだろうか、本当に何もかもわからない。

好意というのを向けられるのはあまり好きではなかった、音楽に集中したいから、その妨げになるものだったから。

そんな私が誰かの事を好きになっている、まるで笑い話だ。彼が私を好きだと言ったら……その時は、なんて思うのだろうか。

「今度リサか燐子に頼んでみようかしら」

知ってしまったせい、気になってしまったせい。今まで欠片の興味も、少しの理解も出来なかったそういう本を読んでみたいと思うようになっていた。

恥ずかしがり屋が

朝目が覚めると日付が進んでいた。

当たり前だ、寧ろそうならないことなんてありえない。日付をまたいでから寝ればとか、その日のうちに目覚めればとか、そういったつまらないものはまた別。

昨日のこと、湊から言われたことは未だに信じられない。あれは夢だ妄想だ、そんな風に考えたから日付を確認して。

でもあれを夢だなんて思えるわけも、間違えるわけもない。だというのにため息をつく。

好きと言っても大雑把だ、でもああいう風に直接言われたのだから、恋している……と思っつていいと思う。

全部、全部わからない。顔を洗っても頭の中はスッキリせず、また大きなため息がこぼれてしまう。

いつたい何時から、どうしてなのか。そんな当たり前のものからあれは本音なのかなんてものまで考えさせられて、でもその中で最もわからないもの、それはアイツがこぼした言葉によるもので。

「燐子さんからって……」

聞き間違えるわけもない。アイツは確かに燐子さんに言われそうだと思わされたと言った。

アイツが俺と話したのは Roselia にとって必要だったから。そうリサが言つて、多分その場に燐子さんもいたのだろう。

どうして、どうしてそんなことを言つた。不満があるわけではない、ただ本当に不思議なだけ。

ただの冗談で言つた。まさか、彼女はそういつたことは言わないだろう。平時であればまだしも、バンドの危機と言つてもいい状況で。

「……考えても仕方ねえか」

猫が寄ってきたので膝の上に乗せる。こういつたことは本人に直接聞いた方が早し正確だ。なんで言つたんですかと、ただそれだけで済む話。勿論ごまかされなければあればだが。

なんならリサに聞いてもいい、その場にいたというならばアイツの性格上なんで聞いていそうだし。本人に聞くのは引けるしそうさせてもらおうか。

「……遅いんだよ」

呟いたそれは昨日と全く同じもの。遅い、好きだと言うのが遅い。なにも自惚れてい

るわけではない、ただ、本当に言われるのが遅かった。

俺が燐子さんを好きになる前なら、迷いはじめであったならばこんなに考えることも迷うこともなかっただろう。

俺は燐子さんの事が好きと確かに思えた。湊に嫌われてしまったならばとかそうではなく、好きだと、純粹にそう思えた。

問題が解決したらあの時言えなかった答えを、俺も好きですと言おうなんてものも思っていたのに……

俺は今、迷ってしまっている。

それは悪いことか、考えなくてもわかること。言っていないからまだ大丈夫とか、少しでもそうは思えない。

ああ、好きって何だろう。何度思ったかわからないその悩みをまた考えていた。

「久しぶりく、元気してた？」

「少なくともお前は元気そうだな」

あの出来事から四日、それだけ経ってようやくリサがバイト終わりの俺の前に現れた。

もつと早く来いとかそういうものを抱いていたわけではないが、ピアノが手につかな

いくらいには気にならされていた。Roseliaのこと、湊のこと、そして憐子さんの事を。

そんなならばさつきと聞いてしまえばいい、そうわかっけていてもなんて聞けばいいのかわからないからじつと聞き続け、でもその中にRoseliaの話、湊の事は一切なく。

「あ、ごめんね。アタシばかり話しちゃってた」

「じゃあ俺からも幾つか聞きたいことあるんだが……いいか？」

「それならどっか寄ろうよ、立ったままだとあれだしさ」

それに、と付け足すように振り向いて招き猫のように手を動かした。

「もう一人いるからさ」

リサがそう言うのと壁の向こうから覗き込むかのようにこちらを見てくるのは、今最も気にならされていた人。

目が合えば逃げるかのように壁に隠れてしまい、そんな彼女の背をリサが押して俺の前にやってきた。そこでも視線は俺とは全く関係ない場所に、その姿は俺に告白をしてきたなんてものが嘘であると思えるほどのもので。

「い、今井さん……私、やっぱり……」

「いまさら何言ってるの？ それに、蒼音も嫌じゃないでしょ？」

言葉も発せず頷くと、それじゃあ行こうとリサが言つて歩き出し、俺が後を付けその後ろを燐子さんが。

偶に振り向けばやはり顔を伏せられる。ああ、彼女はこんな人なんだ。恥ずかしがり屋、それも俺が今まで会つてきた人の中でも上位に入り込んでしまふくらいには。

だけど、そんな彼女が俺に告白してきた、あの時何を思ったのか、俺にはわかるはずもない。でも、勇気を出してそうしたというのは間違いないだろう。

なのに俺はそれに対して答えることができないでいる。それがどうにも俺の心を締め付けてくる。

「あの……」

「……どうかしましたか？」

「いえ……なんでもない……です」

今日初めてかけられたその声は消えてしまいそうなもので、言いたかったのであろう言葉も飲み込まれて。

俺は何もしていない、することができない。迷わされているから、待つていますと言われたから。そうやって言い訳をすればするほど辛くなるのは俺自身で。

燐子さんの手に目が行った。理由なんかわからない、そういう趣味があるわけでもない。俺達は立ち止まってしまっていたからリサはだいぶ先に行ってしまった。

どこの店に行くのか検討はつくが確実ではない、だからちよつと早く歩かないといけない。それは勿論燐子さんにも当てはまるから……

「ちよつと、二人ともなにしてるの〜?」

前方からそんな声が聞こえたので俺も燐子さんもちよつと早めに歩き出す。好きだと言ふ程の勇気を出され、こちらもそうだと思つているのなら、俺からもそう示す行為をするべきだとわかつていて。

「……………」

なのに、俺はこの手を伸ばせない。子供が注射を刺されるのと一緒で少し我慢してしまえば一瞬で済んでしまうもの、だけどそうすることすら出来ない。

ピアノを弾くことしか出来ないその手を見て、燐子さんの事を見た。そして俺は、燐子さんの歩く速さに合わせる以外何もできないでいた。

「それで、聞きたいことつて何?」

「あ……………Roseliaはどうなんだ?」

「それは……………」

カフェに着いて注文するなりそう言われ、とりあえずとりサに聞いてみたら突然顔を伏せられた。

こんな風に誘ってきたのだし、どうせ上手くいっただろうと思ひ込んでいたがもしかして……

「ぼっちりだよ。蒼音と、燐子のおかげでね」

「お前なあ……」

「そ、そんな……私は別に……」

「そんなこと言わないの。勿論二人だけのとは言わないけど、二人がいなかったらこうはならなかっただろうしよ」

引つかかったとでも言いたげにニコニコとしているリサを見ると、少しでもやってしまったかと思つてしまった自分が馬鹿馬鹿しく思えてくる。

運ばれてきた珈琲を口にする。何故燐子さんは湊にあんな事を言つたのか、本人が目の前にいるのだから聞いてもいいのだが、やはり本人がいる場ともなれば気が引ける。そんな風に思つていたので……

「そういうえば友希那に恋愛小説貸して欲しいなんて言われたんだけど、蒼音はなんか知つてる？」

突然言われたそのせいでむせこんでしまう。大丈夫ですか？ と燐子さんに心配されるが声が出せなかつたので頷くしかなかった。

そんな俺の反応を見たのだから面白そうにリサは踏み込んでくる、と思つたのだがそ

んなことはなく俺が落ち着くのを待っていた。

「……どうした、いつもなら気にせず突っ込んでくると思ったんだが」

「失礼なこと言うな。アタシだってそれくらいわかるよ」

それで、どうなの？ それは俺に対して投げかけられているはずなのにその視線は俺の隣に向いていて。俺もそれにつられて隣を見れば妙に緊張したような様子でこちらを見ている燐子さんが。

これまた目をそらされて、そう思っていたのに今回はこちらの事をじつと見てきている。

隠せない。もとより隠す必要はないと思っていたが、そうすることは許されないとわかったから。

「……湊から、好きって言われた」

「……それから？」

「……それだけだ」

「もったいぶらなくてもいいんだよ？」

「何とも返してねえよ」

納得していないかのような表情をリサは浮かべる。無理もない、俺がアイツの事を好きなきなことをコイツは知っているのだから。

それだからなんて返したか、何もなかったのか、それを聞き出したいのだろう。単純な興味もあるがそれは多分、燐子さんが最も気になることだから。

思い返せば燐子さんの事をどう思っているのかなんて聞いてきて、今から燐子さんが本を渡しに行くからと俺に伝えてきた。燐子さんが俺の事を好きなのだと前から知っていたのだろう。

そして知っているからこそ聞き出さなければと思っている。彼女は恥ずかしがり屋だから、知らなければならぬから。

隣を見れば燐子さんは不安そうな表情を浮かべている。でもこれ以上に言いようがないと思っていると隣から声が飛んできた。

「蒼音さんは……友希那さんの事、どう思ってます……いるんですか？」

「……変わらないです。アイツの事はやっぱり好きで……」

「だけど、何とも返さなかったん……ですよね？」

「はい」

そう返すと燐子さんはほつと息をつく。一方リサはわかっていないのか俺と燐子さんの方を交互に見て、え？ と声を漏らし続けていた。

「えつと……どういふこと？」

「そういう意味……です」

「ごめん、ぜんっぜんわからないんだけど」

「……そのまんまの意味だよ」

うーんと頭を抱えて唸っているリサを放っておいて残っていた珈琲を飲み干す。

不安そうな顔を見せ、答え次第でほっとした様子なのだ。きつと怖かったのだと思う、湊が俺に告白して、俺がなんて答えるか。

聞けない、そう思っていたけれどやっぱり気になりすぎるといのが本音。それにごままで答えてしまったのだし聞いてしまってもいい、そう思ってたことにした。

「燐子さんは……なんで湊に俺の事が好きなんじゃって聞いたんですか？」

「ど、どうしてそれを……」

「……湊がそう言ってたので」

言葉を探すようにあちらこちらと視線を動かし、気づけばリサも頭を抱えるのをやめて燐子さんの方を見つめていた。

リサも知らないことなのか、どうにせよ俺もリサもただ待つことしかできない。

「えつと……ああでも言わないと友希那さんは……蒼音さんと話してくれそうに……なかったですから」

それが理由なのか、一体いつ湊が俺の事を好きなんじゃないかと思っただのか気になったがそれは聞かないでおこう。

Rosealiaの為に仕方なく言った、そういうことなのだと思います瞬間、彼女はそれにと付け足した。

「もしそれで……蒼音さんが友希那さんの方が好きだと言ってたら……それまでですか」

彼女は笑みを浮かべながらそう言った。その笑みの裏に隠れた安心したように感じさせられる雰囲気も、俺には眩しすぎて見ていられなくて。

「えつと……さ、つまり蒼音は友希那の事が好きだけど、燐子の事も好きって事？」

「……まあ、そうなるな」

最低だと罵られて当然だ、そう言われるようなことをしている、言っているのだから。今までそうでなかったのは燐子さんが飛びぬけて優しかっただけ。

そう思っていたのにリサは俺に対して、そつかとだけ溢しただけでそれ以上は何も言ってこなかった。

「そういえば夏祭り近いよね、その日って二人は暇してるの？」

「まあ……予定はないな」

「私もない……ですね」

「じゃあ二人で行ってきなよ」

「そ、そんな……私なんかと……」

なんでもないかのようにリサはそんな風に聞いてくる。燐子さんは遠慮しているのかそんな風に言っているが、ちらちらとこちらを見ているのは俺も気づいている。「俺は行きたいですけど……嫌ですか？」

「ほら燐子、蒼音もこう言ってるんだしさ」

「え、あの、その……私も行きたい……です」

それじゃ決まりとリサが軽く手を叩く。リサは来ないらしいので二人きりとのこと、燐子さんを見れば顔を赤くして俯いたまま。

ああ楽しみだ。夏休みなのだから楽しみなのは当たり前なのだが、好きな人と何かするとなればそれはより強くなるもので。

ああ、好きというのは心地好いものだ。こんなにも楽しみに思える、もう既に胸が高鳴り始めている。

早く夏休みになってしまえ、俺はそう思っていた。

好きというのは心地好いものだ。それは間違いない。

だけど胸に引っかかる何か、それも間違いなく好きというものによるものだった。

理由を知りたくて

春になった頃にはあれほど望ましかった夏休みも鼻の先。今のところの予定はただ一つ、燐子さんとの夏祭り。まだそうではないというのに気分がいい、悪いはずもない。ああ早くその日になってしまえと、その日の準備は何もしていないのにそう思わされる。それは持ち物のことでもあり、心の準備のことでもある。

昼休み、飯も食べ終えたしすることないなとスマホを開けば一件のメッセージが。なにかと思ひ確認をしてみれば学校が終わったら駅前で会いましょう、ただただそう簡潔に、たった一文で書かれていた。

それだけであるならばどうということはない。問題はその送り主、そこには湊友希那と書かれていて。

まっさらなメッセージ欄。例えるなら積もった新雪、それを踏み抜くかのようなもの。アイツは一体どんな気持ちでこれを送ったのだろう。

もし今日俺にバイトが入っていたならば、何かしらで遊ぶなどで断られたらとか、そういうことを考えた上でこの文を送ったのか。

幸い今日はフリーな為わかったと返そうとするもどうにも納得いかない。メッセージ

ジなのだし送れば取り返しをつかないものだからそれだけでいいのか、なんてことを考えてしまう。

送られてきたものを返すだけなのに、ただそれだけをどうするかと頭がこんがらがりそうなくらい考えさせられる。

ちよつと長くすればこつぱずかしいし、かといって短すぎるのもなんか嫌だ。少なくとも初めてのメッセージ、わかつたとだけ返すのは許せないと勝手に思ってしまった。

ほんと、なんでこんなことで考えさせられなければならないんだ。わかつたでも了解でも、長つたらしくそれっぽいな事を書いても結局は一緒。そうわかつていて、なのにもうも迷ってしまう。

湊は俺に送る時これでいいのかとか考えたのだろうか、少しは緊張したのだろうか。絶対に今わからないものであるくせに考えてしまい、どうせそんなことないんだろうなと思うとちよつとイラツとした。

それは憶測であるけれどどんどん加速していく。それは俺がこんなにも悩んでるのにといいものからなのだろうか、それとも少しも恥ずかしいとかそういうものを抱いてくれないアイツにイラつくのか。

昼休みが終わるチャイムがなる。まだ教師はこないしきつさと返すか、そう思ったの

だが次は移動教室なのでそうもいかない。

そのまま授業を二時間、その間に考えていたのだけれど納得のいけるものがでなくて、結局は終わつたから向かう、なんてその場凌ぎに返っていた。

「……いねえのかよ」

顔を合わせたらまずなんと言おう、そんなことばかり考えていたのに約束の場所に湊は見当たらない。なぜか普段より人が多い気はするが、その中に埋もれてというわけではない。

明確な時間を指定されたわけではないし学校だつて違うのだからそれは当然、それでもため息は零れた。まあどうせ待つにしてもそう長くは待つことにはならないだろう。

早く来いよなんてことを考えてしまい、それを誤魔化すかのようにスマホを弄りながらも周りを見回し暫くするとようやくやく湊の姿が目に入った。

「待たせたかしら？」

「そうと言つたら？」

「ごめんなさいって言うしかないわね。でも、そんなには待つてないでしょう？」

時間を確認してみたところ十分程度、まあそうだなと返したところで一つの疑問を抱

く。あれ、十分しか経ってないのか？ というものを。

体感ではもっと長かった、一時間とはいかないがその半分くらいは待っていた気分。だというのに時の流れは余りにもゆっくりで。

「それで、今日は何の用だ？」

また音楽の感想でも聞きに来たのか、それとも遅めの感謝でもしようというのか。

どうであれ湊が会いたいというからには何かしらの用件はある、そう思っていたのが湊は首を横に振った。

「別に、何も無いわ」

「……なら俺に会う理由はなんだよ」

「理由がないと駄目なのかしら？」

首を傾げられ、本当に何も無いかのように湊は俺に対して不思議そうな表情を向けてまでいる。理由もない、ならば俺に合う必要なんてなくて。

それにコイツの事だ、必要がないのならば一人でも練習していそうなものなのだが。勿論理由がないからといって嫌なわけではない。これで誰かとの約束より優先したとなればまた変わっていたのだろうが、まあ好きな相手なのだ、嫌である筈もなくて。

「あ、友希那さんに蒼音さん。こんにちは」

「こんにちは。久しぶりだね」

「湊さん、今日は練習じゃないんですか?」

「そうね、そういう美竹さんは?」

「実は近くに新しいカフェが出来たらしくて、ひまりと一緒に行ってみないかって」

突然声をかけられ、誰かと思いきやそれを見ればそこにはひまりちゃんと蘭ちゃんが。

この二人は俺らと違ってきちんとした目的があるらしく、ひまりちゃんの方を見れば楽しみというのがあふれんばかりに感じ取れる。

さて何をしようか、ただ突っ立つてるだけで過ごすのは馬鹿らしいしすることもなうえに疲れる。三人の話を右から左へと流しながら考えていたのだが、ひまりちゃんからある提案をされた。

「そうだ! 二人がよければですけど、一緒に行きませんか?」

俺と湊は目を合わせる。自分は別にいいけれどそっちはどうだ? そう目で会話を
する。

そして互いになんの反応も起こさないでいるとひまりちゃんは、予定があるならそっ
ちを優先してもらって大丈夫ですと言ってきた。

「いえ、することもなかったところだし……そうね、美竹さんがいいのならお邪魔させて
もらおうかしら」

「アタシは別に大丈夫です」

「蒼音さんはどうですか？」

「……みんながいいなら俺もそうさせてもらおうよ」

「……することがないなら助かったから助かった、でもそれは俺にとつて手放しに喜べるものではない。」

「みんなというのは蘭ちゃんひまりちゃんは当然ではあるのだがもう一人、そちらの方に目をやればまるでなんでもないかのようになっています。」

「二人きり、そんなことを意識していたのは俺だけなのか。馬鹿みたいじゃないか、そんな風に思わされてイラつかされて。」

「ひまり、なんであの二人誘ったの？」

「そ、それは……スイーツが美味しいって話だし少し分けて貰えたらいろんなの食べられるかなあって……」

「……また体重増えたって嘆いても知らないよ」

「ちゃんと私の分も分けるから大丈夫だってば！」

「そんな楽しそうな会話を二人はしてる。同性だから同じバンドだから、そんなのはあれどきつと底の底まで仲がいいのだなというのは簡単にわからされて。」

「……どうかしたのかしら？」

「……お前は良かったのか？」

「することがないまま過ぎすよりはいいでしょう?」

ああほんと、気にしてるのが馬鹿みたいだ。やっぱりコイツなんか、そう思つて顔を見れば、そう思ひ切れることは出来なかつた。

「ふゝ、大満足だよ」

「ひまり食べ過ぎ、財布やばいんじゃないの?」

「うつ……そうだ、お二人は何で一緒にいたんですか?」

「湊が駅前で会おうつて言つてきたからね」

頼んだ物を食べ終わり今は飲み物を飲んで休憩中。こういったものは普段食べないが悪くはなかつたが、また来たいというほどではない。

蘭ちゃんにバレたくないのか今回は砂糖まみれの珈琲ではなく紅茶を飲んでる湊はなんだか満足気、やはり女子というのは皆こういったものが好きなのだろうか。蘭ちゃんが頼んだチョコプレートを勧められた時は少し嫌そうな顔をしていたが。

「え、それじゃ何か予定があつたんじゃないんですか?」

「予定は本当になかつたから安心してちょうだい」

「それじゃあなんで新庄さんに会おうなんて言つたんですか?」

「理由はないわ」

それは俺の知りたかったこと、でも今回のように理由なんてないと言われたこと。でも蘭ちゃんはその場で諦めずに湊を追及する、なにもないなんて事はないんじゃないですか、と。

そう言われると湊は顎に手を当てて考えるそぶりを見せる。その姿は何か理由となるものを探しているというよりかは何と言ったらいいかと迷っている風で。

「……会いたいから会う、何かあるとするならばそれね」

「だから、その会いたい理由を聞いてるんです」

「ちよつと蘭、友希那さん困っちゃってるじゃん」

湊は遂に困り顔になり再度考えるようにして、そうねと呟いた後、なんでもないかのように言った。

「好きだから、それだけよ」

その言葉を聞いた瞬間俺は固まった。珈琲に伸ばしていた手は勿論、突拍子すぎて理解できないと思考すらも。

もう一度頭の中で同じ言葉を流してみても、そこでやつと恥ずかしさが湧き上がってくる。

一体どういうことだと、いや、既に好きと言われているのだがそれにしても突然すぎる。恥ずかしげもなく、事実何かおかしなことを言ってしまったのかとも言いたげに

首を傾げられる。

「おい、どういうことだよ」

「言葉のままよ」

「だとしてもだろ、それにその事を他の人の前で……」

「隠すものでもないでしょ？」

「隠すもんだよ、恥ずかしいとかそういうのはねえのか」

駄目だ、顔が赤くなってきたいて思考もまともにできないでいる。知っていた、でも知っているのと言われるのでは全く違う。

百聞は一見に如かずなんていうけれど、二度目でも一度目と同じかそれ以上のもので。

意識しているのは俺だけ、そんな風に思ってたさえたのに蓋を開けてみればこれだ。恥ずかしい事を言ってきたのは向こうな癖に恥ずかしかつてるのはむしろ俺で。

「恥ずかしかるものでもないでしょう、苦手なことだったり、知られたくないものでもないのだから」

「す、すいません！　つまりお二人は……付き合ってたっしやるんですか？」

「それは……」

「蒼音の返事待ちよ」

「え、じゃあここでまさかの……!?!」

全員の視線が俺の方に向いてくる。冷静になりきれない思考、この期待されているかのような視線、それでも俺は答えることが出来なくて。

「まあ、今すぐでなくともいいわ」

「……お前はそれでいいのか?」

「決めるのはあなたよ、私がどうこう言えたものではないわ」

その後はひまりちゃんからマシガンのような質問攻めを受ける。それはもしかしたらスイーツ食べてる時より元気そうに思えるほど怒涛のもので。

そんなひまりちゃんを蘭ちゃんが抑えて質問が止んだところで湊は俺の方を向いてくる。

「そういえば蒼音、あなたは どうして私だけ名字呼びなのかしら?」

「……お前は名字の印象が強かったからな、名前を知った時父親のつて言ってただろ」
「なるほどね。それで、いつまでそれを続けるつもりなのかしら」

言葉にはされていないが言いたいことはハッキリとわかる。今更変えようとなるとやはり恥ずかしくて、でも湊がこちらをジッと見ているせいで誤魔化すということは出来なくて。

「……わかった、これからは友希那って呼ばばいいんだろ?」

「そうね……そうしてくれると嬉しいわ」

ああ、ほんと調子が狂う。そうしてくれるれば嬉しいなんて、なんでもないかの様に言うべきことでもない、コイツらしくない。

ふと小さく、見落としてしまうくらい小さく湊は……友希那は笑った。それは今の俺にとつてあまりに刺激的な物で。

「そういえばこの前あなたに話した曲の事なのけど……」

友希那はなんでもないかのように話をしてくる。顔を上げてみれば先程の表情が？かのような真剣そうな表情を。

いつも通り、見慣れたそれと先程の笑みとのギャップに、いつまでも顔が赤くなっていた。

距離を縮め

約束の日の当日というのにも落ち着かない。

朝起きて今日の天気確かめる。雨だと言われ少し悲しくなつて、星座占いなんて普段は気にならないものですらその結果に喜んだ。

ラッキーアイテムだという青のハンカチを部屋から探し当て、気になるあの人の距離が縮まるかもなんてものを変に意識してしまつて。

「燐子、今日の夜でしょ？」

「は、はい」

「頑張つてね、応援してるよ」

練習も終わり後は時間が過ぎるのを待つのみ。今井さんからの励まし言葉を受け取りスタジオを出ようとしたところで友希那さんの方に目が行つた。

同じ人が好き、それを知つて、でもどうすることもなく何か起きるわけでもなかった。

いつも通り、前と何も変わらない。互いに好きで、だからどうしたというかのように関わりが増えもせず、避けもしていない。

「友希那く、今日のお祭り一緒に行かない？」

「お祭り……そういえばそんなものもあつたわね」

「折角だし行こうよ。因みにもう一人いるんだけどいいよね？」

「もう一人……蒼音かしら？」

友希那さんの口から出た名は聞き間違えるはずもない彼のものです、そしてその名を出すということは……やはり蒼音さんの事が好きだということ。わかつていても心臓がドキリと鳴ってしまふ。

でも彼は今日私と祭りに行くからそれはありえない、でももしかしたら、なんて思うと怖くなってきてしまふ。

私なんかより二人の方に、そう考えたくないことばかり考えて。

「残念だけど蒼音は……別の人と行くらしくてさ、アタシ達のところには日菜がいるよ」

「そう、今日は予定もないし行ってもいいかもしれないわね」

「お、じゃあ帰つたらまた連絡するね」

言葉を濁すかのように今井さんがこつちを見て言うのと、それに気づいてか友希那さんもこちらを見てくる。

まるで射貫かれるような視線は今井さんがスタジオを出ると更に強くなり、彼女はこちらに近づいてきた。

「……………なん……………でしようか？」

「今日蒼音とお祭りに行くのは……………あなたなのかしら？」

何だというのだ、ズルいとか羨ましいとかそういうことを思っているのだろうか。そう思ってくれているのなら……………ちよつとだけ嬉しい。

それはただの嫉妬。私が彼女に抱いている物を彼女もまた抱いているならばちよつとだけ。頷いてと返せば考え込むかのような間の後、彼女は更に問いかけてきた。

「……………もしかして燐子、あなたも彼の事が好きなのかしら？」

「……………だったら……………どうなんですか？」

静寂が私たちの間に漂う。氷川さんは既に行ってしまった、あこちゃんも今井さんについて外に出た。二人きり、会話は全くないけど離れることも出来ない。

「……………蒼音が告白に答えてくれないのもそういうことなのかしら？」

それにも何も返せない、でも目をそらさないで見つめ合う。ああ、強い人だ、相変わらず。私が何と返そうと、なんと思おうと彼女は何も変えないだろう、好きだということ、その表し方、私に対して思うことも。

いつまでもこうしているわけにはいかなないのでスタジオを出れば雨の音が小さく聞こえ始める。

「友希那さんは……………恥ずかしくないんですか？」

「何のこと？」

「誰かを好きって……他人に知られたり、本人に言うこと……です」

「別に恥ずかしいことじゃないと思ってるから」

この前蒼音さんから聞いた話によれば、友希那さんは上原さんと美竹さんのいる前で告白の答えを聞こうとしたらしい。

そのせいで二人にはバレてしまったというのに友希那さんは少しの恥じらいもなかったようで。

隠しているのか、それとも本当に何とも思っていないのか。私だったら信じられない、一度はしたが半場自暴自棄のようなものだ。

もし彼女のように恥ずかしがらずにいられるならきつと彼との距離も縮められる。そう思うからどんな風なのかは知りたかった。

聞いてみた結果としては価値観が違った、それなら仕方がない。猫が好きな人もいれば犬が好きな人もいる。勿論逆にどちらか嫌いな人も。

それと一緒に、絶対に変えられないところだからこうして恥ずかしがり屋にいるのも仕方がない。

降り注ぐ雨の音を聞きながらそう思ってしまったところを友希那さんでも、と付け足してきた。

「もし恥ずかしかったとしても、関係ないわね」

「……………え？」

「恥ずかしいからといって言わなかったり表さなかったら、伝わらないでしょ？」

ああ、これは仕方ないことだ。価値観の問題なのだから、考え方の根っこである話なのだから。

そもそも、私だって恥ずかしくても何度かそれを乗り越えた、小さく小さく進んできた。

なんて、どれだけ都合のいい言い訳をしても何が正しいのか、そうではいけないとはつきりとわかる。

友希那さんは、きっと私より一步を大きく進めてしまう。当然だ、かけ声で始まったわけでも、仲良く一緒にゆつくりというものではないのだから。だから私は彼女より大きく進まなければならない。

わかつている、そう、わかつているのに…………

「りんりん、友希那さんと何話してたの？」

「ううん、別に……………なんでもないよ」

……………遠慮をしているわけじゃない。足を引っ張るこの感情を無視できるならば私だって。

雨の音が少し、強くなった。

人混みは苦手だ。祭りだって、ゲームのイベントなら違うけれど正直好きではない。つまらないわけでもない、ただ人が多すぎるといって一点に尽きる。

雨が降っている。昼と比べれば弱々しくてあつてないようなそれだけど、そんな程度でも少し気分を下げさせるには充分で。

「待たせて……しまいましたか？」

「いえ、そんなです」

音のしない傘を指しながら約束の場所に向かえば既に蒼音さんが待っていて、この程度ならとも思っているのか彼は傘を指していない。

彼だけではない。傘を指しているのは寧ろ少数派、周りを見てみれば指しているのは私を含めて数人ほどこしか見当たらない。

「それじゃあ行きましようか」

「……はい」

どこに、そんなもの決まってない。存在しないから悩まさられるのではなく、たくさんあるから悩まされる。どこにも寄らず、ただ隣を歩き続ける。

すれ違う男女の二人組は皆手を繋いでいた。ああ羨ましいとは思うけど、どうにもそ

うすることは出来なくて。

傘が邪魔だから、突然するのは失礼になるんじゃないか。言い訳はいくつもあるのだけれど、結局はただ、恥ずかしいだけ。

「そこのお二人さん、一つどうだい？」

そんな中突然声をかけられたので、蒼音さんと顔を見合わせた後一つ買う。これで両手も塞がった、食べているから話も出来なくなった。

祭りというからにはこういうこともあるし、楽しむというのだから仕方がない。別に楽しくないわけじゃない、嬉しくないわけじゃない。でも、少しだけ寂しくて……

「そういえば友希那から聞きましたけど、来週ライブやるんですよね？」

「え……あ、はい」

「行けるかわかんないですけど行けたら行くんで、頑張ってください」

「……………」

そんな雰囲気を感じてくれてか、私が食べ終えたのを確認してからそう話しかけられる。いつの間にか雨も止んでいたのだから少しだけ距離が寄りちやつて。

ああ、それは嬉しい。ほんのちょびつとでも近づいたこと、気遣いをされたのも偽りなく嬉しいのだけれど……でもやつぱり、引つかかるものがないわけではない。

変わってる、友希那さんの呼び方が。それだけの事が重く、深く私に突き刺さる。

呼び方がなんだ、名前呼びなら私だつてされている。そう単純に思えたのならよかつたのだけれど、めんどくさいことにそう思うことは出来ないでいた。

何故、どうして、なんて考えてもどうしようもないのに考えてしまう。

名字呼びから名前呼びに、本当にそんな些細なことが頭の中を埋め尽くす。

仲が良くなった、明確に距離は縮まっているはず。じゃあ、私は？

「……どうかしましたか？」

ずっと変わらない、変えていない。好きと言われるほどではあるのだから完全にそうとは言わないけど、本当に小さなもので誤差ばかり。

その一方で友希那さんは直線的に近寄って行ってる。恥ずかしいとか怖いとか一切なしに止まらないまま進んでいる。それは、私には簡単に出来ないこと。

彼との関わりの回数は私の方がずっと多い、なのにその進み方は私と並んで、もしかしたらその先を行っているかもしれない。

今日言われた言葉が蘇る。想いを言わなければ表さなければ伝えられない。そんなの当然で、わかっていても出来なくて。

今日もそうだ、ほんの少しでも好きだと言ってないし、そう察させるような事はしてない。そんなでは距離を縮めるなんてできるはずもない。

恥ずかしいという感情が邪魔をしてくる。自分から提案出来ない、手を繋ぎませんか、たつたそれだけの事を。

「あつ……」

ハンカチが落ちた、ポケットから落ちたそれは今日のラッキーアイテムのはずで。雨が降っていた後出し地面はびちよぬれ、ああもう散々だ。

それを拾おうと服が地面につかないようにしゃがんで手を伸ばすと何かに当たった。パツと手を引く、それは……蒼音さんの手だったから。

「ご、ごめんなさい……」

「い、いえ、ごちらくそ……」

彼が拾ったそれを渡されて、私はそれを強く握った。想いでなら絶対に負けてない、その自負がある。

手が当たった時私はなんと思った、嬉しかった、後から恥ずかしさに襲われたけれどそれがどうでもよくなるほどに。

「あ、あの……」

「なんですか?」

距離を縮めるとは何なのか? 名前呼びならそうなのか敬語を捨てればそうなのか、隣を歩けば、一緒にお祭りにいけばそうなのか。

そんな複雑なことではない。それらも決して間違っていないが、もつと単純なものがある。それは……

「手を……繋いでもらっても……いいです……か？」

そう小さく言つて手を動かすが蒼音さんからは何も返つてこない、言葉も、行動も。もしかして私の声は聞こえない程に小さなものだったか、それとも嫌なのか。

今なら顔から火が出てしまいそう、熱くてまともに考えられない。俯いたまま顔は上げられないが、彼の足がそこにあることから隣から移動はしていないのだとわかる。

どれだけ恥ずかしくても手は下げない、もうとは言わない、今だけは下がらない。

心臓が鳴り続ける。周りの音全て飲み込む程鼓動を刻み、一体何秒立ったのかすらわからない程の時間間隔の中で、指に何か優しく触れた。

「……ごめんさい、今は、これで」

指と指、掌には及ばない浅さでだけど、確かに手が繋がれた。

先程とは比べ物にならない勢いで心臓が鳴る、なんだかクラクラさえてきてしまった。ああでも、恥ずかしいとかそういうもの全部飛び越して、どこか遠くに行つてしまつて。

「友希那さんとは……こういう事、したこと……あるんですか？」

「……一回だけ」

でもあれはこんな風じゃなくて、と付け加えられる。？を言われるとは思っていない、それでも心の奥底に、小さく黒いものができるのは確か。

恥ずかしいと感じるよりも強いそれは、指でだけ繋いでいたものを、確かに手で繋がせてくれた。

真つ赤に染まつた顔が見える。ああ、彼もこんな顔をするんだ、私はどれくらいだろう。恥ずかしさによる最後の抵抗か、顔を逸らした。

友希那さんは彼のこんな姿を知っているのだろうか。私達は手を繋いだまま、道を歩き続けた。

射的、金魚すくい、型抜き。色々遊んでみたけれどどれもいまいち覚えていない。

家に帰りベッドに寝転ぶと今更になってため込まれていた恥ずかしさが爆発して寝転がり回る。

ああなんてことを、そう思うも遅くただただ自分のしたことが自分に降りかかってくる。

死んでしまいたいくらいの恥ずかしさに襲われながらも、出来るかどうかとは別で、もう絶対にしないとは思われない。

楽しい、ではなく面白いでもない。気持ちいいというわけでもない言い表しようのな

い何か、それは……とても心地よいもので。

「蒼音さんは……」

迷惑じゃなかったか、彼は楽しめたのか。今日繋いだ手を翳しているとそんな事ばかり考えてしまう。手を洗うの勿体ないな、なんて思ってしまうくらいには今回の事は私には大きなこと。

それもそう、次もそうなるとは、できるとは限らない。だから一回一回を大切にしていきたい。次も、その次も、今日みたいになるとは限らない。

今日だけで一体どれだけの距離を縮められただろうか。彼からしたらほんのちよつとかもしれなくても、私からすればそれこそ星の距離程のもの。

二番目でもいい、思われているのならそれでいい、なんて思えるほどこの想いは小さくない。

彼からあなたが一番好きだと言われたくて、そうなりたくて。

未来を願って今を求めて。あなたが好き、言っただその言葉をそのまま返される日を、私はいつまでも待ち続ける。

選ぶということ

異性と、それも好きな人と手を繋いだ。

不思議な感覚だ。時間が経って尚それは、手を洗っていないわけではないのにハッキリと残っている。

熱を、感触を、寸分の狂いなく今ここにあると錯覚しかねない程に覚えていて、でも何も手では触れていないという事実が物寂しさを与えてくる。

異性と手を繋いだ、今までで一番なかったかと言われたら勿論そんな筈がない。じゃあ、好きな人というのは？

……これも初めて、なのかもしれない。

友希那と手を繋いだ事がある、それは事実だ。それはだいぶ前、更にアイツの事を好きでなかった時。

だとしても、そうしたという事実と記憶は残っていて……

「あの時は……どうだったんだっけ」

そもそもどっちの手でしたのかすら覚えていない。ただ恥ずかしい、そうは思っていない。ただ恥ずかしい、そうは思っていない。ただ恥ずかしい、そうは思っていない。ただ恥ずかしい、そうは思っていない。

帰った後はこんなにも悶々としたか、そのことについてこんなにも考えたか。燐子さんと繋いだのと反対の方の手を見て、ため息をついてからソファーに倒れ込んだ。

「……気にしてんの、俺だけなんかな」

燐子さんもこんな風に考えてしまっているのか、友希那は……そもそも覚えているのか。

きつと、好きというものはこういうものなのだろう。気になって、気になって気になつて仕方がない。それはなんでも変わらない。

「好き……か」

それで言うなら今の俺にとってピアノは何なのだろう。好き、そう言うことは簡単だ。嘘ではなく事実なのだから。

じゃあ心の底からそうかと言われたらどうだろう。一番かと聞かれたら……：……どうなのだろう。

引つかからないものが何もないかと言われたらそれは違う。でもそれは関係ないと思えているのだし、ピアノは好きだって心の底からそう言える。

でも俺は、全て投げ出してピアノだけを取る事ができるかと言われたらそんなことはない。何もかもにおいて一番かと断言できるかと言われたら、言うことは出来なくて。

そもそも一番以外捨てるというのがおかしいものだ。そんなストイックにいたらお

かしくなってしまうし、それについて誰も怒ることはない。

でも好きな人というのはそうもいかない。俺は一番を選ぶ、選ばないといけない。

「……………」

二人のこと、どちらも好きだ。好きなどころは日に日に増えて、頭の中はピアノ以上に二人が占めている。

何もかもが違う、そんな二人を好きになった。二人の共通点なんか、それこそ音楽をやっていることくらい。

「…………俺からも、なんかしないとなあ」

何処かに誘って、手を繋ぐにも俺から伸ばして。出来る事したい事全部やりきってから決めたい。そうせずに決めたくない。

中途半端で、なんとなく後悔なんかしたらそれはなによりも酷いことで最低で、それだけは絶対に嫌だ。踏みにじるようなことはしたくない。

「…………寝るか」

二人のうちどちらかを選べたとして、もう一人はどう思うのだろうか。

納得するのか、怒ってしまうか、それならいい。じゃあ、悲しんでしまうのか。俺の選択はその可能性を含んでいるというのが怖くて、恐ろしい。

もしかしたら母親も最初はこんな風に考えていたのかもしれない。目を閉じて、ずっ

とそんな事を考えていた。

長期休暇というのは常に望みに望んでいるもので、その中でも一番長い夏休みというのは特別だ。

友達と遊んだり家族と何処かに行ったり、楽しみになるような事が大量なのだが、それでも時間はまだまだ余る。暇かと聞かれればそうでもないと答えるが、忙しいかとか聞かれれば暇と答える。

世間ではそうなのだろうが俺の夏休みは今のところ暇一色だ。積極的に遊ぶ友人はいないし家族とのあれこれもない。予定というものがあるとするならばそれこそバイトくらい。

「……はあ」

だからこそ俺には理由がない。忙しいからと言うことが出来ないから言い訳が出来ない。二人のこと、誰にではなく自分に対して。

気持ちに嘘はない、でも行動に表せるのかどうかは全くの別物。恥ずかしいと強く思うわけではなく、何をすればとわからないからでもない。自分でもどうしてそうできないのか、全く分からない。

「ため息なんかついちゃって、幸せが逃げちゃうぞ?」

「……嫌なもん出してらって思ってるからいいんだよ」

「偏屈だなく。なにか悩みでもあるの？」

「お前は関係ないさ」

信号を待っている間、隣にやってきたリサに話しかけられる。信号が変わって歩き始めても隣を付いてきて、渡り終えたところで前に出られ道を塞がれる。

「アタシはつてことは、友希那か燐子のこと？」

「だったらなんだよ」

「別に、気になったただだからさ」

その後近くの日陰を指さされ、どうと首を傾げてくる。リサは話したりないらしいし、俺も暇なので大丈夫だと伝えてそこに移動した。

「で、燐子とはどうだったの？」

「……………」

手を繋いだ、なんて言えるはずがない。同じバンドなのだし既に彼女から聞いている可能性もあるがそれでも。答えられず目線を外せば追及してこない。

流石に悪いかとリサの方をちらりと見れば、ニヤニヤと、なんだか馬鹿にされていそうなほどの顔を向けられていて。

「……………お前、知ってるだろ」

「なんのことかな？」

「顔に出さない努力くらいしろ」

「蒼音だつて、全然隠せてないよ」

何を馬鹿など思えどカメラで撮っていたわけではないし確かめる方法などない。試しに顔を軽く触つてみたところでわかるはずもなく。

恥ずかしさを感じながら文句の一つでも言つてやろうかと思つていたところ、一つの声が割り込んできた。

「あなた達、何してるの？」

驚きもあれ、今を表す丁度いい言葉もないから黙り込む。リサの方を見ると目が合つて、察してくれたのか彼女が友希那に説明してくれた。

「偶々あつたからさ、特に何をしてたつてわけじゃないよ」

そう、と形だけの返事をして友希那は俺の隣に来る。聴こえてくるのは目の前を通り過ぎる人の足音と車の音ばかり、隣からはなんの話も振られてこない。

燐子さんと繋いだ手、その反対の方に友希那がいる。手を繋がないか、なんて言えるはずもない。恥ずかしいからというのもあるが、ただ道行く人を眺めている奴にそういうのが癪だから。

何を思つてそうしているのかはわからない。暇なのかそれとも観察でもしているの

か、どうであれこいつは俺の事を視界の隅にすら入れてないということが、より強く友希那の事を意識させてくる。

「お前」

「貴方は」

そんなだから声をかけたけれど、それは突然こちらを向いてきた友希那の発したものが重なった。

予想だにしなかったことで言葉を飲み込む。それは彼女も同じな様だったが、俺が続きを話さないからか一呼吸して、言った。

「貴方が私の告白に答えない理由……燐子の事を好きだから、で合ってるかしら？」

騒々しい程に思っていた周りの音が一気に遠くのものになった。知っていたのか、だとするならとりサの方を見るが首を横に振られる。

ならば……勘だろうか。ああでも、友希那の顔はそんな風ではなく、確かな事実を確認するかのようなもので。

そうだと単純に返す事も、だからどうしたなんて言うことは有り得ない。どのようになすべきか考えていると、なんとも陽気な音楽が流れ始めた。

その音源はリサからで電話がきたとのこと。数分程してそれを終わらせたリサは俺たちの方を見た。

「ひまりから会おつて言われたんだけど……二人はどうする?」

「あ……俺はパス」

「なら私もそうさせてもらおうわ」

そう言つてリサはこの場を去つて二人きり。気まづさに戸惑いながらも友希那の方を見ると、彼女はハッキリと、目をそらさずにただこちらを見ている。

嘘は、つけない。どうせ通用しなさそうだし、そうしたくない。先程の問いに対しそうだと告げると彼女は目を瞑り、暫く考えるようにして再度問いかけてくる。

「貴方は燐子の事、どう思つてるの?」

「好き……じゃ足りないか?」

「いえ……それでいいわ」

好き、簡単で、それでいてどこまでも真理である答え。何がと聞かれたらどれだけ出るかは予想もつかない、どれくらいかと言われたら表し方がわからない。

でも求められているのはきつとこんな単純なものではない、そう思つていたのに彼女は何やら考え込んでいる様子。声をかければそれで大丈夫よと言つてきた。

その後また無言の空間が出来上がる。引つかかるものでもあるのか、友希那は手を口元にあて何かを考えている様子。

流石にこのまま時間がただ悪戯に過ぎていくのは望むところではない。それにいつま

でもこうして立っているのも疲れてきた、喉も乾いてきたしどこかによりたい気分だ。それら全て先程言おうとしたことと丁度いい。

「お前、この後暇か？」

「そうだけど、それが？」

「なら……カフェでも行かないか？」

「確かに立ちっぱなしでいるのも疲れるし、そうしましょう」

隣り合って歩き出す、手は……繋いでいない。そうしようなんて言い出せるはずもなく、すれ違うカップルらしき人がやってるそれを見て手が少し寂しくなり握り込む。

こいつはそうしようと言えばしてくれるだろう。恥ずかしげなく理由もわからず、ただそうする。正反対だ、彼女達は本当に。

「なあ……お前は隣子さんのことどう思ってるんだ？」

「感謝しているわ。同じバンドとしては勿論、衣装とかも全部やってもらってるから大きく息を吐く。正直安心した、そう思えるなら、それだけしか思わないのなら。」

もし俺が思うような事を抱くのならば……いや、それは自意識過剰というやつか。それに、そういうのはコイツとは縁遠そうだ。

好きと言った。その言葉、決して軽んじていない。だけど選ばなくてはならないという事実は余りにも大きくて、逃げようにも逃げ道はないし間違えてもコンティニューな

ど存在しない。

ふと隣を見るとどうかしたのかしら？
と聞かれたので、なんでもないと返して
いた。

抱いたそれは

燐子の事をどう思っているのか。感謝していると返したその質問が未だに頭の中に残っている。

間違っていると思うわけではない。足りない、何かが。それだけでないとわかって、でもそれが何かわからない。

「どうした？」

「……なんでもないわ」

一体なんだ、何だというのだ。どうでもいいと割り切れない、思考がどんどん染まらされていく。

今度のライブの事を色々話したいと思っていたのにそれを切り出せず、蒼音と会話をしているのに少し聞き流してしまっている。

ふと近くにあった鏡に映った自分の姿を見る。ああ、わからない、なんて思っているのかわからない。

自分のこと、だけど自分じゃわからない、断片的にわかってきても本体が見えてこない。

「あそこ、見てみろよ」

そう指さされた窓の外を見てみてば子猫が数匹、彼は私の事を忘れてしまったかのようにならぬを見続ける。

いつもなら私もそうなのだろう、でも今はそうならない。窓の外を見続ける彼の横顔を見つと見続けていると、不思議な感情を抱かされる。

不思議なもの、でもそれは好きだという時ほどの暖かさはなくて、だからといって冷たいものではない。

きつとこれは何度も感じたことがある、日常的でないとしても珍しいものではない。でも、どうしてそう思うのかわからない。

——羨ましい、なんて

何故そう思ったのか、そしてその感情は、何故だか隣子に対して抱いたものに似ている気がした。

羨ましいと猫に対し抱いた、そしてそれは隣子にも似た者を。それらの共通点とはなんなのか、考えたところでも出てこない。

ただ蒼音の横顔を見ると、胸が締め付けられるかのような気がして……

「……なにか付いてるのか?」

「……いえ、気のせいだったみたい」

軽く顔を触りながら言ってきたのでそう返す。その後は子猫の方を二人で見ることにして、それはその子達が何処かに行くまで続いた。

その途中、何度か彼の方を見てしまった。何も変わらないのに、どうしてそうするのかわからないままその日は別れて。

「……やっぱり、なんでもないわね」

一人で猫のところに向かい頭を撫でるが、この子達が可愛いと思う以外に何も無い。羨ましいなんてやっぱり勘違いだったのか、でもあれはそれ以外に何と表すのか私にはわからない。

もしかして好きとはこういうもの、だとするならば燐子に対してこう思うことはおかしくて。

燐子も私に対して似たような物を抱いているのだろうか、それとも私だけなのか。明日燐子に聞こうかしらと考えながら猫の頭を撫で続け、昨日より暑いなど夏を感じていた。

「あれ、湊さんじゃないですか」

「お、ちゃんと働いてるね」

「もちのろんですよ、なんてったってモカちゃんですから」

練習帰り、リサが飲み物を買いたいと言うので一緒にコンビニに寄るとそこには青葉さんが。

他のお客さんも見当たらないということでもリサは話し込んでいたので、折角だし私も飲み物を買うことにする。

私の好きな甘い珈琲は見当たらない、お茶でも買おうと思ったけれど私はいつもなら買わないようなブラックの珈琲を手にとっていた。

こんなもの苦くて飲めたものじゃない。でもそれは私のもので、例えば蒼音なんかはいつもこれで飲んでいる。

彼は一体どんな風にかこれを口にかけているのだろう。美味しいと持っているのか、それとも大人ぶっているだけなのか。

「あれ、どうしたのそれ」

「何を買うのかなんて私の自由でしょう?」

「そうだけどさく……飲めるの?」

いつの間にか隣にいてそんな事を言ってくるリサを無視してレジに向かう。

会計を済ませ、しかし外は暑くて出たくない。リサが戻ってくるまで待とうと思ったところで青葉さんから話しかけられる。

「ひーちゃんから聞いたんですけど、蒼音さんの事が好きってホントなんですか?」

「ええ、そうよ」

「へえ、最近お二人はどんな感じなんですか？」

「どんな？」

「ここが気になつてるとか、デートしたとか」

気になつている、とするならばやはりそう。気になつて、でもそれだけ。どんな風にもない、連絡先がふと目に入れば目が行つてしまふし、彼は今何をしてるのかとか、そんなもの。

デート、というのは一緒にカフェに行くとかもそれに含まれるのだろうか。それともそんな程度じゃ駄目で、燐子みたいに祭りとかに行かないと……

ぞわりと背中を何かが駆け巡つたかのような気がした。ああ、これだ、この感情だ。羨ましいというものにとても似てる、でも圧倒的に冷たい。黒く、底冷えしてしまいうな。

なんだろう、これは。私は何に対してこの感情を抱いているのだろうか。一体どうして、私はこんな風な物を。

青葉さんを見るとこちらの言葉を待つているようで何も発してこない。質問の途中なのだから当たり前か、それならいつそ、聞き返してみるのもいいかもしれない。

「一つ聞きたいのだけれど、誰かと誰かの関係に羨ましいと思うのって、おかしいかしら

？」

「つまり、今そういう感じってことですか？」

「まあ、そういうことね」

青葉さんは数秒考えるようにして、ニヤニヤと笑みを浮かべながら答えた。

「おかしくないと思いますよ、それだけ好きってことですし」

「……青葉さんもそういう経験が？」

「さあ、それは内緒ですね」

そんな会話をしているときリサが戻ってくる。リサの会計を待ち、青葉さんのありがとうごさいましたというのを背に受けながら外に出た。

外は暑い、特に冷房の効いた店内から出たのもあり余計にだ。買った物を飲もうと袋から取り出したものは当然ブラック珈琲で。

「……苦い」

「も、だから言ったのに」

蒼音の事を考えていたらつい買ってしまったそれ、手元にはこれしかない仕方ないと一口だけ口にするがやはり私には合わない。

ほら、とお茶を渡されるが特段喉が渴いているわけではないので別にいいと断る。珈琲の蓋を閉じ、スマホで一つ連絡を送り、それが返ってきたので歩き始める。

「友希那く、そつちは家と反対だよ？」

「私は用があるの」

「そんなの言つてなかつたじゃん」

別に帰つてもいいと言つたがアタシも暇だからと答えられる。まあリサがいるからどうこうというものではないし放つておくことにした。

目的の場所、蒼音の家の前で足を止め、インターホンを鳴らし彼が出てくるのを待つ。

これは……二回目か。あの時と一緒に彼が家にいるかはわからない、でもあの時と違つて彼の連絡先を知っている。だから今何処にいるかと聞き、その答えがここだった。

「二人してなんの用だ？」

「聞きたいことがあつたから」

「アタシは友希那についてきただけだから気にしないで」

そう答えると彼は私の事をジツと見てくる。それだけか？ と聞いてきたのでそうだと返すため息をつかれる。

「……お前は聞きっぱなしにするな、てかそれだけならわざわざ来ることもなかつただろ」

「駄目だったかしら?」

「……そういうわけじゃねえ」

スマホを見てみれば確かに蒼音から何か用かと返信が来ていた。確かに連絡だけで済むと言われてみればそうだが、別に彼も駄目だと言っていないし問題ない。

それに……それでは少し、物足りない。後一つ、飲めなかつた珈琲を渡そうと思ったというのもあるが。

「貴方、明日って暇かしら?」

「明日は予定ありだ」

「なら明後日は?」

「ちよつと友希那く、明後日は一日Roseliaの練習でしょ?」

リサから言われそういえばそうだととなり、それならば明々後日はどうかと聞けば了承が返ってくる。

その日はRoseliaの練習もない、予定も決められたし帰ろうかと思つたところ蒼音から一つ質問をされた。

「その日何するんだ?」

「何を?」

「そんな聞き方してくるんだからしたい事は決まつてるだろ?」

明々後日、何をするか。そんなもの何も決めていない、でも二人の目がそうは答えさせてくれない。特にリサの興味津々と嫌でも感じさせるそれが。

さて何をするか、蒼音と何か出来ればとは思っていたが……なんと言ったものか。暫く考えて、そうだからだと私は口を開いた。

「デート、しましょう」

「……は？」

ピタリと二人が固まったのがよくわかる。何かおかしなことを言ってしまっただろうか？ そんな事を思っている私に対し、言葉の雨が降り注いできた。

「それにしても、友希那があんなこと言うなんて驚いたよ」

「リサには関係ないでしょ」

「まあ、そうだけどき。何か思うことでもあったの？」

「……………」

きっと青葉さんからその言葉を聞いてしまったから出てしまった、なんて単純なものではない。

羨ましいと思った、彼から何かと思われる何かに対して。そしてもう一步踏み込んで、ズルいと、多分そう思ってしまった。

何に、燐子に。彼とそういうようなものをしたことがあり、なのに私はしたことがない。抱いている感情は同じなのに、そんなの不公平で。

なんで彼女だけ、そう思い始めると止まらなくて、だからこうして実行した。きっと私は彼女に対し妬ましい、なんて思ってしまったのだと思う。

こんな感情、子どもの頃玩具の取り合いで負けてしまった時以来だろうか。子どもっぽいでも構わない、これは紛れもない、私の感情だから。

「……リサ」

「ん、どうしたの?」

「デートって、何をしたらいいのかしら?」

リサが何も無いところで躓いた。何かおかしな事を聞いてしまったのだろうか?

渡し合い

「……………」

シヨツピングモールの丸椅子に座り考え込む。昨日のこと、デートしましょうと言われたあれ。

友希那はいつもいきなりすぎる。突然連絡をよこしてきたかと思えばあんなこと、一体何の意図があるのだろう。

……いや、意図なんてわかりきっている。好きだから、あいつはそう答えるだろう。「……………まだ早いか」

なんの用もなくシヨツピングモールに来たなんてことは当然ない。待ち合わせ、その相手は燐子さんで、それまではだいぶ時間がある。

デート、とはどのようなものなのだろう。意味はわかる、問題はどこからそうなるのか。

気にかけてる相手と一緒に出かけるのがそうだとするならばそれは一度ではない。

なら、今日のはどうなるのだろう。デートと……言うしかない。そう考えてしまったせいもいつも以上に緊張してる、昨日もろくに寝れなかった。

「もしかして……俺だけか？」

友希那は昨日ああ言ってきたのだし、そんな風に意識はしていなかったかもしれない。でも、隣子さんは？

俺は……正直言つてよくわからない。意識をしていなかったわけでもないし、緊張なんてありえないくらいしていた。ああでも、共通の趣味があつたせいかな男女の関係だと思ひ切れることはできていなくて。

「また……待たせちゃい……ましたか？」

「いえ。さつき来たばかりです」

「……………」

なんだか疑っているようだが今回ばかりは本当の事なのでどうしようもない。まあそう言つても信じてくれないだろうし、悪い事ではないのだし別にいいだろう。

「どこか行きたいところ……あつたりしますか？」

「い、いえ……私は別に……」

「それならアイスでも食べに行きませんか？ 外暑かつたでしょうし」

「そう……ですね」

今回のデートとも言うべきこれは俺が誘つた、だからといって一から百まで決めてはいない。本人に行きたいところでもあればそれだと思つていたがそう上手くいかないよ

うで。

それならそれで考えてはいたがやはり不安だ。上手くいくのか、楽しんでもらえるか。

なんて考えていたけれど一瞬にして何かがそれを覆い隠す。その正体は右手に当たる何かによるもので。

「ひ……人が多くて……はぐれちゃい……そうなので」

それだけ言ってこちらを見上げるその姿にあれこれ全部吹き飛んで、まさかと返して歩き始める。

多分誰も俺らのことなんて見ていない、だとしても恥ずかしいと思うのは仕方ないことで。顔は赤いだろう、熱も出始めたかもしれない。

彼女はどうか、なんて確認しようとするれば目が合ってしまった互いに逸らす。話すことなく、顔を合わせることもない。でも、手を離すことはなかった。

「燐子さんはどれにする予定ですか？」

「そう……ですわ……」

燐子さんは真剣そうにメニューを見る。流石に並んでいる間ともなれば人の多さもあり、通り過ぎていくわけでもないので恥ずかしくて手は離してしまった。

自分から誘っておいてなんだが俺的にはどれでもいい。無難にすすめとあるものを頼もうかと考えていたところ声をかけられて。

「蒼音さんは……何にするんですか？」

「そうですね……すすめつてありますしあれにしようかと」

「なら私も……」

なんて会話をしていたら順番が回ってきていた。隣子さんは……俺と同じでいいのだろうか？ 取り敢えず俺の分は先に頼んで視線を向ける。

先程の言葉的にそうであろうし、二つ目を頼もうとしたところ彼女は指をさして、これでお願いますと店員に言った。

「払うんで大丈夫ですよ」

「い、いえ……これくらい自分で……」

「これくらいですし、誘ったのも俺なので」

半ば強引に金を支払いアイスを受け取る。隣子さんは納得してなさそうな表情を浮かべているが、既に払ってしまったものなのでどうしようもない。

席につき食を進め、この後どうしましょうかとかR o s e l i aのこととか会話をし続ける。そんなだからお互いに食べるのは遅く、大きいものではないのにまだ半分程度にししか食べれていない。

アイスという品である以上溶け始めてくるのは仕方ない。まだそうでないとはいえだんだんとスプーンの通りが良くなってきてしまっているしさっさと食べた方がいいだろう。

そう思っていたのだけれど燐子さんからある提案をされて。

「あの……良ければ、なんですけれど……交換、しませんか？」

「え？」

「あ、いえ……その……」

聞き間違いでなければ交換しませんかと、何を？ そんなもの、これしかないだろう。味が異なるのだし交換しよう、そう捉えるのが普通なのだろうが、顔を赤く、そらされながら言われてしまえば気になってしまうのも仕方がなくて。

「駄目……ですか？」

「……いえ、そうしましょうか。折角味も違いますし」

ああ、よく回る口だ。いざ交換したはいいものの食べ進める事は出来ないまま時間は進み溶け始めてきた。

これは所謂間接キスとやらになるのだろう、が交換してしまつた以上このまま捨てるという事はありえなくて。

覚悟を決めて一口、味なんてわかるはずもなく、代わりにただただ恥ずかしさだけが

広がっていく。

くらくらしてしまいそうそれ、将来酒を飲んだらこんな風なのだろうか。であれば……確かに、溺れてしまっても無理はない。

さて燐子さんはどうなのかと目の前を見てみれば、どうやら彼女も同じよう顔が熱でも出しているかのように赤くなっていた。

自分もあなのだろうか。確かめる術はなく、アイスに触れた冷たい手では顔に触れてみても冷たさしか感じ取れない。

「あの……戻しませんか？」

「あ……そう……ですね」

このままでは食べきれぬ自信はない。嫌いなものというわけではないし、やろうと思えばできなくはないのだろうか、その前に自分がどうにかなってしまいそうだ。

そういえば友希那から貰ったあの飲みかけらしき珈琲、誰のか、なんてのはわかりきっていることだ。

まだ口はつけていない、そうであることが唯一の救いだ。もししていたならば俺は今更なる羞恥心に襲われていただろう。

しかし、口をつけた回数や量など関係するものではない。その証拠として、一口しか互いに相手の物を食べていないが、それでもこんなにも返ってきた物を口にするのを戸

惑っている。

俺と燐子さんはなんとかアイスを食べきったが会話はない。

なんと切り出したものか、目も合わせられずに時間だけが過ぎて、その静寂を破ったのは彼女から。

「よかつたらこの後……本屋……行きませんか？」

「はい、大丈夫です。何か買いたい本でも？」

「えっと……はい、新しい本……買おうかなって」

そうと決まればということでも本屋に向かう事に。最初は繋げた手、でも今度はそうすることとは出来なかった。

燐子さんが本を探している間、折角だし俺も何か探すかと思いつながら彼女の後をついていく。しかしあちこち見回せど興味をそそる物は中々見つからず、あつたとしても既に持っているものばかり。

そんな俺とは反対に本を見つけたのか、燐子さんは本棚を眺めていた俺に話しかけてくる。

「蒼音さんも何か……買うんですか？」

「そうしようかなって思ってたんですけど、中々良さそうなのが見つからなくて」

「あの、それなら……私が探してみても……いいでしょうか？」

それは一体どういふことなのか、取り敢えず領いてみると彼女は何処かに行ってしまった。と言つても走つてゐるわけでもないのので後を追えばそこは新発売の小説が並んでいる場所だ。

領いてしまつた手前もし既に持つてゐる本を渡されたらどうしようかと考えていたがその心配はなくなつて少し安心した。

あれでもないこれでもない、本を手に取り元の場所に戻してゐる。その様子は真剣そのもの、それはまるで自分のものを探してゐる時よりも真剣そうで……

「あ、蒼音さん、これとかどう……でしようか？」

そう言われ見せられた本、あらずじとタイトル、それだけでしか判断出来ないけど、好みであるか答えるしかないもので。

不安そうな表情を浮かべてゐる、だからありがとうございませと笑つて答えれば彼女はほつと息をついて顔を逸らす。

そうしたら燐子さんは何故か俺にその本を渡さずにレジに向かおうとしたので呼び止めた。

「さっきの……お返しがしたくて……」

「あれは俺が好きでやったことなんで気にしなくても……」

「これも……私が好きでやってる……ことです」

筋は通っている、がそれとこれは別だ。形に残るものであるのもそうだし、値段もそう。でも彼女も譲る気はないようでそう伝えても領いてくれない。

どうしたものか。これを承諾するのはなんか嫌、でも何を言っても彼女は断るだろう。それに、彼女がしたいと言ってくれたのだ、強く断ることなど出来るわけがない。

そうして悩んで、一つの答えを出した。

「じゃあ燐子さんが買う予定の方、俺に買わせて貰えませんか？」

「えっ、でも……それじゃあ……」

「形に残る物ですし、貰いっぱなしになるっていうのは……」

彼女は悩み始める。それでは意味がない、そう思っているのだろう。それはその通りで、値段だってほんのちよつとしか変わらない。

「それなら今度……ピアノ聴かせてください」

そう付け足せば彼女は折れたのかこちらに本を渡してくる。レジに並んでそれらを買って、本屋を出て最初に会った椅子に座ってそれらを交換する。

傍から見ればおかしな行動だが一々見る人もいないだろう。交換し終えて次はどうしようかと考えていると、燐子さんが本の入った袋をじつと見つめている事に気づいた。

「どうかしましたか？」

「蒼音さんは、友希那さんにも……こういった風に何かを交換したこと、あるんですか？」

「ない……わけじゃないですけど……」

「ないです、と即答しようとしたところで踏みとどまる。そういえばリサから貰ったクッキーを渡したことがある、ああでも、あれは今回のとはまた違うもので。」

「自分で買った物はないですね……貰った事も」

「……そうですか」

そして数秒後、彼女は微笑んだ。嬉しかったのか、何かが面白かったのか、わからなけれどそれは眩しくてドキリとして、今度は俺が顔を逸らすことになった。

氷山の一角

「まさか被るとはな……」

友希那とのデート当日、待ち合わせ場所として指定された場所はシヨツピングモール。それは三日前に燐子さんに俺が指定したものと同じで。

何をするかというのは知らされていない。アイツは全部決めてきているのか、それともこの前の俺のようになんとなくしか決めていないのか。

十分前になっても姿を見せない彼女を壁に寄りかかって待ちながらそんな事を考える。

「時間にはまだ早いと思うのだけど」

「遅れるよりはいいだろ」

「それもそうね」

友希那がやってきて俺と同じように壁に寄りかかる。時間丁度くらいに来ると思っていたから予想外、早く起きたとかそんなだろうか。

隣り合ってきて何処に行くのかと内心身構えていたのに、友希那は一向にそれを教えてこない。それどころか話すこともなくただこちらを見つめていて。

「……なんだよ」

「どうかしたのかしら?」

「お前が……いや、なんでもない」

言い争ったところで何も起らない、もしこんなくだらないことで険悪な雰囲気になつてしまったら最悪だし黙っておこう。

ふと時計を見ればそろそろ本来の待ち合わせの時間、このまま何もしないで過ごしたいわけではないし彼女に訊ねることにした。

「何をするのか決めてんのか?」

「まずは映画を見ようと思つただけけど……」

何ともベタで、しかしデートと言つて浮かんでくるものとしてそれはかなり上位に入ってくるもの。ちゃんと考えてきてたんだなと思うも意外ではあつた。

言つてしまえば全部丸投げなんてことすらありえると思つていた。こいつは音楽と猫以外に興味がなさそうなやつだし。

しかし、さて、映画ときたか。映画を最後に見たのはいつだったか、テレビであればいざ知らず、映画館でとなれば……パツと思ひ出せる中にそれはなかつた。

今やつている映画というのはなんなのだろうか、最近ではテレビもあまり見ていないのでそこら辺は全くわからない。

「何を見るとかは決まってるのか？」

「それは……えつと……」

少し赤くした顔を背け言い淀まれる、もしかして決めていないのだろうか。

俺の興味のなさそうなものにしたために選ばなかった、というならば嬉しかったのだが友希那の反応を見るにそうではないらしい。

その反応は見覚えがある。それは友希那ではなくてもう一人、燐子さんがいつもしているもの。恥ずかしい、そう表すかのような。

でも友希那のこの姿、見たことがないわけではない。それは決まって猫関連、もしかやと思って今日上映予定の映画を見ると予想通り、そこには猫が主人公の映画の名が。

好きだと言う時ですら欠片も見せないその姿は新鮮で、なんだか弱々しく見えるからなのか、いつも以上に彼女の事が可愛く見えた。

「……調べてみたら猫が主人公の映画やるみたいだし、それにしないか？」

「……！　そ、そうね。それにしましょう」

早く行きましょう、と彼女は歩き出す。何処か楽しそう、ホントにアイツは猫好きだ。ああ、でも……

アイツの楽しいに、俺はいるのだろうか？　燐子さんと繋いだ手を見て、そして既に

遠くに行ってしまった友希那の方を見て一つ、ため息をついた。

「映画、よかったわね」

「……そうだな」

映画を一人以外で見たというなら鉄板とも言おうべき感想の伝え合い。友希那は止まることなく猫の魅力を語っている一方、俺は彼女の話の聞くだけの案山子のようなものになってしまっている。

正直言ってしまうえば、映画には全く集中出来なかった。つまらなかつただとか腹を壊したとかではない、その原因は目の前のコイツのせい。

猫が出るたびにやーんちゃんだの可愛いだの、つい呟いてしまったのだろうが隣にいるもんだから気になってしょうがなかった。友希那の俺でない方の隣が空席だったのは唯一の救いと言ったところか。

ただ、うるさいと思わされる程ではない、怒っているわけでもない。もしそれが俺の隣に座っていた男がやっていたとしても何ともなかつただろう。

集中させられなかつた理由、それはそれをしたのが友希那だったから、それだけだ。

「……あげないわよ?」

「……俺だつてまだ残つてるからいらねえよ」

今いるのはこの前燐子さんとアイスを食べた場所。黙って見続けていたせいだろう、欲しがっていると思われるでしまったのでそれを否定する。

「そういえばお前、今日音楽の話全くしないな」

「嫌かしら？」

「気になっただけだ。しなかったことなかっただろ、多分」

友希那と顔を合わせ会話をして音楽関連の話を中心にしない時、なんてのは一度もなかったはずだ。

どれだけ小さくても音楽の事、Roseliaの事は話していた。勿論、俺が指摘していなければこの後話していたかもしれないが。

「……そうね、音楽の話をしなかったことはなかったわ」

別になんでもない、流してしまうような話題。そうなる筈で、でも友希那は少し暗い顔をした。

何かおかしなことを言ったか、先程の自分の言葉を思い返し、しかしそんなものはなかった。であれば何故、と思考していると彼女は口を開いた。

「私、あなたの事を全然知らないわ」

「……なんだよ、急に」

「そのままよ。音楽以外で私は、あなたとまともに話したことがない」

それは些か話を盛っているような気もするが……彼女の中ではそうなのだろうか。どうであれ、それは心からのものだと思われる、わからされる。

「あなた一昨日、隣子と出かけたのよね？」

「……ああ」

「それで、何をしたのかしら？」

「本を探したくらいだな、話すようなことは」

他にもあるがあの日一番とするならそれだろう。互いに本を買いあつた、その程度だけ、あの本は何だか読むのに変な緊張さえた。

それを聞いてどうするのか、彼女はそうと呟き立ち上がり食べきつたアイスのカップを捨て、俺に向けて当然かのように言ってきた。

「行くわよ」

「どこにだよ」

「本屋よ。嫌、とは言わせないわ」

あまりに唐突すぎる。嫌、ではないが……友希那は本を読むのだろうか。音楽雑誌ならわかるが小説とか、悪いが好んで読んでいるようなイメージはない。俺もゴミを片付け、友希那と隣り合って歩く。

何故急にあんな事を言ったのか、元から本屋に予定があつたというわけではないだろ

うし、行くところがなかったし名前が出たから行こう、という風でもない。

嫌とは言わせないと言った。つまり、明確な理由があるはずで。

それは何だろう。俺の事を全く知らないと言っていたし、俺の趣味に触れようとも思ったのか。それとも、燐子さんと俺が行ったからなのだろうか。

「……何か付いているかしら？」

「……気のせいだった、何でもねえよ」

もし、もしそうだとするならば……この手を繋いだという事実、コイツは知っているのだろうか。知ったらしましょうと言ってくるのだろうか。

俺から手を伸ばす事は、やっぱり出来なかった。

「……本って色々あるのね」

「そりやそうだろ」

「あなたのおすすめの本とかってあるかしら？」

一緒に本を探して数分、自分で探すのを諦めたのかそんな事を聞いてくる。

おすすめの本、となればいくらでもある。だが俺が持っているものであれば貸してやればいいし、出来ればそうではない方がいいだろう。

友希那が好きそうなもの、音楽関連と猫はともかくとして後は……なんだろう。

先程の彼女の言葉を思い出す。俺の事を全く知らないと言ったあの言葉、それは俺からしても同じだと気づいてしまった。

コイツの好きな物は、趣味は、そんなもの俺は知らない。好きな相手のことなのに、氷山の一角程度でしか知れていない。

「……お前、好きな物ってなんだ？」

「はちみつティーとかかしら。後は……そうね、リサのクッキーとかかしら」

「じゃあ趣味は？」

「趣味と言えるものはないわね、そんなものにかかる時間があるなら練習をするわ」

それはどこまでも俺の知っている湊友希那で、でもそれはより深くで知れたもの。まだ俺は彼女の事を全く知らない、でも、聞いてわかることなんてほんの少ししかなくて。

「なんで急にそんな事を聞いてくるのかしら？」

「……お前の興味なさそうな本選ばねえためだよ」

口ではなんとだだって言える。勿論嘘ではない、でもその比率なんて微々たるもので。

どれにしようかと探し回って、でもそう簡単に見つからない。いつまでもそうして連れまわすのはよくないだろう。

仕方ない、俺も持っているが猫が主役の本にしよう。そう思いその本を探し、友希那にこれだと教えることにした。

「……これ、あなたも持つているのかしら？」

「嫌なら別のを探すが……」

「いえ、これでいいわ」

そう言つて彼女はレジに向かつて行つた。時間的にはそこそこだが、季節のせいもあつてか外はまだ明るい。

この後どうするか、アイツはどうしたいのか。友希那が返ってくるまでのちよつとの間、レジの方を眺めながらその事を考えていた。

慣れないこと

「あのボスほんとキツかったー！ ごめんね、りんりん。あこが足引つ張っちゃったよね」

「ううん……あれ、本当に難しいクエストだから……次はパーティーメンバー増やして……やってみよっか」

「うんっ！ 蒼音さんとか誘って、ぜーったいクリアしよー！」

あこちゃんとシヨップینگモールのカフェにやってきて、昨日のNFOで勝てなかったボスのことについて話し合う。

未だに彼とやるゲームには慣れる気がしない。彼の事が気になっていつも通りに出来ないから。

でも……嫌じゃない、むしろ逆、出来るのならば積極的にしたい。だから、そうだねと返事をして余っていたケーキを食べきった。

「次はアクセシヨップに……って、あれ……」

ねえ、りんりん見て！ あそこのシヨップにいるの……リサ姉かな？」

あこちゃんが指さした方を見れば今井さんの姿が。何を見ているんだろうと思って

目を凝らしてみると、それが水着だとわかった。

海にでも行くのかな、なんて思ってたら声かけてみよ！ とお会計を済ませたあちちゃんは走って今井さんの元に向かっていった。

「リサ姉〜！」

「わっ！ び、びつくりした〜」

「ごめんなさ〜い。リサ姉水着買いにきたの？」

「うん、実は今週末にひまりと海に行く約束してさ〜」

持つてるの中学時代のだから、と言う今井さんに対しあちちゃんが自分も行きたいと言うと、今井さんはそれに許可を出す。

そしてあちちゃんは喜びそのままに私の方を向いて言ってきた。

「ねっ、りんりんも行くようよ！」

「……………えっ……………む、ムリ……………ムリです……………」

私には関係ないこと、そう思っていたから驚いた。でも無理、海なんて、しかもこの時期に。人は沢山いるだろうし、なによりも水着なんて絶対に。

「え〜、絶対楽しいよっ、りんりん！」

「あちちゃん……………でもムリ、です……………」

「そっか……………まありんりんとは海じゃなくても遊べるもんね」

あこちゃんはやちよつとだけ残念そうな表情を浮かべ、それがどうしようもないくらいに胸を痛めてくる。

「でもま、水着見るのは付き合ってくれてもいいよね？」

「行こつ、りんりん！ 最強にかっこいいやつ、見つけよ！」

「わ、私も……？ ま、待って……」

結局その日は水着探しに付き合つて、アクセサリーショップには行かなかつた。

あこちゃんは私に似合う水着を探してくれようとしたけど私はそれを断つて、それであこちゃんはまた残念そうな顔をして、それでもいつか絶対海に行こうねと言ってくれた。

行けたら……いいな、それがいつになるのかはわからないけれど。

帰宅後、あこちゃんと一緒にNFOをする予定があつたので起動すると、トップページにお知らせが一つ。イベントかなと思ひ見れば、そこにはコラボのお知らせと書いてあつて。

性能は……まあまあだけど、見た目は可愛くて欲しい。いったいどこでやるんだろうと思つて調べてみると……

「……」

週末に今井さんが行くと言つていた海の近くにある海の家、開催場所は何度見てもそ

う書いてある。

海に行かないと貰えない、でも限定装備は欲しい。私の中で二つの気持ちがせめぎ合って……勝ったのは後者だった。

……いや、どうだろう。これは言い訳かもしれない。本当に限定装備が欲しいだけなのか、海に行きたいのか、あこちゃんのあの寂しそうな表情が嫌で嫌で仕方なかったのか。

自分でもどれかわからないけれど……それでいい、わからないならそのまま。この気持ちが変わらない事の方が大切で、だから早くあこちゃんに連絡しないと。

連絡をしたらやつてしまったという気持ちが襲ってきたが、やれたという気持ちもあふれてくる。

蒼音さんに告白して手を繋いで、それに比べればこんな程度と思っている。彼と出会わなければ……こうやつて言うことも出来ていなかったかもしれない。

人は慣れていく生き物。最初は苦手でも、回数を重ねれば段々と薄れていく、Roseliaのライブでも過度の緊張をしなくなってきたのがいい例で。

ならば蒼音さんとのもいつか慣れてしまうのだろうか。それは今のところ、頭すら見せてくれない。

「燐子さんの水着選びのお手伝いができるなんて、嬉しいです」

「まかせといてね、アタシとひまりで超似合うやつ探すから」

「お、お願い……します」

海に行きたいとあこちゃんに言って、でも問題が一つあって、私は水着を持っていなかった。

なくはないのだけれど昔のものだし、着れる自信もなく不安だったので今井さんと上原さんに頼むことにした。

勿論着ない、という選択肢がないわけではなかった。普通の服で行けば少し……いや、だいぶ暑いだろうけれどそれでも済む。

なのに買いに来た理由は単純で、あこちゃんから水着持つてるの？ って聞かれてしまったから。それともう一つ、周りが全員水着となれば悪目立ちしてしまう、それがないにより嫌だった。

露出が派手なものでなければなんでもいい。そう思っていたのだけれど二人はじつと、見定めるように私の体を見ていた。

「な……なん、ですか……？」

「……前から思ってたんだけど、燐子ってスタイルいいよね？」

「そんなことは……別にスタイル……よくないです」

「そんなことあります！」

「うう……」

喜ぶべきなんだろうけど恥ずかしくて何も返せず、顔が赤くなつていくのが自分でもわかる。そんな私を置いて二人は段々と盛り上がっていき、まるで自分の事のようなはりきりを見せ水着屋さんに向かつていった。

二人の後をつけながら考える、蒼音さんは私の事をどう見ているんだろうと。二人のようにスタイルがいいと思つているのか、それとも何とも思つていないのか。

スタイルがいいと思つていると考えちゃうと何だか恥ずかしくなってくるが、彼が何とも思つていないのかと思うと、少し寂しい。

自分の体が優れていると思つたことはない。今までは勿論、二人から言われた今でもそう。

だからこの水着選びだつて二人が選んでくれたものの中から、そう思つていたんだだけ
れど……

「やっぱ燐子は黒だと思ふんだよね〜」

「燐子さんなら可愛いピンク系も着こなせると思ふんですよね〜」

「く、黒……？　ピンク……？」

なんだつてない、そういうものだと思つていたのに……

「じゃあデザインは？ アタシはビキニタイプを押すね！」

「ここはむしろワンピースタイプじゃないですか？」

「び、ビキニ……？ ワンピース……？」

何だか想像の遙か斜め上を行くくらいに二人に気圧されて……

「さあ、どっちがいい!？」

二人のその言葉を頭が理解しきつてくれず、沸騰してしまいそうになってしまった。

「ごめんね、燐子のペース考えずにガンガン言っちゃって」

「燐子さんの水着を選びに来たのに燐子さんの事置いてけぼりにしちゃってました……」

反省です……」

「いえ、そんな……」

何とか落ち着いた私に対し、二人は謝罪してきた。謝られることは何もされていない、寧ろ選んでもらっている立場なのにそうしないているのだから謝るのは私の方。

私のペースでと今井さんに言われ、店の中の水着を見て回る。あれもこれも見ているだけで恥ずかしくなってきたてしまう、でもこんなにも協力して貰っているのだからどれがいいかと一生懸命に探して。

あれは可愛い、これは落ち着いてる。あそこの方にあるやつは……ちよつと露出が多すぎる。

二人と一緒に見て回つて数十分、候補となりうるものは絞り終えた。何様だと言いたくもなるが恥ずかしいから、と二人にはお店の前で待つてもらふことにし、それらを持って試着室に入る。

「どつちが……いいのかな」

折角だから二人の意見を取り入れたい、でも片方に選んでもらつたものをそのままというのは、何だかもう一人に悪い気がして。

ピンクのビキニと黒のワンピース、私はどつちを選んだ方がいいのだろう。考えて考えて、結局わからないまま時間が過ぎていく。

どつちがいいかなんて私には決められない。誰に見せるためのものではないのだから、そう思つたけれどふと、何故だか蒼音さんの事が浮かんできた。

……どつちが可愛いかなんて私には決められない、どちらがいいのかなんてわからない。そんなだから蒼音さんに見せるとするならどちらがいいのか、なんて考えてしまつた。

「うう……」

また顔が赤くなつた気がする、今度は爆発してしまつたかのよう。ああでも、それな

ら選べそうだ。誰でもない、彼が好みそうな方を選べばいいのだから。

上原さんと今井さんに心の中で謝りながら二つの水着を見る。彼なら……多分こっちの方を好みそうだ。知らない事でも予想は出来る。

勝手だけど、理由なんてないけれどなんとなく、そう思った。

二人の事を随分と長く待たせてしまったし、お店を出たらまず謝ろう。そう思っていたけど、二人の間にいるその人を見て、一瞬頭が真っ白になってそうする事は出来なかつた。

「あ、燐子さん！ お疲れ様です！」

「お疲れ様。気に入ったの見つけられたみたいで安心したよ」

「……お疲れ様です」

どうして蒼音さんがここに、もしかして何を買っていたかも知ってしまっているのか。

彼と目が合うと、彼の事を考えて水着を買ったという事実が恥ずかしくて今日一番の熱を体が訴えてくる。そんな私の事を知ってか知らずか、今井さんが話しかけてくる。

「それで結局、どんなの買ったの？」

「そ、それは……」

二人には恥ずかしいからお会計終わるまで待つてくださいと言ってしまったが……

ああ、見せてしまった方がよかったかもしれない。

でもチラリと彼の方を見ると伝わったのか、当日まで楽しみにしてるねと言ってくれた。

彼の事を考えて、彼が好みそうなのは、そう考えたけれどやっぱり見せるとなると話は別。勝手なものだからこそ彼には知られることもない、見られることも。

そう思っていたのだけれど……

「そうだ！ 蒼音さんも今週末に海行きませんか？」

手にしていた袋を落としてしまうとところだった。彼も海に来る、もしそんな事になったら彼が私なんかの水着姿を見てしまう。想像しただけで限界だ。

でも彼が予定があるからとそれを断ったのを見て安心し、だけど何処かで残念だと思う自分もいた。その理由はなんなのだろう。買い物に行くと行って歩き出した彼の背中を見ていると余計にわからなくなってくる。

あなたの事を考えて選びましたと言いたいのか、これでいいのかと聞きたいのか。感想を求めているのかそれとも……可愛いとか綺麗とか、そんな事を言われないのだろうか。

「燐子さん、連絡先交換しませんか？」

「え、あ、はい……喜んで」

上原さんと連絡先を交換し、その後蒼音さんのいた方向を見るが彼の姿はもう見えな
い。それも当然、ため息をついてしまつてそんな私を見てか、上原さんは一つ質問をし
てきた。

「あのく……もしかして隣子さんつて蒼音さんの事……好き、だったりするんですか？」
ああ、バレてしまつた。これに關しては分かりやすすぎた自分が悪いのだけれどやつ
ぱりこういうのを知られると恥ずかしい。そんなことないですと否定してもよかつた、
別に肯定しても何かが変わるわけでもない。

彼女は友希那さんも彼の事を好きだと知つている、そんな彼女がこの気持ちを知つた
らどう思うのだろう。私には無理だと思ふのか、面白がるのか無反応なのか。

色々考えてみて、この気持ちに？は付きたくないと言つれば、応援しますねと彼女は
言つてくれた。その後は二人と昼食を食べて解散することになつた。

そこそこな時間だというのに外はまだまだ明るくて暑い。空には雲が流れていて
至つて普通、昨日や一昨日見たものとの違いなどわからない程度。

今週末のように大きな予定がない限りは毎日がこうなのだろう。勿論練習はあるし
あこちゃんとも遊ぶ、そしてたまたま蒼音さんに会う事があるのだろうけど、それらは特
別と言えるものではない。

彼と過ごして、そうする事で距離を縮め仲良くなっていく。友希那さんに負けないために、彼にあなたが好きだと言って貰うために。

きつと彼女もそう考えているのだろうか、そんな日々が続くのだと考えると……何だか少し、怖くなった。

茨と刺

夏休みも早い事でそろそろ半分程度になってしまった。それでも時間はまだまだある、ピアノをやっていないなかった二年間、それを埋めるには足りないくらいだ。

課題はもう終わらせきつたし完全に自由、夏休みが終わるまでずっとピアノの練習をして……というわけにはいかない。

隣子さんのこと、友希那のこと、それらはきつと何より優先するべきなのだろう。

こうやってピアノに逃げて、二人に合わない日がない程の行動が出来ず、そんななにわからないと言いつつ諷する。

もし下手を打って嫌われたりなんかしたら、しなければ済む話だが絶対にそうならないとは限らない。

それが嫌、好きだから、好きになつてしまったから嫌われたくない。どれだけ自分勝手なものかはわかつてるけど、ふと思うと怖くなつてしまう。

でも何も進展のないままでは呆れられてしまうのではないかと、そう考えてしまうと泥沼だ。安全な道なんてない、何処を見回しても棘だらけで……

「……そりゃそっか」

この道を選んだのは誰でもない、俺自身だ。茨がある棘があるとわかっていながら選んだのは。

切り進むしかない、そうしなければ前に行くことができない。棘を恐れては、痛みを恐れては崩れてゆく道に飲み込まれる。

「……………」

スマホを見るに外では雨が降っているらしく、窓から眺めてみれば確かに大雨だ。まあ今日も明日も外に出る用事はないし関係ないか、なんて思いながらソファーに寝転がる。

「痛いのは……………嫌いだな」

痛いのは嫌い、人間誰しもそうだろう。一応好きだという人も探せば何人かいるかもしれないが、少なくとも俺は嫌いだ。

自分が嫌いだから人にはしたくない。誰かの怪我した瞬間なんて嫌でも頭の中に残る、それに自分が関与しているならば尚更。

ましてや、好きな人に対してそんなこと、したい筈もなからうて。

俺が切り裂くべき茨、前に進むのを咎める棘。そのまま突き進めば大怪我してしまう。

それを切り裂いて、切り裂いて、やっと道が開けた時、その時の事を考えるべきなの

だろうがあまりそうしたくない。

その茨は、棘は、自分よりずっとずっと大切なものなんじゃないか。そう思うと手が上がらない、足がすくんで動かない。

道を進むには棘を傷つけなければいけない。何かを得るには何かを失わなければならない。

頭痛がしてきた、でもこんな程度、もし傷つけてしまった時に比べればきつと吹けば飛ぶ埃のようなものなのだろう。

そんなだつたら、そう思うと一緒に目を閉じて、崩れた道の底を眺めていた。

昨日の雨は嘘のように晴れている、そんな外を眺めながら今日も練習するかと思ったところでインターホンが鳴った。

宅配はなかったはずだし子どもの悪戯だろうかとドアを開いてみれば、どうやら悪戯ではなかったようで人の姿が二つ。

「ヤッホー、元気してる?」

「……こんにちは」

友希那はリサに引かれてやってきたのか息を切らしている。急ぎの用かと思ったがそうではないらしく、ではなにかと聞いてみれば目の前に友希那を突き出され。

「友希那ってば練習以外じゃ外に出なくてさ、それで連れて来たってわけ」

「……別に大丈夫って言うてるのにリサが聞かなくて」

「そんなこと言うてるけどさ、嫌だとは言わなかったじゃん」

「それは……」

外は暑い、見れば二人も汗をかいている。太陽に晒されいいことなんて一つもないし、入ってくかと思えば二人共頷いたので家に上げた。

「涼し〜」

「……なんも面白いもんねえぞ」

わざわざやってきたのだ、家を見回すリサにそう言い冷たい飲み物を出すくらいはするかと冷蔵庫を開くと、友希那から小声で話しかけられた。

「その……にゃーんちゃんは……」

顔を赤くして、珍しく恥ずかしそうに。相変わらずだなど思いながら猫の元へ案内すると、友希那は俺の顔を一度見た後猫を撫で始めた。

嫌がる様子もないしアイツも覚えられているのか、なんて考えながらリサの元に戻る。お礼の言葉と引き換えに飲み物を渡すと、一口それを飲んでから話しかけてきた。

「この前送った写真、どうだった？」

「……なんて返答を求めてんだ」

「深い意味はないって。ありがとうとか楽しそうとか、そんなのだよ」

本音はどうかかわかったものじゃない、顔を背けながら俺も飲み物を飲む。

この前リサから送られてきた写真というのは燐子さんの水着姿を撮ったそれ、本人の許可を取っているのかは知らないがこうして聞いてきたということは送り間違えたのではなく故意ということだ。

「それとも何、深い意味の方で捉えちゃった？」

「……」

「冗談だって、そんな怖い顔しなくていいじゃん」

「……気のせいだ」

その写真を送られたことはどうでもいいとは言わないが、一度見てしまった以上取り返しのつかないことなのでどうしようもない。

でもそれを見てどう思ったか、同じく過去形であるけれどどうしようもないものではない。

好きな人、露出は多くなかったがそれでもその水着姿を見て、まだ何もしていないけれど罪悪感を覚えた。よくないこと……とは言いきれない、でも自分の事が嫌に思えたのは事実だ。

好きという感情があるからそうなってしまふ。浅くない、表面だけのものではない、

それなのにそこに好きという感情を抱く。

あの水着は、燐子さんに凄く似合っていた。だけれどその格好は、普段の彼女の印象とかけ離れていた。

誰だつていいはずがない。であるけれどももし外見が全く一緒に中身だけが違う、そんな人がいたとしたら俺は、好きだと抱かずにいられるのか？

知つていれば勿論そうならない、でも知らなければ？　もし俺が燐子さんのこと全部忘れ、そんな偽物を見たとして俺は好きじゃないと言えるのか？

俺は彼女が好きだ。恥ずかしがり屋なところも、ゲームが好きだという意外な一面も、それ以外も全部ひつくるめてこそその彼女が好きだ。

だから全部考えすぎ、彼女だからそう思わされる、彼女が恥ずかしがり屋だから罪悪感があるだけ。

そうだと自分に言い聞かせていると目の前に猫を抱えた友希那が座った。

「あれ、もしかしてその子つて蒼音が飼つてる子？」

「そうね、今は眠つてしまつているけど」

小さく浮かべたその笑みに吸い込まれるように視線が行つた。アタシも撫でていいと聞いてきたリサに対し適当に返事をしてしまうぐらいには。

数分程彼女らを眺めていると、友希那は突然こちらを向いて話しかけてきた。

「あなたは今日、練習はしないのかしら？」

「……お前らが帰ったらやる予定だ」

「それなら久し振りにあなたの演奏、聴かせてくれないかしら？」

そうやって聞いてくるのも音楽が好きだから、でしかないのだろう。だけれど俺の演奏を求めている、というのは不思議と気分がよくなってくる。

ずっと一人で練習していたし感想を聞いてみたい、というのもあるが。

「この子は……」

「あー……ここで寝かしとけばいいか」

「ソファアーの上でいいかしら？」

ああと返せば友希那は猫をソファアーの上に移動させるが、名残惜しいのかその場を離れようとしなない。

俺は友希那から視線を外しその近く、猫の方に向け……

……ああ、本当に自分が嫌になる。ため息が零れ、どうしたのと聞いてきたリサに俺は、なんでもないと返していた。

「今日はごめんね、急にお邪魔しちゃってさ」

「今度から事前に連絡入れるくらいしろよ？」

「了解、と言つてもアタシ一人じゃこないけどね」

あの後ピアノを弾いて、それ以外何をする事もなく彼女たちを送り出すために外に出る。

これからこいつらが何をするかは知らないが、友希那が家を出なくてと言つていたし何処かにでも行くのだろう。

俺もバイト以外での外出などそれこそ指で足りきるほどではあるが、流石に運動くらいはした方がいいだろうか。

「そういえばさ、蒼音って夏休みの課題の調子はどう？」

「終わらせた、やることも多くなかったしな」

「真面目く、友希那はどう、ちゃんとやらなきや駄目だよ？」

「やるわよ、私をなんだと思ってるの？」

「そんな事言ってるけど、夏休み終盤になるといつも焦ってるじゃん」

「そ、それは……今年は大丈夫よ」

そんなことを話していたらリサが突然、そうだと声を上げ友希那を俺の前に押し出してくる。いつたいなんだと俺も友希那もわからないでいると、リサは俺たちの手を取り繋ぎさせ言った。

「友希那の課題、手伝ってあげて」

「んな急に……」

「勉強を教えてつてわけじゃなくて、やるとこちゃんと見ててほしくてさ」

勿論アタシも手伝うけど、なんて言ってくる彼女の言葉に？はないかもしれないが、すべて言っているわけではない。

俺と友希那の事を思つてのこと、そんなことされなくても言う友希那とは既に手は離れている。

期限通りに出せないと練習も出来なくなるよ、という脅しに屈したのか、俺に視線を向けてきたのでわかったと口にした。

「それじゃあよろしくね、蒼音」

「……………めんなさい」

「……………そう思ってるなら早めに終わらせるぞ」

なんて会話をして彼女たちは去っていった。その背中を見つめ、先程繋がされた手を見る。

飽きるほどみたそれ、なんの変化もないけれどそこに残っている感覚は確かなもので

……

「期限、か……」

もし決められていたら何か変わったのだろうか。例えば夏休み最後に答えてと言わ

れていたら俺は今、焦るようになっていただろうか。

リサから送られてきたあの写真を見て、ずっと前から消せずに残っていた友希那との写真を見て、ずきりと何処かが痛むかのような気がした。

代償を払う

夢を見た。何の面白みも、オチもないつまらないもの。ハッキリ全て思い出せるかと言われればそうではなく、薄らと思いついで出すので精一杯。

外は明かりを取り戻してきているがまだ日は登っていない。意識はハッキリとしてきたが体を起こす気にはなれず、寝転がるようにしてスマホを手取る。

「今日の練習は確か……」

練習はお昼頃からでそれまでまだまだある、かといってやることもない。蒼音やリサに聞かれたら夏休みの課題をしろと言われそうだが、どうにもやる気はおきないでいる。

期限通りにしさえすればなんでもよいし、今までもどうにかやってきたのだし、まだ焦り始めるものではないだろう。

「……期限といえは」

決まったのだろうか、蒼音が選ぶその日のこと。燐子と話して、それとももう決まったと、私が知らぬ間に決まってしまったか。

別にいつだろうと構わない、彼が燐子の事を選ぼうと……

ぞわりと、何か背中を駆け上ったかのような気がした。

季節外れに冷たかったその正体はわからない。落ち着かない、落ち着けない、考えたくないけれど考えずにはいられない。

私は彼の事が好きだ、いつ好きになったのかはわからない。

私は彼の事が好きだ、どこが一番好きなのかはわからない。

私は彼の事が好きだ、多分、隣子には負けてない。

いや、いくら考えたところで選ぶのは私じゃない、彼だ。だからどんな結果だろうと私はそれを受け止めて……

パン、と乾いた音が部屋に響く。寝転んでいた体は上半身だけ起き上がって両手が合わさるように重なっていた。

目の前を小さく黒い何かが通り過ぎる。閉じていた手を開くと、そこには何もいなかった。

「うう、暑い〜」

「そう思うから暑いんです。そもそもこの時期に長袖を着てくるのがいけないのでは？」

「だってだって、この服かっこよくないですか!？」

練習の帰り道、あこは紗夜に対しそんなことを言い、今度は私に向けて友希那さんもそう思いますよね、なんて聞いてきた。

彼女に乗って話すことが出来る燐子とリサは二人で会話中、紗夜の方に顔を向けてみるが彼女もなんと答えるべきかわからないようで困り顔をしている。

あこが着ている服がダサイというわけではないが、服のかっこいいかどうかなんてよくわからない。ただこちらを見上げてくるあこの事を無視できる筈もなく、でも？を言うわけにもいかないから。

「……そういうのは私より燐子に聞きなさい」

「りんりんはかっこいいって言ってくれました！」

「それなら私たちに聞く必要もないでしょう？」

「そうじゃなくて〜」

わからない、燐子から既に言われているならわざわざ私たちから求める意味が。

燐子が優しきから？を付いているかもしれない、という風に疑っているわけではないようだし。

「どうしたの？」

「あ、リサ姉！ この服かっこいいよね!？」

「サイコーにかっこいいよ」

話が聞こえてたのかりサがこちらにやってきてそんな事を言う。褒められて嬉しうなあこは燐子の元に、それを見てリサは私たちに呆れたような顔をして声をかけてくる。

「二人共素直に褒めればいいのに」

「……私にはああいうものはよくわかりません」

「私もよ、それに燐子に褒められたのだからそれでいいでしょ」

「わかつてないなあ二人共」

ため息をつかれ私と紗夜は顔を見合わせる。暑さを我慢してまであの服を着て、私なんかよりずっとセンスのある人に褒められたのに私にも求めてきて、私にその意図はわからない。

褒められて嬉しいというのはあるだろうけど、私程度のセンスで褒められたところで得られるそれなど微々たるもの筈。

「わかつてても言われたらいつて経験、二人もあるでしょ？」

誰かからだから言われたらいつてもいいのもさ、続けるように彼女は言う。

わかつてても言われたらいつてもいいのに言われても何もない、誰かから、というのも関係ない。そう思っているのだけれど何か引つかかる。

ふと隣を見ると紗夜は納得したかのような表情を浮かべている。彼女はわかつて私

にはわからない、それに原因はあるのかどうか、この引つかかるものは何か、全部わからない。

そんな事を考えていたら皆別れてしまいリサと二人きり、家までそう遠くないが話さずにいるには遠すぎる。先程のリサの言葉を頭の中で繰り返すと、やはり気になるものは晴れてなくて。

気になるけれど別に不都合があるわけでもない、だからそれは置いておいてもう一つの気になること、燐子と何を話していたのかを聞こうとする。

深い意味はない、ただなんとなく聞かなければいけない気がした。それは多分蒼音関連なのだろうと思わされて。

「明後日蒼音とデートしたいってことで、どうやって誘ったらいいかって話しててさ」

……面白くない、自分から聞いたことなのに、予想通りなのにそう思ってしまう。明日も休みなのに、なんてのはどうでもいい。理由なく、意味もなく、どこかイラつく。

私がこんな事を思ってるなんてリサは欠片も思っていないのだろう。リサの言葉を聞き流させながら溜まり始めた黒い何かは、ヘドロのように粘りたい。

「課題はちゃんとするんだよ？」

「……ええ」

気がつけば家についてしまったらしい。今家の中には私一人、閉めたドアに寄り

かかり付けた明かりを見上げてみるとため息が零れた。

先程感じた黒い何かは今にも体を突き破りそうな程に強くなっている。頭が痛いし耳鳴りがする、でも体調は悪くないし思考も明瞭だ。

恐らく私は燐子に嫉妬している、蒼音とデートをするというそれが許せない。

自分勝手だ、そんなにしたいのなら明日しようと連絡すればいいだけなのにそれだけじゃ駄目だと思う自分がいる。

ああ、リサの言葉が分かってきた。わかっているともいうのも、誰かからというのも。そういうことなのだろう。

鞆からスマホを取り出す。私が今やろうとしていることはよくないことだ、本当にするべきかとスマホを眺めて深呼吸をして、電話をかけた。

「……もしもし」

燐子は蒼音から好きだと言われているのだろうか。声に出して伝えられたことがあるのだろうか。

「明後日なんだけど、空いてるかしら？」

私は……ない。彼から好きだと言われたことが一度たりともない。

「それならデートしましょう。場所は……駅で、遠くに行きたい気分なの」

あなたは本当に私の事が好きなのか、優しさから何も言っていないだけなんじゃないの

か。

電話を切る。よかった、間に合った。大きく息を吐いて、ずっと立ちっぱなしだった玄関の明かりを消して自分の部屋に向かう。

私は最低な事をした、その自覚はあるしそれによって何も思わないものがないわけでもない。

「……………」

嫉妬という名の怪物は何処かに隠れ、そのお陰で心は軽くなったかのようだ。

外を見ると雲が空を覆っている。雨が降りそうだ、多分それは、明日まで続くだろう。

予想通り昨日は止むことなく雨が降り続いていた。一昨日から嫉妬が何処かに隠れた代わりに言い表せないようなものを感じる。もし今日の事を知られたら、なんて思われるだろうか。

空を見上げる、天気予報では雨は降らないということだが一面黒い雲で覆いつくされている。

今更取り消せないし取り消すつもりもない。でも取り消せないから、取り消さないから不安になる。

虫のいい話だ、やったのは、しているのは自分だというのに知られたくないなんて

思ってしまう。

駅について逃げるように日陰に入る。壁に寄りかかっただけでなく上を向いて、でもすぐに視線が落ちてしまう。

やっぱり嫌うだろうか、私の事を。燐子は、リサは、蒼音は、こんな私なんかと侮蔑して私を置いて行ってしまおうだろうか。

「おい」

突然声をかけられ思考を中断させられ、誰だろうかとそちらを向けば蒼音の姿。ドキリとしたのは何故なのか、彼を見たから、ではないだろう。

こんなにちはと言えばいいのだろうか、それともいい天気ねなんて言ってみればいいのか。黙りこくついているとため息が彼の方から聞こえ、その後すぐに話しかけられる。

「今日何処に行くか決めてんのか？」

「……いえ、特には」

遠くに行きたいなんて言った癖して何処に行くかは全く決めてない。

どこでもいい、どこでもいいというわけではなくどこでもいい。それには誰と、という条件がついてなら。

「行きたいところはないのか？」

「私は別に……あなたは？」

「俺もだな」

こういう時燐子ならどうしているのだろう、そもそもこうならないように全て決めているのだろうか。無言のまま時間が過ぎて、日陰にいるせいで彼の顔もよく見えない。呆れられてしまうんじゃないか、そんなことすら考え始めた時、行くぞと声をかけられた。

「……何処にかしら？」

「さあな、でも遠くに行くなら早くした方がいいだろ」

それに、と彼は続ける。

「お前とどっか行くにして、決めてたことが少ねえだろ」

「……それもそうね」

気にしすぎ……なのだろうか、ちよつとだけ力が抜けて大きく息を吐く。隣町か、そのまた隣か。もしかして終点まで行ってしまいか、何もかも決めてない。

彼が背を向けて歩き出す、私はその後をついて行く。彼に手を引かれたら、そう思ったのは何故だろう。はぐれたくないからか、それともただそうしたいだけか。

駅の中に入ろうとしてまた振り返って辺りを見回す。きつと手を引かれないというのには、今日に限ればこれも理由の一つであるのだろう。

「お前、ここに来たことは？」

「……多分ないわね」

なんとなくで降りたそこ、駅を出て辺りを見回すが見覚えのありそうなものなどそれこそコンビニくらい。

もしかしたらライブをしに来たことがあるかもしれないが、覚えていないのだから関係のないことだ。

そっちはどうなのかと聞いてみるが帰ってきた答えは一緒、つまりここはお互いにとって未知の場所であるということと少しばかり不安になる。

「とりあえずどっか寄るか」

「そうね、カフェにでも寄ってこれからどうするか決めましょう」

彼は返事をしてスマホを弄り始めた。何をしているか覗き込めはしないから待つていると行くぞと言って歩き始めたので後を付ける。

カフェの場所を調べていて、今だってその場所を確認しながら歩いているのだろう。優しいと思うべきなのだろう。実際そうだ、私は昨日スマホの充電をするのを忘れてしまつて、それを言っていないが私がしないから調べてくれている。

なのにスマホを覗き込んでいる彼の事を見るとなんだか気に食わない。

だから私は、手を繋いだ。

スマホから視線がこちらに移り歩みも止まる。時間が止まってしまったかのように互いは動かない、喋らない。でもドキドキと、なんでか私の体の中で暴れているのはわかる。

「……歩くの、早いわ」

「……悪かったな」

嘘、場所を確認しながらなのにそんな早いわげがない。でも彼は真に受けたのか歩くのが遅くなって、そのせいかスマホを見つばなしではなくたまにこちらを向いてくれる。

会話なんてものはないけれど心音は向こうに届いているかもしれない、掴む力が強いなんて思われているかもしれない。

蒼音は一体どう思っているのか、私と同じように思っているのか。もしかして何とも思っていないのかもしれない、それは隣子と慣れてしまっているから、そして……

……なんて事を考えていたらカフエに着いたようで、手を繋いでいる理由もないので離して入店する。離れた手には寂しさが残り、しようがないので自らの服の袖を掴む。

「この後どうする？」

「どうする、って言われても……」

何をすればいいかわからないし何ができるのかもわからない。特にしたいこともな

いしそれは彼も同じようぞ。

「じゃあ適当に歩いて歩いてなんか見つけたらそこ行くか」

そうしようかと答えたはいがここにはきたばかり、飲み物だつてまだ届いていない。話すような事も思ひ浮かばずじつと彼のことを見る。

私としてはなんだつて構わない、ずっとここにいて時間が過ぎるのを待つのだつて。でもそれじゃつまらないだろう、彼が。

「あなた、普段燐子とはどんなことをするの？」

「何か食べたり買い物したり……だな」

「それ以外には？」

「それ以外……たまにゲームしたりとか」

飲み物が届いてそれを口にしながら話をする。これからどうすれば彼がつまらないと思わないのかと気になって聞いてみたが、どうにも燐子としていることは私としているそれとそんな変わらないらしくて。

唯一違うとすればゲームしたりということだが……それは私では無理だろう。面白い話でも出来たらよかつたのだが、生憎そう簡単には思いつかなくて。

ふと窓の外に目を向けると、うつすらと何かが降つて、水溜りに波紋を広げている事に気が付いた。

今の季節に雪など降るはずもないし、猫や犬が降るわけもない。であればこれは何か、わからないはずもない、でもわかりたくない。

「……………」

天気予報なんて当てにならないなんて思いつつも、これは蒼音とのデートの約束を横から奪った私への罰、なんて風にも思ってしまう。

「傘持つてるか？」

「ないわ、あなたは？」

「俺もだ」

準備しとくんだつたと蒼音はぼやくがそれは私だつて一緒。これでは何処かに行くなんてできない、私は別に構わないけれど彼は…………

「…………止むと思うか？」

「…………無理そうね」

「だよなあ」

あまりに強ければ弱まるのを待てばよかっただろう、しかしこの程度であれば待つていても弱まるよりも強くなっていくだろう。

嫌になるほど強くはない、でも気にならないほど弱くもない。明日は練習があるし風邪を引くわけにもいかないし、多少濡れるのは我慢して駅に戻ってしまった方がいいだ

ろうか。

そんな風に考えていると彼は財布からお金を取り出し机に置き、頼んだ珈琲を飲み干して席を立つ。

「強くなる前に傘買ってくる」

「え……」

お金は払つといってくれなんて言っていたが、彼が置いていったのは彼の分だけでなく私の分を払つてもまだ足りるくらい。

これが一番、それはわかってる、私だって雨に濡れたいわけじゃない。

「はあ……」

肘をつけて外を眺めているとため息が出てしまう。暇だ、スマホの充電はないし一人では何もできることもない。

何故だろう、蒼音といってもそんな話をしてたというわけではなかった、なのに今更になつてそれを感じている。

「……早く戻つてこないかしら」

その呟きに意味はない。暇だから、一人じや寂しいから、なんて子どもみたいな理由じゃない。雨が強くなつてしまうのを心配してだ。

店の中の時計は見えないからどれほど待ったかわからない、でも少しは待ったはず、

だけど雨のせいで遠くまで見えないせいも蒼音の姿は見えてこない。

……もしかしてだが私の事を置いて帰ってしまったのか。そんなこと彼はしないかわかっている、だからもしかしてだ。

手を繋いで歩いてたから長く感じただけで、実際の距離はそう離れていないというので駅で待っているのかもしれない。そうであれば充電のないスマホに連絡がきているから気づけてないというだけなのか。

でもここには彼に引かれるようにしてきたのだ、道なんて覚えていない。だから祈るようにここで待っているしかなくて。

おかしい、私は何を感じているのだろう。嫉妬とはまた違う今の空のようにどんよりとしたそれ、不安で不安で仕方がない。

こんな風を感じたのは子どものころ以来だろうか、落ち着かなくてどうしたらいいかわからない。またため息を一つ、紅茶を飲むがそれが晴れることはなくて。

それを幾度か繰り返しているところらに向かつて歩いている人影が見えた。誰かはまだわからない、が期待を込めそれを見つめそれが蒼音だとわかると殆ど飲んでなかった紅茶を飲み干し、代金を払って外に出る。

「遅かったわね」

「そんな時間経ってないだろ」

体感であれば30分程は待ったと思うが、実際にどうかはわからないので？だと断じることが出来ない。

思わず代金も払ってしまったので店の中に入り直すのは気が引ける。だいぶ濡れてしまった様子の彼は屋根の下にきてビニール傘を一本渡してきた。

「……………」の後どうする？」

「……………」あなたはどうしたいのかしら」

「別に」

彼のそれは答えてはいるが答えになっていない。

答えになつてない、だけど……………答えていないわけじゃない。

「……………」どうしようかしら」

「さあな」

空を見上げ屋根の外に向けて右手を伸ばす。大雨だ、止みそうな気配すらない。

互いに傘はあるけれど一步も踏み出さない、どこに行こうと提案もしない。それでも互いに、帰ろうとは口にしない。

「……………」

雨の音と水を跳ねる車の音、後は私の心音だけが聞こえてくる。暴れそうなほどじゃないのに、かき消されてもおかしくないそれは確かに聞こえてくる。

彼の方を見る、聞こえてくる音が大きくなった。ここに來るときに繋いだ手を見て、自然と彼のものに向けて伸びてゆき……

気づいたのか彼がこちらを見てきて思わず手を引つ込め顔を逸らす。どうして、というのには自分に問いてもわからない。

こんなことは始めて。リサから借りた本にもこういう描写は乗っていたし恐らく、彼が好きだからこうなるのだろう。

燐子も彼といるとこういう風になるのだろうか、ふとそんな事を考えたら、消えたはずの感情が一気に湧き上がってきた。

不安、先程よりも遥かに強い。一体何に対してと考え、なんとなく彼の事を見て気づく。

ああ、違う。何で抱いたのかじやない、何で今まで抱かなかつたのだろうか。知ってしまえばとどまるどころを知らない、食い散らかすように不安が蝕んでくる。

もしかしたら嫉妬というのも元を探ればこれが原因なのかもしれない。

視線を彼の方に向けるとその不安は更に大きくなっていった。

目的もなく歩き回って、何もせず雨を凌いだり何処かに寄って、そんな事をしていたら時間はあつという間に過ぎ去っていた。

電車から降りて駅から出る。雨は未だ降りやまず、外が暗くなり始めたのもあつて視界を塗りつぶしているかのよう。

「ねえ、蒼音」

彼は傘を指して雨の中を歩き出そうとしている。なんだと聞き返してくる彼はなんと思っているのか、今日の事をつまらなかつたなんて思つてはいないだろうか。

屋根の下の私と空の下の彼、数メートル程度だけあまりに遠く感じてしまう。

「あなたは音楽のこと、好きかしら？」

「なんだよ、急に」

音楽は好きだ、それと猫も、それは彼も同じはず。彼を見上げる、何が聞きたいのかわからないという風にこちらを見ている。

「私は好きよ……あなたの事も」

じゃあこれも一緒なのか、あなたは私の事が好きなのか。彼は顔を背けるが私は目をそらさない、何とも答えない彼を見ていると胸に穴が開いてしまったかのように落ち着かない。

「……あなたは燐子のこと、どう思つてるの？」

「……どうもなにも、お前と一緒にだよ」

「それじゃあわからないわ」

わからない、それじゃわからない。予想はついたところで実際に言われないとそれは真実になりきれないから、わかっているとも言われたいから、あなたに言われたいから。

「……言わなくてもわかるだろ」

「わからないわ」

わからない、わかるはずがない。だって……

「私はあなたに好きだって言われたこと、一度もないわ」

彼はこちらを向いて、だけど何も発しない。気にならなかつた雨の音が段々煩わしく思えてくる、待てば待つほどそれは強くなつていつて。

「……好きだよ、友希那の事も……燐子さんも」

多分そうなのだろうと予想はついていた、だけど実際に言われると安心か喜びか、色々混ぜこぜになつたものを感じさせられる。

「私と燐子、どっちが好きかって決まってるのかしら？」

「……悪いけどまだ決まめれてねえ」

何も悪くない、決めれてないならそれでいい。あなたの口から好きだと聞けた、それだけで今日のこと、したことを後悔はしていない。

「……そろそろ帰りましょ」

「……そうだな」

隣り合つて歩き始める、そこに会話はない。私はあなたが好き、あなたは私を好き。改めて知ることができた、知ってしまった。

あなたはいつか選ぶ、私か燐子のどちらかを。それは待つべきことで、迎えてほしくない。

怖くて、怯えて、嫉妬して期待する。それらを知ってしまったのは良いことばかりではない、が悪いことでもなくて。

あなたがいつか私の事を好きでなくなってしまうんじゃないかなんて、今まで考えたこともなかったしこれから考える必要もなかったのだろう。

だけでももう考えずにはいられない。それはきつと代償だろう、誰によるものか、そんなもの、問うまでもなくわかりきっていた。

不透明なもの

「はあ……」

ため息がこぼれる。意味もなく天井を見上げるとまた一つため息がこぼれて今度は視線が落ちていく。

嫌なことがあったわけじゃない、困ったことと言うのは違うだろう。迷っている、ただそれだけだ。

どうすればいいんでしょうなんて聞ける相手はいない。恥ずかしいとか知られたくないだとか、それ程に付き合いの深い知り合いがないから。

全部本当のこと、だけど全部違う。この悩みは、俺が一人でどうにかしないとイケないものだから。

誰かに聞いてそれで曲げるのは駄目だ。俺の問題、俺に託された選択、であれば誰かに少しでも委ねることは許されない。誰でもない、俺自身がそう思っている。

好きと言われて好きと言って、それはいつまでも慣れないし恥ずかしい、そしてなにより嬉しくてたまらない。

いい加減決めないとなと思っただけでも決めれない、いい加減には決めたくない。

選択をしてしまえばそれで終わり、どうなるかはわからないがあっさりとして恐ろしくて、目をそむけたくなってしまう。

バイト行かなきやなどイヤホンを付けながら外に出るが、雨が降ってるせいかなんか憂鬱な気分になる。

最近雨ばかり、いつになったら晴れるのだろうかと思いつながら歩を進める。

ああ、そういえば今日は気になっていた本の発売日だ。バイトまではまだまだ余裕もあるし、帰りは雨が強くなってしまうかもしれないし先に買ってしまったか。

本屋の方に足を向け、やっぱりやめた。イヤホンを外して再び歩き出す。優柔不断だな、なんて思いながら歩いていると、またため息がこぼれた。

「蒼音さん、こんにちは！」

「お久しぶりです」

「……お久しぶりです」

こんな日に客なんてこないだろう。その予想は当たり退屈な時間を過ごし、バイトを終えて外を見ると雨は止んでいた。

雲は消えず太陽は見えていないが雨よりまし。この天気なら来る時に寄らなかつた本屋に行ってもいいが、バイト終わりというのものもあるのだろう、あまり行く気にはなら

なかった。

明日もバイトだし明日でいいか、なんて考えながら水溜りを避け歩いているとあちやんとひまりちゃん、蘭ちゃんに出会った。

「どうかしたんですか？」

「……なんでもないよ」

あちやんを見る、その隣を見る。そこにいるのは蘭ちゃんとひまりちゃん。見間違えるなんてことはない、わかってはいるけど、やっぱり少しだけ期待してしまう。

「蒼音さんってこの後用事ってありますか？」

「……ないかな」

「それならあこたち一緒に来てくれませんか!？」

どうやら三人はカフェに寄った後雑貨屋に寄るとのこと。別に俺は構わないが他の二人はどうなのかと聞いてみると別に構わないと言われる。

それじゃあ行きましょうとあちやん、そして何故か張り切っているひまりちゃんは元気に歩き出す。

「……すみません、突然こんなことになって」

「いいよ、寧ろ俺が混ざって迷惑ならいかなってくらいさ」

「あの二人はそういうの思わないですから」

「蘭ちゃんは？」

「そうだったら嫌だつて言いますよ」

正直だな、と思いつつも嫌じゃないと言われてるようなものだから悪い気はしない。ゆつくり歩いていると置いて行かれてしまいそう、ちよつとだけ歩幅を広げると蘭ちゃんも合わせてくる。

目的のカフェは遠いのだろうか、なんて前の二人を見ながら考えていたらそういえば、と隣から話しかけられた。

「湊さんとはどうなんですか？」

足が止まる、釣られてか蘭ちゃんも。

どうなのか、答える言葉は何一つとして浮かんでこない。悪くはなつてないし進展といえるようなものもない、でも別にと答えるほど何もないわけではない。

好きになるだけでは駄目、それはもう一人にも起こってしまう事だから。

好かれるというのとはわからない、数字があるわけでもないし読み取れるものでもないから。

「わかんない……かな」

「……そうですか」

今の友希那との関係、表すとしたら何になるのだろう。

恋人ではないけれど、知り合い程度ではないはずで。

友人では足りないが、親友とするには付き合いが短すぎる。

両想いというのは合っている、でもそれはあいつだけじゃなくて。

大きいため息をつけてから歩き出す。こんな関係あいつと燐子さんだけ、名前をつけられないその関係は心地いい、抜け出したくないくらい。

でもこの関係はそれと一緒に罪悪感が襲ってくる。好きだって気持ちに正しく答えられない、思いがりだとしてもそれがとても辛い。

いつ出せと決められたら俺は答えられるのか、それはいつになるのだろうか。なんて考えてしまつてまたため息が。

そうじゃない、決められたらと言われたのだからそんないつかを待つのは違う。

イライラする。蒸し暑い中空を見上げ、それだけを思っていた。

「蒼音さん、一口だけ、一口だけ食べさせてもらうことはできませんでしょうか!」

「……まあ、ひまりちゃんがいいなら」

「ありがとうございます〜!」

俺の前に運ばれてきたスイーツを見ながらそんなことを聞かれる。その様子は迫真ともいえるもので断れず了承する。

お腹が空いていたわけでもないしなんとなく甘い物が欲しかっただけ、食べなれていないそれを頼んだ理由はそれだけだ。少量であるが美味しそうに頬張る彼女を見てそんな事を考える。

それを見て自分のスイーツを口にするるとひまりちゃんがお返しにか自分のも分けますと言ってきたので断った。

好意を断るのはあれだが一口食べて満足だ、それに彼女もそうですかと言って幸せそうに食べ進めているし、作った人もあんな風に食べられる方が嬉しいだろう。見ているかは知らないが。

「蒼音さんって甘い物食べるんですね」

「食べるさ、蘭ちゃんも食べれないってわけじゃないでしょ？」

「そうですけど、なんかイメージと違うっていうか……」

「蘭く、決めつけるのはよくないよ〜？」

甘い物は嫌いではないし苦手じゃない、ふと欲しくなる時もあるがそれだけだ。角砂糖が大量に入った入れ物を眺めながら珈琲を飲むと甘い物を食べたせいかわちよつとだけ甘く感じた。

「そういえば聞いてなかったけど、雑貨屋に行つて何するの？」

「我が闇の力を封印し……え〜つと……そんな感じの物を探しに！」

全員が食べ終え少しして、その質問にあこちゃんはその答えに蘭ちゃんは困ったような表情を浮かべ聞き返す。

「……それ、あたしが行く必要あったの？」

「カツコいい蘭ちゃんがいたらカツコいい物なんてすぐ見つかるかなって」

「そ、そう……」

その返答に照れたように顔を背ける彼女、俺も二人に対してはこんな姿をしているのだろうか。

そろそろ行こうという提案を受け店を出ると、何かを見つけたかのようにあこちゃんが走り始めた。

「りんりんくん、偶然だね！」

「あ、あこちゃん……それに……」

目が合つて、軽く頭を下げるとそのまま返される。その後彼女は二人に対して視線を向けたが、あこちゃんがそうだと発したせいかわいらしい視線が行く。

「りんりんも一緒に雑貨屋行かない？」

「……えつと……」

「白金さんはこの後予定とかつてあるんですか？」

「本を……買おうと思って、ましたけど……急ぎでは、ないので」

もしかして燐子さんが買おうとしている本は俺の買おうとしているものと一緒なのか、なんて考えていると彼女と再び目が合う。

本を買おうと思っていた、だけど別の事に誘われてそれを承諾しようとしている。それは本を買うのはいつでもできるからか、それとも……

「蒼音さん確か買いたい本があるって言ってましたよね」

「えっ、そんな事言ってたっけ？」

「もー、蘭はちゃんと聞いてたよね？」

ひまりちゃんが蘭ちゃんをつついてるのが見える、その理由は……知っているからだろう、でなければこんな？はついてくれない。

誰から何処から、なんてのは今気にしてもしょうがない。蘭ちゃんがこちらを見てくる、じっと、察するように。

「……うん、言ってたよ」

「じゃあ折角ですし、蒼音さんは燐子さんと本を見に行ったらどうですか？」

「でもそれじゃあ……」

「大丈夫ですよ、私達にはカツコいい蘭がいますから」

蘭ちゃんの背中を軽く叩きながらそんな事を言っつて、あこちゃんが悩みながらもわかったと言うと彼女の手を引いてひまりちゃんは歩き始め、蘭ちゃんはその隣について

行った。

見られていることに気づいたのかあこちゃんはこちらに手を振っている、よく見えな
いがひまりちゃんは頑張ってくださいという意図なのか親指を立てているのだろう。

手は繋がらない、まだ彼女達に見られているから、なんて今は言い訳はできるがそれが
なくなつた時どうだろう。

「行きましようか」

「……はい」

三人の姿が見えなくなつて歩き出す。右手には何も無い、彼女は逆で左手にだけ何も
ない。決めたわけじゃないのにそうなるように荷物を持ち替えた。

無理矢理は繋げない、繋ぎませんかなんて切り出せない。

空いた手同士がたまたま当たつてしまい、ごめんなさいと言つて引つ込めたその手を
見て彼女を見て、目が会つた。

そらされて、俺も遠くを見て。手を降ろして少しだけ近づくと、今度は当たることなく
そのままだった。

本を買つた。燐子さんと俺の求めていたものは一緒に、二人してそれを手にした時に
はお揃いですね、なんて言われてしまった。

その後外に出て、だけど互いに帰らない。会話はない、何もしていない、それでも足は動かない。

解決法なんて何処か寄りましようと言うだけ、でも何処に行く？ それがわからないからこうなつてしまつてゐる。

「暑い……ですわね」

「そうですわね」

見上げると空は変わらず雲で覆い隠されている。また雨が降つてもくるかもしれない、彼女の傘は見えない。

雨は降るだろうか。降るのを期待しているわけではない、だが降るなという嘘になる。

そんなもの調べればすぐに出るだろう。でもそうせず彼女を見て、また空を見上げる。

わからない、わかるはずもない。この後の天気、明日の事に未来の事。

荷物を持ち替えると開いた手にまた手が当たる、今度はその手を繋ぐように。

それはどちらからなのか、そんなことさえわからなかった。

夢を見て

「燐子さん……」

目の前に蒼音さんがいた。どうしてこんなことになんてわからない、とにかく目の前に彼がいて。

動かない、動けない。後ろの壁に背中を預け、崩れてしまいそうな足を無理矢理立たせ、視線は彼から離せない。

彼の両手が私の頭の横に、彼の顔が近くに。声が出ない、駄目と発することすらできなくて。

自然と手が動く。彼を突き放すのではなく、引き寄せるように。

何をされるか、なんとなく予想はつく。瞼が落ちていく、開いているべきだとわかっ
ていても言うことを聞いてくれない。

彼との距離が後ほんの少し。近づく程に瞼が落ちていき、ついにそれは落ちきって

……

パチリと、先程までのが嘘のように目が開いた。

「え……」

理解が追いついていない中、アラームの音と激しく鳴る心音だけが耳に入ってくる。そしてゆっくり、ゆっくりと浮かび上がってくるのは恥ずかしさ。

十分に涼んだ部屋、だが全身沸騰してしまいそうな熱を感じてようやく理解した。

あれは、夢だと。

アラームを消すことすらせず布団にくるまる。忘れろ、忘れてしまえと。でもそれはアラームが鳴り終えて、それでも消えることはなかった。

離れない、今朝の夢が離れてくれない。そんなだから練習で失敗してしまうしそれも一度程度ですむ筈もなく。

普段なら夢なんかすぐ忘れてしまいうくせに、そもそも思い出すことすら出来ない癖して、今日ばかりは延々と襲われ続けている。

忘れようとして、でもそうすればそうするほど浮かび上がってきて。それは彼に関することだからか、それとも……彼との、あんな夢だったからか。

練習中でなければ倒れ込んでしまいそう、今でも顔を隠してしまうくらいに恥ずかしい。誰も知らないのに、私だけしか知らないのになんでかそうしてしまう。

あの夢を忘れない、でもあの夢の続きを今すぐにでも見たい。

あれが夢じゃなく、現実に起きたとしたら……

「白金さん、大丈夫ですか？」

「えっと……何のこと、でしょうか？」

「何と言われましても、顔を赤くしたり抑えたりしてますので……」

体調不良を疑われているようで、大丈夫ですと返しても氷川さんの目は懐疑的なまま。少しでも気分が悪くなったら言ってくださいね、そう言っ水を手渡して彼女は練習に戻る。

こんな考え全部流してしまおうと水分補給をして、やっぱり消えなくて大きく息を吐く。

友希那さんの姿が目映り、じつと彼女の事を見る。たいした理由なんてなく、練習している彼女に吸い寄せられ離せない。

あまりに眩しいその姿に息が止まって、なんだか遠くに見えてしまつて。

大丈夫とはなんだつたか、やっぱり今日の私はどうかしてる。眩しくて、綺麗で、そんな彼女を見てずきりと胸が傷んで、指先から力が抜けていく。

「りんりん、今休憩中？」

突然、背後からあこちゃんに声をかけられた。どれほど見続けていたのか、私は友希那さんから視線を外しあこちゃんの事を見ると、もの寂しさと同時に安心感がやってきた。

彼女の事を見るあちゃんの目は輝いている。御伽話によく出てくる憧れる少女のよう、私がかつて蒼音さんに抱いたそのような。

「やっぱり友希那さんってかつこいいね！」

「……うん、そうだね」

そうだ、そうだろう。友希那さんは私と違って、私にない物ばかり持っていて……

「な〜に言ってるの、二人共かつこいいよ」

「わ！ びっくりした〜」

「あはは、ごめんごめん」

背中を優しく叩きながらそう言ってきたのは今井さん。思考の海から引きずりあげられ、ふと、友希那さんの事を見つめ直してみれば彼女は私の事を見つめていて。

まるで、吸い込まれるかのような視線を向けられていた。

「ねえ隣子、練習終わった後って時間ある？」

「えつと……大丈夫、です」

「なんの話するの？」

「今度のライブの衣装についてちょっとだけね」

それじゃあよろしくね、と言って彼女は練習に戻り私達も練習に。

今井さんの事を見ていると、練習場所まで戻ってから私の事を見ていて、視線が合

うと外された。話というのはライブの衣装についてだけではない、それくらいわかってしまう。

話すことも悪くないが練習を疎かにし過ぎるのもよろしくない。あこちゃんだって既に練習を再開している。

深く息を吸い、十分に集中をして鍵盤に指を置き、押す。それは曲通りのものだけど演奏とは言えないようなもので。

集中できない、曲の中に入り込めない。これでは私は部外者だ、曲の中での張本人になりきれていない。どうしたものかと考えていると唇に指が触れ、そんな程度でじわじわと顔が赤くなっていくのが自分でもわかる。

そんなままで今日の練習は終わってしまった今井さんと二人で外に出る。

「えつと……今井さん？」

「……あ、ごめんね、ちよつとぼーつとしちゃってたよ」

なんと切り出そう、頭を搔いている彼女はきつとそんな事を考えている。

ライブ衣装についてあれこれ話して、簡単に話がついた後やってきたのは無言の間。聞きたいことがあるのは間違いない、でも、私にはその予想もついていないから私は待つことしかできなくて。

そして数秒、あるいは数分か、それほどの時間が経って彼女はようやく私の事を見た。

「えーつとさ……隣子、友希那と何かあった？」

「友希那さんと、ですか？」

「あー、言いたくないとかならないんだけど……」

「いえ……友希那さんとは、何も……」

何か勘違いをされているのだろうか、私がそう返すと彼女はホント？ とこちらを見つめてくる。

少しの怖さすら感じるそれに頷くと、彼女は大きく息を吐いて壁にもたれかかった。

「よかつたり、アタシの勘違いだったみたい」

「いえ……ちなみにどうしてそう、思ったんですか？」

「なんか今日、二人共互いの事を意識してそうだったからさ」

私が彼女を意識していた、というのに心当たりはある。でもそれは私だけのはずで、友希那さんが私を意識だなんて……ありえるのだろうか？

「友希那さんが……ですか？」

「うん、たまーに隣子のこと見てたりしてさ」

気付かなかった？ と聞かれ思い返し、でも思いつかない。もしそうだとしたら理由はなんなのか、それも思いつかない。

「そういえば友希那とはって言ってたけど、蒼音とは何かあったの？」

笑顔に向けて聞いてくる。答えに期待しているようで、それでいて面白がりそうな雰囲気は微塵も感じない。

ああ、わからない。こんなことを考えてしまうのだ、やっぱり今日はどうかしてる。

「今井さんは……」

「ん、どうしたの？」

「どうして私に……手を貸してくれるん、ですか」

きつと聞くべきではないのだろう。今井さんも困惑している、ああでもわからない、なぜ私に協力してくれるのかなど、聞くだけ損だとわかりきっているのに。

「えーつと……もしかしてお節介、だった？」

「い、いえ、そういうわけじゃ……」

——どうして友希那さんだけでいいはずのそれを、私にもしてくれるんですか？

彼女の優しさからくるであろうそれ、理由なんてない、多分そう答えられる。わかっているけどわからないから、聞いてしまった。

友希那さんと私、付き合いでいえばそれこそ比べものにならないくらいは違う筈。それだけだからと言われればそれまで、私に先に相談されたからと言われてもそれまでだ。

彼女は何も答えずに飲み物を飲む。それは予想外で、段々と吸い込む息が深くなつて

いくのが自分でもはつきりとわかる。

「私もね、わかんないんだ」

そう答えると彼女は飲み物を一気に飲み干した。大きく息を吐き、私の事でもなく、まだスタジオに残る友希那さんの方でもなく、あらぬ方向を向いて話し出す。

「友希那には幸せになつてほしいし、勿論それは燐子もで」

視線を戻され笑顔を向けられる。心臓が一度だけ、大きく鳴った。

「だからどうなつてほしいのか、自分でもわからなくてさ」

それに対しなんと答えたらいいのかわからないしていると彼女が立ち上がり、彼女の顔が近くに来る。

「そういうわけだからさ、なんかあつたら気軽に相談してね」

「ありがとうございます」

それだけ言うと彼女は去つていく。残されてもすることはなく飲み物を飲み干して、でもその場を去ることはできなかった。

今井さんがわからないといったそれは、きっと誰もがそう思っているのだろう。それも、正解なぞないのだから。

「蒼音さん……」

彼はきつと、最も悩んでいる筈だ。わからないと、嫌なくらいに、逃げ出したい程に。

スマホを取り出してメッセージを作成する。恥ずかしいとかの感情は驚くほどなく、送ってようやく少しだけ浮かぶだけ。

彼が好きなのは、私が好きなのは、友希那さんが好きなのは。わかりきって、でも知り尽くせてはいないこと。

鞆から一枚のチラシを取り出して、それをじっと見つめていた。

暑い。雲は流れ蝉が鳴き、地面を太陽が照らし熱が襲ってくる。

そんなだけど嫌だとは思わない。額の汗を拭って大きく息を吐いて目当ての人物を待ち続け数分、その人物がやってきた。

「すいません、待たせてしまつて」

「いえ……私が早く、来すぎただけですから」

予定の時間よりずっと早い、そんななのにこんな会話は初めてでない。待ちきれなくて、待たせたくなくて。

蒼音さんとのカフェも慣れたもので、席につくと彼が私の分の飲み物まで注文してくれる。

彼を呼び出して、伝えたいことがあつて、でも会話がなまでのまでいつも通り。遮ってしまわないように彼は黙ってくれて、私は何故か口を開けない。

飲み物が運ばれてきてようやく鞆から本を取り出し渡す。彼から返される自分の本は他の本とは別の場所に置いてあるからこれが何回目か、なんてのも全部覚えてる。

「これは……」

「この前渡された本がそういうのだったので好きかと思っただけですけど……読んだことありませんか？」

「いえ、この本はない、です」

その本は彼が買わなそうだと思っただけで渡したものと似たようなタイトル。わざわざ買ってきたのだろうかとページを開く。

あこちゃんに好評だったけど彼はどうかだろう、つまらない、なんてことはなかっただろうか。

「……」

私が本を読んでいたからか蒼音さんも読み始める。そうして数分、本から目を外して、でも気づかれないように彼を見る。

気に入ってくるのか、それはいつも不安で仕方がない。そう怯えながらも本を読む彼を見てしまう。

ここにいるのは私と彼のみ、他のお客さんはいるけれど見知った人はいないから邪魔は入らない。珈琲を飲む彼を、ページを捲る彼を見続けていると、ふと彼がこちらを見

てきた。

理由なんてないのだろうその行為、でも誤魔化すように急いで本に視線を落とす。気づかれたかもしれないということではなく、彼を見ていたというそれに恥ずかしさを感じてしまう。

もしかしたら顔が赤くなっているかもしれないから本を持ち上げ顔を隠す、なんでもないかのようにページを捲るが内容なんて入ってこない。

本を下げ、目だけ出すようにしてそろりと覗き見る。彼の視線は落ちていてホッと胸を撫で下ろし、だけど少しの寂しさを感じて。

「……はあ」

今日彼を呼んだ理由、それをずっと切り出せない。彼から今日何をするんですかと聞いてくれれば言えるかもしれないが、でもそんなの待つていても来るとは限らなくて。

理由もない、目的もない、ただ一緒にいたいだけ。そうである時は聞かれたくないと願うそれを今は熱望している、もしそうになったら答えられるかは別だけど。

「そっさいえば燐子さん」

「は、はい……」

突然名を呼ばれ、少し裏返ったかのような声を出してしまう。もしかして、と期待し鞆を引き寄せた。

「今度のライブ、楽しみにしてますね」

「えっ……来るん、ですか？」

「はい」

駄目でしたか？　なんて聞かれたから首を振る。そんなの聞いてない、来られて困ることなんて何も無い、ただ緊張する、それだけだ。

そうならないくらい集中すればいい。わかってて、簡単で、されど難しいこと。

「た、楽しみに……してて、ください……」

「頑張ってくださいね」

緊張する、それは彼がライブに来ることなのか、彼に私の演奏を聴かれることなのか、どちらなのだろう。

似てるようで少し違う。両方かもしれない、好きな彼だからなのか、憧れた彼だからなのか。

でも好きだから憧れる、憧れたから好きになる。そんなの、全く違うから。

「蒼音さんは最近……どうなん、ですか？」

「……やっぱり楽しいですね」

笑いながら、なんともないかのように、恥ずかしげに、そんなのを期待していたけれど、彼は下に俯きながらそう答えた。

どうしてそんな顔をするのか、聞けるはずもない。ただ寂しそうにしている彼を見ていることしかできなくて。

「今度演奏聴いてもらって、何かアドバイスでもくれませんか？」

「そ、そんな……私なんかじゃアドバイス、なんて……」

「それなら聴いてもらうだけでも、誰かに聴いてもらいたくなって思ってたので」

それならと了承して、なんでそんなことをと考える。彼ならきつと私より上手で、立場としては逆の筈なのに。

先程の表情と何か関係しているのか、そんなことを思い鞆から手を離し、飲み物を口にする。

友希那さんは知っているのだろうか、ふとそう考え、頭を左右に振る。

「どうかしましたか？」

「い、いえ、なんでもない、です……」

彼女だけが知っているのが嫌ならば聞けばいい、ああでもあんな表情をされてしまったらそうすることもできない。

結局、今日の目的は達成することができぬままその日は解散してしまった。

「あ……」

日が落ち始めて地面がオレンジ色に染まってきて、今日の事を思い返しながら帰り道を歩いていると、すれ違った人に目が行った。

その人も私の事を見て立ち止まっている。銀色の髪に夕焼けが映り、幻想的なその雰囲気に吸い込まれた。

「……………どうかしたかしら」

「いえ……………なんでもない、です……………」

目をそらし、閉じる、その行為になにも意味はない。暗闇で過ごす数秒、その間は何もなく、光が戻ってもそう。でも友希那さんはそこにいて私の事を見ている。

近くを車が通りすぎて、汗が流れるのを感じ取れて、そして彼女が口を開く。

「この後時間、あるかしら？」

長くはならないわと言われ頷き、ここではなんだからと歩き出した友希那さんの後を追う。

彼女との距離はほんの少いで、それこそ彼女の影を踏めるくらい。なのにとても遠く感じてしまつて一歩がだんだん小さくなる。

気にしないようにと思つていることは余計に気になつてしまう。なんでもそうだ、例えば今日の事だつて。

聞くべきでない、そうわかつてる。それに憶測にすぎないことだ、ああでも、思い返

してみれば当てはまってしまふ。

私知らなくて、彼女だけが知ってる彼のこと。そしてそれは、彼にあんな顔をさせるもので……

「……はあ」

下を向いてため息をつき、足が止まってしまっていたことに気付き少し早めに歩を進める。

結局のところ知ったところで私がどうにかできることなのかもわからない。触れられないならそのままでもいい、触らぬ神に祟りなしだ。

「それで……何の用、ですか？」

友希那さんが足を止めようやく追い付いて、たどり着いたカフェに入店する。このカフェ、この前彼と来たところと同じだ、なんて事をぼんやりと考えていた。

カフェの中は涼しくて、生き返ったかのような感じさえする。冷たい飲み物だけ頼み、彼女の言葉を待つ。

「燐子は……不安になることってあるかしら？」

「えっと……なんのこと、でしょうか？」

「蒼音のことよ」

突然のその言葉はよくわからない。聞く理由も、その意味も。それに彼女はそういつ

たものと無縁、勝手だけれどそんな風に思っていたから。

「怖いとか恐ろしいとか、私は彼の事を考えると、最近そんな風に思ってしまうことがあるの」

「それって……」

「勿論彼の事じゃないわ。」

……いえ、彼の事なんだけど、彼の事じゃなくて……」

弁明するかのような彼女を見て、安心した。わかる、わからないはずがない。だから心の中で同意して、少し嬉しくなる。

私も抱くのだ、怖い、恐ろしいと。それは彼自身じゃなく、彼の関係に対して。

「……わかり、ます」

「……あなたもなのね」

「はい、思わないはず……ない、ですから」

友希那さんの事を見る。じつと、瞬きすら忘れてしまったかのように。そうすると彼女も私の事を見返してくる。

自分と蒼音さんとの関係、友希那さんと彼との関係、そしていつか訪れる未来、それら全てが痛いぐらいの不安を押し付けてくる。

「……それだけよ、私が聞きたいのは」

そう言って砂糖を入れた珈琲を飲む彼女は先程とは違い、なんだか近くにいるように感じ取れた。

目の前で座っているのだからそれはそう、でもそうじゃない。彼女もそんな事を思うんだと、そんな風に知れたから。

だからこそ、許せない。

私と同じ風を感じてしまう彼女が知っている事を私が知らないという事。彼女自身じゃなくその事実と、知らない私が許せない。

だから今日あったこと、私は気がついたら既に聞いていた。彼と音楽のこと、それを知りたくて、知らずにはいられなくて。

「……どう言えればいいのかしら」

「知って……いるんですね」

「ええ、でも……」

友希那さんが窓から外を見る。言いたくないのか、言えないのか、どうにせよただ彼女の言葉を待つだけで。

「……燐子は、どこまで知っているのかしら？」

「どこまで……?」

「そうね……彼が音楽をやめていたことは?」

「え……」

これくらいは知っていると云う風な様子で言われたその言葉はあまりに衝撃的で、信じたくなくて、嘘だと願ったけれど彼女の表情は真剣そのもの。

なんで、どうして、彼女の口は開かない。聞きたくて、でも聞きたくない。私の憧れた彼がピアノをやめていたなんて認めたくないから。

「……友希那さんはその理由、知ってるん……ですか?」

「ええ、でも……」

知っているけど言えない、言いたくない、再び窓から外を見る彼女からはそんな考えが読み取れる。

私も外を眺める。景色はオレンジ色に溶けて、いつか見た夢よりずっと現実味がなく幻想的だ。だからこそこれが夢だったらいいな、なんて思ってしまった。

「……………」

言葉はない。何を話せばいいかもわからなくて、今は何も聞きたくなくて。踏み込んでしまえばいい癖に、最初から聞かなければよかった癖に。

友希那さんと別れてカフェを出て、それでもまだ上の空のまま、ただ時間だけが過ぎ

ていった。

「はあ……」

真つ暗な部屋、ベッドに横になり電気もつけずにぼーっと天井を眺める。

ネットでは彼の事を調べたら出てくるだろうか、なんてことを考えながらも実行する気がどうにも沸かない。

もう、よくわからない。私の憧れていた彼は音楽をやめていた、ただそれだけ。それに今は再開してる、いいじゃないか、終わりよければと言う言葉があるかのように、今がよければそれでいいはずなのにどうして。

憧れていた存在がそうなっていたことが悲しいのか、それとも彼がそうなってしまったことに思うことがあるのか、そんなことすらわからなくて。

……いつから、なのだろうか。私と再開する前から既にピアノを再開していたのか、それとも、私と再開した時には辞めていたのか。じわじわと、侵食されていくかのように思考が汚されていく。

思考はそれきりで、身体が電話をかけていた。着信待ちの音だけが鳴る部屋、私の中で心音が静かに響いている。

『どうかしましたか?』

その声を聞くとと思う、改めて思う。私は蒼音さんのことが好きなんだな、と。
「蒼音さんは……ピアノのこと好き、ですか？」

『……はい、好きです』

「……そう、ですか」

よかつた、と声漏れた。その回答は、私の夢を叶えるために必要なものだから。
ずっと昔の言葉、彼は忘れてしまっているであろうそれを私は思い続けている。

『……突然どうしたんですか？』

「いえ……ただ、声が聞きたかっただけ、です」

今度あった時、その時こそ今日の目的を果たそう。彼がピアノを好き、それだけわかればもう、迷う必要はない。

その後少し会話をして電話を切る。また真つ暗な天井を眺めるけど先程とは違う。知れたから、彼のことじゃなく、私の本当の気持ち。

彼を憧れていたから好き、好きだから憧れた、そんなの全部関係ない。

彼が好き、それに理由なんてない。ただそれだけ知れた。

目を閉じる。なんだか今日は、いい夢が見れる気がした。

引きずられて

ピアノは好きですか？ 何気ないその問いが頭の中に残っている。

はいと答えた。偽りない、心からの答え。今でもそれは正しいと思ってる、それでも思うところがなにもないというわけではなかった。

嫌いじゃなく好き、好きで好きで大好きでたまらない。それはわかっている、思っている。

ピアノの事を考える度に母親と父親が頭によぎってくる、お前はそれでいいのかとこちらを覗いてきて、その度縮こまってしまう。

関係ない、なんて切り捨てられる程大人じゃない、わかりましたと押し通されてしまうほど子供でもない。失ったものは大きすぎて、だからまだどこかで決めきれないだけ。

「えつと……なにかあつた？」

「……別に、なんにもないさ」

これは俺の迷いであって、自分の答えは既に出ている。だからリサの心配の声も関係なくて、寧ろそうされるとなんだか辛さすら沸き上がってくる。

本当にめんどくさいやつだ。何度答えを出してもすぐに引つ込め、また出しては引つ込めて。決めてしまえばいい、後悔なんて飲み干してしまう度量を持てばいい。だが、そんな馬鹿のようにはなりきれない。

今日は買い物途中のリサと、それに付き合っていたひまりちゃんに出会い、お互い暇だと確認が取れたので音楽教えてと頼まれた。

なくなるものではないから教えたっていいのだが、教えるとなればリサは *R o s e l i a* の演奏を聴かせてくるだろう。

どうやら俺は、次のこいつらのライブを相当楽しみにしているらしい。聴くならとっておきたいから今は聴きたくない、なんて子供のな思考、だから断った。

ひまりちゃんの方なら、と思っただけれど自分達だけじゃ悪いからと言われてしまう。でもそのかわり、私達のライブも来てくださいねとも言われたが。

「それにしても今年はいつにも増して暑いね〜」
「毎年そう言ってるさ〜」

「正解。でも実際そうだからさ〜……」

手で自らを扇ぐ、そんな程度で変わる筈もなく汗が流れてきた。日向で焼き焦げるのはよろしくないと言陰に避難しているのだが、やはりその程度で変わる筈もない。

「カフェかコンビニ、どっちか行きませんか？」

「賛成。蒼音はどっちがいい？」

「あー……カフエで」

「それじゃあ早く行こ、これ以上外にいと溶けちゃいそうだし……」

この二人は買い物帰りだし少し休憩したいだろう、そんな考えがなかったわけではないが、やはりこの暑さはコンビニのアイス程度で消せるものではない。

暑いと嘆くひまりちゃんの声を聞きながら、あまりの暑さからか陽炎の立つ道を歩いて向かうカフエは、実際よりずっと遠くに感じた。

カフエに着いて扉を開けると、世界が変わったかのように冷たい風が吹いてきた。寒すぎるなんて思ったのも一瞬で、すぐに気持ちいい程度に収まった。

席について冷たい飲み物を頼んで、見回してみればどの客もだらつとこの涼しさを満喫していた。

「夏休みももう終わっちゃうね」

「ほんと夏休みつてすぐ終わっちゃいますよね」

リサが溢した一言に、ひまりちゃんがため息を付け足し同意した。後一週間程度、たったそれだけで今年の夏休みは終わってしまう。本当に日が経つのが早い、毎年そうだけど今年は特にそうだった。なんて、これも毎年言っている気もする。

今年が色々あったからか、物足りなかったからか、それとも去年の夏休みが何も無すぎたせいかな。どうにせよ夏休みが終わった後の事を考えると憂鬱で。

「ひまりは夏休みの宿題終わってる？」

「流石に終わってますよ！」

「あはは、ごめんごめん」

その話題を聞いてふと頭に浮かんだのは友希那の事。勉強があまり得意そうな風ではなくて、音楽と猫以外に興味を持たなそうないつのこと。

「なあ、リサ」

「ん、どうかした？」

「友希那って課題終わらせてるのか？」

なぜあいつのことを考えた。気になったから、心配したから、それともあいつだからなのか。

「今週ライブあるし、流石に終わってると思うけど……」

「だよなあ……」

なんだろう、その返答はどこか気にくわなかった。別に言い方とかそうじゃない。予想が外れたというだけなのか、よくわからないまま窓の外を眺める。

「どうしたの、なんか残念そうじゃん」

残念そうとはどういうことか。疑問を抱き、ため息が自分から聞こえてきてやつとそういう気分な事に気づく。

こういう風に期待するのはよくないことなのだろう、ああでも、そうあつて欲しいと願わずにはいられない。

珈琲を口にする。甘くない、砂糖もミルクも入れてないからそれはそうだ。その何処が好きなのかと言われたらわからないがいつも口にはしている苦さ。

その筈なのに今日はやけに舌に残る、喉に引つ掛かるみたい。ぐつと、全部溶かして流し込むようにして飲み込んだ。

「でも昨日あこちゃんに会った時はまだ課題終わらせてないって言っていましたよ」

「あはは、この間その話したら紗夜に怒られてたよ」

あこちゃんといえば昨日NFOにログインした時彼女がオンラインと表示されていた、てつきり彼女も終わらせていたのかと思っていたがそうでもないらしい。

とはいっても彼女には燐子さんがついていて、全く進んでいないということはないだろう。だがどうか、燐子さんは優しすぎる面もあるから心配ではあるが……まあ、真面目でもあるから大丈夫か。

「そういうえば蒼音、明日あこが燐子と課題するって言ってたから行ってみれば？」
「俺はもう終わらせてるが」

「そうじゃなくて、嫌なの？」

そんなの俺に利点がない、だからといって断れるかどうかは別。頭でわかって、冷静に判断して、そうして答えは出せなくて。

嫌ではない、けどどしたわけでもない。こうして悩まされる理由はたった一つ、燐子さんだけ。

悩む俺を見てか二人は顔を合わせる。何か企んでいるのか、口には出さず、頷くだけでこちらに視線を戻してきた。

「蒼音さんって教えるの上手そうですね、燐子さんも助かると思います」

「そうそう、燐子も感謝してくれると思うな」

……断りにくい。罪悪感を感じるからじゃない、正当性を告げられたからじゃない。ただ煽られたから、俺の迷いの火を。

「……俺が行ったって邪魔、あこちゃんだってそう思うだろ」

「あこはそこら辺大丈夫だって、蒼音の事よく思ってるだろうし」

「この前蒼音さんのことかっこいいって言ってましたよ」

この二人、徹底的に断らせない気だ。まあどうしても断りたいわけじゃない、邪魔になるかもしれないから、そう思ったただけだ。

そうなりそうなら帰ればいい、とまで言われてしまえば逃げ道はない。わかったよと

伝えると二人は顔を合わせ、上手くいったと言わんばかりに笑ってる。

「それじゃ、あこと燐子に知らせとくね」

そう口にしながらスマホでメッセージを打ち込んで、行動力の塊みたいなやつだ。

どんな感情なんだろう、今の俺は。面倒とは思っていない、嬉しいというには語弊がある。

言い表せないような感情を抱きながら外を眺めていると、日陰に隠れている黒猫を見つけたのでその子の事を暫く見つめていた。

曇り空、しかも予報によればこの後雨も降ってしまいうらしい。憂鬱さを抱え、足は重くなく、だけれどため息は漏れてしまう。

決められた時間はまだ先、とはいってもわざわざ時間を潰すほどのものじゃない。そろそろ出とくかとかと家の扉を開けた。

「えつと……」

見間違い、ではないだろう。上から下まで見回して、遡るかのように見直しても視界は変わらない。扉を開けると友希那がいて、鞆を抱え待っていたかのように俺の事を見ている。

言いくいことなのか、一体いつからか、待てど待てども彼女の口からは何も発され

ない。目を剃らされてしまって、時間も有限なため、どうせこいつの事だからと、予想できることで話しかけた。

「……猫に会いたくないなら悪いが今日は予定ありだ」

「いえ、そうじゃなくて……」

どうやら違うらしい。ならばなんだと、そうなれば予想はつかない。

友希那の視線はあちらこちらと泳ぎ、やっと俺の方を見たかと思えばまた目をそらす。そうして鞆を顔を隠す程にまで上げ、顔を見せないまま声を出した。

「燐子とあこと勉強するって聞いたから、その……」

友希那もくる、なんて誰からも聞いてない。そも今日勉強をするだなんて誰から、と考えても仕方がない。

勉強するなら自分も一緒にしたい、という理由であればそれはいいことだ。だけどあのなんとも言えない間、先程の視線の動き、もしかしたらと俺は聞いた。

「お前……さては課題終わってないな？」

ビクリと彼女が跳ねたように見えたのは気のせいか、でも関係ない。すぐさま否定の言葉が飛んで来ないというのはつまりそういうことで。

「そりゃ駄目だろ……」

「嫌……かしら？」

ライブが近いのだからそんなの駄目に決まってる、であれば Roselia のファンとして曇りない演奏を聴くためならばできることはしたい。

だからこの問いに対しての答えは一つしかなくて、それが嫌だと感じるかと聞かれたら……ありがたいとは思わない、でも嫌だとも。

「……それ、二人に許可は取ってるのか？」

「いえ、まだよ」

「そういうの先に向こうに伝えとけよ」

「あなたがいいって言うかわからなかったから」

友希那も勉強したいって言ってるんだけど大丈夫か、あちちゃんとのメッセージ欄にそのように打ち込んでいた手が止まる。

その言葉に隠れた意味、こいつ自身は気づいているのだろうか。そういうところそ恥ずかしがれよ、なんて文句は心の内にしまっておく。

「あちちゃんは大丈夫だって」

「それなら行きましょう。」

ところで勉強ってどこでするべきなのかしら」

「普段なら家でいいだろ」

家の扉を開けて数歩、移動距離としてはそれだけではあるのだが時間だけはだいぶ

経っている。

「ちよつと早めに歩くぞ」

これでは昨日浮かんだ心配と全く一緒に、そんな風に感じさせてくれる彼女にちよつとだけを安心して。

空を見上げる。相変わらず空は曇っていて何も見えないから、よくわからなかった。

「りんり〜ん、ここ教えて〜」

「えつと、ここはね……」

燐子さんがこちらを見てきていて、でもそれはすぐにあこちゃんの方に戻る。教えている途中でもチラリと、それに気づかないふりをしてやり過ごす。

「蒼音、ここなんだけど……」

その言葉で俺も友希那に視線を戻す。カフェのテラス席にて俺が友希那に、燐子さんがあこちゃんに教えてる。

ここにやってきて二時間ほど、それだけ経ったにも関わらず会話の量は相変わらず少ない。

燐子さんと話せない。互いが教えているから忙しいというのもあるけれど、そんな中でも話そうとしたら丁度よく友希那から教えろと言われるから。

友希那ともそう多くは話せない。なんと話しかけられるかが見当たらないというのがあるけれど、単純に話していると集中できないというのを思うから。

唯一あこちゃんとは多少話せるのが救いか、でも彼女も燐子さんに教わっているのだからずっと話すというのはできなくて。

「やっとな終わった〜！」

「お疲れ様、あこちゃん」

「友希那さんでもできましたか？」

「……ええ、それなりにね」

あこちゃんが大きく伸びをしてそう言うなり張り詰められたような空気が消えていく。

その空気を読んでか、それとも流されてか、友希那がまだ途中の課題ごと鞆にしまう。そうして俺の事をじっと見てきているということはつまり、そういうことなのだろう。

「これでライブに向けて集中できるし頑張るぞ〜！」

「いい心がけね」

どの口が言うんだかと思いつつも、こいつは終わらなくても練習第一か、という事を考えるとなんでかため息がこぼれた。

燐子さんと目が合った、でも話さない、なのに視線は離さない。微妙な雰囲気なそれ

は、そういえばと言うあこちゃんの声で消え去った。

「蒼音さんはピアノのコンクールに興味ないんですか？」

「コンクール？」

「うん、りんりんがこの前コンクールに出たいって言ってたから、蒼音さんはどうなのかなって」

「あ、あこちゃん……」

「どうなのだろう、正直よくわからない。嫌……かもしれない、でも出たいという気持ちがあるかもしれない。」

自分でもよくわからなくて、頭がぐちゃぐちゃに塗り潰されるような感覚。

関係ないと考えても、全部引きずってやると覚悟しても、それでもまだ、俺の足は縛られている。

「……よく、わかんないかな」

「……別に嫌なら出る必要はないでしょう？」

「嫌じゃないさ、音楽は好きだからな」

女々しいな、なんて思ったところで変えられない、だから摩りきれるまで引きずり回せばいいのにそれすらしていない。わかってる、わかっている、それだけだ。

「……みんなはこの後、どうするんだ？」

「あこは帰ってゲームしたいなあって」

「私も帰って練習をするわ」

「えっと……私は……」

今日の予報は雨、であればこの問いの答えは一つ。それじゃあとあこちゃんについていくように燐子さんはついて行くように別れた。

二人の姿が見えなくなつて、友希那と二人で帰り道を歩くがこれといった会話はなまま時間だけが過ぎていく。そうしてため息を一つ溢してから一つ問いかけた。

「……お前、明日とか時間あるか？」

「練習が終わつた後なら、何か用でも？」

「何かつてお前、課題終わらせられてねえだろ」

「……いいのかしら？」

いいも何も放つておくわけにもいかないだろう、一人じゃやらないだろうし。

ありがとう、という言葉が返ってきて、こいつとも別れる場所になつて向かい合う。

「……結局、どうなのかしら？」

「なんのことだよ」

わかっているけれどそう返す、でも彼女に答える気配はなくて。

「……後でまた考えとくさ」

「……そう」

明日とか明後日とか、一週間後には決められるかもしれない。今日だから、今だから整理がつかないだけ、後でなら、多分大丈夫。

「それじゃあ……また明日」

「ああ、また明日な」

そうして別れて空を見上げるが相変わらず太陽は見えそうにない。

足が重くて前に進まなくて、やっと家に着いたかと思うとタイミングよく雨が降ってきた。

鍵を開け、手をかける。そこまでして尚、家の扉を開けるのを酷く億劫に感じていた。

好きであるが故に

俺には好きな人がいる。

好きで好きで、溺れてしまいそうなくらい好きで、その人の事を考えると息をすくとすら苦しくなる。

手を伸ばしても届かなくて、振り向いてほしいけれど叶わなくて、ただこの思いは捨てることができないままで……

なんて、小説に書かれている事を自分に重ねてみるけれどその世界に入りきれないでいた。

「はあ……」

読んでいる途中だが本を閉じる。本を読むとその世界に飛び込んだようになってそれが好きで、なのに、今考えているのはまったくの別のこと。

「……どう、なんだろうな」

散らかった部屋を片付けるのが面倒なように、ぐちゃぐちゃとした思考をどうにかしようとするのがどうしようもなく億劫。

ピアノのコンクールの話を聞いた時、色んな物を感じていた。出たいという本能を、

まだ早いんじゃないかという理性を。

出たくないという嘘か本当かわからない、わかりたくないものさえも。

「それじゃあ駄目なんだよな……」

仰向けに寝転がって目を閉じる。燐子さんと友希那の事、考えるべきはそれなのだろう。わかっている、わかっているけれど、片隅ではいつもピアノの事を考えてしまう。

別に今じゃなくなたっていいのに、二人の事の方が先に決めなければいけないのに。

待つてますと言われたからいつまでも待たせている。改めて考えるとやっぱり、ずきりと頭痛のようなものも襲ってきて。

家の中にいるとこんなことばかり考えてしまいそうで外に出る。頭痛に吐き気、目眩、体調不良と言うならばというものの嵐。辛い、苦しい、少し気を抜けば倒れてしまいうそう。

ああ、ああ。そう、これでいいのだ。

きつとこれだけを考えるべきなのだろう。そうわかっている癖して逃げ出して、ふらふらと足を動かしながら宛もなく外を歩く。

「おや〜？ 蒼音さんじゃないですか〜」

「……モカか」

「元氣無さそうですね〜、どうかしたんですか〜？」

「……色々とな」

「大変そうですね」

なんでもない、答えるべきはそれ、事実何もないのだから。だけれどそう言うことができないのは何故なのか。

誰かと待ち合わせでもしているのか、彼女はコンビニの壁に寄りかかったまま動こうとしない。風が吹いてざわざわと音がする。

別に目的があつてここに来たわけじゃない、なんとなくで来ただけだ。だか来たのであればとアイスコーヒーを買って外に出ると、モカはまだそこにいた。

「リサさんがもう少ししたら来ますよ」

「リサに用はない」

「またまた、何か相談したさそうな顔してるじゃないですか」

どんな顔だ、そう言いかけて、でも言ってしまうとそれを認めてしまうことになりそうだから珈琲と一緒に飲み込んだ。

相談したい。そんなわけがない、そんな大したものじゃない。たとえどれだけ二人の事を考えていたとしても、ピアノのコンクールに出るのか、出ないのか、ただそれだけの話なのだから。

相談など、出来るわけがない。俺一人で悩むべき事で、解決するべきことだから。

「特別にく、モカちゃんが相談を聞いてあげましょうか?」

「だからないって言ってるだろ」

「どれだけ言ってもわからない、何度言ってもわからない。どんな風に思っているのか、自分でわからなくなり始める。」

「あなた、何か困っていることでもあるのかしら?」

突然の第三者の声、もしやと思いい向いてみればそこには友希那がいた。

「……ねえよ、そんなの」

「本当かしら?」

「一体いつから聞いていたのか。射貫かれるかのような視線を受けて、胸を貫かれるかのような印象を受けた。」

「一歩、その場から下がった。壁に背中が当たった、右の踵が壁に当たる。視線を友希那からそらした。」

「蒼音さんは、何か相談したいことがあるらしくて」

「……ないって言ってるだろ」

「あ、モカちゃん用事思い出しちゃった」

「壁から背中を離し、俺に視線を向けながらそう言ってきた。そんなものない癖にとやう間もなくモカはどこかに行ってしまう。リサを待っていたのではなかったのか。」

気まづくなつて珈琲を飲むが、遂に味覚までやられたか、あまり味がしない。飲み干して、ゴミを捨てることなく壁に寄りかかり続ける。

会話はなくてなんだか息苦しさを覚えるが、何を話したらいいのかよくわからない。これも全部モカがあんな事を言い残したから、なんて考えてたら友希那が隣にやつてきた。

空を見上げ、ぼーっと流れていく雲を眺めていた。

「ねえ、蒼音」

「あれはモカが……」

「何の事かしら？」

この後時間はあるか、そう言われたので首を縦に振る。

それにしても嫌になる、今年だけでこんな風に思ったのは何回目だろう。本当に俺はピアノが好きなのか、なんて考え始めて。

ああでも、二人の事が好き、それは確かなもので、だから何より優先すべきで。

もう一度空を見上げる。ゆっくりと流れる雲が、少しだけ羨ましく思えた。

何処に行くかと聞いてみたが、どこでもいいと言われたのでカフェにやつてきた。

飽きるものではないけれど、友希那とも隣子さんともカフェに来すぎて。どこか違

うところにと考えてはみたが特に行きたいところもないし、二人もどこでもと言うことが多いから結局カフェで落ち着いてしまう。

友希那が珈琲に大量の砂糖を入れる。最初の頃は信じられないと思っていたがもう慣れたものだ、自分の珈琲が少し甘く感じてしまうのはいつまで経ってもなくなりそうにないけれど。

これといった会話もなく静かなまま時間が過ぎていく。何か用があるのか、ないのか、わからないしどちらでもいい。

珈琲が半分ほどなくなつてようやく、彼女は口を開いた。

「あなたはコンクールに出るのかしら？」

手が止まる。こんな質問をしてきたのは偶然なのか、胸が締め付けられるようなものを感じた。

「……なんでそんなこと聞くんだ？」

「なんでつて言われても……」

ただ気になつただけ、こいつはそう言うだろう。なんとなく、深い意味はなく。

そんな友希那にだから言うことができる、こいつが友希那だから言わなくてはならない。

コンクールにはでない、お前と燐子さんを待たせてるのにそんなことをするわけには

いかないと。

「……あなたの演奏を聴きたいから、しかないわ」

喉までできてた言葉は、彼女が発した言葉に押し戻された。

嬉しくて嬉しくて、クラクラしてしまいそうなそれ。

でも、だからどうした、それとこれとは別。彼女の期待を裏切ってしまうことになるけれど、それでもこっちの方が。

思ってるのに、わかってるのに、その言葉が頭をよぎって口の動きを鈍らせてくる。

「それで、どうなのかしら?」

じつとみられてなんだか恥ずかしくなってきた、それでも言わないといけなから、深く息を吸った。

「……コンクールには、でねえよ」

「……理由は?」

正直に言うか、適当に誤魔化すか。迷ったけれど嘘をつく必要もない。

「お前と隣子さんの事もあるのにコンクールなんて出られないだろ」

「……それはどういふことかしら?」

「……どうもこうも、そういうことだよ」

少し低い声で言われ、座ってさえなければ一步引いてしまいそうな圧を感じた。

怒っているのか、それとも意外だと思ったのか。じつとこちらを見て再度聞いてきた。

「それはつまり……私と燐子のせいってことでいいのかしら?」

「せいとは言っていないだろ」

「変わらないわよ」

喋れない。目を閉じて甘ったるい珈琲を飲む彼女を前に悪戯に言葉は吐けず、ただ思考をして待つことしかできない。

カップを置く彼女、瞳を開ける彼女、一挙一動に意識が持つていかれてしまう。

「あなたはピアノのこと、好きなのよね?」

「……そうだな」

「それならよかったわ」

いったい何があるのか、そう考えていると突然、彼女は俺の名前を呼んだ。

「私のこと、選ばなくていいわよ」

今、なんと言った?

選ばなくていい? 何を? そんなもの一つしかない。

嫌われたのか、呆れられたのか、考えて考えて、だけどわかりそうな気がしない、わかりたくない。

何かしてしまったかと考えて、どうにかできないかと思考して、でもやっぱり思い付かない。

友希那は俺から視線を外して、両手を何故だか握りしめている。ふつと体から力が抜けて、入らなくて、手で身体を支えなければ倒れこんでしまいそうになる。

なんて聞けばいいのかわからない。頭の中で言葉が浮かんで消えて、数分、あるいは数時間考え続けているかのような感覚に襲われる。

「……どうしてだ？」

「どうしてって？」

「どうしていきなりそんなこと言うんだよ」

二人のうちどちらかを選ぶのに悩んでいる、そのうち片方が相手を選べと言ってきた。全部解決することだけれど俺はそれを許したくない。

どこまでも自分勝手、でも仕方がない。そう簡単に引き下がれるものであれば元より悩んでないやしない。俺は友希那の事が本当に好きなんだと、今更ながらに、何度目かの再確認をさせられる。

「こうすればあなたは悩まなくて済むんでしよう？」

「……お前、俺の事が嫌いになったんじゃないのか？」

「そんなわけないわ。もしかして、そうなるようなことをした覚えがあるのかしら？」

よくわからない、だけど友希那が俺の事を嫌いになったわけじゃない、それだけわかると一気に安堵が襲ってくる。

けれどそれを味わう暇はない。ああでも、悪いことをしたわけじゃないから謝るに謝れなくて、どう話すべきかわからない。

「……お前はそれでいいのか？」

「ええ、構わないわ」

静寂が痛いくらいに体を刺してくるようになって、それを破るようにして出したのはそんな言葉。

彼女は何処か遠くを見ている。何を思って発したのかはわからない、けれどそれが彼女の本心だと認めたくなくて、それが嘘だと願って。

何もかもが気にくわないというわけじゃない。俺のためだとすること自体はいい、むしろ嬉しささえある。ただそのやり方だけだ。

「たまたま私だっただけで、この話を隣子が聞いていたのなら彼女も同じ事を言うてるだろうから」

「……どういうことだ？」

「わかってないのね……」

——あなたのピアノが好きだから、私がその邪魔になるくらいなら選ばなくていい

いわ。

どこまでも力強く、だけれどもどこか弱々しく感じられる言葉だった。

そういうことだったのか、なんてわからない。俺のピアノにそんな価値はない、全部過去に置いてきてしまっているものだから。

「……演奏くらいいつでもしてやるよ」

「それは私への音楽でしょう？ あなたがする、あなたのための音楽、私はそれが聴きたいのよ」

じわりと、何かが染み渡っていく感じがした。ティッシュを手に取り、しかし珈琲は既に飲み干していたから、それが自分の内で起きたことなのだと理解した。

そんなに言うならコンクールに出てやる、そういうわけじゃない。俺の音楽が好きだと言った彼女を説得するには、本気で、本心で答えなければならぬ。

「……なあ、友希那」

「なにかしら？」

「お前って俺の事好き、なんだよな？」

「……突然何を言うのかしら？」

何って、意味なんてない。そうだとさえ言えばそれだけで、隠すように違うと言われればそれだけ。本心から違うと言われたのなら……それまでだ。

「……ええ、好きよ。何度も言ったでしょう?」

顔をちよつと赤くしている。恥ずかしい、なんて思っているのだろうか。

友希那は言った、燐子さんも同じ事をと。もちろん本人がいないので確認のとりようがないが、そうであるならば、むしろコンクールに出なければ彼女にも悪くなってしまう。

決意の言葉、その前に一つだけ確認の言葉を入れる。

「もし俺が音楽をやめたらお前は俺のこと、嫌いになるか?」

「……どうということかしら?」

「別に、気になつただけだ」

「そんなわけないわ」

ため息が聞こえてきた。当然だと呆れられたのか、そうであるならば……嬉しい限りだ。

「ありがとな」

「……突然何かしら」

口からは感謝の言葉が、ああ、結局俺はそうしたいということなのだろう。騙して、騙して、それで、それでもいつも簡単に掘り起こされる。

これは正しいことである、なんて言いきることはできない。友希那がそうしろと言っ

て、俺もそうしたいと思っただけだ。

「コンクール、出るって隣子さんに言ってみる」

「……そう」

それ以上はなにもない。残っていた珈琲を一息に飲み込んで、彼女の小さな笑みに胸を締め付けられ、だけどこれは全く苦しくなくて。

コンクールがいつなのか、それはまだ知らない。だけど多分、そう遠くはないことなのだろう。

いつまでもじやない、決めるんだ。コンクールが終わったらどっちが好きなのかを。

俺には好きな人がいる。

その人の考えていると胸が苦しくなって頭がおかしくなりそう。

手を伸ばすと取ってくれる人がいる、垂れ下がった手を引き上げてくれる人がいる。

背中を押してくれて、一緒に休んでくれる人がいる。

外は明るい。今日はいいい日で、そうなれば明日もきつといい日の筈で。

未来は一つだけ。後悔はしない、したくない、してはいけない。きつとそうなる、そうしなければ。

空では相変わらず、雲が泳いでいた。

引つ掛かり

「……」

「友希那さん……どうか、したんですか？」

「大したことじゃないわ」

「ほんと〜？ 練習中もどこか上の空な感じあったよ」

「……そんなことないわよ」

こんな風な話をしているけれど、リサと燐子の言葉は右から左に流れていく。

頭の中に浮かんでいるのはこの前の事、彼の言葉。音楽をやめたら自分の事を嫌いになるかという、あり得ないこと。

きつと深い理由もない、聞いただけとか、そんな。

そうわかつている癖に、そうだと答えていたらどうなっていたのか、というのが頭に浮かんでしまう。

少し怖い、でも気になる。彼は、どちらを取るのだろうか？

「苦い……」

「やっぱりポーツとしてるじゃん」

砂糖を入れ忘れた、いつもなら一番最初に行っているけれど、たまたまそうだったただけだ。

真つ黒の珈琲の中に砂糖を混ぜてじつと、起こした渦の中を見つめる。混ぜ違って混ぜ違ってもう、元のものには戻らない。

「それで、二人共最近どうなの？」

「どう……とは？」

「それはもちろん……こういうさ」

砂糖を手に取り、それを私の珈琲の中に入れてくる。どういう意味か、きつと昔の私ならわからなかつたのだろう。

再びそれをかき混ぜて、リサから顔をそらし燐子がこちらを見てきて、それを受けながら珈琲を口にする。

先程とは違って甘い、やはり苦いままで飲むというのはまだ理解ができない。

「特に何も無いわよ」

「私も……特には……」

「ほんとかな？」

「嘘なんてつかないわよ」

そも、リサが関与するようなことじゃない。私と燐子と、彼での問題で、それ以外は

何も絡まなくて、絡ませてはいけなくて、絡ませない。

「それについて二人は思うことないの？」

「……………」

「関わることではないんだろうけども、もう秋だし、時間も無限ってわけじゃないし」

お節介なのはわかってるんだけど、なんていう彼女はきつと、蒼音にも同じことを言っているのだろう。

余計なお世話、ではない。このことのせいで練習に集中できてないわけじゃない、でもそうじゃないと言いきれるかというと……

いつでも、どこでも、何をしていても、彼が頭にいる。大きくなかったとしても隅っここには必ずあって、それに気づいてしまえば虫食いのように思考の中に潜り込んでくる。

それがあまりに自然で、無意識だから避けようがない。もしかしたら彼もこんな風に考えてくれているのだろうか。

ああ、また。

音楽が好き、彼は好き。滲んで、溶けて、一体どっちの方が強いのか、たまにわからなくなってしまう。

目標も、成すべき事も、歪んで迷ってしまったかどうかさえもわからない。

そんなだから、思ってしまったのだ。

音楽をやめた彼の事を嫌いになると答えたら、彼は音楽より私を取ってくれるのか、なんて。

自分なら答えを出せないそんな問い、浮かべるべきではなかったそんな問い。

足元が見えない未来は当然怖い、だけど待ち続けるのは……

珈琲に砂糖を追加する。そんな考え全部溶かして、混ぜて、一息に飲み干した。

珈琲にはそこそこの量の砂糖を溶かしていた。一つ入れたところで所詮、何も変わらなかった。

信号が変わるのが長い。だけどわざわざスマホを眺めるほどじゃないから理由もなく遠くを見る。

コンクールに出ると決めた、でも課題曲はわからない。それどころかどこでか、いつのものか、全く決めていない。

検索をかければすぐにでも見つけられるだろうけれど、一人ではあまり出たくない。未だに怖いというわけじゃない、いや、なくはないけれど……燐子さんが出るのならそれと一緒にいい、そう思ったから。

「あ……」

その声はどちらが出したのか、信号が変わって歩き出してぼったり、今までなかったわけではないがびっくりして互いに足を止めてしまった。

信号を渡り切ってない中途半端なところで話をするわけにはいかなかったので道を戻ると、すぐ様信号が変わって車が走り出す。

「えつと……燐子さん」

「は、はい」

「この後って時間、ありますか？」

答えは言ったか言わずか、どちらにせよ走る車の音で聞こえなかった、それでも彼女が頷いたのは見えた。

別に大した用事じゃない、コンクールに出ますと言うだけで、あわよくば一緒に出てくれませんかと聞くだけだ。

どこだってできる、数分程度で済むだろう。だけどこんなところで切り出すのは、なんて考えてしまつて口が重くなつてしまう。

「……何処に行くかつて……決めて、ますか？」

「決めてないですけどそんな長い話でもないですし……」

頭で思っていることと口から出る言葉が噛み合わない。

自分から聞いておいて、それで何処かに行つて数分で終えてしまつたら彼女に悪いん

じゃないかなんて思いながら、それでもそう易々と切り出すのはできなくて。

「それなら……蒼音さんのお家に行ってもいい、ですか……」

聞こえない程の音量のはずなのに、信号の音にすらかき消されてしまいそうなのに、それはどんな音よりも確かに聞こえてきた。

真つ赤な顔をして、なのにもと違つて顔をそらさず向き合っている。なんて思つた瞬間火傷してそうな程赤くなつて背を向けられてしまつたが。

「大丈夫ですよ」

頭は真つ白なままだがすぐにそう返答する。やつぱりなんでもありません、なんて言わない、言わせたくない。だから取り消す間もなくそう返した。

それは彼女の勇気とでもいうものを無下にしたくないから……なんて浮かんできたけど綺麗事だ。嬉しいとは違う、何とも言えないものに塗りつぶされたから。

手をつないでまた信号が変わるのを待つ。こうしていると塗りつぶされたはずの思考が、心が、もつと深い色に変わつていくような感じがする。

「お昼つてもう食べてますか?」

「いえ、まだですけど……」

「それなら何か作りましょうか?」

沈黙が嫌というわけではない。この提案は単純に、話す理由が欲しかつただけ。

大したものを作れるわけでもないが返答はなんとなくわかっている。何があつたかと冷蔵庫を探していると返答がやってきた。

「蒼音さんの好きなもので……お願い、します」

予想通りの解答、なのだけど引つ掛かりがある。

好きなものでだけならばわかる、だが俺の好きなものでと。思い違いなのかかもしれない、むしろそうである可能性の方が多いだろう。自意識過剰なのか、期待し過ぎなのか、どうにせよそれについては聞かないようにした。

心臓がドクリと脈を打つ。昼飯をご馳走、と言える程大したものではないが振る舞つて、片付けも手伝ってもらつて、向かい合いに座っているが口を開けないでいる。

二人きりという事、今飲んでいる熱めの珈琲。自分の中と外、形がないものとあるもの。熱の元はおそらくその二つ。

「あ……」

なんとなくで溢したその声は、会話が行われていなかったせいもあつてかやけに大きく聞こえてきた。

気づけば珈琲は飲み切っていて、だからか熱が引いてきて黙る言い訳がなくなつた。

いや、言い訳をしていたわけではなかったのだが飲み干して、それでもまだ苦いもの

がずっと残っている。

「燐子さん」

「は、はい……なん、でしょうか？」

頭を一度掻いて彼女の方を向く。こんな改まるようなことではない、わかっているのにこうなのは仕方がないことなのか。

「確かピアノのコンクールに出るん……ですよね？」

「まだ……決めてはない、ですけど……」

そらして、こちらを見てまたそらす。口ではああ言うけれど、恐らく彼女の答えは決まっているはずで。

だから責任はない、どう答えようと俺の勝手。そう、俺が出した答えが紛れもなく、俺の本音だ。

「俺は……燐子さんがいいなら、一緒に出たいって思ってます」

「……一緒に、ですか？」

「はい。一緒に、です」

そこを強調されると途端に引いていたはずの熱が、恥ずかしさに形を変えて混み上がってきた。でもきつと、彼女に比べたらそれはまだ可愛い方なのだろう。

俯いて、更には手で顔を覆い隠している。数秒、数分、恐らくそれくらい経つてよう

やく、彼女は指の隙間からこちらを覗いてきた。

「あ、あの……」

突然彼女は自分の鞆から一枚の紙を取り出しこちらに渡してきた。

大事に保管していたのだろう、シワどころか折り目一つない。ざつと目を通してみるとそれがとあるコンクールのものであることがわかった。

決めていないとはなんだったのか、そう思いながら目を通していると燐子さんが。

「実は……Roseliaのみんなにもまだ見せて……ないんです」

彼女は微笑みながらそう言った。そのせいいか、それとも内容のせいいか、熱を感じた。それも今日一番の。

「課題曲が決まったら、参加するかどうか決めようかなって思ってたん、ですけど……」
出るならそのコンクールと決めていたとのこと。

大きな声のわけではない、口調が強かったわけでもない。なのに彼女の言葉からは強い意志を感じ取れた。

因縁があるのだろうか、真相は彼女以外にわかるはずもないのだが……これまた何か引つ掛かるようなものが。

でもこれはさつきと違う、何が引つ掛かっているのかすらわからない。

「それじゃあ……そろそろ帰り、ますね」

「あー……送っていきましようか？」

燐子さんは大丈夫ですと言いかけて、お願いしますと言いつ直してきた。

引っ掛かる、引っ掛かる。燐子さんの事を見るとそれが膨らんでいくことだけは確かにわかった。

雨の日に

練習中、何故だか部屋に飾ってある写真が気になった。

集中しなければ、そう思つて気にしないように、なんて上手くいくはずもなく、考えれば考える程それは頭の中で強くなつていく。

昨日も、一昨日も、その前の日も、毎日見ているはずなのにどうして。心当たりは……ないわけではない。

忘れたいこと、忘れたくないこと、忘れてはいけないこと忘れられないこと。ここの写真はその全て、でもこれに関与しているのは俺と母親だけの筈で。

だから、写真を見ていると燐子さんが浮かんでくる理由がどうしてもわからない。

彼女が何か関係あるのか、それともただただ彼女の事が……

ああ、でも、どうだっていい。別に不満も不安もないのだから。

嫌ではないし、嬉しいかと言われてもそういうものじゃない。

「……冷えてきたな」

ついこの前まで夏だったというのに、滝のように汗が出ていたというのに。蒸されるような、焦がされるような、そんな風だったのに。

窓を閉める。冷たい風に心地よさを覚えながら記憶に新しい暑さとの差に気温以上の寒さを感じていた。

「あー……」

やらかした。バイト中もしかしてと思い見ないようにしていたが、やはり雨が降っている。

いつもはなんとなしに天気予報を見ているのにこんな日に限って見なかった。運がないとでも言うべきか、なんて考えながら空を見上げる。

止んでくれればいいのだが、ザーザーと聴こえてくるそれから逃避するように思考すれど変化はない。

秋になって暫く、そろそろ長袖にしようかと悩んでいたのだが、まだいいかと思っていたのを咎められた気分だ。

このまま雨に打たれながら帰ったら風邪を引いてしまうかも、寒さに身震いを起こしながらそう考えて、壁に寄りかかっていたため息を漏らした。

「あなた、何しているのかしら？」

どうしたものかと迷っているとそんな声が。そこにはビニール傘を指してコートを着て、俺と正反対な格好をした友希那がそこにいた。

「見てわからないか？」

「もう夏も終わつたというのにあなたはまだ半袖なのね」

「別に秋になつたら長袖じゃなきゃいけないなんて決まりはないだろう？」

「そんなことを言うわりには随分と寒そうだけれど」

それとこれは別。決まりがないからサボつただけだし、サボつたから痛い目を見てい
るだけ。

何を思ったか友希那は隣にやってきて傘を閉じて水を払う。話すことでもあるのか、
そう思ったけれど彼女は黙つたままで。

「何か用でもあるのか？」

「別に、あなたが暇そうにしてるから」

「雨が止むのを待つてるだけだぞ」

「明日の朝まで止まないらしいわよ」

一時間程度ならば覚悟していたがそこまでなのか、仕方がないし風邪引く覚悟で帰
う。なんて風に考え一歩歩くと友希那から傘を差し出される。

「傘、ないんでしよう？」

「準備がいいんだな」

折り畳み傘でも持つているのか、なんて思いながら彼女が先程まで指していた傘を受

け取ると、彼女は首を横に振りながら言う。

「まさか、これ一本よ」

何を言っているんだと思ったけれど、こちらを見上げるその視線に冗談はなさそう
だ。

つまりこれは……そういう提案か。

「……ちよつとくらい濡れたとしても文句言うなよ?」

「そうならないようにしてほしいのだけど」

「もしもの話だよ」

傘を開くとさつきと同じく友希那が隣に、違いと言えるのはその距離か。

自分で傘を持つのがめんどくさいから頼られた、憐れみから傘を渡された。俺だから、渡された。

雨を弾く音が聴こえている。少しばかり手が冷えるが、ほんの少しだし風邪を引く可能性に比べたら遥かにマシ。

こんな雨の日に外出している人間は少なく、友希那に歩幅を合わせると遅いなど感じるが、比べる対象がないから比べようがない。

水溜まりを跳ねる車の音が、やけに大きく聴こえていた。

「明日空いてるか？」

「何か用かしら？」

「これ返さないとだろ」

友希那の家に着いて、貸してあげるわよと言われたから今日は傘を借りることにする。

いくらビニール傘とはいえ借りた物は返さないといけないし、なるべく早い方が当然良い。

「明日は……練習終わりでなら取りに行けるわ」

「いや、俺から返しに行くさ」

「律儀なのね」

「基本だろこんなの」

借りて、パクる気であるわけじゃない。結局は信頼の話、疑われたくない。誰であってもそうだけれど、こいつには特に。

どこで練習するのかというのと何時くらいになりそうか、それだけ聞いて別れようとしたら待つて、と呼び止められた。

「……………」

「どうしたんだ？」

真つ暗、というわけではないが明かりと言えものは家から零れる程度のもの。

雨はバイト先を出た時よりも強くなっている。それもあつたけれど、格好があれなため流石に寒い。

これ以上外にいと少ししか雨を浴びていないとはいえ風邪を引きかねない、そのため早く帰りたいのだが彼女はその口を紡いだまま。

ザーザーと、その音に世界が塗り潰されている。

——少し……上がっていかないかしら？

それなのに、いや、それだからなのか。はたまたその内容のせいなのか、なんにせよその声は妙によく聞こえてきた。

顔をそらした友希那が今どんな風な表情をしているか、見えない、わからない。

ドクリと心臓が一つ大きく鳴り、鼓動が速くなり、感じていた寒さは何処かに消えて。世界を塗り潰していた雨の音も、気が付いたらどこか遠くのものになっていた。

「……親はいないのか？」

「今日は遅いって言われてるから……」

多分、帰ってくるのは30分後くらい。それを聞いてどう答えるのが正解なのか。

30分というのは決して短いものじゃない、でも長いかと言われたら言葉に困る。

でもそんなのは関係なくて、問題はそれが確定じゃないということ。

30分より遅いかもしれない、それならいい、なんの問題もない。だけどそれより早く帰ってきたら？ 友希那の親と鉢合わせたら？

なんて説明すればいいのか。恋人ですと言うわけにはいかないし、友達ですと言って通せるようなものじゃないだろう。

「駄目、かしら？」

目的がわからない、もしかしてそんなものないのかもしれない。

でも、少なくとも俺は、どこか怯えを含んだようにそう聞かれて断れるわけがなかったのだ。

「飲み物は紅茶でもいいかしら？」

「……入れられるんだな」

「それくらいできるわよ」

呆れたような怒っているかのような言い方。彼女の部屋ではないのだけれど、それも目のやり場に困ってしまう。

「寒くないかしら？」

心配すぎだ、そう言いたいけれど心配してくれるのがこう……嬉しくて、なにも答えられない。

出された紅茶は温かい、というよりは熱い。湯気が出てるそれを口にする勇氣はなく手でカップを触るだけに留めておく。

会話はない、窓は閉めているというのに雨の音が聞こえてくるかのようなほど静寂が広がっている。

「……こういう時、どんな会話をするのが正解なのかしら」

「……俺に聞くな」

そういうことがわかるほど経験豊富じゃないし、そういうことを知っている程知識もない。

ああだこうだと思い浮かんだことを片っ端から言ってみてもいいのだが、正解を探すのではなく、失敗をしたくない様な状況でそのようなことを行える筈もない。

気が付けば紅茶の入ったカップからは熱を感じなくなつて、口にしてみれば嘘のように熱くてほんの少量しか飲むことができなかつた。

両手の手のひらで腕を触ってみると、その部分は暖まる代わりに手のひらから熱が吸われていくかのような感じがする。

「雨はだいたい強いみたいね」

「弱まる気配もないな」

「本当に明日には止んでるのかしら」

さあ、でも台風が上陸するとかは最近のニュースで目にしていないし多分止むのではなからうか。

段々と紅茶は飲めるくらいには冷めていき、手で熱さを感じながらも飲み進める。

「……蒼音は早く帰りたいのかしら？」

「まあ……友希那の両親が帰ってくるより早くにはな」

覚悟が足りない、そうじゃない。

胸が締め付けられるかのような感覚、誰がそうしているのかなんてわかりきっていることだ。

そうされて、当然なのだから。そうしている相手はきつと、誰よりもそれを知っている。

彼女のスマホが鳴る。それを確認して彼女はなんでもないかのように聞いてきた。

「ねえ、もしお父さんもお母さんも帰ってこないとしたら……どう？」

「……はっ」

先程言っていたことはなんだったのか、どうとはなんなのか、彼女はなんて答えてほしいのか。

言葉にすらならないものが喉まで昇ってきて、それを飲み込みながら思考をなんとかまとめようとする。

「……冗談よ、そろそろ帰ってくるよりらしいわ」

「……お前もそういうこと言えるんだな」

「例え話で言ったのにそう真剣に考えられるとは思わなかったから」

今俺はなんて思っているのだろう。安心していいのか、残念がつているのか。

既にぬるくなっていった紅茶と共に流し込もうとしたけれど、へばりついているかのようには消えてくれなくて。

飲み干して、感謝の言葉を告げて帰ろうかと思ったら呼び止められる。その手には友希那が着ていたコートがあつて。

「これ、着ていきなさい。風邪を引かれたら困るもの」

「……何を言ってるかわかつてんのか？」

「おかしな事は言っていないと思うのだけれど」

「普通は男にコートなんか貸さねえだろ……」

やっぱりこいつはズレている。どうやって断ろうか考えていると、無理矢理コートを持たせながら彼女は言った。

「あなた以外にはしないわよ」

「……心配するのは結構だけど、父親のを貸すとかはないのかよ」

「勝手にお父さんのを貸すわけにはいかないでしょう？」

それはそう、でもそうじゃない。俺だから、そう言われて嫌な筈がない。だけどそう易々と受け入れられるかと言われたら別。

受け入れることは簡単じゃない、でも断るのは嫌だから。

「……ああもう、汚しても知らねえぞ」

「あなたならそうはしないってわかってるわ」

「絶対なんてことはないんだよ」

言い争っていたら友希那の親が帰ってくる。そろそろと言っていたしあまり時間はないだろうし、こちらが折れる以外に選択肢はない。

もしコートが女性ぽかったら迷っていたが、彼女がそういうのに興味がないだけか、どちらでもなかったからそれを着る。

サイズに関しては……まあ、着れないことはない。

雨の具合はわからないが止んではいけないだろう。ビニール傘を借りようとして、再度呼び止められた。

「それじゃあ、気を付けて」

「また明日な」

雨は少し弱くなっているようで、貸されたコートのお陰もあつてか寒さはだいぶ防いでいる。

いや、これは防げているというよりは……

額に手を当ててる。手か、額か、それとも勘違いなのか。

原因は様々考えられるけれど……

「これで風邪だったら笑えないんだけどな……」

どうであれ、暖かいと、確かにそう感じていた。

阻むもの

朝は憂鬱、それに大した理由なんてない。頭はあまり回らないし、そんな状態でアラムの音が鳴り響く。

まだ眠っていたい、そんな思いを抱きながらアラムを止めて布団から身体を出す。

今日がコンクールの課題曲の発表日。気になるけれど一人で確認する勇気はないから、スマホを手にははみるけれど画面は暗いまま。

ピアノの前に座る、鍵盤に指を置く。実際には弾かない、目を瞑って夢想するだけ。あの舞台上で演奏する自分を、夢を叶える自分自身を。

「ふう……」

手が震えてる。小さく息を吐いてみたけれどそれが収まる気配は微塵も感じ取れない。

楽しみなのか、待ち遠しいのか、それとも怖いのか。多分それら全てなのは間違いなのだろうけど、そのうちどれが一番なのかと聞かれるとわからない。

きつと楽しみで待ち遠しい。ちよつとは怖いけれど私はあの頃とは違うからきつと大丈夫だ。

鍵盤に置いた指全てをゆっくり、深く落とす。適当に置いたから綺麗じゃないけどそんなのはどうだっていい、そう思ったけれど寧ろそれが悪手となって。

不安が指にこびりついて取れてくれなくて、それは心にも染み渡ってきて身体が少し冷えたような気がした。

わかつているのに、わかつているから……

「蒼音さん……」

思い人の名を呼ぶと少しはマシになったような気がしたのは気のせいだろうか。

窓を開けると、冷たい風が入ってきた。

「ピアノコンクール？」

「はい。今度開催するコンクールに……出場しようと思ってるんです」

「その話はしていたけれど、随分前の話じゃなかったかしら？」

「出るなら……これにしたいって、思っていましたから……」

Roseliaのみんなにコンクールの話をすると驚き半分、でも初めての話じゃないから意外とすんなりと受け入れられた。

コンクールに出たいというのは前々から言っていて、だけれど出るならこれと決めていたから時間が経ってしまった。

「でも、大丈夫？ コンクールは人がたくさんいるから苦手って言ってたよね？」

「うん、それにこのコンクールは公開審査だから……見に来る人もたくさんいるんだ……」

「そ、それは緊張するね。大勢の前で一人なんて、アタシだったらヤバいかも……」

今井さんも、氷川さんも、あこちゃんも知らない理由。そして友希那さんでさえ理由の全ては知っていない。

だけれどもそれは蒼音さんにも言えなかったものだから全てを知っているのは私だけ。

尊きものだと思えるこの想い、清きものだと思えるこの夢、自分を変えるための道標。

大切だからこそ漏れ出さないように蓋をする。開けたら溢れてしまうかも、空気に溶けてしまうかも、だから大事に、大事に蓋をする。

「りんりん、平気なの？」

「平気じゃないけど……挑戦してみたいんだ」

誰でもない、私のため。

私じゃない、私の夢のため。

夢じゃない、ただ私のため。

「……そう。うまくいくといいわね」

「はい、ありがとうございます……」

「そうなるとコンクールの練習の時間が必要ね」

「はい、個人練習の時間を作って……課題曲の練習をしようと、思います……」

Roseliaの練習には支障が出ないようには、そう言うといちいち断らなくたっていいと今井さんに言われ、信頼されているのかと嬉しさを感じられた。

「ところでりんりん、課題曲ってどんな曲なの？」

「今日参加要項が発表されたから……サイトに書いてあると、思うんだけど……まだ私も、確認してないんだ」

「へえ、じゃあ見てみようか」

今井さんがスマホを机の上に置きサイトを開く。私を含め全員がその小さな画面を覗き込み、課題曲はいつたいなんなのかと探す。

「あ、あったあった！ これだよきつと」

あこちゃんが探し当てたその曲は……あの時コンクールで弾いた曲と一緒だった。

偶然か、運命か。仕組まれたものじゃないことくらいわかつてはいるけれど、ああでも、頭の中は真っ白になってまともな思考もできやしない。

「りんりん、どうしたの？」

「その……知ってる曲、だったから……」

全身の血が沸騰したかのように身体が熱い、心に黒い何かが重くのし掛かる。

手が冷たい。ほんとはそんなことないんだろうけど、顔に当ててみるとそう感じさせられて、なんでか知らないけど、震えてる。

「昔、コンクールに出た時に……演奏した曲なんだ」

「え、昔コンクール出た時ってだいぶ前でしょ？」

「その頃に高校生向けの課題曲を弾いていたの？」

私の意思じゃない、先生がこれくらいならできると言ったから。難しい曲を弾いていた、みんながそれを手放しに褒めるからなんとも言えることができない。

嬉しくないかと言われたらそんな筈ない、嫌かと言われたらそれも思う筈がない。でも、でも、でも、やっぱり……

「頑張ってるね、燐子。応援してるよ」

「……はい、ありがとうございます……」

遙か昔の事だというのに、蒼音さんに褒められたのと比べてしまうと……見劣りしてしまうなんて思ってしまうのはきつと、最低なことなのだろう。

だけど当然のことなんだと思ってしまうのは、仕方がないことなのだろうか。

「少しいいかしらっ？」

「えっと……なんででしょうか？」

練習が終わって、早速コンクールに向けて自主練習をしようと思っていたら友希那さんに声をかけられた。

集中しようと深呼吸をしようとした瞬間だったから変な声が出てしまい、皆から視線が向いて恥ずかしくなる。

「友希那く、邪魔しちゃ駄目だよ」

「……長くはならないわ」

なんと云えばいいのだろうか。怖いとまではいかなくても、そう感じてしまうかのような圧がある。

何か友希那さんの気に触れるようなことをしてしまったか、最近の事を思い返せど見つからない。

「二人で話したいから、リサ達は先に帰って貰えるかしら？」

「すぐ終わるんでしょ？ なら外で待ってるよ」

そんなに大事な事なのか、でも友希那さんは長くはならないと言っていたし。

先に謝ってしまおうと思っただけれど息苦しさから声は出ない。早い鼓動、飲み込んだ唾が確かに感じられた。

みんなが部屋から出ていって、友希那さんは一息をついて話しかけてきた。

「……聞きたいのはコンクールについてよ」

「コンクールについて、ですか……」

単純に興味があるだけなのか、でもそれだけならば今である必要が、みんなを退出させた理由がわからない。

曖昧な質問であるから彼女が問う意味を探すことから。彼女は無駄なことは聞いてこない、そう知っているから思考を巡らせる。

ならば……そうして出てきた答えは肝を冷やさせるものだった。

「ご、ごめんなさい……」

「急に謝ってどうしたのかしら？」

「えっと……今日の練習に集中、しきれてなかったことに……怒っているのかと……」

集中していなかったかと言われたらそれは否、でも集中しきれていたかと言われたらそれも否。

友希那さんは大きくため息をつき、だけれど違うと言うから驚かされる。であればそれこそ何も思い付かないが……

「それについてはまた後で聞くことになると思うけれど、そうね……」

——今聞きたいのは蒼音とあなたと、コンクールの関係についてよ

恐ろしい程の静寂が部屋を埋め尽くす。そんな個人的な事だとは欠片も思わず、それ

で驚き思考が止まってしまった。

「言いたくないのならいいのだけれど」

「い、いえ……でも、なんて言ったらいいのか……」

少しは示されたとはいえこれでは大して変わってない。範囲が狭まったとしても、何処にあるかはつきりわからなければ誤差のようなものだ。

ああ、でも、ゆつくりと口は開いていた。

「蒼音さんは私の好きな人で、目標で、夢で……コンクールはそのための場所……です」
自然と言ったそれは自分でもはつきり聞こえ、顔が赤くなつて視線が床に落ちる。

ああ、きつと笑われる。そう思つて顔を上げてみると……彼女はじつとこちらを見て
いるだけだった。

「……そう、時間を取らせて悪かったわね」

それだけ告げて彼女は扉の方へ。もう終わりなのだろうかと思うとなんだか拍子抜け。

握つた手を胸に持つてきて、息を止める。真つ白に染まつた思考の中、私は彼女の事を呼び止めていた。

「私からも……いいですか？」

彼女が返事をしてこちらを見る。私が呼び止めた癖に何を話したいのか、何を聞きた

いのかわからない。

その癖思考はゆっくりとじていて焦る様子はない。時間がゆっくりとなつたかのような、そんな感覚の中、私の口は自然と動いていた。

「友希那さんにとつて……蒼音さんはどんな人、なんですか？」

「どんな、つて言うのは？」

その問いには答えず、なんでこんなことを聞いたのだろうかと順序おかしく考える。

何を気になつたのだろうか、私はどんな答えを求めているのだろうか。ふと、彼女から目をそらして鏡に映る自分の姿を見る。

ああ、きつと……

「……………好きな人よ」

随分と長い時間をかけて絞り出されたその言葉は、それと反比例するかのように短く、単純で、純粋なものだった。

無駄なことはない、あんなとかこんなとか、そういつた装飾のないどこまでも簡潔なもの。

どんなところかとは聞かない、彼女はきつとわからないとか、全部とか、そういつた答えを出すと思う。そんな目が潰れてしまいそうなほど純粋なものを言葉ではなく、表情でもなく、なんとなく感じ取れる。

なんとなく、とは言うものの同じ人を好きになってしまったから感じ取ってしまうのは仕方がないのだろう。そしてそれは、彼女も同じはずで。

「友希那さんは、もし……」

喉から言葉が出かけたけれど、飲み込む。なにかしら、と彼女に視線を向けられて、さらしてしまおう。

蒼音さんを選ばなかったらどう思いますかなんて、簡単に聞いていい筈のないものなのに。

「なんでもない……です」

自信があるわけじゃない、寧ろ友希那さんと自分を比べて、私が勝っていることなんてそれこそ……と考えてしまおう。

だから怖くて、不安。口から出かけた意図もわからない。共感を求めているのか、それとも彼女の口から聞いて安心したいのか。

この前彼女は言った、怖いのだと、不安だと。表面的なそれじゃない、その深層、もし選ばれなかったら彼の事を、どう思ってしまうのか。

私が抱いているものをまるつきり同じように考えているのか、私が考えていることは普通だと思いたいから。

……ああ、どうにせよだ。天井のライトが嫌に眩しく感じ取れた。

「邪魔しちゃつてごめんなさいね」

「い、いえ……大丈夫、です」

彼女が扉を開けて部屋から出ていく姿を見送った。なんだか手が痺れる、少しだけならとその場に座り込む。

ずっと握っていた手を開く、そこには何も無い。その手を何度か閉じたり開いたりして、ライトに向かって手を伸ばす。

届きそう、でも届かない。透けて見えそう、私の薄い薄い心の持ちようまで。

ああ、よく見えない。数秒の間、ぼーっとその手を眺め続けた。

「……練習、しなきゃ」

小さくため息をこぼしてから立ち上がる。指をキーボードの上に置いて大きく、大きく息を吸い、吐いた。

視界が暗くなっていく、狭くなっていく、でも頭の中はスッキリしない。だからそれを払うかのように冷えた指を躍らせた。

一と多と

あ、と間の抜けた声が目の前から聞こえてきた。名指しされたわけではないが相手が見知った顔だから誰に向けたものかはわかりやすく。

だけど呼び止められたわけではないしその隣を通り抜けようとする今度は名前を呼ばれる。

「何か用？」

「別に、何もありませんけど」

それだけで会話は終わり、だがそれじゃあと行って帰るのは忍びない。

向こうも同じような事を思っているのか、道の端に立っていた彼女は壁に寄りかかってこちらの事を見てくる。

「……………」

気まずい、というわけではない、ただ話すことがないだけだ。

壁に寄りかかる彼女のの前を通ってというわけにもいかないだろうし、さてどうしたものか。

これで何かしらの予定があればそれを出して帰ってもよいのだが、コンクールに向け

ての練習しかすることはない。

であればだ。俺は彼女の隣で壁に背を預けた。

「蘭ちゃんはこの後何か予定は？」

「ないですけど、何か用ですか？」

「いや、特に」

ふう、と息をついて空を見上げる、何か話せる物でもあればよいがそんな話題は持ち合わせていない。

数秒、数分、それだけ経てば別れてもいいだろう。今日の夕飯はなんにしようか、なんて流れる雲をボーツと見ながら考えていた。

「新庄さんは最近、どうなんですか？」

「なんのこと？」

「えっと、ピアノの調子です」

「うーん……まあまあかな」

沈黙に耐えられなかったのか、彼女はそんな事を聞いてきた。

やればやるほど上手くなる、なんて時期は過ぎてしまつて成長は緩やか。コンクールが近いことに焦りはあるがそれでも、楽しい。

子供の頃の自分に手を引かれ、今まで通つた道をまた通つて、そしてやがてまだ見ぬ

ところへ。

コンクールという本番に向けどこまで出来るか、不安ではあるけど何よりも。

「そういう蘭ちゃんはバンド、どうなの？」

「アタシ、は……」

言い淀まれ、冷えた空気がよりいっそう冷たくなった気がした。

返ってこない答え、それは予想とはあまりに違うもの。なんとも居づらく感じてしま
うが、無遠慮な俺の問いかけが原因なのだからそう考えてはいけなくて。

「あの、新庄さん」

「……何？」

「一つだけお願いしても、いいですか？」

断れる筈もない。頷くと、彼女は俺の手を掴み、どうにも真剣な表情で言ってきた。

「アタシと一緒に、カラオケ行ってくれませんか！」

「……は？」

気の抜けた声が漏れてしまったが仕方がない。もしかして俺は疲れているのだろう
か、そんな事を考えながら、頷いてしまったが為にそのお願いを受け入れた。

カラオケとは名は聞けど、実のところ来るのはこれが初めてだ。

好きとか嫌いとか、行ったことがないのだから決めつけようはないのだが、行く理由がないから来たことがないだけ。

歌うことは得意じゃない、が嫌いでもない。それでもどれくらい上手なのだろうと確かめる程の情熱はないし……誘い誘われる知り合い合いなんでもものもいなかった。

別に、始めてだからといって緊張するわけじゃない、ただその始めてでの付き添いが異性という事実が気になるだけ。

いや、これは緊張と言えるのか。燐子さんや友希那という時という時に抱くものとはいれど、それとは確かに別物で。

「……蘭ちゃんはこういうところよく来るの？」

「アタシはあんまり……新庄さんは？」

「俺も全然、なんなら始めてだし」

彼女はバンドをしているのだから歌うのは飽きるくらいにしているだろうし確かに来ることは少ないか。なんて自己完結気味に考えを纏めている彼女は少し驚いたような表情を向けていて。

「新庄さん、カラオケ来たことないんですか？」

「そんな意外なものじゃないでしょ」

「それは湊さんとも、ですか？」

「そうだけど……それが何か？」

友希那こそカラオケなんて、と言っついそんなものだけど、蘭ちゃんの中でのあいつはそうではないのだろうか。

「それで、今日はどんな用なの？」

「あ、えつと……アタシの歌を評価、してほしくて」

「……それは俺である必要あつたの？」

別に迷惑なわけじゃないと先に告げておく。だが別に俺じゃなくてもバンドの子やリサ、なんなら同じボーカルとして友希那とか、他の選択肢はいくらでもある。

なのに何故俺なのか、偶々出会ったからと言われてしまえばそれまでではあるのだが、でも多分、偶々ではないのだろうというのはあの感じから考えさせられて。

「みんな……甘すぎるから」

正当な評価をされていない、そういう風に彼女は感じているのだろう。とは言ってもバンドのボーカルをしているのだし下手な筈はないし、寧ろ上手いとまで行っている筈。

それに俺はあくまでピアノだけで歌に関してはどうこう言える知識も持っていない。だがまあ、頼まれた事を断るほどではないからよいのだが。

「俺なんかでいいなら。でもまともな評価はできないかもよ」

「いや……湊さんと比べてどうかっていうのをお願いしたいんです」
「友希那と？」

頷かれたその真意、季節外れに燃えるかのようなその瞳。
きつと、そういうことなのだろう。

俺だつて友希那の歌を聞いたことはそう多くない。ライブの時と、その他に数回程度。それを知っているかはともかくとして、求められているなら答えるのが筋というものだ。

負けたくない、彼女はそんな感情を友希那に対して抱いている。対抗心として、不安として。

「それじゃあ……どれがいいですか？」

「どれでも。歌いやすいやつでいいよ」

「それなら、これで」

知ってる曲、確か友希那に勧められた曲の中に合った気がする。

趣味は似てるのか。歌われるそれを聴きながら、そういえばどうやって友希那と比べるかなんて考える。

上手、言い表すならそうだろう。歌に関しては専門外、というほどではないけれどそうであることに違いない。

これが友希那だったらどうなるのか、なんて考えてはみたけれど結局は予想で、それは本物ではなくて。

一生懸命だ。それはそう、俺みたいに絡みの薄い人間に頼むのだから。彼女は俺がしていることを覚えているのか、その燃え盛る瞳に映っているのは誰なのか。

相変わらず動いていた指を止め彼女の事を見る。どこか、遠くを見ているような彼女を。

「ふう……」

たった一曲、されど一曲。長さは、数はさほど関係ない。それに乗せた思いは明確にその曲の価値を表す。

一息ついて俺の方を見て、彼女はその感想を訊ねてきた。

「どう、でしたか?」

「よかったと思うよ」

「どこを直した方がいいとかはないんですか?」

「うーん……」

音楽というのは難しい。それもそうだ、だって答えなんて存在しないから。

どれだ、どこだ、なんだ、もしこれが友希那だったら、ふとそう考えて、モニターに数字が浮かんでいることに気がついた。

「凄い高得点だね」

「別に、点数なんていくつでも変わらないですよ」

本心か謙遜か、90点越えのそれを見た瞬間に顔を一瞬そらしたのは何故なのか。

学校のテストであれば勉強したってこんな点数取れるとも限らないし、凄いことではあると思うのだが。

「それで、どうなんですか？」

話を剃らすなど、そんな風な視線を向けられる。ここでありきたりであったり、その場しのぎの答えは許されるものではないだろう。

誘いを断らなかつたのだ、きつとそうするべきで……

「蘭ちゃんはさ、歌ってる時何を考えてるの？」

「歌っている時、ですか？」

「そう、さっきのもそうだけど、ライブの時とかさ」

違和感という程のものじゃない、それこそそういうものだと思つてしまえばそうなつてしまうほど。

音楽の価値とは乗せた思い、ではそれに乗せるものはなんなのか、何処に向かつているのか。

「……わから、ないです」

でも、と恥ずかしそうに頬を軽く掻きながら、目を刺らしながら答えた。

「みんなと演奏してる時は……楽しいって感じてます」

音楽における一と多は全くの別物、見た目ではなくそのあり方が。

だから、と結局はつまらない答えを出してしまう。

「比べること事態、間違ってるとは言わないけど気にしすぎるものじゃないと思うよ」

「そんなの……わかってるんですけど」

ギョツ、と彼女の手が強く握られる瞬間を見た。

適当には答えたくない、でもどう言えばいいかはわからない。確かに求められているものは何一つとして答えられていないし、俺が言ってることだって所詮、ただの持論だ。

「じゃあ蘭ちゃんはさ、Rosealiaで友希那の代わりに歌って友希那より上手く歌える自信はある？」

「……いきなりなんですか？」

「逆に友希那が蘭ちゃんの代わりに歌って、自分より上手く歌われる感じ、する？」

「それはないです」

「つまり、そういうこと」

ソロではなく、バンドとしてあるから、周りとの関係、信頼、上手さとはそれら全部組み合わせたものになるから。

蘭ちゃんの歌から感じたものはそれらを求めているようなものを。決して足りないものを補おうというものじゃなく、押し上げるために欲しているような。

「でも、歌単体で見たら……」

「あー、それなただけ」

「ここまで引つ張つておいてなただけど、蘭ちゃんの歌を聴いていて、友希那ならと頭に浮かべて思ったことがある。

酷いものだ、ああでも、仕方がないものだからしょうがない。

「俺、友希那の事を鼻屑しないで見れる気がしなくてさ」

「……………」

「する気はないし、してる気もない。でも自信もないんだ」

「だって、俺は友希那の事が好きだから。」

「ちゃんと見えているつもりになっていてだけで盲目かもしれない。そうしたくないと思つているけれど、こればかりは源泉から歪んでしまうものだから。」

カラオケの部屋にしてはおかしな静かな空間、だから、彼女が小さく笑う声がよく聞こえてきた。

「なんですか、それ」

「ごめんね」

「いいですよ。それに、いい話も聞きましたから」

仕方がないと思つたのか、彼女はそれで納得してくれて、誤魔化すようだから少し申し訳ないけれど、ああでも事実なのだからしょうがない。

それこそ公平性を保つというのなら二人の事を一切知らない何処かの誰かに頼むしかないが、それでは相手の事を信頼ができない。

であれば決めることなど機械くらいしか……

「どうかしたんですか？」

「いや、なんでもないよ」

画面に映つたあの数字、機械が判別しているのだし公平性は一番だろう。

まあただ点数が高いから上手いかと言われればそうではないだろうし、それを頼りにするのはよくないだろう。

なんて考えていると、蘭ちゃんにマイクを差し出されていて。

「新庄さんは歌わないんですか？」

「俺？」

「せっかく来たんですから」

確かに付いてきただけとはいえ金にかかる、でも歌か……歌える曲など思いつかないが。

どの曲かと探し続け、結局選んだものは……友希那が歌っていた曲で。その点数はお世辞にもいいものだとは言えなかったけど、まあ、楽しかった。

「今日はありがとうございました」

「いや、俺も楽しかったから」

あの後数十分、三回程度互いにやってカラオケ店を出た。

楽しくはあったが……まあ、誘われて暇であれば程度。一人でこようとは思わないが、まあ、歌える曲がいろいろあればそうなのだろう。

「それじゃあ、また」

「うん、また今度」

連絡先を交換し、そんなことを言って別れる。

友希那と……燐子さんは難しいか。でも今度誘ってみてもいいか、そんなことを思いながら振り返った。

伝え方

「いらつしやいませー」

その声を一切無視して辺りを見回す。そうして、見つけてしまった。

「ねえ」

「……なんですか」

自分でもこんな声が出るとは思わなかった。どこまでも底冷えした、歌では決して使わないであろう声。

それを聞いた彼女はこちらを見上げ、対抗心でも抱いているかのような目をこちらに向けている。

運がいいのか悪いのか、昨日の今日で彼女を見ることになるとは思わなかった。

「ハハ、座つてもいいかしら」

「……いいですよ」

いや、運だなんて嘘、羽沢さんのお店にわざわざ来ておいてそれはないだろう。

ここならいるんじゃないかというのが頭の片隅にあったのだろうか。まあ、そんなことはどうでもいい。

「……………」

睨まれている、そう感じてしまうのは気のせいかな。でも仕方がない、多分、私もそのようなものを向けてしまっているかもしれないから。

「えつと……………何になさいますか？」

「珈琲をお願いできるかしら」

珈琲が届けられて、席を指定したにも関わらず一言も会話をしていない私たちを見て羽沢さんは不安そうな表情を浮かべている。

届けられた珈琲に砂糖を入れかき回していると、美竹さんから話しかけてきた。

「湊さん、そのまま飲まないんですか？」

「……………それが？」

「いえ、その……………」

いつもなら否定したり誤魔化しているものだからか、明らかな困惑の色が見て取れる。でもそんなのはどうだっていい、ただ少し、イラついてるだけだ。

「……………用があるなら早く言ってくれませんか？」

「昨日の事よ」

「昨日って……………あ」

まるで言われるまで忘れていたかのような反応。珈琲を飲んで、甘くて、止まりそう

にない。

「……見てたんですか」

「見られて困る事だったのかしら？」

「別に、大したことではないですから」

「大したことがない、ね」

どの口が言っているのだ、カラオケ店から蒼音と出てくるところを偶々見てしまったとまで言った方がよかったのか。

わかった上でそう言っているのであれば……舐められている。

まず最初に目を疑った、次にどうしてだと思考を巡らせた。そして最後に、彼女への怒りが浮かんできた。

八つ当たり、そうとも言うのだろう。でもこれは正当で、どうしようもなく、それでも思わないとどうにかなってしまいそうだったから。

珈琲を飲む、その味は感じなくて。

「歌を聴いてもらっただけですよ」

「なんでも言えるわ」

燐子には抱かないようなこれ、どうして美竹さんには抱いてしまうのか。

横取りだから？ 燐子とは距離が近いから？ わからない、わからない。ああさて

は、美竹さんと蒼音との関係がわからなかったからか。ああ、でもどうでもいい、理屈なんてものじゃない。

ぐるぐると、ぐるぐると、何度も珈琲をかき回す。

「それなら新庄さんにも確認取ればいいじゃないですか」

「それは……」

そんなのわかっている。でも、でも……怖いから、そんなのできるわけがない。

目をそらす、壁に何があるわけでもない、だけど返す言葉が何もないからそれをじつと見続けていることしかできなくて。

「……もしかして、怖いんですか？」

ドキリと心臓が大きく跳ねた。

言い当てられてしまつて、否定できなくて、肯定すらできない。だからなんだと、そんな風でいらればいいけれど、まるで体が小さくなつてしまつているかのようで。

そんな私を見てか、小さく笑う声が聞こえてきた。その元は言わずもがな、抵抗しようにも声は出ず、睨み付ける事しかできない。

「湊さん、本当に新庄さんの事好きなんですね」

「だったら何なのかしら」

「いえ、別に」

身体が熱くなってきた。珈琲が温かいから、お店が外より暖かいから、そんな筈もなくて。

怒っている、じゃあなんで？ それは彼女が彼と一緒にいたから。ならばそれはもう

一人にも向けられるべきだ。

燐子にも……蒼音にも、同じように。

「本当に歌を聴いてもらったただけですから、安心してください」

「でも……」

「信じてもらえないなら……よくないですけど、湊さんは新庄さんの事も信じられないんですか？」

「そんなわけ……！」

どうして？ なぜ私は彼に対してこんな無責任な信頼をどうしてできるのか。ましてや、私と燐子という前例があるというのにな。

結局は自分が信じたいものがなにかというだけ、見た目が違うだけで中身は全くの同じだというのに。

ふっと身体が一気に冷えた。狭苦しかった視界がほんの少しだけ広がったような気もする。

「……………めんなさい、少し熱くなりすぎてたみたい」

「大丈夫ですよ、でもちよつと意外だったので驚きましたけど」
「意外？」

「新庄さんの事を好きっていうのは知ってましたけど、こんなとは思わなかったの」
意外、なのだろうか。わからないから比較のしようがないけれど……無関係、ではな
いけれど彼女に伝わっているのだ、きつと彼にも。

そう考えるとこそばゆいが、嬉しきは違いなくある。

ほら、こんな風に彼の事を少しでも考えたと止まらなくなつて、それ以外に考えられ
なくなつて、やがて音が聞こえなくなつて、最後に目を閉じてしまう。

彼は音楽が相当好きなのだろう、そしてそれは私もだ。こんな風に、落ちるかのよう
に意識が持つていかれる。

なら私は音楽と蒼音、どちらが……ああ、駄目だ、こんな決められないし、そうす
るべきではないのだから。

でも、でも……彼は、どうなのだろうか？

「……聞いてますか？」

「え……ごめんなさい、聞こえなかつたわ」

なにやら話しかけられていたらしく、釣り上げられるように意識が浮かばされる。

何を思つてかは知らないが一つため息をつかれ、恐らく先ほど言われたのであろう言

葉を言ってきた。

「湊さんは新庄さんに好きって、伝えてるんですか？」

「ええ」

「ほんとですか？」

「……どういふことかしら？」

信用されていないのか、それとも嘘をついていると思われるのかは知らないが私は事実しか言っていない。

好きだと言っている、きちんと本人に。だから伝わっているはず、もし伝わっていないのなら……まさか、彼はそれがわからない程頭が悪いわけがない。

「心配してるだけですよ」

……私はどんな風に思われているのだろうか。まあどうでもいい、私と彼の事は私と彼だけわかっていれば。

ああでも、私と彼の事、本当に全て何もかもわかっているのかと聞かれたら自信はない。

「好きって一言に言っても色々あるじゃないですか」

「そう間違われるようなものでは伝えてないわ」

「じゃあ、その強さは伝えているんですか？」

強さ？ 好きという気持ちに強いも弱いもあるものなのか。好きlikeと好きlove、強さは違えどこれらは向く方向がそもそも別。

私はきちんと、そこを違えず伝えていくはず。

「自分はこんなにもあなたの事が好きなのに、っていうのです」

「別に、示す必要はないでしょう？」

「必要はないですけど、意味はあります」

どれくらい好きかと、具体的に見えるわけでもないのに示す意味。

まず私はどれくらい蒼音の事が好きなのだろう。音楽と同じくらい、心臓が痛くなる程、燐子が抱くそれよりも……

ああ、なるほど、そういうことか。

「でもどれくらい好きか、なんて示せないじゃない」

「できるじゃないですか、湊さんなら」

「私なら？」

それは何なのか、答えは浮かばず珈琲を飲んでる彼女の口が開かれるのを待つ。

そして、それは数秒後の事だった。

「歌えばいいんですよ」

「歌？」

「それが一番じゃないですか、湊さんなら」

歌う、一体何を？ そんなもの決まっている、彼への思いをだ。

音楽は好きだ、彼の事も好きだ。であれば……それを溶け合わせればきつと、寸分の狂いもなく想いも全て伝えられる。

ああ、でも……

「私、そういつたものは聴かないから……」

そう、所謂ラブソングとでも言うべきものは聴かない、聴いたことがない。

当然聴こうと思えば聴けるし、練習さえすれば歌うことはできる。でも、でも、それは違う気がして。

「作ればいいじゃないですか」

「私が？」

「他人の想いなんて口に出しても、なんの意味もないですし」

作る、私が、私の想いを、歌にのせて……彼のために。

ごくりと喉を空気が通った。不思議と更に身体が熱くなった気がする。

「……なるほどね、やってみるわ」

「手伝いましょうか？」

「大丈夫よ、一人でやりたいから」

「そうですか」

誰も関与しない、させない。これは私のものだ、彼へのものだ、口出しなんてさせないし許さない。

彼以外には見せない、聴かせない。彼だけが知ればいい、彼しか知らなくていい。

自然とそんな風に思えて、そうと決まれば早めに帰るにこしたことはないだろう。

お会計を済ませようと立ち上がり、ああ先に言わなければいけないことがあるなど美竹さんの方を見る。

「今日はごめんなさい」

それと、と彼女の答えを待たずに付け足した。

「今日はありがとう、感謝するわ」

「……………」

なんと言ったかははっきりとはわからないけれど、顔をどこかに向けながら小声で、まあ、文句は言われてないのだろう。

会計を済ませて外に出る。冷たい風が襲ってくるが、曲の事を考えていると熱くなる身体からしたら気持ちのいい程度のものだった。

伝えるとは

「やつほく、元気してる？」

「……それなりにな」

「全くそうじゃなさそうだけど」

目についたコンビニで珈琲を買い、それを飲みながら帰ろうと思つていたところに声がかかる。

そいつの言うことは俺としては別にそんなことはないけれど、外から見ればそう見えるのだろうか。まあ気にするようなものではない。

ため息一つ、ついさつき買った珈琲を飲みながらコンビニの壁に背を預ける。

リサの手には飲み物が入った容器と、その反対の手にはレジ袋が。透けて見える中身からスイーツが幾つか、容器の中身は期間限定と唱われているやつだろう。

彼女はそれらを口にすることなく立っている。視線はどこかに向いていて、特に話しかけられるわけでもない。

「何か用事でも？」

「ん、特にないよ」

そうか、とだけ返して誤魔化すように珈琲を再び飲む。相も変わらず会話の引き出しが少ないもので、頑張つて引つ張り出したものは別のもの。

勝手に恥ずかしさを感じさせられて、そんな自分がより恥ずかしくて。

用事はない、となれば誰かを待っているのか。であればさっさと帰るのがよいのだろうが、話しかけてしまった手前そうすることは少しひける。

手に持つカップを揺らし、これは帰りの分は持たないだろうなど思い、勿体ぶるかのようになんか飲む。

「そういえばどうなの？ コンクール」

「……まあまあ、だな」

駄目駄目かと言われればそんなことはない、完璧かと言われればそれもそう。だけど焦る気持ちはない、それに理由はないのだけれど。

昔は練習練習、暇さえあれば練習、なんて風だったのに変わってしまったものだ。

「練習、しなくていいの？」

「やるに決まつてるだろ」

「そうじゃなくて。燐子はRoseliaの練習の後に自主練してるからさ」

Roseliaの練習、内容は見たことはないが密度は凄い筈だ。

恥ずかしがり屋な彼女の事だ、失敗したくないという思いはあるのだろう。立派な彼

女なことだ、中途半端では嫌なのだろう。

だが家でやるならまだしも、練習のすぐ後にやっているのだ、俺の知らない何かしらの思いがあるのだろう。

「なら俺も練習量増やすか」

「不純だね」

「元から純粹じゃねえよ」

人につられて何が悪い。燐子さんが頑張っているというのだ、恥ずかしいものを聴かせるわけにはいかないし。

思い立ったが吉日、理由もできたわけだし帰るとするか、そう思つて背中を離すとカッブから音がして。

……残りは半分もない、折角だし飲み干して捨ててから帰るとしよう。

「蒼音はさ、不安になつたりしないの？」

「何がだ？」

「紗夜や友希那、燐子もただどず〜と練習しててさ」

どの意味で、聞こうにも空を眺める彼女に声をかけることができない。

不安、仲間の体調か。ああそれは違うだろう、であれば部外者である俺には関係……なくはないけれど、聞くことではない。

「自分ももつと練習しないと、思うんだけど……」

別に気にすることじゃない、なんて無責任なことは言えない。気になるのだからしょうがない、それが当然。

特に高校生なんて忙しいものだ、しかもリサはバイトだっしてしているし……知り合いも俺なんかよりもずっと多いだろう。

更には彼女の心配性というか、お節介とまで行きかねないものからすればそうなるのは当然で。

「別に悪いことじゃないだろ」

「でも……」

「思えるだけましき、全くやらないってわけじゃないんだろ？」

「それは……そうだけど」

思えていればよい、ほんの少しでもやれてれば尚よし。それができていけばいつか勝手にやるだろう。量より質という言葉もあるように、やりようなんてものはいくらでもある。

それに俺やそこらの人とは違うものをリサは持っているのだから。

「お前は どう思う？」

「リサ、言ってくれれば私は幾らでも付き合うわよ」

「……友希那、いつからいたの？」

「ついさっきよ」

「お前が下向いてるうちにな」

誰かを待っているのかと思つたし、であるとするならば相手は友希那だろうと思つていたがその通り。

そつか、とリサは空気に溶けてしまうかのような小さな声で呟いて、ゆつくりと視線を上げて空を見上げる。

「ん〜！ ありがとうね、二人とも」

「私は何もしてないわ」

「こういうのは素直に受け取つとくもんだよ」

大きく伸びをしなからそう答える彼女。空元氣、ではないだろうが吹っ切れたという程でもないだろう。

とはいえ友希那が来たのだし邪魔者の俺はさっさと帰るとしよう。そう思い歩きだそうとして呼び止められる。

「どこに行くの？」

「帰って練習だな」

「……そう」

それだけ、たったそれだけで後は続かない。それなのに俺の足は縫い付けられたかのようには動かなくて。

「素直じゃないね、友希那も」

「……なんのことかしら？」

「蒼音と何処か行きたいって言えばいいのに」

「……………」

足を縫い付けるは自らの影、返答への期待が足を重くして、身体が影の中に吸い込められるかのようだ。

こちらとリサの事を交互に見て、俺に聞こえないような大ききで彼女はリサと話している。

その間は苦さが。珈琲とはまた違う気持ち悪くなってしまうような不思議なものが何処からともなく浮かんできていて。

「蒼音はどうなの？」

突然名を呼ばれ、目線をあちらこちらと動かしながら小さく、また意味もなく声を漏らすことしかできなかつた。

——どう、なのだろうか？

期待をしているのか、練習しなければと思っているのか。冷たい風が吹いて、目を閉

じた。

「ほら友希那、行つてきなつて」

「でも……」

「でもじゃないよ、ほら」

友希那の背中をリサが軽叩き、倒れ混むようにしながら数歩前へ。彼女は振り向き、それに対しリサが手を振つたので彼女はこちらを見る。

ふつと、身体が軽くなつたかのような気がした。

原因なんてわからない。ただ、そう感じたのは事実であつて。

細く、途切れてしまいそうな声で呼びかけられる。手に持つカップが揺れ、そういえば中身はほぼ空だつたな、なんて事を考えてしまう程には上の空で。

「……あなたはどうか……なの?」

「俺は別に……」

ガシガシと頭を搔く。何が別にだ、しすぎとも言える程気になっているのに嘘ばかり。今更恥ずかしがつているのか、それとも予定を破らせるのが嫌だと思つたのか。

「……リサと予定があるんじゃないのか?」

「そうだつたけれど」

あんな風だから、そう呟いて彼女はリサを指差した。

声の大きさにリサには聞こえてないだろうに俺達が振り向いた事に気づいた彼女は手を振ってくる、となればなんと言おうと無駄なのだろう。

「何処か行きたいところあるか？」

「えっと、大丈夫……なのかしら？」

その問いに肯定の意思を見せると、ならば行きたいところがあるとされる。

珍しい、普段ならばどこでもと答えられいつも通りカフェに行くのだけれど一体どこなのか。

どこに行くとかは聞かない。何処であろうと行くのだし、こいつに限ってそういう場所には行かないだろうから。

手を伸ばすと不器用そうにそれを取られ、何度しても慣れない感覚に身を委ねていった。

「あなたに聴いて欲しいものがあるの」

行きたいところがあるというのだからどこなのだろうと思っていたがやって来たのは喫茶店。これでは普段通りと思つたが、わざわざ言われる程なのだし相当なものなのだろう。

渡されたイヤホンを片耳にだけつけて、頼んだ珈琲を飲みながら曲が流れるのを待

つ。

喫茶店とコンビニとでは味は違う、わかっではいるし飽きもない。ではあるけれど気分れで砂糖スティックを手に取った。

「あなたが砂糖を使うなんて珍しいわね」

「たまにはな」

まあ、一本丸々使いきるといふわけではないけれど。半分ほど入れたところで友希那に渡してみれば、彼女はなんの迷いもなくそれを珈琲に入れる。

新しく気に入ったロックでも流すのか、それとも *Rosealia* の曲でも流すのか、そう考えていた中で流れてきたものは思いもよらぬもので。

間違えてないか、そう指摘しようとして、やめた。真剣そうにこちらを見てる彼女にそんな事を聞けるはずもなく、何よりも彼女がもう片方のイヤホンを耳にしているから。

意味がわからず理解ができず、歌詞もメロディーもきちんと聴けそうになかった。だけれどもわざわざ聴いて欲しいものがあるときまで言われたのだし曲に意識を向ける。

曲が終わり、こちらを上目で見えてくる彼女にゆっくりと問われる。

「どうだったかしら」

「どうもなにも……」

何を聞きたいのか。

聴かされたのはラブソング。その声は女性のものだったが聴いたことのない声で参考にするためなのか、歌詞への反応か自分が気に入ったから感想を聞きたいのか。

迷って、悩んで、答えられずにいるうちに声をかけ直される。

「なら、この曲を私が歌うとしたら？」

ラブソングは聴いたことはあるにしろ好んで聴くものではないから良しも悪しも対してわからないが、もしこの曲を友希那が歌うとするならば……

「似合わねえ、かな」

この曲を友希那が歌うとするならば、そう聞いてまず最初に浮かんだことがこれだった。

それに対しての彼女の返答はそう、という簡素なものだった。何が、どうして、そんな風に聞かれると思っていたのに全く気にしていない様子で。

「なら逆にどんなものならいいと思うのかしら？」

ラブソングは誰が作ったか、というのが一番の問題。なら友希那らしい、自分の言葉で作られたものがいいだろう。

俺の意見なんて……

「……なあ、友希那」

「何かしら?」

「これって練習の為か?」

「違うわ」

「ならRoseliaで歌う為のか?」

「それも違うわ」

「なら……」

「ぐくり、と喉が鳴っていた。

もしかして、もしかしてと思考が染まっていき……

「あなたに向けてのものよ」

珈琲を飲む。甘い、甘い、ここまで砂糖を入れた気はしなかったけれど、ああそうだからき混ぜ忘れてしまっていた、であれば甘くもある筈で。

なんだかくらくらさえてきた、まともな思考ができていないのだけは自分でもわかる。ぐるぐると、ぐるぐると珈琲をかき混ぜて渦を作り出す。

「……それはまた、どうしてだ?」

「私には歌しかないから」

だから、その歌で伝える。聞いているだけで恥ずかしく、だけどあまりにも真剣な目で見られるものだから目と目を合わせて。

「本当はあなたに言おうか迷っていたのだけれど私って、そういうのが苦手だから」

ようやく視線が外れたので背もたれに強く寄りかかる。暑い、熱い、火がついて燃え尽きてしまいそうな程。

沈黙。数秒、数分と時間が過ぎ、珈琲はいつの間にか飲み干していて、底に溶けきっていない砂糖があるのが確認できた

「その……お前が書くのか、それ」

「ええ、そのつもりよ」

「いつ、できる予定なんだ？」

俺の声は多分、震えていたと思う。自作のラブソング、自分にはこれしかないと言うほどの物を俺に。

望むように、祈るように、言葉を待った。

「出来上がり次第伝えるわ。でも、そうね……」

来月中には完成させるわ。

なんでもないかのように、確信もないのだろうがそんな風に言ってきた。

「……そうか、楽しみにしとく」

「ええ、最高の物にしてあなたに届けて見せるわ」

先程飲んだ珈琲が逆流したかのような甘さ、苦さが俺を襲ってくる。沸き上がる熱さ

が、どこからか冷たさが。

期限はない、だけれども俺はある問いに答える義務がある。
来月中、その言葉は何よりも強く、深く、頭に刻み込まれた。

罪の在り処

「燐子は今日もこの後練習？」

「はい……コンクールまで時間、ありませんから」

「そっか、頑張つてね」

Roseliaの練習が終わってコンクールの練習。時間はもうない、一分も、一秒ですらも無駄にできるものじゃない。

「えつと、りんりん」

「あこちゃん……どうしたの？」

Roseliaの練習からコンクールの練習へと切り換える意味を込めて目を閉じて、ゆつくりと深呼吸をしたところであこちゃんから話しかけられた。

なんだろう、彼女の瞳からは寂しさみたいなのが読み取れる。最近遊べてないことやNFOができていないことが不満なのだろうか。

ごめん、あこちゃん。でも今は駄目なんだ、コンクールが終わったら……全部終わったら一緒に、一杯遊ぼうね。

彼女らしくなく言葉はない、視線もあちらこちらへと向いている。言いにくいことな

のか、私はその言葉を待つしかない。

「無理、しないでね」

「……うん、わかってるよ」

「……それだけ。頑張ってるね、りんりん」

あこちゃんは嘘が下手だ、何を隠しているかはわからなくても何かを隠していることは用意にわかる。

他にも言いたい事があったのだからそれを全部飲み込んだ。何故？ そんなものきまつている。

「……ごめんね」

あこちゃんが去って私一人になったスタジオでそう呟く。小さな声だがよく聴こえたのは罪悪感のようなものがそれをより強いものとしたからか。

また目を閉じ、深呼吸。指を足に当てリズムを取る。安心して、無理はしない、約束だから。

無理はしない、無理じゃない。できる、やれる、やらなきゃ、やらないと。

指を落とす、鳴らした音は部屋の中に嫌なくらい響いていた。

「お腹、空いたな……」

ふと、そんな声がどこからか聞こえてきた。ベッドに座り込んで息を吐くと一気に疲れがやってきた。

最後にご飯を食べたのは……昨日の夜、あれ、昼だけ？ どうにしろ目を覚ましてから食べていないのだけは覚えてる。

お父さんもお母さんも仕事でない。家には私一人、なんだか寂しく感じてしまうけど、とりあえずは何か食べよう、そう思っただけで立ち上がろうとする。

「あれ……？」

立ってない、なんでだろう。足に力が入らなくて、手で身体を浮かすこともできず、ただただぼーっと目の前を見つめていた。

何もない、だけど視界はそこから動かせない。いや、その表し方は不適切か、どうにもそのような行為すら億劫で。

今日も朝から練習をしていたし疲れてしまったのか、ああでも……駄目、頭もうまく働いてくれてない。

今倒れ混んだらもう、起き上がれる自信はない。空腹で、思考も不明瞭、こんなになるまでしたからにはもう……

もう？ もうなんだ？ 私はこれで満足しているのか？

まさか、まさか、そんな筈はない、そんな風であってはいけない。

沸き上がってきた思いを使い、ベッドを強く押し立て立ち上がる。

取り敢えずは何か食べよう。何があったっけ、そんな風に思った直後にスマホの音が耳に入ってきた。

誰だろうと確認してみるとそれは予想外の人物で。

「ど、どうして……」

明日会えませんか、理由も場所も、時間もない、ただそれだけの簡素な文。

断るべき、そんなことはわかってる。実際にそうしてきたのだし、ごめんなさいと打ち込むだけで解決してしまうものなのだ。

なのに……なのに、そう返すことはできなくて。

大丈夫です、なんて真逆の文を返してしまっていた。

「……はあ」

どうしてこんなことをしているのだろう。練習しないと思ってるのに、焦ってるのに、どこか楽しみに思ってる自分がある。

こぼれたため息は真つ白で、すぐに溶けて空に消えて行く。もう少し厚着しておけばよかった、なんてのは今更で。

「蒼音さん……」

呼ぶのはこんなことになった原因、彼からの申し出を断れる筈もなく受け入れてしまったけれど後悔はしていない、ただ何故今なのかだけがわからなくて。

集場所となったのは喫茶店でも彼のバイト先でも、互いの家でもなく本屋さん、となればその理由は予想できる。

練習ばかりだから息抜き、ということなのだろうか。最近の本も読めていないしコンクールが終わった時に読む用の本を買っておくのも悪くないかもしれない。

「お久しぶりです」

久しぶりに会った彼の挨拶には返すことができなかった。

バクバクと破裂しているかのような音が身体の中で鳴り響き、何か喉に詰まりものがあるかのように息がうまくできなくて。

私が彼と会う時はいつもこうだったか、もう思い出せないけれどこうだったかもしれないし、こうじゃなかったのかもしれない。

「え、えつと……」

ようやく絞り出したものは言葉ですらなかった。

口にしようとした言葉は空気に溶けて消えていき、目を合わせることすら恥ずかしくなってしまうってそっぽを向く。

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫……です」

大丈夫じゃない、とは冗談でも言えないからそう返す。このままでは何もできないまま時間だけが過ぎてしまう、胸に手を当て大きく息を吸った。

「今日はどんな用……なんですか？」

そんな意気込んで尚勢いは転落するかのように落ちてしまい、先程以上の恥ずかしさにも襲われる。

「あこちゃんから、最近燐子さんが元氣無さそうって言っていたので」

「……それだけ、ですか？」

「はい」

そうですか、と眩く中で落胆と歎息、その相反する感情を抱いていた。

彼が心配したからじゃないという、最近会つてもいないから仕方ないことなのに抱いてしまう傲慢さ、会つてあげてと言われてないのにこうしてくれるという程度の事。

となればすぐに解散か、いやいやそんな訳がない、あつてほしくない。ああでも練習をしなければいけないことを考えるならそれは喜ばしい筈で。

「どうかしましたか？」

「い、いえ、この後……どうするのになって」

「本を見て昼飯でもって思つてましたけど……嫌なら」

「そ、そんなことないです！」

ぶんぶんと頭を振って否定し、思考を振り払う。理性が邪魔だ、練習の時間が削れているのは彼も同じ、であれば構わない、それでいいではないか。

彼から逃げてしまうかのように入り口の方に向かい、それでは意味がないから数歩戻ったのだった。

「今日は付き合ってくれてありがとうございます」

「い、いえ……」

あつという間だった。まるで世界に私一人取り残されてしまったかのように時間は溶け、本を買って昼食も済ませてしまった。

覚えている、今日何をしたかどんな風に思っていたか。だからこそこれ程までに時間が過ぎていく事が不思議でならない。

来るべきじやなかった、練習しておくべきだったと、あんな風に考えさせていた理性は何処に行ってしまったのか。もう、全部蒸発してしまっていて。

だけれど来ない方がよかったと微塵も思っていないわけではない。息抜きのようなものだと頭では理解してる、だけれどもこれは、あまりにも甘くて痺れるような時間だった。

「練習、頑張ってください」

終わらせたくないと思ってしまうている、終わってほしくないと願ってしまうている。だけどそんな優しくくない、終わりはもう目の前だ。

仕方がない、しようがない。コンクールの練習をしなくては、そしてそれは彼も同じなのだから。私の言葉を待たず背を向けた彼に、手が伸びた。

「れ、練習……一緒にしませんか？」

なんと言ったのだろう、熱された頭はゆっくりと冷えていき、自分が何をしているのか自覚する。

私は彼の手を掴んでいた。冷えた頭がまた沸騰しだして、だけれどもその手は離さない、離せない。

「えっと、それは……」

「今から、です」

恥ずかしい、でもその手は緩めない。息が荒くなる、でも目はそらさずに。

「駄目、ですか？」

「……大丈夫です」

風が吹いた気がした。季節外れの暖かい風、どこか優しいものが肌を撫でた。

どうしてこうなってしまったのだろう、なんて全部自分のせいなのに現実逃避気味に考える。

一緒に練習しましょうと言うまではよかった。問題はその後、どこでそれをするか。何処かのスタジオを態々借りようという話にはならなかった。つまり彼の家か私の家、どちらにするかという話になって。

それで私が誘った、私の家なら大丈夫ですと。今思い返してみれば熱くなって火傷して、肌を食い破って炎すら現れそうなものだ。

理性なく本能での提案、思案は何一つとしてなく願望だけでの発言、であればどうなるかはわかりきっていて。

「……………」

当然、こうなる。よくよく考えなくても当たり前、そもそも私は何を期待していたのだろう。

ピアノの音がする、それは私によるものじゃない。彼は今、私とは別の場所にいる。彼は確かに目の前に、だけれども凄く遠くの場所にいる。

手を伸ばせば触れられるだろうけど、声をかければ返ってくるだろうけど、そんなことしようと思えないからそういうことだ。

喉が鳴った、胸の前に持ってきた手は動かせない。心臓が激しく脈動するがそれは何

故だろう、どちらなのだろう。

あなたが好きだからなのだろうか、それともあなたの音楽が好きだからなのだろうか。多分、どっちもで。

まるで金縛りにあつたかのように身体を動かすことはできず、ただただずっと彼の演奏を聴いていた。

遠くの誰かを見るように、テレビの中の誰かのように、作り物の世界の誰かのように。

「そろそろ燐子さんも弾きますか？」

「……え？」

ふっと、声が零れると同時に身体を縛っていた何かが消えた。

言われた言葉の意味を考えてみたらすぐ気づく、それはそう、これは彼一人での練習ではないのだから。

提案したのは私、一緒にと言ったのだこうやって見続けるのを彼はよしとしないだろう。

「どうかしましたか？」

「な、なんでもないのでふ」

焦りすぎて舌を少し噛んでしまい、気付かれてないだろうかと不安になってしまふ。

身体が重いし胸が潰れてしまいそうだ、伸ばした背筋が冷えて頭がクラクラとさえし

てきた。

こんなに緊張したのはいつぶりか。緊張、そう、緊張だ。視界がぶれた、立っているのか座っているのかすらわからなくなってしまうほどに。

彼の見ているところ、彼の演奏の後、そして弾くのはあの曲。私の演奏は彼に届くかどうか、いや、遠い場所にいる彼に私の演奏が届く筈がない。

怖い、恐ろしい、失望されるか、呆れられるか。隣を見てみれば蒼音さんは不安そうにこちらを見ている。

その不安はなんなのだろう。考えたくない事まで考えてしまうから無理矢理ピアノの前に座ろうとした。

「あ……」

躓いて、転びそうになる。無様だ、こんな調子でコンクールなんか出られるのか。無理だ、やっぱり私なんかじゃ……

「……燐子さん」

貴方は何も悪くない、だからその表情をやめてください。いつそ煽ってくれる方が、馬鹿にされる方がいい、だからそんな心配そうな表情を私なんかに向けないで。

手に何かが当たった。何かと思って見てみれば蒼音さんが私の手を握っていた。

「大丈夫です、燐子さんなら」

安心する、すつと心を覆っていたものが払われたみたいだ。

「俺がついてます、つてむしろ逆効果か……」

だから貴方は何も悪くないのだ、そんな事を言わないで。

「少し一緒に弾いてみますか？ そしたら少しは緊張も解けるかも」

そうだ、とそんな事を言ってきた。ああ、もう限界だ、自分が自分でなくなってしまうそう。

私は今、蒼音さんに触れている。

「蒼音さん」

「なんですか？」

「……ごめんなさい」

貴方が悪いのだ、何もかも。

気付けば私は床に倒れこんでいた。彼を、押し倒すようにして。

そこにある夢

夢を見た。

それは夢だから現実味がなくて、夢の癖にはつきりと覚えていて。

夢なのに、痛かった。

「……………」

ボーっとする、昼寝をしすぎた後みたいに頭が回らない、やっぱりあれは夢なのかと疑ってしまう程に。

そんなわけがない、あれが夢だと？ 寝言は寝て言うものだ、冗談で済むものではないことぐらいわかっているはずだ。

目を背けてはいけけないもの、誤魔化してはいけけないもの。身体から力が抜け仰向けに倒れ混んだ。

眩しく感じさせる天井が煩わしくて手で目を覆う。このまま寝れてしまえばいいのに、だけれども当然そんなことはできず、静かな部屋にため息の音が寂しく響いた。

「俺のせい、か」

どうやら事態は俺の思っていたよりもずっと酷いらしい、とはいっても自業自得であ

ることに違いはなく、悲観するには俺の罪は大きすぎて。

肩が痛いし首も重い、更に頭の中は今日のことでもいいいっぱいだ。

罪悪感、いや、感覚なんでもものではないか。犯した罪が罰として俺にのしかかっている。

「はあ……」

どうしてこんな風になってしまったのだろう、俺が悪いのはわかっている、ならどうすればよかったのだ。過ぎ去った過去に答えを求め、意味のない問答を何度も何度も繰り返す。

「馬鹿馬鹿し」

あざ笑うかのように声が漏れた。本当はわかっている癖に何を言っているのだ、彼女だつて言っていただろう？

独り言が多くなってしまうけれど仕方がない、誰かに聞かせるわけじゃないけれど少しでも口に出さないと体の中で破裂してしまいそうなのだ。

どこで間違えた？ そんなの最初からだ、どうすればよかった？ わかっている癖にわかっているふりをするなよ。

手を下ろし天井を見つめ今日、彼女に言われた言葉をもう一度頭の中で繰り返す。

『何度も、何時もずっと、ずっと待っていたのに、貴方は……』

思い出すだけでずきりと頭痛が、締め付けられるかのように胸が痛い。

ああ、そうだ、その通りだ、自分でもわかっていたけれど本人に言われるとやっぱり、くるものがあつた。

彼女が言つたから、それも確かにあつたのだろう。でもその中に彼女だからということとはなかつたか、本当に燐子さんだからというものはなかつたのか。

……改めて考え直してみると自信が持てない、本当は微塵もなかつたのかもしれないがあつたのかもしれないと一度でも考えてしまえばもう、なかつたと答えることなんてできなくて。

返す言葉はない、そんな俺に対して彼女は続けた。

『一つだけ……約束、してください』

断る権利は俺にはない、受け入れる義務が俺にはあつた。だから聞く前に首を縦に振つたことに後悔はないし、反省もしていない。

『ごめんささい』

よく覚えてる、彼女は本気だったのかもしれないがそれなり程度の力で握られた右手には今でも感覚が残っている。

「確か、こんな風……」

手が勝手に動き、あるところに触れた。やはり現実味はない、今はそれほど恥ずかし

いとは思わなければ、明日には死んでしまう程の恥ずかしく思うのかもしれない。

初めてだった、今まで彼女がいたことなんてないのだから当然。

指は唇を滑り落ち、首をつたって胸を過ぎ、腹にまで行きベッドの上へ。

『……答えは、友希那さんより先に私にしてください』

喉が乾いた、だけれど立ち上がる力は沸いてこなかった。

翌日、学校は終わったけれどもバイトはない、けれども家にはどうにも帰りたくないからふらふらとそこら辺を散歩感覚で歩き回る。

女々しいな、と自分を笑ったところで何か解決するわけじゃない。なんて、何度思ったかわからないことを考える。

やっぱり昨日の今日では解決してくれないようだ。

ピタリと足が止まった。意識をしたわけではない、勝手に足を止めていた。

いや、足だけじゃない。全身が、そして一瞬ではあるが思考までもが確かに止まり、数瞬後には一気に血が回りだし身体中熱くなり始め。

バクバクと心臓が鳴り響くのを抑え振り返りその場を離れる。今は、あいつとは顔を合わせたくないから。

「あ、蒼音さん！」

だけれども、どうやらそれを許してくれる程世界は優しくないみたいだ。

呼ばれる声に振り向けば、張本人であるひまりちゃんがこちらに手を振っている。その隣にいる蘭ちゃんが、そして……あいつもこちらを見ていて。

「なんでそんな遠くにいるの?」

こちらの気を知らないでそんなことを、重たい足を引きずるような感覚で動かして彼女達の元へ。

何か用事があるわけではないようで、別に何かをしていたわけではないらしく、寄ったところで行われたのは世間話のようなもの。

「蒼音さん、蒼音さん」

「どうしたの?」

突然ひそひそとひまりちゃんに話しかけられた。二人には聞かれたくないことなのか、今はその二人で話しているのだしわざわざ小さな声で話す方が疑われてしまいそうなものだが。

「蘭と友希那さんってあんなに仲よかったでしたっけ?」

「元から悪くはなかった気がするけど」

「それはそうですけど、今までは二人の間に火花が散っているのが見えるような感じだったのに……」

言われてみれば確かに、だけれど比喩のようなものだから表面上だけならどうなろうと不思議じゃない。今話している二人が腹の中に何を隠しているかなんてわからないのだから。

……まあ、その火花というのは殆どが蘭ちゃんから発されているものだったし、友希那が感情を隠すなんて想像もつかないが。

「ひまり、何話してるの？」

「な、なんでもない！」

「大したことじゃないよ」

大したことではない、だけれど聞かれたら面倒なことになるだろうから隠すに越したことはない。蘭ちゃんがひまりちゃんに詰め寄っているが答えることはないだろう。

二人が話すということは当然、俺と友希那は暇というのに分類されることになり。ああ、気まずい。顔を見ることができなくて特に意味もなく近くの赤信号を眺めて。

「ねえ」

「……なんだよ」

だけれどもそんな些細な抵抗も話しかけられてしまえば終わりだ、返答もぶつきらばうなものになってしまうが、話しかけられたままで会話は続かない。

流石に態度が悪かったかと思っていると手を引っ張られ姿勢を崩され、彼女の顔が随

分と近くに映し出された。

女性の顔が近くに、たったそれだけのことで昨日の事が、こいつじゃないとわかってはいるのに強く蘇ってくる。

「私、何かしたかしら？」

射貫かれたかのように錯覚する視線、それが真つ直ぐ俺に刺さっていた。

「……なんでもねえよ」

やめてくれ、お願いだ。そんな真つ直ぐに、綺麗な瞳で俺の事を見ないでくれ。

ずしりと、風邪をひいてしまった時のように体が重くなる。

「湊さん、あたし達は帰りますね」

「ええ、わかったわ」

何があつたのかわからないといった様子でひまりちゃんは慌てているが、そんなの知らないと蘭ちゃんも彼女は彼女を連れていく。

その場凌ぎのようなものだとわかつてはいる、わかつてはいるけれど一瞬でも友希那の目が俺から背けられた事に心の底から安堵した。

「それで……」

あまりに短い安堵、寧ろそれがあつた分より強いものとして焦りが襲ってくる。背筋に冷たいものが流れて気持ちが悪い。

「……やっぱりやめておくわ」

「……どうしたんだよ」

「なら、聞いて欲しいのかしら?」

そうではない、どうも釈然としないまま時間だけが過ぎていく。

どうしたい、俺は一体何をしたい。昨日の事を彼女に知られたいのか、知られたくないのか、そんなことすらわからない。

「誰にでも聞いて欲しくないことの一つや二つくらいはあるものね」

「……………」

「それにあなたのことだから」

きつと、深い理由があるのでしよう? それだけ言って彼女はその場を去ろうとする

この理由が深いのか浅いのかなんてわからない、酷いことなのか優しいことなのかも
そうだ。誰のために隠すのかすらも定かではない。

ただ、俺は帰ろうとしている彼女の手を掴んでいて。

「この後時間、あるか?」

なんて口にしていただけだった。

友希那に昨日の事、答えを出さずなら私からと言われた事、それに対し何も返せなかつ

た事を話した。その前の事は話すことはできなかつたけど。

「そういうことね」

「……」

「他にも何かありそうだけれど、聞かないでおくわ」

「こんなことになった比率としてはむしろその隠している事の方が多いし、彼女もそれは感じ取っているのだろう。」

それを聞かないでくれるのは、少しだけ複雑だ。

「何もないのか？」

「なんのこと？」

「さっきの聞いてだよ」

場所を移すという程長くする気はなかつたので道で立ったまま、一応邪魔にならないように端に寄つてはいるが。

手は既に離れていて、どうにも落ち着かないから後ろで組んでいる。

「別に、先でも後でも結果は変わらないでしょう？」

当たり前だ、その場で決めるのではなく決めてから行くのだから変わりなどするはずもないし、これを聞いて彼女に何かあるわけじゃない。

「それにしても、燐子がそんなことを言うなんてね」

それは彼女にしてみても予想外の事だったようで。リサやあこちゃんに聞いてみても同じ反応が返ってくるのだろうか。

「……なんだよ」

「いいえ、別に」

こちらをじつと見ていたから聞いてみたけれど返答はないに等しい。

ふう、と彼女は一息つき、誰に向けてか呟いた。

「意外……ね」

彼女が溢したその言葉は上手く聞き取れなかったが、恐らくはそう言ったのだろう。

何の事だ、何に向けてだ誰の事だ、くらくらしとしてしまうほどに思考は回り。

「練習があるからそろそろ失礼するわ」

「悪いな、それなのに呼び止めちまって」

「時間には間に合うから大丈夫よ」

軽く手を振って彼女を見送りながら先程の言葉の意味について考える。

意外、流れからすればそれは燐子さんの言葉に思うことがあったということなのか。だけれどもそれならその前に言っていて。

確認なのか、それとも口から零れてしまったものなのか。もしかしたらなんの意味も持っていないものなのかもしれない。

「意外、か」

その言葉は空に消え、誰に拾われることもない。意外と取れるなら、思いも寄らぬのなら、そんな行動をされたのなら信頼されていると捉えてみるのもよいかもしれない。

口に手を当ててる。

やっぱり昨日の感覚が深く根付いていて、今更になつて酷く恥ずかしくなり、冷たい風が吹き付けてくる。

いつもならば身体が燃えるように熱くなっていた筈なのに、今日に限っては冷えてゆくばかりだった。

背に抱えるもの

いつもと違う、という言葉には何の意味もない。それが言い訳になるわけじゃないし、他人からすればそんなの興味が無い、そもそもそれがほんとかどうかすらわからない。原因は探せば簡単に見つかるかもしれないし、どれだけ時間が経つても見つからないかもしれない。もしかしたら、それ自体が勘違いなんてことすら起こり得る。

「中学生かよ」

意味もない問答、何を求めているのだろう。確認、責任、自己満足、かつこいいとも思っているのだろうか。

コンクールまでもう片手で足りるようになってしまい、今更になって焦ってみるが対して成果も出はしない。

楽しく、効率的に、ああだこうだと考えてはみれど結局はどれも満ちることなくそれなり程度、真剣にはなれるけど没頭はできなくて。

「子供の頃は……」

別に今でも子供だが、昔よりはそう感じる事が多いのはきつと、あの頃は純粋な気持ちでいられたからだろう。

過ぎて初めて気づくということは最近増えだして。

「……………」

気づいた、憧れた。燐子さんと一緒に練習したあの日、彼女に。

内容、確かにそうかもしれない。触れれば割れてしまうかのように繊細なもの、自らができないそれに思うものはあった。

でも、そうじゃない。一番は、憧れたのは、どこまでも深く集中した彼女のこと。

話しかけようとは思わなかったが、そうしても気づかなかつただろう。例え触れてみようとも気づいてくれなかつたかもしれない。

音楽と自分だけの世界を作り、入るといふ昔はできていたものを彼女から感じ憧れ、そして僅かに嫉妬した。

今でも鮮明に思い出せる。あの瞬間彼女は硝子のように、シャボン玉のように綺麗で、夢げで……

俺はなんだ？ 音楽という、曲という世界の中で一体どの立場なのだろう。

主役か語り手か、それとも観客か。それが正しいわけではないとわかっている、だが主役であるかのように振る舞えるということは意識をすればするほどできなくなつて。

学び方を知り、技術を得て反省をする。何も間違えてない、正しきことだ。

でもそれは、確かに純粹さとは遠退いていて。

ともすれば、主役である事において何より大切なものは、そう意識しないこと。であれば俺にはもう無理で、燐子さんならありえることで。

なんて、それだけであつたのならなんの問題もなかったのだけれども。

「はあ……」

5分だけ休憩しよう、なんて実行して5分きっかりで済ませられる人間は果たしてこの世にいるのだろうか。

こんな風にならないうちでも考えてしまえば10分やそこらなど優に過ぎてしまう。純粹さは過ぎ去つてしまえば二度と手に入らない、だけれど自覚をした瞬間から過ぎ去っていく。

音楽に、ピアノにどこまでも、透明な程の純粹さを持てる彼女の事を考えつつ窓から空を眺めていた。

晴れか雨、どちらが好きかと聞かれてもどちらともいえないと答えるだろう。

晴れだから気分がいいだとか、雨だとリラックスできるとか感じたことも考えたこともない。強いて言うならば雨の時は外出が面倒くさいくらいだが、そもそも外出自体そこまで頻繁にするわけではないからどうでもいい。

ザーザーと、開けたドアから雨の音が家の中にまで聞こえてくる。

「……で、何しに来たんだけ？」

「雨、強かったから」

なるほど、傘を持っている癖に濡れてるといふことはそれだけ雨が強いということか。確かに、彼女の後ろに見える外は時間にしては黒く塗りつぶされていて。

「取り敢えず体拭いとけ」

「ありがとう」

風呂場からタオルを探して渡す。見る限りびしょ濡れという程ではなさそうだが風邪を引かれても困るので、体を拭かせて風呂場まで案内する。

「着替えはねえぞ」

「そこまで濡れてないわよ」

「どうだか、心配しすぎと言われればそうかもしれないが、こんなもんだと思う俺もいる。」

勿論、友希那か燐子さんでなければこんなにはならないが。

「雨、止むと思う？」

「暫くは止まないだろうな」

飲み物を取ってこようかと聞いたがいらないう返答。

俺は背を向けたまま、言い表せないような居心地の悪さを感じながらその場に座り込

む。

髪が濡れていた、寒そうだと思った。だから風邪を引いてしまわないようにと心配をして……

友希那は白い服を着ていた。ああ、いらぬ、こんなものは必要ない。

何故だか無性に恥ずかしくなって、膝を抱え俯き顔を隠す。熱は感じてはいないがむず痒さは襲いかかってくる。

暑い、暖房をつけたせいだ。あれだこれどと意味のない、関連性のないことばかり考えて思考を何処かに飛ばそうとしてみるがまるで効果がない。

俺は、何を求めているのだろうか。

「ねえ」

「なんだよ」

「こつちを向いて」

「嫌だね」

意地ではない、期待はない。一度あつたのだからもう一度もあるかも、なんて烏澁がましいことは思わない、思ってはいけない。

謙遜、傲慢、どつちもだ。唇を強く噛み、埋めるかのように顔を下に落とす。

やましい気持ちはない、邪な感情は彼女には似合わない。罪悪感に似た何かを埋め尽

くした。

しかし細く冷たいものが首筋に当たったのを感じ顔を上げ、振り返ってしまった。

「何かあったの？」

「……何もねえよ」

言えない、言ったら……どうなるのだろう。少なくとも嫉妬くらいはしてくれるのか？

ああだから、それが傲慢だ。相手を知ったつもりで、どう思ってくれるかを期待するなど、押し付けるなどわかってはいるはずなのに。

それでも尚そうしてしまうのはきつと、好きだという事実には押しされてなのだろう。

逃げ出したい気持ちはありつつ、期待か恐れか、よくわからないまま会話もなく時間が過ぎていった。

「で、どうなのかしら」

「……どつちのことだ」

「どつちも何も、コンクール以外に何かあるの？」

笑えてくる、コンクールに向けて集中できてないことがモロバレだ。こんなんじゃ情けない姿を晒してしまう。

……いや、情けない姿ならもう、晒してしまっているか。

「聴かせて、あなたのピアノ」

「理由は？」

「あなたは正直だけど、私達みたいな人間は演奏を聴いた方がよくわかるでしょ？」

目を合わせる。どうやらある程度は乾いたようで、見る限りでは濡れているところはない。

目と目が線で繋がれたように、張った糸で引つ張られるかのように離せない。それだけではない、顔、体、果ては指一本動かすことはできなかつた。

そんな中でも唯一と言つていい程動いていたのは心臓のみ。どくりと、体全体が揺れていると錯覚するような鼓動が止まらない。

凍ってしまったかのように動かない全身は、しかし沸騰したかのように熱を持つ。

あ、という小さな声が自らの口から零れていた。

「……わかつた」

なんだ、なんと表せばいいのだろう。

戸惑い、緊張、それらは違う。歓喜、不安、それでもない。

その場を立ち上がってドアを開けなんとなく、一度振り返つた。

「大丈夫なの？」

酷いとは思ってたけどここまでか、乾いた笑いが口から漏れた。

友希那はさっきの演奏を聴いてどう思っただろうか。怒る、心配、そんなもの通り越して呆れているに決まってる。

思考が染まっっていく。不純物はよく目立つから小さなものでも過度に感じてしまい、感じてしまえばどんどんと拡がっていく。

今まで積み重ねてきたピアノへの思いがたった一日、この前の出来事に食い散らかされてしまっている。

「顔色悪いわよ」

「……元からこんなもんだよ」

「嘘ね」

彼女は俺の顔に手を添えた。

暖かい、さつきまで冷えていた癖に。何処かほっとして、感じていた焦燥感は収まり新たに思考に混じったそれは、とても優しくかった。

「どうしたらいいのかしら？」

「……わかつたら苦労しねえよ」

「確かに、それはそうね」

過ぎたことはどうにもならないからこの感情だっけどうにもならない。もしどうに

かなったとして、どうにしたらいいのだろう。

歯車が外れたのではなく、狂ってしまったのだ。奥、はるか奥、目で見えず手で触れられない、そんなところでおかしくなってしまった。

「悩み事なら聞くわよ」

「遠慮しとく」

「……そう」

話せる内容じゃない、話したらどうなるか想像はつかないがそれだけは確か。

そんなことと切り捨てられるかもしれない、真つ正面から考えてくれるかもしれない。もし話したのなら……

……もしかしたら、彼女も。

「雨、だいぶマシになってしまったらしいわ」

「そうか、気を付けろよ」

一瞬、思考が全て塗り潰された。その招待は嫌悪で、期待。ああ、本当に気持ちが悪、い、いつそ、どうにかなってしまった方がいいんじゃないか。

「私は何かを捨てる事は悪い事じゃないと思うわ」

「……………」

「背負うことによって頑張れるかもしれないけど、そうでなければ重いだけだし何より、

楽なもの」

わかつてる、わかつてるさそんなこと。だけれども落とせばもう拾う資格がない、捨てるということは傷つけることだと、わかつていないはずがない。

「だからわかつた上で一つ、あなたに提案よ」

——コンクールの演奏は、私の為にして。

「……なんだよ、それ」

「別に聞かなかつたことにして貰ってもいいわ」

「無理だろ、今更」

何故だか偶然その瞬間だけ雷が鳴ったとか、そんな事は起こらずその言葉はもう聞かえてしまった、そしてそれは無視できないことで。

「嫌でしょう、そんなこと」

嫌だと、強く否定できなかつた。飲み込んでしまひそうだった、吞まれてしまひそうだった。今ならば、なんでも受け入れてしまふほどに思考は鈍くて。

嘘だか本音だか、何を意図してなのか。わからない、わからない、それをどうするかすら決められない。

思考にほつりと、新たな不純物が染み込んだ。

「……風邪、引くなよ」

「そっちこそ、万全の状態でコンクールを迎えなさい」

そう言つて彼女はいつの間にか足元にいた猫に構い、満足したのか出ていった。

万全の状態、簡単に言ってくれる。だけれども、ああ仕方がない、あいつが求めているのだ、俺のそれを。

スマホを開いて明日の天気を確認すると、どうやら明日は雨らしい。

猫が飛びかかってくる。心配かけてしまったか、その日は一日中そのことを構つてやっていた。

帳が落ちて

演奏が聴こえてくる、誰のものかわからないけれど、上手であることはわかるそれ。普段の私と比べたならば……多分、私の方が上手だろうが、練習と本番は全くの別物である。

今日の私はどうだろうか。いつも通り、練習通り、それ以上の物を引き出すことは出来るのだろうか。

「蒼音さんは……緊張、してるんですか？」

そんな問いを彼にぶつけたのは、はたしてどういう意味があったのだろうか。口に出せねば爆発してしまいそうだったからか、私がそうなっているから彼にもそうあつて欲しかったからなのか。

演奏が終わり、次の人がステージに向かっていくのが見えて。いつものように焦ったりすらできず、自分が自分じゃないかのように冷静で。

出番まで後どれくらいだろう。一分経って、三分が過ぎて、また別の人がステージに上がって。少しずつ、でも確実に本番が近付いてきている。

楽しみなのか怖いのか。何時もの壊れてしまったかのような心音は今日に限っては

聴こえてこず、寧ろゆっくりと、止まってしまひそうな程のペースで鳴る心臓を掴むかのように胸に手を起き、大きく息を吐く。

身体に不調は何一つとしてない、むしろ不自然な程の絶好調。翼を授けられたかのようだ。身体は軽くて、今ならば空へだつて飛び出せそう。どこまでも、止まれず、翼が溶けるまで。

「手を、出してください」

突然言われたその言葉に従い、彼に向けて手を伸ばそうとしたが動かなかった。一体どうしたのか、自らの腕を見てみれば小刻みに震えていた。

やはり緊張しているのか、そう感じるとだんだんと身体中に痺れが回ってくる。手から身体を、足までいって最後には舌の上に酸っぱい何かすら浮かんできたかのような。

だけれども、震えはすぐに止まった。彼が私の手を取つて、彼の手が私の手を支えるようにしてくれて、それだけだ。だけれども実際には、引つ張られもしないのだから何の支えにもなっていない。

一瞬にして冷えていた身体が熱くなって、変な声が出そうになって、しかし、彼の手の違和感に気づいてそれら全ては押し沈められた。

「してますよ、緊張」

「い、い、いめんさい。そんな風に見えなくて……」

「……騙すのが得意なだけですよ、色々」と

すぐにメツキは外れますけれど、というのはどういうことか。こうして触るまで、彼の手も震えていることに、冷たくなっていることに気がつかなかつたのに。

聞き逃したことにして目を瞑り、大きく息を吸う。緊張しているのが私だけじゃないという事実には酷く安心させられ、そして、何故だかあの時の事を思い出していた。

でも、あの時のようにはならない、しない、させてやるものか。目を開いて、映るあなたに声をかける

「……蒼音さん」

「なんですか?」

このまま彼の手を握ってしまおうと力を込めたが実らず、ただ空気を掴んだだけに終わってしまった。ああ、どうやら緊張も抜けきっていないらしいが、だがこの程度何ともない。これならば普段あなたという方が何倍も緊張する。

演奏が終わる。次は私の番、そして私の後に蒼音さん。順番もあの時と同じ、だけれどあの時と違うことは確かにあって。

「……見ていてくださいね」

私の震えは収まった、彼の震えは収まってはいなかった。確かに、バレてしまえば一瞬でメツキは剥がれ落ち、残るはただの男の子。

私はあなたの後ろを追い続けていた。遠い背中を、見えない背中を延々と。そして今日、ついに私は彼と並び立っている、だから、だから、今だけはあなたの先に行きます。見ていてください、私の事を。それに言葉はいらない。だからこそ、私の名を呼ぶ声に振り返った。

「頑張ってください」

……返事はしない、恥ずかしがらない喜ばない。ステージへと向かい目を閉じ、開き、映る世界が、住む世界が切り換える。

ここには私一人、他には誰も存在しない。無音のその世界に、音を落とす。

きつと、人生においてこの時間というのは、ほんの刹那的なものでしかないのだろう。だが、だが、その刹那は色鮮やかに、鮮明に刻みつけられる。子供をやめて、大人になつて、そして死ぬまで、抜け落ちる事の無いものに。

やっと忘れ物を取りに来ることができた。これでようやく、私は本当の意味で未来に向かうことができるようになったんだ……

私の演奏が終わり蒼音さんの演奏も終わり、私達は二人向かい合う。

お互い、このコンクールにかけた時間は計り知れないというのに終わってみれば一瞬

で、だけれども熱された体は中々冷えてはくれなくて。

「お疲れ様、です」

「……お疲れ様でした」

夢を叶えてしまった。演奏したというのもあり、彼の演奏を聴くというのもあつて疲れがあり、心地の良い倦怠感に包まれている。

夢を、願いを、望みを叶えて想いがなくなってしまうのではないかと不安に思っていた。だけれどこんなにも疲れているというのに、欠片も想いは薄れていない。

稀に感じていた、私の想いと夢、それらは同じなのではないかと。

「手を、出して貰っていいですか？」

そうして出された手に自分の手を重ねる。温かくて震えはなくて、彼の顔を見上げると何故だか安心して。

突然ドロリと、溶けるかのように視界が歪んだ。

疲れか安堵からか、どちらにせよそうなって倒れそうになったというだけ。歪んで、不思議とゆっくりと流れていく中倒れることなくいられたのは手を引かれたから。

強く、だけれど優しく。重ねていた手はいつの間にか握られていて。

「……蒼音さん」

「……どうかしましたか？」

まだ、一つ残している。

生きてきた意味、というには大袈裟ではあるが、今まで一瞬たりとも忘れたことのない夢がある。

「りんりん〜ん!」

声の方を向いてみれば、あこちゃんがこちらに向かつてきていて、その後ろにはR o seliaのメンバーが見えた。

この後は、どうだろう、蒼音さんを含めみんなでご飯でも食べに行くのだろうか。先んじて二人きりで彼に言えば、彼はそれを受け入れてくれるのか。

……まあ、そこまで盲目ではないのだけれど。

それでも、だ。後でも先でも、いずれやらねばいけないことがある。それははじめでも、区切りでもない。ただ私が、望んでいるだけ。

彼の手を引き、耳打ちをして手を離す。名残惜しさに数秒、視線さえ動かすことが出来なかったが、彼から送られる視線がなんだか面白くて、こちらに来るあこちゃんを迎える事ができた。

どうしたんですか、その顔は。あなただつて私に対して似たような事を言ったことがあるくせに。

やり返してやったという風な優越感なのか、どうにせよ普段であれば絶対に言いもし

ないことではあつたのだが、コンクールで麻痺してしまつたか、全くもつて気にならない。
い。

「りんりん凄かつたよ〜！」

「ありがとう、あこちゃん」

飛び込んでくるあこちゃんを受け止めたが、どうにも力が入らずふらついてしまう。

身体が軽くなつたかのようだ。肩の荷が降りたというべきか、穴が空いたとでもいうべきか。どうにせよ、終わってしまった事の話。

影が伸びていく。冷たい風は変わらないまま、空は紅く変わっていく、そしていずれは黒く、暗く、闇夜のそれに。

帳が落ちる。それは夜の訪れか、それとも、何かの終わりの証だろうか。

辺りは空色を残すことなく、だけれど星の光は家から漏れでた光や電灯など、人工物によつて遮られている。

人気のなさが少しの寂しさを感じさせてきて、それからくるものもあり、季節もあり、身体を縮こませて抗つてみせるも大した効果はないように。

足を止めて、一つ深呼吸をした。指を伸ばせばピンポンと、インターホンの音がした。

自分でしたくせにその音に驚かされて、白い息が零れたのが目に入る。待つこと数

秒、扉が開かれた。

「ご、ごめんなさい。思ったより早く……来れたので」

「大丈夫ですよ、待ってたので」

招き上げられたのは彼の家、そう望んだのは私から。

外に比べれば遥かに暖かくて、まるで夢の中に迷い混んだかのようにほつとする。もしや夢ではと自らの頬を触ってみようとすれば、あまりの手の冷たさに変な声が出てしまう。

「座っててください、飲み物持ってくるので」

そんなに長くいるつもりはない。それは彼にもコンクール後に伝えたし、今日はお父さんもお母さんも家にいる。

だから寛げないのだが、いかんせん現状は寛いでいるとは言い難い。何せ、初めてではないにしてもあれやこれやと、気にならないはずもないのだ。

「……それで、何の用なんでしょうか？」

ホットミルクを差し出されて、私の好みを覚えててくれたかと嬉しくなる。

少し熱いくらいでまだ飲めそうになく、息を吹き掛けてみればゆらゆらと、水面が微かに揺れた。

「お願いが、あるんです」

緊張はしていない、不安もない。なら興奮でもしているのか、違う、そうでもない。落ち着いている。全くの無感情というわけでもなく、揺れる蠟燭の火のような、石を投げ込まれた水のような。

ホットミルクにもう一度息を吹き掛けて、揺れた水面ごとを口にすると、身体の芯から暖かさが広がっていく。

これは夢でもなく望みでもなく、約束だ。あなたはそれを覚えていないかもしれない。私が覚えているだけでいい、私がそれを果たしたいだけだから。そしてそれは今日に果たしたかったのだ。

「一緒に、演奏してくれませんか？」

そう言えば、驚いたかのような彼の表情が目に入った。恐ろしい提案をしたつもりもないけれど、彼からしてみれば予想外であったものらしい。

一体、彼は何を予想していたのだろうか？

「……それだけ、ですか？」

「それだけ、です」

だけとは言えど、それが大したことではないのが事実。まあ、そう思っているのは私だけかもしれないが。

暫く私の顔を見つめた後、彼は問いかけてくる。

「俺なんかで、いいんですか？」

「蒼音さんだからいいんです」

「……そうですか」

この問答の意味は何なのか。トクリ、トクリと、静かな空間に私の心音だけが響いている。だから彼の了承も、煩いくらいに私の中で響いていた。

浅ましく、欲深く

何時ぶりだろうか、この感覚は。

大失敗を起こした時か、ちよつとした悪戯が大問題になった時か。はたまた母が消えた時、それを父のせいにした時だろうか。

愉快、痛快、笑えてしまうくらいには愚かしい。まだ理由を知らなかったとはいえ、あれは人生をやり直したなら必ずやり直したいと思っている。

当然そうなることなどないのだから、後になって悔やんでいるのだ。

あの時と同じ、久しぶりに消えてしまいたくなくなった。

己自身の浅ましさが、あれもこれも全部イラつかせてくる。

「吐き出す……」

恋と、愛と、欲と。何時から俺はこんなにも欲深くなつたのか、溺れてしまったのか。無理もない、お前は悪くないと訴えかけてくるのが本能で、お前が悪いのだと責め立ててくるのが理性。まるで獣のような、後先考えず、自分勝手な思考回路。

唇に触れてみれば、ああ本当に、削ぎ落としてしまった方がいいんじゃないか。

愛する気持ちは純粹であるならばそれがいい、恋する心はそれがいい。理性を上回

り、本能で好きだと想えるのなら、それにこしたことなどあるはずなく。

「自分勝手なやつ」

自虐をすれど、返ってくる言葉などあるはずもない。顔を覆い、締め付けられるような頭痛とは逆、破裂してしまいそうな痛みが襲ってくる。

恋して、愛して、そこまではいい、それだけでよかった。だが俺は欲した、そうならば自分本意だ。

純粹であればあるだけいい、事実そうあれた。だけれど純粹でありすぎて濁ってしまつて。

家に行きますねなんて言われてしまつて、受け入れて、俺はその時なんと思つていたか。

薄汚い、欲にまみれた思考が、期待が、確かにあつた。

後悔が役に立ったのか、今回は何も起こしていないし口に出してもいない。

だけれどもそう考えたという事を自らが許せない。やつて後悔する程度のことなど、所詮はその程度なのだから。

ゴン、と大きな音がした気がする。何か落ちたのか、俺が落ちたのか。どうだろう、確かめるのも面倒だ。

寝て起きたら全部夢でしたなんて事があつたらいいのに。出来事も、感情も、全部泡

のように消えてしまえば。

でも、そうしたら今日のコンクールは全て幻だったということになってしまう、あの心の揺さぶりが全て嘘だったということになってしまふ。

「……それはやだなあ」

そんなことあるはずもなかるうに、それでもそんなことを考える。

だがあれが幻なら、現実ではもつと上手くできるのだろうか。

ああ本当に、どこまでも強欲なやつだ。

無欲であるということは幸せだと、薄れ行く意識は黒く塗りつぶされていった。

「うっ……」

身体中が痛い、床で眠ってしまっていたせいだろうか。

朝日は眩しい程に眩しくて、特に予定もなく付けたアラームが煩わしい。手を伸ばし、だけれど届かなくてため息がこぼれた。

普段から散らかしている気はないが、それでも普段よりも幾段と綺麗になつてる部屋を見て嫌気が差す。

アラームを止めるためにスマホを覗くとメッセージが一つ、アラームを止めることをせず、瞬きさえせず、ただそれを眺めていた。

『今日会えるかしら?』

それだけのメッセージにあらゆる思考も、行動も止められる。縫い付けられたかのよ
うな視線は濁きによってか途切れ、思考もようやく動きだす。

何の用か、何処でなのか。今日とは書いてあるが、今日のいつなのか。動き出せば暴
れ馬のように止まることなど知らなくて。

「……………」

会つて、俺はどうしたいと思つた?

向こうの用など決まっている。昨日のことを話して、それ以外のこともするだろうが
主題はそれだ。ただそれだけなのだ。

会いたいと思つた、理由はない。いいじゃないか、素晴らしいじゃないか、では俺は
彼女に何を望んだのか。

称賛? 違う。

罵倒? 違う。

批評? それも違う。

俺が期待したことは……

「はあ……………」

別に、友希那にも望んだ訳じゃない。事実まだそれには早くて、いや、そも彼女がそ

うするようなどこ等想像もつかない。

三大欲求とはよく言うが、全く、そんなもの言い訳にしかすぎないのに。

恋と愛、そして欲。一体どれが最初にくるものなのか。

欲がなければ恋もなく、恋がなければ愛もなく、愛がなければ欲もない。なんて、どうでもいいことを考えるのは現実逃避をしているだけなのだろう。

でも、でも、なんて未練がましく思うのは全部、今日は予定があると返した自らの選択への後悔から。

取り消そうとして、既に既読が付いているからそうもいかない、付けたそうとして思いつかない。結局どうしたいんだなんて考えは頭の端に放り投げて。

「そういえば、飯無かったな」

リビングへ向かいながらそんなことを思い出し、まだお休み中の猫を起こさないようにそろりそろりと歩を進める。

何も考えないでいられればと座り込んでみるが、そんなことを考えている時点で結果はお察しだ。数分後、俺は家を出ることにした。

食材を買って、帰って料理して、そのあとどうするか。ピアノは……あまり気分じゃない。

頭は変に冴えてしまっているから眠れそうにはないし、課題やなんだが余っているわ

けでもない。

久しぶりにゲームでもしてみるのもいいかもなど考えていれば、ふと目の前に人影が見えた。

「今日は忙しいんじゃないのかしら?」

因果応報という言葉があるように、嘘などつくべきものではないのだろうと再認識させられる。例えばそれが誰かに対してであろうと、自分自身にであろうとも。

「……これからバイトがあつてな」

先ほど学んだばかりであろうに、またこうやって嘘をつく。これで後悔をすれば過去の自分を恨むのに、今の自分は未来のことなど二の次。

勉強にせよ、金銭にせよ、それらの計画性は比較的にあるというのに一体どうしてなのか。

出した言葉を飲み込むことなど出来るはずなく、白く色付く息の音すら確かに聞こえてくる。

「急いではいけないところ引き止めて悪かったわね」

「別に急いではないさ」

「なら、少しくらいは時間があるのかしら?」

「少しくらいなら……」

自らの口から漏れ出たその言葉。言って、それが耳に入って初めて理解する。

他人には嘘をつけるくせに、自分には嘘をつくことが出来ない。嫌になる、一体どうして悪い気の一つや二つしないのか。

「早く行きましょう」

悪いことじゃない、そんなことはわかっている。寧ろ断る方が悪いことであるのだから、そんな理屈的なものではない。

ああ、だけれども、先程より少し上機嫌な風に感じさせる友希那を見て、そんなことを思うことなど不可能なのかもしれない。

話すことはコンクールのこと。良いや悪い、今までの事からこれからどうするのかなど、そんなことばかり。

他人事ではないし、大したことがないというわけではないけれど、どうにも真剣に考ええることは出来ていない。

相変わらず甘ったるい、舌の上に固形物でも浮かんできそうだ

「あなた、本当は今日バイトなんてないんじゃないのかしら？」

「……何でそう思うんだ？」

「全く時間気にする様子がないから」

言われてみれば、そう思って確認してみれば30分も経っていた。

急に気恥ずかしくなつて顔を背ける。結局、嘘など簡単にバレてしまうものなのだ。

「それで、今日は何の用があるの？」

「……なにもねえよ」

「隠し事？」

「隠してねえよ」

とは言つても、先程まで嘘をついていた人間が何を言つても信用ならないだろうが。

黙り込んで、じつとこちらを見つめてくる。天敵に見つかつた生き物というのはこんな気持ちなのか、鼓動がゆっくりになつていくのを感じていく。

「……嘘はついてないのね」

「なにもねえつて言つただろ」

「なにも、というのは嘘でしょう？」

言い当てられてしまつて身体が硬直し、あなたは嘘が下手ねなんて言われるが否定はしない。上手いやつはここで少しの罪悪感も抱かないのだろうから。

「言いたくないこと？」

「言えないことだ」

こんなこと言わない方がいいだろうに、隠せないこと嘘をつけないこと、悪くはない

が良くもない。

嘘が口から出れば虚しい事、なんてよく言ったものだ。

「……それは、燐子のことかしら」

違うと言えないのは言い当てられているから、そうだと言えないのは恐ろしいから。一体どうしてなのか、人間破滅的なものを夢想してしまう。

もしここで本心全て晒け出してしまえばどうなってしまうのか、なんて絶対にしないことを考えて、小指の先が冷たくなる。

引かれる、軽蔑される罵倒される。どれであれ、その他であれ恐ろしいものだ。

言い返せず押し黙っていればため息が聞こえてきて、その主は憂鬱そうな顔をして窓の外を眺めていた。

「時間、大丈夫なの？」

「なにもないって言っただろ」

「嘘なんでしよう、それ」

きつと何かが食い違っている。勘違いでもされているのか、こちらを見ようとしてもない彼女は、何処か不機嫌そうにすら感じられて。

……ああ、いや、確かにそうか。これから燐子さんと会う予定があるなんて彼女に言える筈もない。当然逆もしかり、でもそれなら、それくらいならば言いたくない程度の

ものであつて。

「本当に今日は何の予定もないんだ」

「……嘘、ではないのね」

「俺は嘘をつくのが下手らしいからな」

やつとこちらを見たと思えば、今度は珈琲を飲んで顔を隠してしまう。

俺も珈琲を飲もうとしたが、どうやらもう飲み干してしまつていたらしい。少し黒くなつた底を見つめ、友希那の事を眼に入れた。

「お前は、俺に言えないこととかあるのか？」

「ないわ……まあ、言いたくないことならあるけれど」

即答、それは隠すものなどないという信頼の表れか、それとも隠すほどのものなどないという事実からか。

あまりにきつぱりと言うから拍子抜け、だけれど友希那らしくもあり、俺は目を背けていた。

店を出れば風が身体を締めさせてくる。いい加減手袋くらい用意するか、なんて考えながら空を見上げる。

曇り空、青空一つ見えていない。まるで閉じ込められてしまつたみたいで。

「あなたは悩み事が多そうね」

「……突然なんだよ」

「別に、大したことじゃないわよ」

否定はしない、それは事実だから。悩み事の解決法など動くか、聞くか、無視するか程度しかありはしない、なら俺は何をしているかといえば……最後のものが大半であつて。

「そういうお前は少なさそうだよな」

「そうね。なくはないけれど、大抵すぐ解決するから」

こちらを見てくるのはどうしてか。明白だ、でも、そうすることはできなくて。

「昨日のあなたは、楽しそうだったわよ」

突然の言葉に驚けば、何処か不機嫌そうな、そんな風な友希那の顔が目に入った。

どうすればいいのかなど俺にしかわかるわけがない。でも、俺にはどうするべきかはわからなかった。

どうあってほしいのか

私は鈍感ではない。だけれど賢くもない。

それだから彼が何か悩んでいることはわかっても、何故悩んでいるのかまではわからない。どうするべきかも、何が出来るのかも。

言えないことと蒼音は言った。ならば聞せず、放置すべきというのはわかる。わかるが、納得できるかは別の話。

燐子の事だと聞いて彼はなにも返さなかった。否定も肯定もなく、つまりそういうことなのだろう。沈黙というのは、わからずとも伝わらないものではないのだ。

「何があつたのかしら」

言いたくないではなく、言えないというのであるからそれは大層なこと。喧嘩なり、恋仲になるなり、私に言えないとするならばそんなところか。

前者であれ後者であれ、彼が言えないというのだから本人に聞くわけにもいかないからこうして一人考えている。

「私だけ……」

怒りはなく、あるものは疎外感。一人など慣れたもので、寂しいなど最後に感じたの

はいつだったのか覚えていなくて。

ああ、それもそうか。彼がいて、Roseliaがあつて、それに慣れてしまったからもう、駄目なのだ。

どうにかしたいと思うのが当然だろう、どうにかしなければと思うことが普通なのだろう。羨ましいと思うことは、きつとどこかおかしなこと。

無為に時間が過ぎていく。何をするでもなく、何を待つわけでもない。音もなくゆつくりと、視界だけが傾いて……

明かりが、上から降っている。

今が夢なのか現実なのか、それすらわからぬ夢心地。顔でもつねってしまえばいいのだが、これが夢だからなのか、単に億劫なのか知らぬが出来ぬまま。

紙が床に落ちていると、視界に入るわけではないが理解できる。私の視界に移るものも紙ではあるが、そこに書いてあることはあまりにも甘ったるくて、寝起きもあつてか吐いてしまいそう。

こんなものをもし見られたのなら、どうともないが、それでもいい気分はしないう。その行動にも、ここに書いてある内容にも。

「……………寒い」

季節もあって冷えきっていて、ああもしや、身体が動かないのは凍えて固まってしまったからかもしれない。なんて馬鹿らしい事を考える程度には余裕がある。

もそもそと、寒さへの抵抗を見せるためかほんの少しだけ身体が動かせるようになってきた。暫くは大したことなかったが、一分やそこらで上体を起こせる程度に。

それでもまだ立ち上がれないのだから、冬の朝というのは絶望的なものなのだろう。

「まだ早いわね」

時計を見てみれば朝の五時と、早すぎるといつて差し支えない時刻。昨日何時に眠ってしまったのかなど知らないが、ともかく二度目の睡眠を咎めるものはないだろう。

実際、今日は *Rose lia* の練習もあるが昼過ぎから。むしろ万全を期すという体裁の元であれば推奨されるものでこそあるのだが……

「あなたは……」

口にするのは蒼音への曲、その一端。書いて消して、考え飛んで手直しては台無しで。付けっぱなしの明かりを消して、床に落ちていた紙を拾い上げる。余裕など、ある筈もない。考えることと思う事、わかる筈なのにいざ書き表そうとすれば夢のように消えてしまう。

昨日なんて少し進むどころか手直しも出来ず、ただ眺めるだけに終わっていた。

「……相談してみようかしら」

曲の内容ではない。これは私のことで、私のものだから、手など加えさせはしない。昨日の事、どうも頭から離れてくれぬ。ぐしやりと歌詞を書いていた紙を握り潰して投げ飛ばすが、目的とは外れ床に落ちる。

いくら考えても纏まらないからこうして何度か捨ててはみているが、結局出るものは似たり寄ったり。やはり今回のも前回のもの、暗唱できる程に記憶しているのが原因なのか。

ため息が零れて、起き上がった筈の身体は再度机の上に突っ伏していた。

あれはあれ、これはこれと、そんな風な分別は出来ているつもりだったのだが、どうもそうではないらしい。公私混同と言うには少し違うかもしれないがそういうもの。

ぎゅつと、締め付けられるように胸が痛い。胸の中にあるもの全部吐き出して、吐き出して、吐き出して、吐き出すものがなくなつて咳き込んだ。

「駄目ね、これも」

殴り書きのような汚い字、読める読めないは兎も角として、書き記したその内容に偽りはない。音楽では、自分の気持ちには嘘をつきたくはないから。

だが、駄目なのだ、羅列ではなく意味がある。でなければわざわざ音楽とする必要がない。

難しい、面倒だ。ああ、だけれども、だからこそ、音楽というものは美しくあつて人

の心を射つことができる。

雑念を抱いてよいものなど出来る筈もなく、であるからには問題を解決しなければならぬ。厄介だが仕方のないことであり、望むこと。

曇り空の心の内、あるがままに手を走らせた。

彼の事、彼への曲の事、どちらも気になるような状態でする練習など結果は見えてくる。自らの首もとに手を置いて、首を横に振った。

宙ぶらりんな今、すべき事は単純明快。燐子の方を見れば今までよりも随分と調子がよさそう。コンクールを終え一皮剥けたか、荷が下りただけか、それとも……

全く、彼女は出来ていたというのに私は練習に集中する程度の事すら出来ていない。

中断してしまうのも申し訳ないし、解決まで持つていけるわけでもないのだから練習が終わったら聞こう。そう決めたのに、彼女を見て、強く自らの手を握った。

宙ぶらりん。自らを制御出来る筈もなく、集中なんてものは出来ることはないまま時間だけが過ぎていく。

「ねえ、友希那」

「……なんでもないわよ」

「まだ何も言っていないでしょ」

全部勘づいている癖してよく言うものだ。気まずそうな表情を浮かべられて居心地が悪くなったかと思えば、彼女は燐子の方を見た。

ほらやつぱり、気づかれている。でもだからといってなんだ、強がつて何も言えやしない。本当に歌う以外では不器用な口だと自分でも最近思うようになってきた。

そう思つて尚行動できないのは、私自身の愚かさゆえだろう。

「聞いたいてあげようか。喧嘩、じゃないんでしょ？」

「……大丈夫よ、どうにかするわ」

「できるの？」

「私は子どもじゃないのよ」

相談しようか、なんて思つていたくせしてこの様。

その後どうだったかなど言わずともわかること。集中をしながら、不思議といつても以上に楽しそうな燐子の事を見れば、きっと意味のないこと、なんて言い訳ばかりして。

私は、子どもじゃないだけで大人にはなりきれてない。

ふと、気がつけば蒼音の事ばかり。予定もなく、寒いだけの空の下、ため息をついてみれば白い息が舞い上がる。

思考と行動が結びつかない。こんなにも彼の事を考えてはいても、彼のために何もする事が出来なくて。

一体何が、それは彼の事でもあり、私の事でもある。

イラついている、今日の練習の時からずっと。寝不足、栄養不足、理由となるもの思い付くものはあれどそうではない、そうではないとわかっているのだ。

私自身にイラついて、蒼音にも、そして燐子にも。

「……はあ」

白い息を吐き出してぶるぶると、音でもたててしまうかのように震えてみれど、その程度で納められる程の熱など起こせるはずもなく。

それなりに厚着をしているつもりではあるのだが、この間リサから貰ったマフラーの端を摘まみ、もう一度首に巻いて見せる。

口が隠れて息苦しい。誰を待つわけでもなく、何をするわけでもなく。情けなさから一人過ごしている。

目の前になど誰もいる筈もなく、見上げてみてもそれは変わらず。絡み合うわけでもなく、綺麗に張り巡らされた電線を向こうに見ていたらアクビが出た。

喉が渇く。からからと、がらがらと、咳き込んでみても解決せず。声が思うように出せなくて、だけれどため息はつくことが出来てしまつて。

ふと、明日には雪でも降ってきそうだと考えスマホを取り出すが、厚い手袋をしたままでは動かすことが出来ず、大した事でもない故に真つ暗な画面を覗き見るだけ。

「……言ってくれたなら」

言ってくれなければわかる事も出来ない私が悪いのに、言いたくないことだと知れている筈なのに。

私のためと彼のため。一体どちらのものなのか、混じり溶けてわからなくなってきた。

……認めればいいと、わかっている。言い訳ばかり思い浮かぶが、つまるところ彼が事が気になって仕方がない。

素直になるというのは存外難しいもので、元より素直であったとは誇張してでも思わないが、これは直そうとして直せるものなのか。

我が強く、誰も気にすることではない小さな事を隠し遠そうとしたり。ああ、気にしないでいたけれど思い返してみれば随分と馬鹿らしいこと。

なら、そんな私は一体どうしたいのか。だからそれがわからないと言っている。では、そんな私は一体どうあってほしいのか。それは、最初からわかっている。

「あなたには、前を向いていて欲しい」

ああ、私は臆病になっていた。彼が嫌がるかもしれない事をするなど今更で、事実私

は彼が嫌がつていたことをしていた。

……実際彼がどう思つていたのかは知らずとも、表面上では確かにそうだった。

そうとわかればすることは一つ。善は急げと言うもので、時間の事もあれ、退けばまた足踏みすることなど目に見えている。

立ち上がり、深呼吸。急に風が吹いてきて目を瞑る。

目を開けば、空は少し暗くなり始めてきていた。

一人が好きかと問われれば、嫌いじゃないと答える人が大多数だと思う。

煩わしいのは好きじゃないし、かといつて一人きりということに喜びを抱く程でもない。極端に振り切るなど不自由極まりないことで。

「……遅いわね」

一時間、多分それくらいは経つていると思う。蒼音の家のインターホンを鳴らしてみただけれど反応はなく、ならば帰つてくるのを待とうと思ひ時間だけが過ぎていく。

これで居留守でも使われていようものならば……駄目、そんなことを考えては。それに、彼ならばそんなことをしないだろうと思つている。

期待ではなく望みでもなく、それは信頼で確信だ。その信頼に漬け込もうとしている事に罪悪感がないわけでもないが、仕方がないことで。

コンビニで暖かいものでも買おうと思ったが持ち合わせがなく、時間もあつてか寒さを耐えるのもそろそろ限界。

だから、早く来て欲しい。元よりまた後日で、などという考えは持ち合わせていない。私と、彼と、今日この場で。そう決めたから。

だけれど不安になって、何度かインターホンを押してみたけれど反応はない。

外から見ればきつとおかしな人に見えるのだろう。そして、おかしな事だと自分でもわかつてもいる。

スマホの充電がないわけでもないのだから、電話の一つでもしてしまえばそれで解決だ。何よりそんな長くを話すつもりもない。

だが言葉など、言葉だけだと、きつと伝わらない。彼の思いも、私の気持ちも、言葉だけでは足らなすぎる。

足が棒にでもなつてしまいそうに辛くて、意思もあり、その場にしゃがみこんだ。

「……何してんだ」

なんと言おうと考え時間が過ぎ、ようやくその時がきた。立ち上がるとそれなりにしゃがんでいたからか、膝の辺りが痛くなる。

彼は賢いから、きつとわかつている。だから何も言わず、せずとも、白い息を吐き出した。

「……悪いけどまた今度な。今はちよつと、疲れてるんだ」

だけど、蒼音は私の事を無視して鍵を取り出す。

長い間待つていたのにとか、無視される事だとか、そんなことはどうでもいい。

「駄目よ。今、ここで」

「言いたくないって、言っただろ」

「なら言わなくてもいいわ。けど、私はあなたにそんな顔して欲しくないの」

彼の手を掴めば、ほら、止まってくれた。振りほどこうとすれば簡単な筈で、こちらを見る目は暗さもあつて良く見えなかつた。

「何で構うんだ」

「そんなの、あなたが好きだからじゃ駄目かしら？」

ああ、冷えてきた。いつもならどうだ、とりあえず上がるかとも言うてくれていた気もする。こんな時でもそんなことをちよつとは期待すれど、目的には変わりない。

「……やっぱ駄目だ」

だから、その返答は予想外のものだった。

すると彼の手が私から離れ、彼が鍵を回す。再度止めることはできず、声も発せず、ただ眺めるだけ。

「……ねえ、一つだけ聞いて」

掠れたかのような声。絞り出すかのように、水中かのように息苦しく、火花でも散っているかのように視界のあちらこちらが白く光る。

「私は、何があってもあなたの事が好きよ」

「……俺も、どうあつたとしてもお前の事が好きだ」

時間が解決してくれる事なのか、あなたでなければ解決できぬことなのか。私では、どう足掻いたところで糸口にすら慣れぬのか。

それが情けなくて悔しくて、そのままドアの向こうに消えた彼の姿を見送った。

空はもう、星によって照らされていた。

同意

八つ当たりだとわかつている、それが最低だと知っている。ならどうしてかなど、教えてくれるならば知りたいほどだ。

いつかなど、今度など、遙か彼方のもので叶う時などある筈もない。叶えることができるのならば、今のような俺なぞ存在しない。

駄目だ、眩しすぎて目でも潰れてしまったのか。張り裂けんばかりになる胸を、握りつぶすかのように握ってみても意味はなく。

俺の事が好きだから等と、簡単に言ってくれたものだ。嫌なのか？ まさか、そんなことある筈もない。嫌なのは何処まで行っても俺自身。

俺はあいつの事が好きだ。当然、燐子さんの事もそうであって、その先がある。

ああいや、先なんて表し方は不健全。でも、でも、先としか表せない程に熱されている。

もしこの熱を晒けだしてしまえば嫌われてしまうかもしれない。予想だ、どうかは知らぬ、もし俺が同じことを言われたら？ さあ、どうだろう。

引いてしまう嫌悪してしまう。まさか、そんなことある筈がない。戸惑うだけか、

きつと、奥底では舞い上がってしまうのか。

「……気持ち悪」

キスだとか、その先を思い描いて浮かぶのは罪悪感。だけならいい、それならいい。そうでないから嫌になる。

世の中順序というものがあつて、守らねばならぬものがある。誰だつて結果を知れてから過程を変えられるのならば苦勞はしない。

だから期待など抱くべきではない。それはまだではなく、いつまでも。子供のような希望論、恐らくではあるがきつと俺は、そこらに溢れ読み疲れたような関係に憧れていて。

ああ、こんな考え、心の奥底を覗いてみれば嫌じゃない。
嫌じゃないからこそ、嫌になる。

「元氣無さそうだね」
「色々あつてな」

リサに呼び出され、開口一番そんなこと。鏡なぞまじまじと見ないからどんな風だか知らないが、見てわかるならばそれは相当。

電話やメッセージで済ませられないのかと聞いてみたら、できれば直接がいいなんて

言われたものだから断ることもできずやってきたが、どこか恐ろしい。

別リリサの事が怖いというわけではなく、言ってしまうえば勘のようなものと引きずられるかのように背筋が伸びる。

「それで、わざわざ何の用なんだ？」

だけれども、勘というのは案外馬鹿にならぬものでこれまでの経験からそういう風な連想をしているというだけ。

連想、リサからとなれば音楽の相談はあれ、直接とならばそれは……

「友希那にさ、何かしたの？」

ほら、こうなった。

指の先から踵、齒の奥までもが浮き上がったかのように落ち着かなくて。

パキリと、指を鳴らしていた。

「……何もしてねえよ」

「嘘つかないでよ」

「嘘って、俺が何かできると思ってるのか？」

「思っていないよ。思っていないから聞いているの」

好意を無下にしてしまったこと、最低な人として真っ先に上げられるような行動をしたと、自覚はある。

後で謝ろう、なんて先送りにしても何か変わるわけでもなく、後悔が消えてなくなるわけでもなく、本当に意味がない。

「じゃあさ、何があつたの」

「何がって、何の事だ？」

「全部だよ。友希那との事、それに燐子との事と蒼音の事」

付け足されたのは、今最も問われたく無かつたこと。

黙秘であれ、逃走であれ、回避する手段はいくらでもある。あるけれど、ため息と共に壁に寄りかかった。

「……見てわかるものなのか？」

「今の蒼音の事を見れば誰でもわかるよ」

嘘は、得意じゃない。正直者であるという自覚はないけれど、人一倍程度であればそうなりえる。

駄目な時に大丈夫だと言うようなやつは嫌いだ、何かあつてもないと言うやつも嫌いだ。馬鹿らしい、今の俺に全部当てはまる。

人間何処まで行つてもこんなもの。身体の中全てを吐き出すかのように長く息を吐くと、苦しさから咳き込んだ。

「……言いたくねえよ、こんなこと」

「酷いことでもしちやったの？」

「そんなこと……」

ない、とは言いきることかできなくて。

答えることが出来ないならば、歪んだ形に持ってしまったならそれはきつと酷いと。

すれ違うならば、行き違うならば、きつと何処かで間違えてしまつて。

「……ああ、しちやつてるな、最初から」

何を間違えたのではない、全部間違えたのだ。あれもこれもそれもどれも、思つてみれば全てのこと。

……でも、嫌だな。そんなこと、思いたい筈があるわけもなく。

「……何を、何で悩んでるのか、アタシにはわかんないけどさ。でもさ、安心したよ」

「……何でだよ」

「悩めるなら、きつと心から考えてるんだらうなつて、二人の事」

当然、むしろそれ以外あらゆるものが細事と言つて差し支えない。

なのに、二人を思う気持ちが自分で何より許せなくて。

「でもさ、蒼音は自分の事も思つて上げた方がいいと思つよ」

「……思つてるよ」

自分の事などどうでもいいと、口では言える、頭では復唱できる。なら、心の内ではどうなのか。

人間とは、ああいや、それは言い訳か。俺は、きつとどこまでも自分本位で、自分勝手だ。

悩みも、出来事も考えも、全てが俺が悪いことで、俺由来のものだから。

またため息。欲も、血も、思考の根元から何もかも吐き出すことでも出来ればいいのに。なんて、出来もしないことばかりを考えて。

「それと、一つだけ言っておくけどさ」

何事かと思えばいつにもなく真剣な表情な様子のリサ。気圧され、ごくりと喉を鳴らしてみれば、立てられた指が目の前にやってきて。

——友希那も、燐子も、悲しませたら許さないから。

「……わかってるよ」

「ならよし。ああそれと、一応教えておくけどさ」

「なんだよ、改まって」

指を戻され、常識を述べるような風に言われたその言葉は、なんとも信じがたいものだった。

「蒼音が二人に思う事って、二人もきつと蒼音に対して思ってることだよ」

じゃあね、と告げると同時にその場を離れ始めたリサを目線だけで追っていく。求めているものは何か。説明、訂正、それらを得ることは叶わなくて。

「……なわけねえだろ」

どうあつて欲しいかさえもわからない。修行僧でもないのだから、俺は二人には好きであつては欲しくて、嫌われなどされたくなくて。

愛されたいと、求められたいと、思ってしまったのだろうか。

「言ったら、怒られるんだろうな」

嫌われたくないなど、友希那に聞かれてしまえばどうなるかなど知れたこと。

それこそ不機嫌ですと、わからせるように見せつけてくる。

「言ったら、悲しまれるんだろうな」

好きであつてほしいなど、隣子さんに聞かれたらどうなるかなど知れたこと。

それこそ悲しいですと、辛くなるほどにわからされる。

……馬鹿らしい。

わかっている、でも逃げる。リサの言っていたことがどういう意味で、どういう事なのか理解できている。

なら何を悩むのか。それはどうせ、俺の願望だ。

こうあつて欲しいと願って、押し付けて、気持ち悪いたらありやしない。

だが確認する術などなく、そうあつて欲しいと考えることでしか乗り切ることはできなくて。

「……燐子さんは」

彼女は、何を思ったのだろう。

行動以上の理由もない、もしくは俺みたいにうじうじと悩んでしまっているのだろうか。

軽く唇に指を滑らせると、無意識的に眼を閉じていた。

偶然とは、不思議と運命的なものばかりである。最も、起こらなかつた運命的な事象が山のようにある中でたった一つだけ叶った、などという現実的な考えをすればそれは当然の事。

だけれどもこんな風なこと、望む望まぬどちらにせよ運命的といわずにはいられない。

「……んこちは」

その声を耳にした瞬間、身体が飛び跳ねた。

服の中に氷を落としたかのような、ぞわぞわと何かが背中を駆け巡る感覚。実際には跳ねてはないと思うが、さて、もしそうだとしたら恥ずかしい限りである。

バクリと一つ、大きく鳴った心臓は少し足りとも収まる気配はない。

身体中が一瞬にして熱くなり目線が落ちて、それを無理矢理上へと矯正し、しかし瞑ることによつてようやく事なきを得た。

「久しぶり、な気がしますね」

「……はい。そんな、気がします」

ゆっくりと開いた瞳の先に彼女の姿は移さない。人と話す時は目を見ろと言うし、知つていて、わかつてはいるが、遙か遠くを眺めていた。

久しぶりとは言つたもののたかだか三日四日。それだけではあるが、そわそわと、慣れないことをするかのような落ち着きの無さが止まらない。

俺の視線が自らに向いていない事に気がついたのか、隣子さんは後ろを振り返つてみるがそこには何もありません。

「……………」

会話など、振れる筈がない。

それは俺だけなのか、彼女はそわそわとしてはいるがいつもとそう変わらない、気がする。

気づいていないだけなのか、気にしているのが俺だけなのか。彼女は、まるで何とも思っていないのか。

一步、燐子さんに向けて歩を進めた。

「謝りたいことがあるんです」

「謝りたい……こと？」

「ごめんなさいと、言うだけならば簡単なもの。内面も、外面も、これで変化など怒る筈もなく。」

身体を屈めて地面に頭を付け、なんてことで解決するならば苦労はなく、どれだけの事をしようと自己満足。ほら、今彼女を目の前にして、罪悪感と、そして他にも何かはあつて。

何について謝ったのか、決して口にはしないけれど。

「そ、それなら私も……謝りたいことが」

対抗でもするかのように、しかしじわじわと消え入るようにして彼女が発したものは、それより先は告げられることはなかった。

なかったが、伝わらないというわけではない。消え入るようなくせをして、それとは反対にゆつくりと顔が赤くなつていく。

内容など、それ一つで充分。

指先が震えるのは寒さからか。情けなくて、隠すように身体の後ろで手を組んだ。

「一つ、聞きたい事があるんですけど」

「……なんででしょうか？」

蛇足。その伝え話を馬鹿にはすれど、人間とはそうしてしまうもの。

だから俺が聞いたそれも意味のない、そして必要のないものであったことなど、自分でも馬鹿らしいほどにわかっていった。

「どういうこと……ででしょうか？」

「……いえ、忘れてください」

唇を噛む。強く、強く、その色が滲み出して流れ出るように。

この問いは何度目か。学ばないやつ、理解しないやつ、でも不安で、俺の事をどう思ってるんですかなどと、聞かぬ方がいいとわかりきっていることを聞いてしまっていた。

「わからないん、ですか？」

「わかっています」

わかっている、わからされた。でも、だから怖いのだ。

「燐子さんが思ってる程……俺はいい人じゃないです」

ここまでして、それでも胸の内に隠し込む。かっこつけて、よく見せているだけで、ほら、暴いてみれば録なものじゃない。

ここまでして、この行動には理由がない、意味がない、必要がない。嫌われたいわけでも、懺悔でも、彼女の想いを否定したいなどもつてのほか。

本当に、蛇足というやつだ。

「……それなら、私だって蒼音さんが思ってるよりずっと、悪い人間……です」

「そんなこと……」

「あります」

だってと彼女が眩くと、俺は無意識に一步退いていた。

「今蒼音さんが悩んでいること全部、元を辿ってしまったえば私のせい……ですから」

「……………」

否定しろ。

悪いのは俺だ。

気持ち悪くて移り気で、サボリ癖があつて嘘つきなくせに正直者。そう、そうだ、悪いのは全部俺で。

「私は、蒼音さんの事になるとちよつとだけ、我が儘になっちゃいます」

チカチカと目眩がする。

「あなたの事が好きで」

キリキリと、締め付けられるかのような頭痛がして。

「あなたに好きであつて欲しくて」

吐いてしまいそうな身体を、何とかして支える。

「また、我が儘を言っつていいですか？」

「……なんでもどうぞ」

今、なんと言われたら断れるのか。ああいや、なんでも受け入れてしまいそう。それこそ手を繋げても、キスをしろでも、なんでもだ。

ペットとかそんな風な、従順にでもなってしまった気分で彼女の言葉を待つ。

「自分に、嘘をつかないでください」

お願いですと、告げられた。

それだけを残し、今日はもう遅いのでと帰る彼女を後ろから眺める。少しだけ手が伸びて、だけれど足が動かない、声が出ない。

空を見上げてみれば、随分と身体が重たいことに今更ながら気がついた。